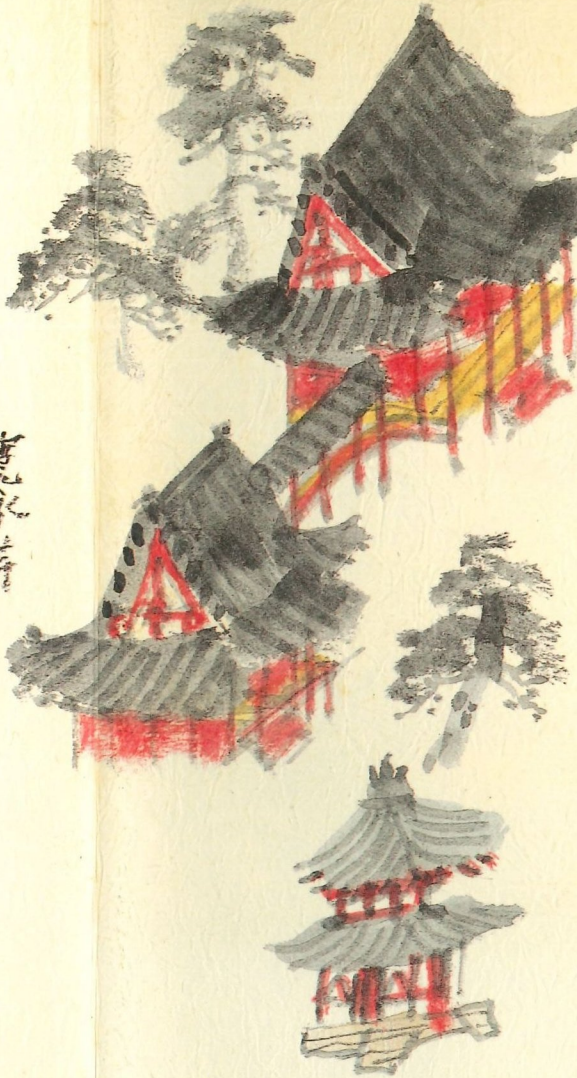
彰義隊

しょうぎたい

吉村昭



朝日新聞社

彰義隊

しょうぎたい

吉村昭

朝日新聞社

彰義隊
しょうぎたい
吉村昭

朝日新聞社

02-250073-5
¥1800E
本1800円＋税
朝日新聞社
1920093018005

彰義隊（しょうぎたい）

吉村昭

朝日新聞社

彰義隊（しょうぎたい）

吉村昭

朝日新聞社

彰義隊・目次

天保山 5
江戸城 34
寛永寺 52
駿府城 62
江戸 81
彰義隊 111
上野の戦い 126
落ちる 145
寺領 171
東光院 185
自証院 194
潮の匂い 216
奥羽列藩 236
会津 257
仙台 268
列藩同盟 286
帰順 305
南帰行 322
幽閉の日々 348
苦悩 360
新しい道 369
日清戦争 374
台湾の戦場 382
終章 389
あとがき 391
参考文献 394

彰義隊

装画・村上豊
装幀・坂川事務所

天保山

慶応四年（一八六八）一月六日夜四ツ（十時）すぎ、大坂城の後門から数人の武家が人眼をしのぶように城を出た。空は雲におおわれ、星の光が雲間からちらついているだけであった。

三日前の夕刻、京に通じる鳥羽街道方面で兵力を集結していた薩摩藩の陣営から、突然、砲声がとどろいた。その方面には、桑名藩の軍勢を先鋒とした幕府軍が京にむかおうとしていた。

その頃、伏見街道でも会津藩を先鋒とした幕府の大軍が京にすすんでいたが、行手をかためていた薩摩、長州両藩の軍勢が、その砲声をきいてただちに戦端をひらいた。

重苦しい静寂をたもっていた薩長両藩を主力とした朝廷軍と幕府軍との間に、その砲声をきっかけにたちまち全面戦争がくりひろげられた。

鳥羽街道方面の幕府軍はただちに反撃したが、損害がいちじるしく、退いて夜襲を仕掛けたものの効果はなく、薩摩軍は鳥羽村の民家に火をはなち、すさまじい火炎が夜空を赤々と染めた。

伏見街道方面の幕府軍は反撃をくり返したが、大敗して淀城にしりぞいた。

薩長両藩の兵力は五千で、一万五千の幕府軍よりはるかに劣勢であったが、圧倒的に優位に立ったのは武器の性能が格段にすぐれていたからであった。

薩摩藩は、六年前の秋、イギリス人一名を斬殺、二名に瀕死の重傷をおわせた生麦事件後、その報復に出た七隻のイギリス艦隊によって鹿児島を襲撃され、はげしい砲戦をかわしてやや有利な戦果をあげた。しかし、イギリス艦隊の驚異的な武器の優秀さにおそれをいだいた藩では、それまでかたくなに守っていた攘夷の考え方を放棄してイギリスと和解し、イギリスを通じて積極的に西欧の新鋭兵器の輸入につとめた。

また、同様に攘夷思想にこりかたまっていた長州藩も、下関海峡を通過する外国船を無差別に砲撃したむくいで、イギリス、フランス、アメリカ、オランダ四カ国の連合艦隊の来襲をうけ、惨敗した。これによって、長州藩も攘夷論は時代おくれの愚論とさとり、薩摩藩の助力を得て外国からの武器の導入に力をそそぎ、その輸入が両藩をかたくむすびつけた。

この結果、両藩は西欧のすぐれた銃砲を大量に保有し、それらの武器で武装した兵を京に進出させていた。

一方、会津、桑名両藩兵を主力とした幕府軍は、旧来の青銅砲、火縄銃で対したので、兵力は三倍でありながら連敗したのだ。

城を出た武家たちは、くらい夜道を無言で足をはやめて歩いてゆく。いずれも上質の衣服を身につけ、提灯の灯に草履をはいた足袋がほの白く見えていた。

武家たちにかこまれるように歩いているのは、将軍徳川慶喜であった。

随行しているのは、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬、老中の板倉勝静、酒井忠惇で、少しおくれて大目付戸川安愛、外国奉行支配組頭高畠五郎がつづき、剃髪の奥医師戸塚文海がその後を

歩いていた。人目につかぬようにひそかに大坂城からぬけ出したため、提灯を手にした数人の家臣がつき従っているだけであった。

鳥羽伏見方向で起こった砲声で戦さがはじまったことを知った大坂の町の者たちは、さらに火をはなたれた鳥羽村の夜空を染める火炎を望見し、騒然とした。

今にも薩摩、長州両藩の軍勢が大挙して大坂になだれこんでくるおそれを感じた人々は、家財を大八車にのせたり身のまわりの物を手にしてあわただしく近在に通じる道にのがれ、町に人の気配はなかった。

細面の慶喜の顔は青白く、時折かるい咳をしていた。前年の暮れから慶喜は風邪をひきこみ、大坂城内の奥座敷で寝着をまとい、ふとんに身を横たえてすごしていた。

寝たり半身を起こしたりしながら、かれの頭には徳川家をめぐる極度に緊迫した情勢が、絶え間なくうかび、深夜に眼をさまして夜明けまで眠りにつけぬことも多かった。

二年前の夏、前将軍家茂の没後、慶喜は将軍職をつぐよう請われたが、徳川本家の相続を承諾しただけで、将軍職につくことはこばんでいた。

すでに幕府の権勢はおとろえて昔日の面影はなく、対照的に反幕傾向を露骨にしめしている薩摩、長州両藩の力が加速度的に増大していて、将軍職についた後、大きな重圧がのしかかることを予測していたからであった。

しかし、他に将軍職をつぐのに適した人物はなく、老中や諸藩主たちの強いもとめに屈し、将軍職についた。

外国勢力の接近にともなって、朝廷を尊崇することによって人心統一をはかり、外国の圧力を一掃しようという尊王攘夷論が全国を支配し、必然的に幕府の独裁政治の基盤は修復不可能なまでに大きくゆらいでいた。

このような情勢の中で慶応三年（一八六七）十月三日、政局を打開するため土佐藩主山内容堂から大政奉還の意見書が提出された。政権を幕府から朝廷に奉還し、朝廷が中心になって諸藩の合議によって政治を推しすすめる。議長には、将軍が就任するというものであった。

幕府政治の存続をこれ以上維持するのは、ほとんど不可能と思っていた慶喜は、この意見書に賛意をしめした。これを、腹心の老中板倉勝静と若年寄の永井尚志につたえると、二人は、

「余儀なき次第、そのようなお考えならば、御英断なさるべき」

と、答えた。

これによって、慶喜は、大小目付ら高級幕吏を招集し、

「徳川家の武備はおとろえ、天下諸藩を統率する力は、残念ながらない」

として、大政を朝廷に奉還するのが窮状を打開する方法だ、と説いた。

さらに諸藩の重役たちを京の二条城にまねいて同じような意見を述べ、重役たちは驚きながらも同意した。

これによって十月十四日、慶喜は朝廷に大政奉還を上奏し、朝廷は翌日、これを承認した。

徳川家康が幕府を創設して以来、二百六十五年にわたる武家政治は、終わりを告げたのである。

当然のことながら、幕府内では慶喜の大政奉還に対する反撥の声が高かった。老中以下幕府上層部の者たちがぞくぞくと京に入り、かれらの中には慶喜に対して、

「なぜ政権を奉還なされたのですか。徳川家をつぶしては、東照宮様（家康）に申し訳が立ちません」

と、憤りを口にする者もいた。

この間に、薩摩、長州両藩は、あくまでも幕府を武力で完全に潰滅させようとして、芸州藩も引き入れて京都に集合し、討幕決行を決意した。

これを実行するにあたって、大義名分がぜひとも必要であった。

薩長両藩は、かねてより岩倉具視をはじめとした倒幕派公卿たちと連絡をたもっていたが、天皇から幕府を倒すべしという勅命を得ようと強力にはたらきかけた。

公卿たちはそれに応じて積極的に工作し、それは成功して薩長両藩主に討幕の密勅がさずけられた。

さずけられた場所は、公卿の正親町三条実愛の邸で、受け取ったのは薩摩藩士大久保利通と長州藩士広沢兵助（真臣）であった。

討幕の密勅が薩長両藩にあたえられたのは十月十四日で、その日はあたかも慶喜が大政奉還を朝廷に上奏した日であった。

密勅には、賊臣慶喜と記され、朝廷に反逆する者とされていた。

すでに京を中心とした地域に薩摩、長州、芸州三藩の兵が進出していて、幕府に対する決戦の布陣をととのえていた。

これに対して幕府軍は、会津、桑名両藩兵に新撰組などもくわわり、一万を越す軍勢が集結した。これを予想していた薩摩藩は、藩地から本格的な出兵をおこない、藩主島津茂久は、西郷隆盛らをしたがえて三千の藩兵を四隻の船に分乗させて鹿児島を出発していた。また長州藩でも千二百の兵が藩地を発し、芸州藩の兵もこれに呼応した。

薩摩藩兵はぞくぞくと京に入り、すでに上京していた兵と合わせて一万の兵力となっていた。

これらの動きは隠密裡におこなわれていた。

討幕派は、幕府を完全に壊滅させるためクーデターをくわだて、十二月九日、天皇から王政復古の勅語がくだされた。同時に宮門と宮中の要所要所に討幕派の藩兵がくり出して確実にかためた。

王政復古の趣旨は、慶喜から将軍の職をとりあげ、幕府の領地を没収し、

「諸事、神武創業の始めに原づき」

と、朝廷が政治の全権をにぎるというものであった。

若き天皇は、王政復古の大号令を発し、政権を推しすすめるため朝廷内の機構をあらため、総裁に有栖川宮熾仁親王を任じた。

王政復古の大号令は、慶喜側に大きな衝撃をあたえた。将軍職を辞するのはよいとしても、領地をすべて朝廷に差し出すことは到底容認できない苛酷きわまりない処置であった。クーデターは、薩摩、長州両藩の策謀であることはあきらかで、幕府に忠誠をちかう会津、桑名の両藩士たちは激怒し、ただちに薩長両藩を討つべしという声が飛びかった。

慶喜は、苦境に立たされた。兵を挙げれば、必然的に朝敵となり、苦悩の末、かれはいったん京

の二条城をはなれて大坂へ退くことを決意した。

十二日夕六ツ（六時）、かれは、会津、桑名両藩兵に守られて、会津、桑名両藩主と老中板倉勝静らとともに二条城の裏門から出た。

一行は、落ち武者さながらに鳥羽街道を進み、翌日七ツ（午後四時）すぎに大坂城に入った。

大坂城内の会津、桑名両藩士や高級幕吏たちは激昂していた。王政復古は薩摩藩が公卿と組んで強行したことはあきらかで、薩摩藩を討つべしという声が飛びかっていた。

慶喜は、二条城から徒歩または馬にまたがって夕刻、大坂城にたどりついたが、途中、寒気がきびしく、風邪をひきこんでいた。

老中の板倉勝静が病床に来て、

「将士の憤りはひとかたならぬものがあります。このままではすまず、兵をひきいて京の薩摩を討つ以外にありません」

と、険しい表情をして言った。

半身を起こした慶喜は、

「戦さを仕掛ければ朝敵の汚名をこうむり、決してそのようなことを口にすべきではない」

と、たしなめた。

「お考えはよくわかりますが、将士らの激昂ははなはだしく、到底おさえつけることはできません。あくまでもかれらを押さえようとなされば、恐れ多いことながら上様を刺しても、京に討って出ようとする勢いでござります」

勝静は、思い切ったように言った。

慶喜は、まさか、とつぶやき、嘆息した。

その頃、江戸では不穏な事件が多発し、それは薩摩藩士西郷隆盛の策謀によるものであった。

かれは徳川家のお膝元である江戸を攪乱させ、それによって幕府側から戦争を仕掛けさせようとくわだて、藩士の益満休之助に江戸へおもむくよう命じ、益満は相楽総三をともなって江戸に潜入した。二人は江戸の薩摩藩邸に入ると、ただちに浪士らを徴集し、無頼の徒もくわわってその数は五百人にも達した。

かれらは、徒党をくんで富豪の家に押し入っては金品をうばい、市中で暴行、掠奪をくり返し、治安は全くみだれた。攪乱工作は関東各地にもおよび、それに便乗した暴徒が放火、掠奪をほしいままにした。

幕府の勘定奉行小栗上野介忠順らは一斉検挙にふみ切り、十二月二十五日の夜明けに庄内藩兵を主力とした兵二千が薩摩藩邸を包囲、砲撃をくわえて藩邸を焼きはらった。

邸内にいた薩摩藩士と浪士たち百五十人は、ふみ込んできた庄内藩士らと激闘したが、四十九人が討ち死にし、益満らは捕らえられた。相楽ら三十人はかろうじて屋敷からぬけ出し、近くの海にとどまっていた薩摩藩の藩船「翔鳳丸」に乗ってのがれた。

この事件の報は、急飛脚によって二十八日に大坂城につたえられた。

江戸をはじめ関東各地で起った薩摩藩による攪乱工作をききつたえて憤りをいだいていた会津、桑名両藩士たちは、薩摩藩邸の焼き打ちをきき、この機をのがさず薩摩藩に痛撃をあたえようとい

う声がたかまった。

城内は騒然となり、幕吏たちは、こぞって慶喜に兵をあげることをせまった。

ここに至っては、慶喜も薩摩討つべしという声をおさえることはできず、薩摩藩邸の事件が、それまでかろうじて堪え忍んできた幕府側を、一気に開戦へと突き進ませることになった。

慶喜は朝廷に対し、

「このような事態になったのは薩摩藩の陰謀によるものであり、江戸、関東各地で騒乱を起こしたのは同藩の藩士の策略であることは天下の知るところであります。これらの者をお渡し下さるよう御願い申し上げますが、それを御採用なくば、やむを得ず武力をもって誅戮をくわえます」

という書面を記し、これを諸藩にもつたえた。

正月二日、幕府の大軍一万五千は兵をおこし、大坂を発して淀城を本営とした。これを知った薩摩、長州、土佐、芸州の各藩兵は、ただちに出動し、幕府軍の前面に布陣した。

三日夕刻、薩摩藩の陣営からの一発の砲撃で、鳥羽、伏見両街道方面で一斉に戦端がひらかれた。

慶喜は、風邪がいえぬまま寝着を身につけてふとんに身を横たえていたが、開戦の報をきいて呆然とし、頭をかかえた。

四日、朝廷は仁和寺宮嘉彰親王を軍事総裁に任じ、錦旗をさずけ、それが戦列に押し立てられた。その報告を受けた慶喜は、さらに驚き、朝廷に刃むかう気持ちは少しもないのに賊名を負うことになったのをなげいた。

敗戦の報がつぎつぎに寄せられ、さらに淀藩が朝廷軍に寝がえったことがつたえられ、大坂城内

に悲痛な衝撃が走った。淀藩の藩主稲葉正邦は幕府の老中であったが、敗退してきた幕府軍が淀城に入るのをかたくこばみ、追撃してきた朝廷軍が淀の民家を焼いてせまると、これを整然と城内にむかえ入れた。

さらに橋本で反撃しようとしていた幕府軍に六日早朝、幕府側の津藩の陣営から砲撃が浴びせかけられた。津藩では徳川家に対する恩顧は忘れないが、勅命にそむくわけにはゆかぬ、という手紙を幕府軍に送った後、砲門をひらいたのである。

淀藩につぐ津藩の寝がえりで、幕府軍は全軍総くずれとなり、大坂へ潰走した。

敗戦は決定的となり、慶喜は江戸にもどって朝廷の意のままにしたがおう、とひそかに考えた。

津藩の寝がえりを知った慶喜は、老中の板倉勝静と若年寄永井尚志をまねき、

「このような事態になっては、この地にとどまっていてもどうにもならない。江戸に帰って手段を考えようと思う」

と、苦渋の色を顔にうかべて言った。

板倉と永井は、慶喜が江戸にもどって諸藩の兵を総動員して朝廷軍に戦いをいどむことと解釈し、ただちに賛同した。

慶喜は、永井に戦場におもむいて幕兵を大坂に退かせるよう命じ、永井はあわただしく家臣をしたがえて馬に乗り、城を出て北へとむかった。

板倉は、どのようにして慶喜を江戸にむかわせるべきかを考えた。大坂湾の天保山沖には、「開陽」を旗艦とした幕府の艦船が碇泊していて、その艦船に乗って江戸へむかうべきだ、と考えた。

天保山沖まで行くには淀川を船で下る必要があり、板倉は大坂町奉行に舟の用意を命じた。

その時、戦場から神保長輝という会津藩士があわただしくもどり、戦況が最悪の状態におちいっていることを、藩主松平容保に告げ、

「戦さの大勢はきまりました。すみやかに兵をおさめて東に帰られるべきです」

と、進言した。

これをきいた会津藩士たちは、思いもよらぬことを口にしたといきまき、神保の言葉をきき入れる者はいなかった。

神保は慶喜の前に行き、同様の言葉を述べ、慶喜は無言でうなずいていた。

慶喜はすでに江戸へ帰ることを決意していたが、戦意のさかんな家臣たちにおしとどめられることはあきらかで、大広間に家臣らと各隊長を集め、

「この上は、どのようにすべきか」

と、問うた。

いずれも血気さかんな者たちばかりで、徹底抗戦を強くのぞんでいただけに、口々に、

「一刻もはやく御出馬なさるべきです。御出馬あれば、士気大いにふるい、薩長軍を蹴散らし、勝利はたちどころに得られましょう」

と、力をこめて言い、

「御出馬を、御出馬を」

と、一同口をそろえて懇願した。

かれらを見わたしていた慶喜は、
「よし、これより出馬しよう。皆々用意せよ」
と、命じた。
慶喜の言葉に、大広間に集まっていた者たちは、眼をかがやかせて喜びの声をあげた。慶喜みずから出馬すれば、味方の士気はいやが上にもあがり、薩長軍を蹴散らすことが期待された。
かれらは、胸をおどらせて足早に大広間を出ると、それぞれの陣営に急いだ。
慶喜は、かれらが一人残らず去ると、急に立って身支度をととのえた。このすきに城を脱出しようとしたのだ。
あらかじめ老中の板倉から江戸へむかうことをひそかに告げられていた会津の松平容保、桑名の松平定敬両藩主と、老中酒井忠惇、大目付戸川安愛、外国総奉行山口直毅、目付榎本道章、医師戸塚文海、外国奉行支配組頭高畠五郎も旅装を身につけ、板倉とともに城の後門にむかう慶喜の後にしたがった。四ツ（午後十時）すぎであった。
門のかたわらに立つ衛兵が、近づく慶喜たちを眼にして、
「だれか」
と、声をかけた。
板倉が、
「御小姓の交替である」
と、答えた。

衛兵は、あやしむ風もなくかれらを通した。
板倉を先頭にかれらは人気のない町なかを西の方向に進んだ。行く先は、淀川ぞいの八軒屋であった。そこは伏見、大坂間を往き来する三十石舟の舟つき場で、昼間は客でにぎわい、旅籠が八軒あることからその名がつけられていた。
八軒屋につくと、岸にそって並ぶ旅籠からは灯がもれていたが、舟つき場はひっそりしていた。
慶喜たち一行が近づくと、長さ十間（十八メートル）ほどの屋根つきの舟に灯が見え、岸に舟主らしい男が立っていた。
板倉が近づき、男と短い言葉をかわすと、男が舟の者に声をかけた。舟乗りは四人で、かれらは腰をあげた。
一同は石段をおり、岸に接している舟の屋根の下に入った。
舟乗りたちは、艫におかれた苫莚を屋根にかけ、棹で岸をついて舟を川の流れの中に出した。鉢巻きをしめた舟乗りたちは、櫓を漕ぎ、舟は川をくだってゆく。
わずかにのぞいていた星の光も消え、川面は闇につつまれている。川ぞいの家々には灯もみえず、遠くで犬の吠える声がしていた。
慶喜たちは、無言で川面に視線をむけていた。
きびしい冷気が体をつつみこみ、慶喜は体をふるわせていた。川面を往き来する舟はなく、慶喜たちの乗る舟の櫓を漕ぐ音がしているだけであった。
出馬すると告げた言葉に歓声をあげて大広間を出ていった者たちの姿が、眼の前にうかぶ。かれ

らをあざむき、城をぬけ出して舟に乗って川をくだっている後ろめたさが、胸をしめている。もしも、急いで江戸にもどると言えば、血気にはやるかれらは憤激し、大混乱におちいる。それは戦場にも波及し、総くずれとなって多大な損害を生ずることになる。

この場合、ひそかに城をぬけ出し、江戸へむかうのもやむを得ぬ処置なのだ、と慶喜はみずからを慰めた。

川幅が徐々に広くなり、岸に近く葦の生えているのが見える。潮の香がしてきた。

前方にほのかに河口が見え、舟はその方向に進み、河口をぬけて海に出た。西北の方向から風が吹きつけていて波が押しよせ、舟は揺れた。海は暗い。

舟は、波に上下しながら舳先を東にむけ、安治川の河口にむかって進んでゆく。

河口には、砲台のもうけられた小高い山がある。上流から流れくだってきた土砂が河口付近に堆積し、船の航行に大きな障害となるため、天保二年（一八三一）に大坂の豪商などが経費を負担し、大規模な川ざらえがおこなわれた。翌年末には終了したが、さらった土砂を安治川河口に近い八幡屋新田につみ上げた。小山であったが、天保年間におこなわれた土木事業であったので天保山と名づけられ、それが航行の目印ともなって目印山とも称されていた。安政元年（一八五四）、ロシア使節プチャーチンの座乗する軍艦が天保山沖に錨を投げ、大坂の町々の者を動揺させたので、そこに砲台がきずかれた。

京方面の情勢の緊迫化にともなって、榎本武揚指揮の幕府がほこる「開陽」をはじめ「富士山」「蟠龍」と輸送船「翔鶴」が大坂湾に入り、天保山沖に錨を投げていることが、大坂城にもつたえ

られていた。

老中の板倉は、慶喜を旗艦「開陽」に乗せて江戸に送る予定であった。しかし、板倉をはじめ随行の者たちは、だれも「開陽」を見たことはなく、その上、海上は闇につつまれ、その所在すらわからない。

板倉たちは、周囲に視線を走らせていた。

舟は、艦隊の艦船をさがしてうごきまわり、ようやく岸近くに碇泊している軍艦を見出した。

舟が艦に近づいたが、艦尾にかかげられているのはアメリカ国旗であった。

外国奉行支配組頭の高畠が、甲板に立つ乗組員に英語で声をかけ、やがて舷側に艦長が姿を見せた。高畠は、「開陽」の所在をたずね、艦長は、たしかに幕府の艦船を見たが、この闇ではどこにいるのかわからぬ、と答えた。舟は、艦の舷側についたまま揺れている。

艦長は気の毒に思ったらしく、とりあえず艦に移乗するようすすめた。

板倉たちは、途方にくれた。このような状態では、いたずらに闇の海上をさ迷うだけで、「開陽」を発見することはできそうにもない。それに寒気がきびしく、風邪気味の慶喜の身が案じられた。

板倉は、高畠と言葉をかわし、アメリカ艦に乗り移って朝を待つことにきめた。

高畠が艦長に、好意をお受けしたいと言うと、舷側に縄梯子がおろされた。高畠がまずそれにとりつき、つぎつぎに縄梯子をのぼって甲板にあがった。板倉の家臣が、乗ってきた舟の者に謝礼をわたし、舟の提灯の灯が安治川河口の方にもどっていった。

甲板に立ちならんだ慶喜たちの衣服を眼にした艦長は、高位の武家たちであるのを察し、高畠に

二、三の質問をした。高畠は板倉の意向をただした上で、将軍慶喜一行であることをつたえた。
艦長は驚き、慶喜を見つめ、一同を艦長室にみちびいた。乗組員に命じて葡萄酒と簡単な料理がはこばれたが、一同は軽く手をつけただけであった。
慶喜たちは、仮眠した。
夜が明け、薄明るくなった海上に日の丸の旗を船尾にかかげた艦船が碇泊しているのが見えた。その中の最も大型の艦が「開陽」にちがいなく、外国総奉行山口直毅が、それをたしかめるため米艦からおろされたボートでその艦におもむいた。
山口は、舷門に立つ士官を見あげ、
「この軍艦は、開陽であるか」
と、たずねた。
「いかにも開陽であるが、何用あってきたのか」
士官が、問うた。
山口は、
「私は外国総奉行山口駿河守（直毅）である。艦長に面談したい」
と、言った。
外国総奉行ということに驚いた士官が、副長の沢太郎左衛門につたえ、沢がすぐに舷門に出てきた。沢は、艦長榎本武揚とともに山口に会ったことがあり、すぐに山口を甲板にあげ、艦長室に通した。

沢は、一昨日、榎本が部下とともに上陸して艦にはおらず、自分が艦の責任者として残っていることを告げた。
山口は、
「ただ今、アメリカ軍艦に高貴の方がおられる。すみやかに当艦へ御移乗なされるので、貴君みずからお出迎えいただきたい」
と、言った。
「御随行の方は何人でしょうか」
「主たるものは私以外に八人である」
沢は、ただちに軍艦役とともに水兵十二人に銃を持たせ、ボート三艘でアメリカ艦におもむいた。
艦長室に入った沢は、そこに慶喜をはじめ会津、桑名両藩主と老中がいるのに驚き、理由をたずねると、山口は、
「くわしいことは開陽に行ってから話す」
と、言った。
沢は、慶喜らをボートに分乗させて「開陽」にもどり、慶喜を艦長室にみちびいた。
その時、一隻のイギリス国旗をひるがえした艦が、黒煙をなびかせて進んでくると、「開陽」と「富士山」両艦の間に錨を投げた。さらに他のイギリス軍艦も突き進んできて、「開陽」の船尾の方に停止した。イギリス艦では士官が望遠鏡で「開陽」をうかがい、さかんに両艦の間で信号をかわし、砲門を「開陽」にむけた。

イギリスは、生麦事件後、薩摩藩と平和協約をむすんで以来、軍事同盟に似た関係にあった。イギリス艦が「開陽」を威嚇する行動に出たのは、討幕をくわだてる薩摩藩との協調をしめす行為であった。

その動きにおそれをいだいた慶喜が板倉に、イギリス艦が「開陽」を襲おうとしているが、どのように防戦するかを沢に問うよう命じた。

板倉からその話をきいた沢は、

「万国の公法として、理由もなく発砲することは禁じられており、御懸念にはおよびませぬ」

と、答えた。

二隻のイギリス艦はなおも不穏な行為をくり返していたが、やがて抜錨して去った。

海上は荒れに荒れ、高波がはてしなく打ちよせてきていた。

その夜、会津、桑名両藩主と老中たちが艦長室に集まって話し合った。かれらは、慶喜を一刻もはやく江戸へもどしたい、と口々に言った。

翌朝五ツ（八時）、板倉が、士官たちと指揮所にいる沢のもとに行き、

「上様は、そうそうに江戸へもどられたい思し召しである。当艦をただちに江戸へむかって出帆させるように……」

と、言った。

その言葉に、沢をはじめ士官たちは顔色を変えた。艦隊が天保山沖に来ているのは、大坂城を海上からまもるためで、戦略上、その位置をはなれるわけにはいかない。

沢は、表情をこわばらせ、御命令には承服しがたいと述べ、

「開陽は、御存じのごとく旗艦であり、艦隊の全艦船を指図する立場にあります。もしも旗艦が去って万一海戦ともなれば、艦船は統制のとれない行動をとらざるを得ません。艦長が不在で、出帆について私に命令権はありません」

と、答えた。

士官たちは、無言で沢と板倉の顔を見つめている。

「上様の思し召しなのである。緊急を要するので、近くに碇泊している富士山艦に指揮権をゆずり、出帆の用意をするように……。それとも、榎本がいなければ、江戸への航海はできぬと申すのか」

板倉の言葉に、沢は、

「決してそのようなことはありません」

と、即座に答え、言葉をつづけた。

「海軍の規則どおりにいたしますれば、たとえ遠く外国までありましょうとも航海するのはたやすいこと。ただ、現在は戦時であり、艦長は、当然のことながら艦隊の戦略を今後どのようにすべきか、考えておられるはずです。それなのに、私の一存で本艦をこの場から動かすわけにはまいらぬのです。いずれにしましても、艦長がおもどりになるまでお待ちいただきたい」

よどみない沢の答えに、板倉は口をつぐみ、艦長室にもどっていった。

しばらくして板倉は、沢をまねき、「富士山」艦の艦長を「開陽」に呼び寄せるよう指示した。

沢は承諾し、ただちに信号をおくり、「富士山」の艦長望月大象が、士官とともにボートに乗っ

て艦の舷側につき、甲板にあがってきた。
沢が板倉を老中だと告げると、望月は体をかたくして頭をさげた。
板倉は、「富士山」艦長の望月に対して、
一、ただ今より、「富士山」を指揮艦と心得、望月艦長は、艦隊の全艦船に命令をくだすこと。
一、沢は、これより「開陽」の艦長となり、ただちに出帆の用意をいたし、以後の艦隊のことは望月に一任する。
と、命じた。
これは、将軍慶喜の命令と心得よ、と板倉はつけくわえた。
望月は、沢と顔を見合わせ、かたく口をつぐんでいた。艦隊は、むろん総指揮者の榎本の判断によって行動するさだめになっていて、しかし、板倉は慶喜の命令であると言い、それにさからうことはできない。
望月は、かたい表情で沢とひそかに言葉をかわし、板倉の指示にしたがわざるを得ないという結論に達した。
望月は、板倉に腰を折って頭をさげると、士官とともに縄梯子をおりて待っていたボートに乗り、「富士山」にもどった。そして、甲板上に士官たちを集めて事情を説明し、「富士山」が「開陽」にかわって指揮艦になったことを信号で他の艦船につたえるよう命じた。
それを確認した「開陽」は、出帆の準備に入った。
その間、一月五日に大坂に入った榎本武揚は、鳥羽、伏見両方面の戦況がはなはだ悪いことを知

り、七日朝、大坂城に引きかえした。
その日の早朝、慶喜の側近として仕えている目付の西周（あまね）が、戦場からもどって城に入り、御目付部屋に行って帰ってきたことを報告しようとした。しかし、城内の者たちの顔は士気色をしていて、いぶかしんだ西に同僚の目付が、親指を立て、
「このお方は、昨夜、城をぬけ出して逃げられた」
と言った。
大坂城に入った榎本は、慶喜が江戸へむかうため城から脱出したことを知って大いになげき、戦さの勝敗がすでに定まったのか、と涙ぐんだ。
榎本は、御座所におもむいて書類、刀剣類をまとめ、それらを部下に軍艦へ送るよう指示して城を去ろうとした。
その時、勘定吟味役の小野友五郎（ともごろう）が、
「城の御金蔵に、古金十八万両がありますが、はこび出すことができず困っております。なにかよいお考えがありますか」
と、言った。
榎本は、
「それ式のこと、なんの苦労もいらぬ。私が引き受け持ってゆく」
と、金蔵に入った。
かれは、部下に命じて大八車五台を用意させ、人足を集めて多くの千両箱をのせた。送りこむの

は「富士山」で、大八車が淀川の舟の発着場八軒屋にむかった。

しかし、それらはかなりの重量で、大八車の動きは遅々としていた。市内には今にも戦さがはじまるという噂がもっぱらで、人足は落ち着かず、逃げ去ろうという気配を見せていた。

それを予測していた榎本は、

「もしも途中で逃げ去ろうとする者がいたなら、容赦なく首を刎ねよ」

と部下に抜刀させ、車を送り出した。

ようやく大八車の列が部下によって八軒屋につき、岸にもやっている三十石舟に千両箱を積みこませ、人足に賃金をはらって舟を出した。

舟は、風波の様子をうかがいながら翌八日、「富士山」にたどりつき、十八万両を艦内に積み入れた。

「開陽」は、出帆の準備をととのえたが、戦場にきているのに離脱して江戸にもどることはできない。士官たちは蒸気室に集まって協議し、そこに沢が入ってきたが、沢もかれらと思いは同じであった。

「艦長がいたなら、出帆できぬ理由をいろいろ考え出し、それを上様に申し上げたことと思う。諸君の考えはどうか」

沢の言葉に、士官の一人が、

「なにか艦に故障が生じていると申し立ててはいかがでしょう」

と言い、他の者は、

「烈風がやむ気配もないので、一応抜錨し、風がやむまで湾内を航行して時間かせぎをし、そのうちに艦長も帰艦なさるでしょう」

と言い、この意見に一同賛成した。

「開陽」は動きはじめたが、湾口に進むことなく、湾内をおそい速度で移動するだけであった。日が没し、五ツ（午後八時）になっても風はおとろえない。湾内を右へ行き左へ行っている艦は、反転して天保山方向にもどっていた。

その時、堺の方向に火の手があがり、士官たちは甲板に出て言葉をかわしながら見まもった。

板倉が、その騒ぎに甲板に姿をあらわし、沢の前に立つと、

「本艦は、湾内を動きまわっている様子。いかなるわけか。上様には、一刻もはやく江戸城へもどられることを切望しておられる。それとも風がはげしく、湾外へ出るのがおくれているのか」

と、きびしい口調でただした。

沢は、

「御不審はもっともでございます。実は、機関に少し気がかりのことがありまして、それで只今、試運転をしておる次第です。ようやく機関に欠点がないことがあきらかになりましたので、これより湾外に出る予定でおります」

と、やむなく答えた。

これによって、「開陽」は、舳先を湾口にむけた。

「開陽」が潮岬をまわると、強風が吹きつけ、それは勢いを増した。

蒸気を最大にして「開陽」は進んだが、船体がはげしくゆれて一時間に二里（八キロ）も進めぬまでになった。沢は、航進は不可能と考え、機関を停止させて風のままに艦をながさせた。

夜が明け、艦は風に押されてながれ、十日の暁七ツ（四時）には八丈島の北方五、六里の海域に達していた。

風がよわまり凪の状態になったので、沢は機関を始動させ、艦は相模灘にむけて航進した。

夜四ツ半（十一時）近くに江戸湾に入り、浦賀沖に錨を投げた。慶喜たちははげしい船酔いで、顔面は蒼白であった。

慶喜は、沢に二百両をあたえ、水夫全員に骨折りの褒美としてわたすよう指示し、沢は甲板に全員を整列させてそれをつたえた。

翌十一日、艦は浦賀沖をはなれて進み、五ツ（午前八時）に品川沖に達した。慶喜は、板倉をともなって「開陽」のボートで浜御殿に上陸した。慶喜の顔はどす黒かった。

御殿から慶喜が上陸したことが江戸城につたえられ、迎えにきた幕臣とともに慶喜は、言葉もなく騎馬で江戸城にむかった。

大坂に上陸していた榎本武揚は、慶喜が江戸にむかうため城をぬけ出し、さらに天保山沖に碇泊する艦隊の艦に乗ったことを耳にして驚いた。艦隊の総指揮者である自分が不在で、さぞ各艦の者たちはとまどっているにちがいなく、かれは艦隊を望見できる天保山に、部下をともなって急いでのぼってみた。

白波の立つ天保山沖には艦船が碇泊していたが、そのうちに旗艦の「開陽」が錨をあげるのが見えた。かれは、慶喜一行が「開陽」に乗って江戸にむかうにちがいない、と思った。

しかし、「開陽」は湾口に進むことはせず、岸和田の方向に舳先をむけた。かれは、航路をまちがえるはずがないと見まもっていると、しばらくして反転し、今度は西宮の方に近づいてゆく。あたかも試運転をするようなうごきで、かれはいぶかしみ、いら立った。

慶喜が江戸にもどるのは、態勢をととのえて一挙に薩長両軍に反撃をしようと企てているはずで、一刻もはやく江戸へ慶喜を送らねばならぬ、と思った。

かれは落ち着かず海面を見つめていたが、ようやく「開陽」が湾口に舳先をむけ、湾外に出てゆくのが見えた。

安堵して山をおりたかれは、翌日、伏見、鳥羽方面の戦況を見ようとして馬に乗って進んでいったが、戦場から傷ついた兵がぞくぞくと街道をやってくるのに出会い、息をのんだ。その姿にかれは、幕府軍が総くずれになったことを直感し、急いで道を引きかえして十二日朝、「富士山」に帰艦した。

「富士山」の艦長望月大象は、慶喜一行が「開陽」に乗って江戸にむかったことを告げ、榎本はこれで鳥羽、伏見方面の戦さの大勢が完全に決したことを知った。

かれは、全艦船引き揚げを決断し、望月に命じてそのための信号を送らせた。艦船は、ただちに出航準備をととのえ、それぞれ錨をあげてつらなって湾口にむかった。外海に出た艦船は、黒煙を吐きながら北上し、二日後の午後に江戸湾に入って、品川沖に錨を投げた。

その間に大坂城をめぐる動きは、まだつづいていた。

慶喜から鳥羽、伏見方面の兵を大坂にしりぞかせる内命をうけた若年寄の永井尚志は、前線を家臣とともに馬で走りまわって諸隊にそれをつたえ、翌七日早朝、大坂城にもどった。

大坂城に入った永井は、城内が混乱をきわめ、あわただしく城を出てゆく者もいるのに驚いた。かれは城中の者から、昨夜、慶喜が老中らとともに城からのがれ出たことを聞いて、茫然とした。慶喜が江戸にもどる意向であることに賛成はしたが、自分が戦場を走りまわっているうちに城からぬけ出したことに裏切られたような思いがした。

頭の中に、さまざまな思いがかけめぐった。戦場をまわってきた永井は、戦さの勝敗が確実にきまったことを知り、慶喜が城を脱出したこともあって兵をすみやかに撤退させることに全力をそそぐべきだ、と考えた。

かれは、ただちに下知をくだし、戦場から大坂城にしりぞいてくるおびただしい将兵に、すぐに城外にのがれ出るよう指示した。

これによって一万以上の兵が、その日から翌日にかけてあわただしく城を出ていった。その撤退の速度は驚異的で、それを見まもる永井は、最後まで城にとどまって全軍を城から退去させることにつとめた。城から出た幕府軍の将兵は、主として紀伊方面にのがれ、そこから船に乗って東へとむかった。その逃避行についても、永井は紀州藩と緊密な連絡をとっていた。

また、大坂から生駒山の暗峠をこえて幕府の直轄領である奈良方向に落ちのびていった者も多かった。かれらは徒歩、または舟を使って四日市方面にのがれ、そこから東海道を江戸にむかった。かれらの撤退が終了したのは、二月に入ってからであった。

慶喜は、大坂城を脱出する折に尾張、越前藩主あてに、城を両藩主に託したいという依頼状をみずから書き、目付の妻木田宮を城中にとどめ、両藩主への城の引き渡しの任を命じた。また、朝廷へも同様の内容の上申書を記し、妻木に託した。

慶喜が老中らと城をひそかにぬけ出した翌日、妻木は、尾張、越前両藩の重役に書状を送り、城中にまねいた。しかし、重役たちは姿を見せず、代わりに越前藩士一人が馬で城にやってきた。

妻木は、慶喜の両藩主への依頼状と朝廷に対する書面をしめし、

「城をお受け取りねがいたい」

と、言った。

思いもかけぬ申し出に、藩士は驚き、藩にもどって指示をあおぐといって、そうそうに城を出ると、尾張、越前両藩主のいる京にもどっていった。

全く無人となった城は、物音もせずひっそりしていた。寒気がきびしく、妻木は従者に大きな火鉢に炭火を熾させ、そこに身をかがめてふるえていた。

翌日、三名の尾張藩士が城にやってきて、妻木は、かれらと対座した。任務をはたして城から出たかったが、藩士たちは、藩主の意向をきくことができないので城を受け取ることはできず、追って指示があるまで城内にとどまる、と言った。

妻木は、失望し、夜は酒を飲んで就寝した。

翌九日早朝、砲車をひいた長州藩の一隊が城にせまり、幕府軍がいないことを知っているらしく、威嚇するように数発の砲弾をはなった。指揮者は、佐々木次郎四郎であった。

妻木は、尾張藩士に白旗をふらせ、大声で、
「城はすでに越前、尾張両藩に引きわたすことが決定し、幕府軍はすべて撤退している。私は目付の妻木田宮と申す者だが、私一人がいるだけで、城内に入り話をきいて欲しい」
と、叫んだ。
城の内外は森閑としていて、妻木の言葉を信用した佐々木は、兵を城外にとどめて部下二人をともない、城に入って妻木と対面した。
妻木は、かたわらに立つ越前、尾張両藩士を紹介し、城はすでに両藩に引きわたすことになっていると告げ、さらに慶喜は城を出て江戸にむかった、と言った。
佐々木は、けわしい眼を妻木にむけ、
「引きわたすことになっているというのに、なぜ城にとどまっているのか」
と、するどい口調でたずねた。
妻木は、
「両藩から受領する正式の使者がくるのを、待っているのだ」
と、答えた。
越前、尾張の藩士も、それに相違ないと口添えをした。
その時、本丸の大台所から火を発し、たちまち四方に炎がのびた。
佐々木についで尾張藩士たちとともに城外に出た妻木は、
「後のことは両藩士と話し合って欲しい。私の任務は終わった」

と、佐々木に告げ、城を立ち去った。
消火にあたる者はなく、火勢はつのって城は燃えるにまかせた。壮大な火炎が城をつつみ、本丸をはじめほとんどすべてが焼きつくされた。

江戸城

慶喜が江戸にもどったことは、町触れによって市中につたえられた。

その触れには、今後の情勢次第ですみやかに慶喜は大坂へ引きかえす、と記されていた。それは、慶喜が態勢をととのえ反撃するであろうという意味がこめられていた。

慶喜は、風邪気味の上に江戸にもどる途中、海は荒れて船酔いにかかり、顔は土気色で体調は悪かった。

江戸城に入った慶喜は、

「長らく京にいたので、脂肪がぬけて骨ばなれしている。霊岸島の大黒屋から鰻の蒲焼きを取りよせるように……」

と、奥詰の者に命じ、二分の金をわたした。

早速、大黒屋へ奥詰の者がおもむいたが、時季はずれで一両でなければ入手できず、自らの金をくわえてそれを買いもとめ、城にもどって食膳にそなえた。

また、鮪の刺し身を食べたいとの指示があり、魚問屋から鮪が西丸御膳所におさめられたが、食中毒をおそれて刺し身を食膳にあげた例はなく、そのため刺し身を味噌づけにし、あらは葱とともに煮た。

それらのことは、家臣の間につたえられた。

その間に朝廷では、一月七日、在京の諸大名らをまねいて、慶喜追討の令をつたえていた。慶喜が朝廷につつしんでしたがうと言っているのは大きないつわりで、大坂城へ退いたのも陰謀であり、その証拠に桑名、会津両藩兵を進撃させ、戦争を仕掛けた。慶喜の反逆はあきらかで、ここに慶喜を追討するものである。もしも、慶喜側につく者があれば、賊徒、朝敵として厳罰に処する。

このことを十分に考慮し、どのようにすべきか、明日五ツ（午前八時）までに書面を以て回答するように……。

これについて、翌日、在京の諸藩は、朝廷にしたがって追討のため全力をつくすという書状をこぞって提出した。

これによって朝廷軍は、出撃態勢をととのえた。

二月九日、天皇は、有栖川宮熾仁親王を東征大総督に任じて錦旗二旒をあたえ、親王は兵をひきいて東海道を進み、三月五日に早くも駿府（静岡市）に進出した。参謀は、薩摩藩士西郷隆盛であった。

その他、朝廷軍は、東山道、北陸道、山陰道にも進み、沿道の諸藩は抵抗することもなく、日本の西半分をその勢力下におさめた。

慶喜の突然の帰城は、幕臣たちにとって予想もしなかったことであった。かれらは大きな衝撃をうけ、言葉もなく血の気の失せた顔を見合わすばかりであった。

それ以前に、鳥羽、伏見で戦いにやぶれたことは江戸城にもつたえられていたが、幕府軍は薩長両藩を主力とする朝廷軍よりはるかにまさる兵力で、必ず現状を打開し、戦局は有利に展開すると信じてうたがわなかった。慶喜が大坂城にいることが、なによりも心強く、慶喜が出馬すれば全軍の士気はふるい立ち、たちまち反撃に出て薩長軍を敗走させることが期待された。しかし、慶喜は、多くの将兵を戦場にのこして、あたかも逃げるように大坂城をぬけ出し、軍艦であわただしく江戸にもどってきた。その行為は、幕臣たちにとって理解しがたいものであった。

かれらは、慶喜が江戸城にもどってきたのは、態勢を立てなおして薩長両藩の軍勢に対しようとしているからだと考えていた。

かれらは、所々に寄り集まって言葉をかわしていた。

憤りは薩長両藩に集中し、朝廷をたくみに巻きこんだのは謀略であり、主戦派の公卿をそそのかして討幕令まで出させている。両藩はあくまでも幕府を完全に潰滅させることをくわだて、それには撤底抗戦する以外にない。徳川家の恩をうけていた譜代の諸大名が、朝廷軍にくわわっていることに憤激する声も高かった。それは、薩長の策略によって朝敵となることをおそれた結果だが、幕府をたおす軍勢と行動をともにしていることは大義にそむくもので、断じて許しがたい、と激昂した。

死力をつくして戦うという声が飛びかい、大坂城から逃げ帰った慶喜を、臆病で卑劣だとののしる者もいた。かれらは、帰城した慶喜が沈黙をまもっていることをいぶかしみ、大いに不満であった。

慶喜は、側近の者も近づけず、あれこれと考えをめぐらせていた。風邪の症状はうすらいでいたが、端正な顔は青ざめていた。かれは、あくまでも朝廷に恭順の姿勢をとるべきだ、と考えていた。大坂城をひそかにぬけ出したのも、刃むかう意志が少しもないことをしめすためで、かれは、幕府の存続が無理であるのを感じていた。

かれの頭に、静寛院宮と号している和宮の顔がうかんでいた。

和宮は、仁孝天皇の皇女で、生母は権大納言橋本実久の娘経子である。弘化三年（一八四六）閏五月十日にうまれ、和宮と名づけられた。

和宮は、六歳の時、仁孝天皇の猶子となっていた十七歳の有栖川宮熾仁親王と結婚の内約をむすばれ、万延元年（一八六〇）に挙式が予定されていた。それは慶賀すべきこととして婚約の準備が推しすすめられ、安政四年（一八五七）十二月には、初めてお歯黒をつける祝いの儀式がおこなわれ、二年後に十四歳となり、明年の冬に入輿（結婚）のことがさだめられた。

その頃、幕府は、朝廷の許可を得ることなく日米通商条約に調印するなど、鎖国政策を本道とする朝廷との関係はきわめて悪化していた。幕府内には、それを深く憂える者が多く、融和させる政策をとるべきだという意見がたかまった。

かれらの間に、将軍と皇女を結婚させるという案がうかび上がった。それが実現すれば朝廷との関係は一挙に好転し、諸外国からの圧力をうけている幕府政治も安泰になる。その案がゆるぎない政治方針となり、将軍家茂と同じ十五歳である和宮の御降嫁を請願するうごきとなった。

和宮の兄である孝明天皇は、思いもかけぬ幕府の要請に驚いた。朝廷との関係を修復したいとね

がう幕府の熱意を感じながらも、すでに熾仁親王との婚儀が内定していることから、これを受け入れることはしなかった。しかし、幕府はこれにもめげず要請を強くくりかえし、困惑した天皇は、公卿の最大の実力者である岩倉具視（ともみ）の意見をもとめた。

岩倉は、鎖国政策をかたくまもるべきだ、という一貫した考えを持っていて、天皇の御下問に、

「今後、幕府が外国と条約をむすぶ折には、必ず朝廷の許可を得ることを確約させるべきです。それを条件として、和宮様の御降嫁要請を受けいれられるのが、よろしいと存じます」

と、答えた。

岩倉のこの言葉で、天皇の気持ちは大きくゆらいだ。

幕府が外国勢力をことごとくはねのける攘夷政策をとるなら、請願をいれぬでもないとして、幕府に対し和宮の降嫁をどのように実施するのかを下問した。

天皇の御下問に対して、幕府は和宮降嫁が容認される感触を得たとして、天皇にあらためて上奏文を呈上した。幕府は、今後、七、八年から十年までの間に武力を充実させ、外圧をはねのけて鎖国政策をつらぬく、と確約した。これは、もとより日本をとりまく国際情勢からみて不可能に近いことであったが、なんとしてでも御降嫁を実現させたいという幕府のあせりによるものであった。

これによって天皇は、幕府の要請をうけることをきめ、和宮に降嫁するようすすめた。思いがけぬ事柄に、和宮は驚き、たとえ尼になるとも断じてお受けできませぬ、と言上した。天皇は、さらに使者を立てて降嫁するようすすめたが、和宮はかたくなに拒否した。

天皇は、苦しい立場に立たされた。幕府に対して外国との交渉拒絶の誓約まで求めた天皇としては、今になって降嫁を拒絶するわけにはいかない。天皇の側近たちは、和宮を翻意させようと、あれこれはたらきかけたが、効果はなく、天皇は、あくまでも固辞すると言うのなら、自分は退位して譲位する以外にない、と和宮につたえた。

その言葉に、和宮の気持ちは大きくぐらついた。夜もほとんど眠れぬほどはげしく悲しみ嘆きながらも、やむなく降嫁することを天皇につたえた。

その折、降嫁の条件として結婚後もすべてこれまで通りの御所風の生活にしたい、と言上した。

和宮は、天皇への書状に、

「天下泰平の為め、誠にいや〳〵の事、余儀なく御うけ申し上げ候事」

と、苦悩の深さをうったえた。

天皇の命令によって、有栖川宮家に使者が立てられ、婚約解除がつたえられて有栖川宮家は諒承（りょうしょう）した。

万延元年（一八六〇）十二月二十五日、結納（のうさい）を意味する納采の儀がおこなわれ、年が明けた。

その折、江戸へむかう時期について、和宮は、父仁孝天皇の年忌明け後である明春以後を強く主張した。しかし、朝廷との融和を一刻もはやく実現させたい幕府は、さまざまな理由をあげて年内を強く望んだ。婚儀がのびれば、尊皇攘夷の志士による反対運動で、思いがけぬ障害が起こることを恐れたのである。

円満解決をのぞむ天皇は、和宮をなだめ、結局、年内に江戸へむかうことで結着をみた。

和宮は、文久元年（一八六一）十月、京を発して江戸にむかうことが決定した。

和宮の降嫁は、幕府が朝廷に対してなにか事が起こった時に人質にしようとくわだてたものだという説がながれ、過激な尊皇攘夷派の者が、和宮一行を途中で待ちぶせして京へ引き返させるという噂がもっぱらだった。そのため、江戸へは東海道を避けて中山道を行くことになり、十月二十日、京を出発し、中山道を進んだ。

行列は、異例の大がかりな規模で、諸藩の者多数が警護し、公卿や侍女の乗る駕籠もつらなってすすんだ。見も知らぬ江戸への旅は苦痛であったが、あざやかな紅葉にいろどられた沿道の風光が、宮にとってわずかな慰めであった。

十一月十四日、行列は板橋宿に入り、翌日、江戸九段の清水邸に到着した。そこで旅の疲れをいやし、十二月十一日、再び行列がくまれて江戸城本丸の大奥に入った。

京から随行してきた公卿たちは京にもどり、翌二年二月十一日、婚儀があげられた。

大奥での和宮の生活は、決して安らいだものではなかった。

降嫁の条件として、結婚後もすべて御所風にするとあったが、それはたちまちやぶられた。あくまで御所風にという要望もかなわず、進退作法をはじめ結髪、服装なども、武家風の大奥の仕来りにしたがわねばならなかった。

侍女に対する嫌がらせも多く、和宮が初めて夫家茂の養母である天璋院に対面された時の冷遇は、和宮と侍女たちを嘆かせた。天璋院は上座について敷物にすわり、和宮は敷物もない下座にすわった。嫁、姑としては当然のことながら、皇女である和宮に対して礼を失したものであった。御所風の礼式にしたがえば、天璋院が姑の立場にあるとはいえ、上席につくことなく和宮と対等の席につき、二人とも敷物にすわるべきであった。

このような扱いは、朝廷の権威をないがしろにするものと解された。

和宮と家茂の結婚生活は形式だけのもので、それもわずか五年で終わった。家茂は慶応二年（一八六六）、長州藩征討のため大坂城にとどまっている間に、脚気にかかって死亡した。二十一歳であった。

和宮は、恒例にしたがって髪を落とし、静寛院と号した。さらにその年十二月、兄孝明天皇崩御の報せをうけ、和宮は嘆き悲しんだ。

夫家茂につぐ兄孝明天皇の死によって、和宮は孤立感をふかめ、悶々として日をすごし、侍女たちは宮の身を気づかった。

その間に幕府は、朝廷に約束した攘夷鎖国の誓いをやぶって、新たにプロシヤ、スイス、ベルギーと通商条約をむすび、朝廷を激怒させた。その後、攘夷論が時代の移り変わりにそぐわぬという認識がたかまり、朝廷もそれらの条約締結をみとめ、かたくなに主張していた鎖国政策もみずから放棄するようになっていた。

このような対外政策の急激な変化で、和宮降嫁の根本的な意義は、全く失われていた。

家茂の死によって和宮が江戸城にとどまる必要はなくなり、京にもどって皇族としての生活に復帰させるべきだという意見がたかまった。そのため、慶応三年（一八六七）十一月に朝廷と幕府の間で話し合いがおこなわれ、明年正月に和宮を京にもどすことが決定した。

和宮は安堵し、宮の周辺で京に出発する準備がはじめられた。

しかし、朝廷軍と幕府軍の間で情勢がにわかに緊迫化し、正月三日、鳥羽、伏見の戦いが開始された。それは、和宮の京へもどることを不可能にするもので、和宮も侍女たちも絶望感にとらわれていた。

慶喜は、和宮が降嫁するまでのいきさつを熟知し、京をはなれて江戸へ来たことに同情の念をいだいていた。大奥とのあつれきも耳にして和宮の心情を思い、さらに家茂の死によって落飾し、ついで兄孝明天皇の死にあった悲しみも耳にしていた。鳥羽、伏見の戦いで京にもどる道を断たれ、大奥にとどまっている宮の悲運を思った。

江戸城にもどった慶喜にとって、皇女である宮の存在は貴重なものに感じられた。それは、朝廷に通じる唯一の綱で、それにすがれば自分の恭順の意を朝廷につたえてもらえるかも知れない。他に思いつく方法はなく、慶喜は和宮に会って嘆願しようと思った。

しかし、たとえ将軍の身であるとは言え、直接会いたいと申し出ることは礼を失するものであり、まず和宮の侍女に会い、和宮へ取りついでもらおう、と考えた。かれは、ひそかに側近の者を呼び寄せ、和宮が信頼している侍女はだれかと問い、家臣は、侍女錦小路（にしきのこうじ）がその一人だと答えた。

慶喜は、まず錦小路に会おうとして、家臣にその旨を錦小路につたえさせた。

錦小路は申し出に応じ、慶喜の前に手をつき挨拶（あいさつ）した。錦小路の顔には、大坂に行っているはずの慶喜が、眼の前にすわっていることに驚きの色がうかんでいた。

慶喜は、鳥羽、伏見の戦さが利あらず、大坂からもどった事情を述べ、和宮にお頼みしたいことがあるので、会うことを取りついで欲しい、と頼んだ。

錦小路は、受諾し、それを和宮につたえた。

宮は、慶喜の突然の帰城に驚き、朝敵とされるような行為をしたことも考えられ、会うことを拒絶した。

和宮の悩みは、大きかった。

嫁いだ徳川家は、天皇の名をもって討伐される対象となっている。そのような徳川家と行動をともにすれば朝敵となり、逆に徳川家に背をむければ婚家に対する義理を欠く。いずれにもくみすることはできず、窮極の折には、ひそかに自害をも考えていた。

和宮に会うことをこばまれた慶喜は、前々将軍家定（いえさだ）の夫人である天璋院の力を借りようと思った。天璋院は、和宮の義母で、和宮を説得してもらおうと考えたのである。

錦小路に会った日の夕刻、慶喜は天璋院のもとを訪れた。

天璋院も、慶喜が江戸城にもどっていることに驚き、慶喜と対面した。

慶喜は、鳥羽、伏見で戦さがはじまり、そのまま大坂城にとどまっていれば、あくまでも朝廷軍と対戦するように思われる恐れがあるので、大坂城をぬけ出して江戸城にもどった事情を詳細に述べた。

これまでの経過から考え、このままでは朝敵とされる恐れがあり、自分としては朝廷の意のままにしたがう気持ちであるので、皇女である和宮のお力にすがりたい。なにとぞ宮に会えるようとりなしていただきたい、と懇願した。

天璋院は、やつれきった慶喜の顔を見つめ、無言でうなずいた。

天璋院は慶喜の願いを和宮につたえ、慶喜に会ってやって欲しいと頼んだ。

和宮は、悩みもだえた。慶喜は朝廷から追討される朝敵になっていて、それに加担すれば、亡き父である仁孝天皇への不孝となる。徳川家か、朝廷か。和宮は苦悩し、義母からの頼みをこばむわけにもゆかず、翌日、慶喜に会うことを承諾する旨を天璋院につたえた。

天璋院からの連絡をうけた慶喜は、その日の九ツ（正午）に和宮のもとを訪れた。

慶喜は、京でのこれまでの経過について詳細に説明した。

大政奉還を奏上し、それを朝廷はみとめたが、その後、十二月九日に王政復古の大号令が発せられた。その内容は、思いがけぬ苛酷なもので、慶喜の官位をとり上げ、幕府所有の領地の大半を差し出すようにという。それは、事実上、徳川家をおとりつぶしにするもので、在京の幕臣らは憤激し、そのまま戦争に突入する恐れがあった。そのため慶喜は、みずから京から大坂城にしりぞいた。

正月一日、尾張、越前両藩主が大坂城に来て、慶喜が朝廷と協議するため京にくるようながした。それによって、三日、会津、桑名両藩兵を先導役として京にむかおうとしたが、突然、薩摩藩の陣営からの砲撃をうけ、それがきっかけで全面戦争となった。自分としては、朝廷に刃むかう意志はみじんもなく、朝敵の汚名をこうむることは断じて避けたいという気持ちから、大坂城を脱出して帰城した。

「なにとぞ、朝廷のお怒りをやわらげて下さるよう、お力をお貸し下さい」

慶喜は、頭を下げた。

和宮は、無言で慶喜の言葉をきいていた。

翌日、慶喜は、さらに天璋院を通じて、みずからの退隠と後継者の選定、そして謝罪を朝廷に頼んで欲しいと和宮に懇願した。

これに対して、和宮は、退隠と後継者えらびは公事であるから自分の関与すべきことではない、と拒絶した。和宮は、あくまで公事に立ち入ることなく、一線を画すべきだと考えていたのである。

謝罪のことのみ、和宮は引き受けた。

翌日、慶喜は、天璋院の同席をお願いして和宮に会い、謝罪嘆願の方法について話し合った。

和宮の生母の兄である公卿の橋本実麗（さねあきら）の子実梁（さねやな）が、朝廷軍の指揮者として京を発し、兵をひきいて東海道を進撃中という報がもたらされていた。和宮は、実梁と気心が通じていて、和宮の侍女をその陣営におもむかせ、和宮から橋本父子への書と、慶喜自身の朝廷に対する謝罪嘆願を持参させることになった。

和宮は、一人で部屋にとじこもって橋本父子への書状をしたためるため、筆をとった。橋本父子への和宮の書状の要旨は、左のようなものであった。

徳川家が朝敵の汚名をこうむり、お取りつぶしになるのは、私にとってまことに辛（つら）く、せめて家名が立ちますよう、私の命にかえても願い上げます。もしも、朝廷軍が江戸に入ってお取りつぶしになるような場合は、私も徳川家の滅亡を見るのは堪えられず、その折には死を覚悟いたしております。なにとぞ、哀れと思（おぼ）し召され、徳川家の家名が存続されますようお願い申し上げ、それをお聴きとどけ下されば、私はもとより一門の端々まで、朝廷の御恩をありがたく思います。

このような書状をしたためた和宮は、同時に提出する慶喜の嘆願書にも再三修正するよう求め、

すべて手落ちのないよう心がけた。

使者にえらばれたのは、和宮のおそばに仕える土御門藤子であった。

藤子は、陰陽頭の土御門晴親の娘で、降嫁のため江戸におもむく和宮に随行してきた、側近の筆頭であった。

藤子は、旅装をととのえて一月二十一日に江戸を出発することになったが、慶喜はとくに藤子をまねき、

「私の進退は、すべて朝廷の御意向のままにしたがう。もしも切腹せよとの御命令ならば、切腹いたす。その旨を、なにとぞつたえて欲しい」

と、言った。

藤子を乗せた乗物は、江戸城を出た。警護の者とともに侍女をしたがえ、乗物は東海道を西にむかった。

その間に、和宮の母の兄の子である橋本実梁は、先鋒鎮撫総督として東海道を兵をひきいて進み、一月二十三日に伊勢の四日市につき、そこに本営をもうけた。

四日市の近くには、会津藩とともに幕府軍の先鋒として、鳥羽、伏見の戦いで朝廷軍と戦った桑名藩の居城があった。実梁は、桑名藩との戦いを覚悟していたが、藩主松平定敬の世子万之助が、使者を実梁のもとに送り、みずから本営に来て降伏状を提出した。桑名藩は、朝敵となることを回避したのである。

実梁は、これをゆるして万之助を幽閉し、桑名城に入って、そこに滞陣していた。

藤子は東海道を進み、二月一日に桑名城についた。道中、藤子をはじめ女たちの旅は珍しがられ、兵の充満する桑名城でも好奇の眼がそそがれていた。

土御門藤子は城内に入り、橋本実梁に会って和宮の書状と慶喜の嘆願書を提出した。

実梁は、和宮の書状を読んでひどく心を打たれた。そこには徳川家存続をねがう切々とした心情がつづられ、朝廷と徳川家の板ばさみになっている苦悩の深さがにじみ出ていた。

その書状は、実梁と父実麗あてになっていたが、実梁は、直接朝廷に訴えるのが当を得ている、と思い、藤子に、これより京におもむいて和宮の書状と慶喜の嘆願書を朝廷に提出するようすすめた。

藤子は諒承し、警護の者にまもられて桑名から京におもむき、公卿の万里小路博房を通じて和宮の書状と慶喜の嘆願書を朝廷に提出した。

公卿が一室に集まり、それら二通の書状を回覧して協議した。

結論を得た公卿の代表人物である岩倉具視は、別室に待つ藤子に対して、

「慶喜公が誠意をもって恭順謝罪するならば、徳川家の存続も不可能のことではない。それを和宮様におつたえするように……」

と、言った。

藤子は、その言葉を得て京をはなれ、二月晦日に江戸にもどって和宮に復命した。

岩倉ら公卿はこのような考え方をしていたが、朝廷軍の中心である薩摩藩は、徹底して慶喜を断罪すべしという強硬な姿勢をくずさなかった。

武家参謀の西郷隆盛は、同藩の大久保利通にあてた書簡で、

「慶喜が退隠したいなどという嘆願は、甚だもって不届き千万。なんとしてでも切腹させねばならぬ。和宮様もやはり賊徒にくみして、慶喜を退隠させればすむと思っているようだが、断乎追討しなくてはならぬ」

と、書き送った。

大久保も強硬論者で、親しい藩士にあてた書簡で、慶喜が和宮にすがって謝罪の嘆願書を提出したことについて、

「まことにあほらしきこと、問題外としか言いようがない。反逆の罪をおかしたことはあきらかで、退隠したいなどとは愚かしきかぎりである。天下の大罪人であるのだから、切腹してしかるべきである」

と、記している。

このような強硬論があったが、和宮の嘆願も無視できず、徳川家の存続は一応認めてもよいという空気にかたむいた。

江戸城内では主戦論が飛びかい、東海道をはじめ諸街道を朝廷軍が進んでくる報が、つぎつぎに早馬でもたらされていた。それと一戦まじえるという声が支配的で、軍議がさかんにおこなわれていた。

そのような混乱の中で、慶喜の真意は不明であった。天璋院についで皇女和宮と会ったらしいという話ももれていたが、それがどのような意味があるのかつかみかねていた。

大坂城からもどってきた慶喜がなにを考えているのか、態勢をととのえて迫ってくる朝廷軍を迎え撃つと予測されていたが、そのような動きはみられない。慶喜は側近の者も近づけることなく、奥座敷にこもったままであった。

陸軍総裁勝安房守はひそかに、慶喜が、朝敵の汚名をこうむることを恐れて戦う意志がないのではないか、と考えていた。家臣たちは決戦を覚悟し、慶喜の出馬を強くねがっているが、慶喜がそれをうけいれるかどうか、実情を知る必要があった。

勝は、慶喜に拝謁したいと申し入れ、奥座敷におもむき、平伏した。

朝廷軍が江戸にせまっているという報が相ついでもたらされていることを報告し、

「上様は、それにどのように対処なされるおつもりか、それをうかがいに参上いたしました」

と、率直にたずねた。

慶喜の顔に動揺の色がうかび、勝の顔に眼をむけていたが、長い沈黙の後、口をひらいた。

「大坂より引き揚げた時から、私の心はすでにきまっていた。朝廷に弓をひくなどということは、徳川家の将軍として断じてすべきではないと……」

慶喜は息をつくように言葉を切ると、

「私は、朝廷の御意向のままにしたがうつもりである。刃むかう意志などみじんもない。そのお裁きをつつしんで受けるつもりである」

と、答えた。

勝は、予測した通りと思い、

「上様のその御決意がいささかもゆるぎないものでございますなら、私ども家臣も上様の御意志通りにいたします。それでよろしいでしょうか」

と、念を押した。

「その通りである」

慶喜の言葉に勝は、

「その御決意をうけたまわり、私たちはそれに沿って命がけで尽力いたします」

と、答えた。

朝廷軍の先鋒が江戸にむかっているという報に、江戸の人心ははげしく動揺し、武士たちはこれを迎え討とうと殺気立っていた。

これを憂えた慶喜は、あくまでも朝廷に恭順の姿勢をしめすため上野寛永寺に行って謹慎し、朝廷の許しを得ようと考えた。

寛永寺は、二百四十三年前の寛永二年（一六二五）、江戸城を守るため比叡山延暦寺になぞらえて東叡山寛永寺として創建し、やがて幕府の墓所をかまえた。

根本中堂には、後水尾天皇の書かれた寛永寺の額をかかげ、代々輪王寺宮法親王が一山を管領した。慶喜が寛永寺で謹慎しようとしたのは、朝廷と縁の深い寺と考えたからであった。

二月十二日朝、慶喜は家臣にまもられて江戸城を出て寛永寺にむかった。途中、新撰組組長近藤勇が、組員をひきつれて見えかくれにこれを警護した。

慶喜は、まず寛永寺に参拝し、ついで二十二歳の輪王寺宮に拝謁した後、大慈院内の二間続きの

部屋に入った。

輪王寺宮は、弘化四年（一八四七）二月十六日、伏見宮邦家親王の第九子として生まれ、翌年、二歳にして孝明天皇の父仁孝天皇の猶子となった。慶応三年（一八六七）、孝明天皇の皇子睦仁親王が即位し、後の明治天皇となるが、輪王寺宮は睦仁親王の叔父にあたる。

安政五年（一八五八）、宮は十二歳で勅命により輪王寺宮の弟子（後継者）に任ぜられた。

輪王寺宮とは、明暦元年（一六五五）、江戸上野の東叡山寛永寺にいた後水尾天皇の皇子守澄法親王に賜った称号である。輪王寺は、下野国（栃木県）日光と上野にある天台宗の寺で、守澄法親王は、この東叡、日光両山の山主となったのである。

慶喜が拝謁した輪王寺宮は、日光の山主と徳川将軍家の菩提寺である上野寛永寺の山主を兼ねていた。名は能久で、法名を公現と称した。

寛永寺の山主となった宮は、仏道はもとより、儒者をまねいて学識を深めることにつとめ、書法をまなび、家臣筆頭の麻生将監を相手にして習字にはげんだ。

元治元年（一八六四）十二月には、親王の位の第一等をさずけられ、天台宗の寺の中心となって比叡山、東叡山、日光の三山を管領するようになった。

寛永寺

寛永寺に謹慎した慶喜は、あくまでも朝廷に恭順を認めてもらいたいと願い、月代を剃ることもなく、髪は乱れたままであった。

十二畳半の部屋から一歩も外へ出ることなく、粗末な食事を口にしてひたすら座りつづけていた。

慶喜謝罪のため使者を出して懇願した和宮は、その責任上、慶喜があくまでも朝廷に対して恭順の姿勢をとるように願い、そのため輪王寺宮に書を送り、慶喜が謹慎をくずさぬようきびしく監視して欲しいと要請した。

二月九日、勅命によって東征大総督に任ぜられた有栖川宮熾仁親王は、主力の軍勢をひきいて京を進発した。参謀には朝廷軍であることをしめすため二人の公卿が任じられたが、実戦の作戦にあたる武家参謀には薩摩藩士西郷隆盛、萩（長州）藩士広沢真臣、宇和島藩士林玖十郎をあてていた。

朝廷軍の当面の攻撃目標は、幕府のお膝もとである江戸で、武力侵入をはかれば江戸は大混乱におちいり、幕府に忠節をちかう武士たちはこれを迎え撃ち、江戸は戦場となる。朝廷軍の進撃は、朝敵と目した慶喜追討を名目としたものであり、それを避けるためには慶喜が朝廷の意のままにしたがうことを哀訴する以外になかった。

これまで、江戸にいる諸大名は、慶喜の処置を寛大にして欲しいと働きかけてきたが、それらはすべて効果がなく、それ以上嘆願することは大総督府の怒りをまねくおそれがあり、それらの動きは全くみられなくなっていた。

ただ一つ残っていたのは、朝廷と関係のある筋からの嘆願だけであった。そのため和宮が使者を大総督府に派遣したが、それも表立った効果はみられず、ただ一つ残されたのは皇族である輪王寺宮の働きかけだけで、輪王寺宮に慶喜に対する寛大な処置を朝廷に訴えてもらおうという動きが起こった。

まず、徳川家一門の一橋、清水両家とともに御三卿の一つである田安家の徳川慶頼が動き、供を連れて寛永寺におもむいた。

宮の執当である覚王院が応接し、慶頼は、慶喜の嘆願について宮のお力をお借りしたい、と申し入れた。

覚王院は、奥に入っていったが、しばらくしてもどってくると、

「せっかくのお申し出であるが、宮様にはお聴きとどけなく……」

と、宮が素っ気なく拒絶したことを伝えた。

勝安房守とともに慶喜の朝廷への嘆願に尽力しようと思っていたのは山岡鉄太郎（鉄舟）で、徳川慶頼が輪王寺宮への嘆願に失敗したことを知り、自ら寛永寺におもむき死を賭してお願いしようと思った。

山岡は、若年寄の大久保一翁の屋敷に行き、

「輪王寺宮様は皇族であり、一度や二度のお願いでは動くことはなさらぬはずです。明日から寛永寺に何度もうかがい、嘆願いたす所存です」

と、強い口調で言った。

大久保は、勝と同じく慶喜からあくまでも朝廷に恭順する覚悟であると打ち明けられ、慶喜のために力をつくすと約束していたので、山岡の決意を大いに喜び、かれをはげました。

翌日、山岡は同志三名をともない、寛永寺におもむいて、寺の僧に面会した。

山岡が用件を口にすると、

「宮様には、それをお聴きとどけになることはあるまい」

と、即座に答え、理由を説明した。

第一に、将軍家は代々、幕府の墓所がもうけられている寛永寺に礼をつくしてきたが、慶喜が将軍職につかれてから寺を軽んじる趣があり、それはいかなるわけか。

第二に、慶喜の父徳川斉昭（なりあき）は、水戸藩主として藩領内に廃仏令をしき、多数の寺院をとりつぶして僧侶を追放した。その処置に寛永寺の僧たちは激怒し、当時幼かった宮も深く憂慮した。

この二つのことから、宮は慶喜に不信感をいだいていて、慶喜のために動くことは決してなさるまい、という。

山岡は、

「たしかに水戸藩でそのようなことがあったときいておりますが、幕府は廃仏令など出したことはなく、上様（慶喜）は、毛頭そのようなお考えはお持ちではありません」

と、反論した。

また、慶喜が寛永寺を軽視してきたというのは、徳川家を相続して以来、京にとどまって多くの難題に直面し、それを処理するのに東奔西走したからで、決して寛永寺を軽んじていたわけではない、と弁明した。

しばらく黙っていた僧は、

「このことは重大事であり、皆と相談する」

と言って、寺の僧十数人を集めて協議した。

幸いにもかれらは、山岡の釈明を理解し、寺随一の権力者である執当職の覚王院に話を通す、と言った。

山岡たちは、覚王院の代理の僧に引き合わされ、願いの筋を切々と訴えた。輪王寺宮に京へおもむいていただき、慶喜が朝廷に恭順するという誠意を上奏され、朝廷の寛大な処置を得て下さるよう、執当職の覚王院におとりなしいただきたい、と述べた。

代理の僧は奥へ入っていったが、しばらくして出てくると、覚王院は、宮にそのようなことをお願いするわけにはゆかない、と言っているとつたえた。

山岡は、同志の三人に、

「やむを得ない。これより宮の御玄関に参上し、嘆願する以外にない。もしも、お聴きとどけなければ、切腹を覚悟し、なんとしてでもお願いする」

と言って、腰をあげ、内玄関から外に出ようとした。

その時、一人の寺つきの武士が会釈して通り過ぎたが、もどってくると、
「貴殿たちは、何用で当寺にこられたのですか」
と、たずねた。決死の覚悟をした山岡たちの顔つきをいぶかしみ、もどってきたのだ。
「嘆願の筋があって、参上したのである」
山岡は、答えた。
うなずいた武士は、
「それではお一人、私についてきて下さい。当寺にこられた理由をおききしたい」
と、言い、廊下を奥の方にもどってゆき、山岡はついていった。
一室に入った武士は、山岡と向かい合って座った。
山岡は、寺へ来た理由を述べ、執当覚王院の代理の僧に嘆願の筋をつたえたが、覚王院が宮に引き合わせることを拒絶されたので、
「もはやいかんともしがたく、われわれ一同宮様の御玄関に行き、死をもって請願することにきめました」
と、言った。
武士は、感服した様子でうなずいていたが、
「しばらくお待ち下さい」
と言って奥に入り、やがて出てきて、覚王院の返事をつたえた。
覚王院は、皇族である宮の御身分から山岡たちの願いをそのまま受け入れるわけにはゆかないが、

田安家の当主徳川慶頼をはじめ譜代大名からの願書が提出されれば、宮に話をお通しする、と言ったという。
山岡は、理にかなった返事をもっともと考え、三人の同志とともに寛永寺をはなれると、若年寄の大久保一翁の屋敷に急いだ。
報告をうけた大久保は喜び、ただちに使者を出して、田安家をはじめ譜代大名に連絡をとった。
田安家はもとより大名たちも即座に応じ、大久保の指示通りにそれぞれ願書をととのえ、翌日から翌々日にかけて大久保のもとにとどけ、それが覚王院に提出された。
朝廷軍の先鋒が東海道を進撃してきているという報せに、輪王寺宮は深い憂慮をいだいていた。朝廷軍が江戸に侵入してくれば、当然、幕府側との間に戦争が起こる。町民たちは逃げまどい、家も家財も焼きはらわれ、多くの者が命までうばわれる。寛永寺山主となってから十年近く、宮にとって江戸の町々は故郷に近いものになっていて、町の者たちに対する愛着心も強い。
そのような江戸の町が、むごたらしい戦火にさらされることは堪えがたく、宮は、勤行で読経するたびに、町々が惨状を呈することのないよう祈りつづけていた。そうした宮に、覚王院から田安家をはじめとした諸大名の願書が提出された。
宮は、それらの願書を入念に読んだ。そこには、むろん慶喜の謝罪嘆願を朝廷に働きかけていただきたいという趣旨が記されていたが、宮は、江戸の町、町民たちを戦火からまぬがれさせたいという気持ちが強かった。
朝廷は、慶喜追討令を発し、それを名分として大軍を江戸にむかって進撃させている。慶喜は朝

廷に恭順の態度をしめして寛永寺にみずからを幽閉させ、月代も剃ることなく、部屋にとじこもって日をすごしている。宮は、朝廷軍が慶喜を徹底的に追討することによって、幕府を完全に崩壊させようと企てているのを感じていた。

そのような意図はあっても、慶喜が恭順していることを朝廷が確実に認めれば、追討の意味はうしなわれ、江戸に武力侵入することはないはずであった。

宮は、慶喜の謝罪を朝廷に認めさせることが、江戸を救うことにつながるのを感じた。

「京に行く」

宮は、決断した。

江戸にいる諸大名が願書を提出してきたのは、自分以外に朝廷に働きかけのできる者がないからで、その願いをいれるべきだ、と思った。

輪王寺宮が京に行くことを覚王院からつたえきいた大久保は、ただちにそれを田安家の徳川慶頼をはじめ譜代の大名たちにつたえた。

かれらは大いに喜び、大久保は慶喜のもとに使者をさし向けてそれを報告した。慶喜は眼をうるませ、無言でうなずいていた。

大久保が慶頼と連絡をとりながら、宮の京行きの準備をととのえた。まず慶喜自身が謝罪書を書き、さらに慶頼と諸大名の嘆願書とともに輪王寺宮に持って行っていただく。それらの嘆願書が、まとめられて覚王院にとどけられた。

出発は、二月二十一日四ツ（午前十時）に定められた。

その日は曇天で風が強く、寒気がきびしかった。

宮は、定刻に寛永寺を出て御輿に身を入れた。随行者は、執当覚王院をはじめ僧たちと宮に仕える武士、医師と越後高田藩主榊原政敬で、かれらは御輿のかたわらにつき、さらに幕臣二名が警護のためつき従った。

御輿は進み、寛永寺の黒門をすぎると、そこには親藩の重役たちが集まっていて見送り、宮の京行きを知った町民たちが、道ばたに膝をつき頭をさげていた。

寛永寺と関連のある江戸の諸寺の住職たちが、つらなって品川宿まで見送り、夕方、宮一行は川崎宿についた。

翌日、宮は風邪気味であったので予定よりおくれて川崎宿をはなれ、その日は藤沢宿泊まりとなった。その夜は雨が降り、翌朝はあがっていたが、宮は一日休養をとり、翌二十四日藤沢宿を発して大磯宿の本陣小島才三郎宅についた。

翌日、その地をはなれ、四ツ半（午前十一時）近く小田原宿につき、本陣に入った。宮の到着を知った小田原藩主大久保忠礼が本陣に来て、宮に挨拶した。

夜になると、宮の風邪の症状がひどくなり、明日の出発はとりやめることがつたえられた。

宮は、そのまま小田原宿に逗留していたが、二十七日朝、東海道を進んできた朝廷軍の兵が沼津までできているという報せを受けた。早くもそこまできていることを知った宮は、覚王院と僧一人に、先鋒の指揮者に会って軍勢が箱根の山を越えぬよう要請することを命じ、二人は小田原宿をはなれて箱根の山道をのぼっていった。

宮は、朝廷軍の進撃の速さに恐れを感じた。箱根を越えぬようにという要請を、朝廷軍が承諾するかどうか。輪王寺宮は、ふとんの上に半身を起こして気づかっていた。

午後になって、覚王院と僧が本陣にもどってきた。宮は、覚王院から報告をうけた。

二人が箱根の道をのぼってゆくと、途中で薩摩藩の一隊に出会い、抑留された。隊長に宮の要請をつたえると、湯本村に行きつくまではとまることはできない、と言い、二人は道を引き返してきたという。

その報告通り湯本村に滞陣するのかと思っていたが、薩摩藩兵は、湯本村をすぎて小田原宿に入ってきたことを知った。

宮は、顔色を変えた。箱根の山を越えぬようにという要請を朝廷軍が無視したことに、朝廷軍のたけだけしさを感じた。

輪王寺宮一行が小田原に逗留していることを知った先鋒総督橋本実梁の使者と、薩摩藩士の参謀中村半次郎、長州藩の佐久間左馬太、肥前大村藩の長岡治三郎が本陣に来て、執当覚王院ならびに用人と対談した。

橋本の使者は、宮がなんのために京に行くのかを問うた。

覚王院は、朝廷にお願いしたいことがあると答え、使者はそれを諒承したが、武家が多く随従しているのはいかなるわけか、と詰問した。

覚王院は、警護のため派遣された武家である、と答えた。

問答がくり返され、使者は、総督の橋本実梁の指示があるまでは小田原にとどまること、さらに

随従の武家を江戸に帰させるようにと命じて、連れ立って本陣を出ていった。

使者は、終始見くだすような態度で、かたわらに座る中村たちも険しい眼を覚王院にむけていた。

宮は、対談の経過を覚王院からきき、暗い表情をして黙っていた。

翌日には、またも薩摩藩士が本陣にきて、今日の夕方には先鋒の兵多数が箱根路に入ってきて雑沓するので、宮一行は小田原にとどまるように、と告げ、去っていった。

先鋒総督の使者は、随行の武家を江戸に帰すようにと要求し、それにそむくと、今後、紛糾がおこる恐れがあり、それにしたがうことになった。

翌日、宮の意向をうけた覚王院は、武家たちにその話をし、諒承した武家たちは、本陣から出て江戸にもどっていった。

随従するのは、覚王院と僧のみとなった。

駿府城

警護の武家がつかず僧のみの随行する輪王寺宮の身を案じた小田原藩主は、身辺警備のため町奉行をはじめ側近の藩士たちに本陣の周辺を巡回するよう命じた。それによって藩士が門の傍らに立ち、夜には提灯を手にした奉行所の者があたりを巡回した。

三月一日、従者をしたがえた薩摩藩士が来て、先鋒総督の橋本実梁（さねやな）が参謀たちと近日中に小田原宿に入ることを告げた。当然、総督は幹部の者たちと本陣を宿所とするので、宮は他に移転して欲しいという。

橋本は公卿で、平時ならば皇族である宮にそのような要求などできるはずもないが、動乱の時でもあり、それもやむを得まいということになった。

覚王院は、警備にあたる町奉行に適当な宮の移転先をさがして欲しい、と頼んだ。奉行は、人を放って宮が泊まるのにふさわしい旅館をさがしまわってくれたが、いずれも朝廷軍の将兵が入っていて、適当なものはない。奉行はさらに宿場内をさがし、浄土真宗の正恩寺（しょうおんじ）を借りることになった。

つぎの日、覚王院は念のため寺におもむいて下見をし、明日、寺に移ることをさだめた。

しかし、翌日は夜明けからの大雨で移転を中止し、その日、雨の中を薩摩藩士が本陣に訪れてきた。また、厄介なことを申し入れにきたのかと思って覚王院が応接したが、藩士は、大軍をひきいて東海道を進んできた東征大総督有栖川宮熾仁親王（たるひと）が、明日、駿府（すんぷ）（静岡市）に到着するので、輪王寺宮に駿府にお越しいただきたい、と告げた。

小田原に押しとどめられて無駄な日を過ごしていた覚王院は、願ってもないことだと考え、即座に承諾し、その旨を宮につたえた。

翌朝、雨はやまず出立（しゅったつ）をためらったが、雨脚が細くなったので輪王寺宮一行は小田原をはなれ、箱根路にかかった。

御輿は山道を進み、やがて雨はやんだが、道には濃い霧が立ちこめていた。

輿丁（よてい）にかつがれた輪王寺宮の乗る御輿が、箱根の道をのぼってゆく。霧の中から増水した渓流の音がしていた。

湯本村をすぎた頃、前方の霧の中から銃をかつぎ槍（やり）を手にした兵たちが、多数姿をあらわした。小田原宿にむかう薩摩、長州両藩の兵たちであった。

かれらは、黒絹の羽織を着た輿丁にかつがれた立派な御輿が近づいてくるのに、視線を据えた。御輿の前後を上質の衣を身につけた僧たちが随行しているのを眼にし、かれらの間にささやきが起こった。輪王寺宮が京にむかおうとして小田原宿まできていることが沼津宿までつたわっていて、かれらは、静々と近づいてくる御輿に宮が乗っているのに気づいたようであった。

かれらの眼に、好奇の色がうかび、かれらは道いっぱいにひろがった。山道はせまく、御輿の通行はさまたげられた。

一人の兵が、急におどけたように歌いはじめ、それにつられて他の兵たちも大声でそれに和した。

〝雨の降るよな鉄砲玉の中へ、（京に）のぼる宮さんの気がしれぬ。とことんやれ、とんやれな〟

かれらは笑い、手をたたいてはしゃぐ。

覚王院をはじめ僧たちは、顔を青ざめさせ、立ちすくんだ。

かれらはおどけて御輿の扉に銃口をむけたり、槍の柄で小突くまねをしたりする。僧が無言で制しても、かれらの狼藉はつづき、ようやく御輿は、かれらの間をすりぬけて山道を進んだ。

僧たちの顔に血の気はなく、唇をふるわせ眼に涙をうかべている者もいた。

道はぬかるみ、僧と輿丁の足もとにははねがあがり、泥にまみれていた。

庄屋の米屋門右衛門方で休息をとる予定であったが、行ってみると兵が入りこんでいて立錐の余地もない。あわただしく出て来た庄屋が、兵たちが前ぶれもなく入ってきて、そのまま腰を据えている、と困惑したように言った。

御輿に眼をむけささやき合っている兵もいて、狼藉をはたらく恐れがあり、覚王院は家の前をはなれるように指示した。

近くの早雲寺に僧をさしむけると、そこには兵の姿がなく、御輿は寺の境内に入った。

住職が出迎え、宮をはじめ僧たちは寺内に入った。住職は宮に挨拶をし、茶菓を献じた。僧たちは、休息した。

御輿は早雲寺の境内を出て、畑宿にむかった。山道には、銃をかつぎ槍を手にした朝廷軍の兵たちが、つぎつぎに進んでくる。かれらは好奇の眼をむけ、御輿は道をさえぎられ、しばしば停止した。兵たちは優美な御輿に驚きの眼をみはり、近づくと扉を無造作にひきあげ、中をのぞく者もいる。

僧が狼狽し、扉をしめた。

御輿は、かれらの眼にさらされながら、停まることを繰り返して、ようやく昼食をとる予定の箱根権現の別当である金剛王院前にたどりついた。

しかし、そこにも多数の兵が入りこんでいて、無遠慮な眼をむけてくる。覚王院は、御輿をすぐに金剛王院前からはなし、近くの小さな旅籠の前につけ、そこで昼食をとった。

その頃から再び雨が落ちてきて、僧たちは笠をつけ、御輿は雨に打たれて山道をくだった。気温が低く、霧が濃くなっていた。

整備されていた道は、おびただしい軍兵の通過で荒れに荒れていた。砲の台車や荷車が数多く過ぎて、雨水をふくんだ道は轍の跡が乱雑に深くきざまれ、激しくぬかるんでいた。

御輿は、二交替の八人の輿丁にかつがれて揺れながらわずかずつ進み、夕刻に三ツ谷の松雲寺につき、宮は御輿からおりて寺内に入った。三島宿まで二里（八キロ）ほどであった。

三島宿に先行させた者がもどってきて、宿場の様子をつたえた。その日は、三島宿の樋口伝右衛門の旅籠に泊まる予定であったが、樋口方にも兵が充満し、他に泊まる家も見当たらないという。そのため、三島へ行くことはせず松雲寺で一夜をすごすことになり、樋口方にあらかじめ送ってあった厨房具をおさめた長持を引き返させ、宮に夜食をとっていただいたのは、夜が明けはじめた頃であった。

食事を終えて間もなく、三島の宿場役人と樋口伝右衛門が来て、覚王院に宮の接待ができなかったことを詫びた。

覚王院は、

「やむを得ぬこと」

と、つぶやくように答えた。

翌日も雨で、御輿は、五ツ（午前八時）すぎに松雲寺をはなれ、三島、沼津、原をへて、夜五ツ（八時）に吉原宿に入った。街道には相変わらず兵たちの姿が多く、砲車をひき、弾丸、食料等をのせた荷車が東にむかってすぎる。兵たちは好奇の眼をむけてきていたが、道は広く、狼藉をはたらく者はいなかった。

翌六日、雨はあがっていて、輪王寺宮一行は暁七ツ（四時）、それぞれ提灯を手に吉原宿をはなれた。夜明け前なので街道に兵の姿はなく、御輿は進み、富士川の舟渡し場についた頃、提灯の灯を吹き消した。

河原にいた川渡しの人足が集まってきて、増水した川に舟をおろし、御輿がかれらの手でのせられた。輪王寺宮は、僧たちと舟で対岸に渡った。

随行の僧が人足たちに賃金を払い、再び宮は御輿に乗って街道を進んだ。霧が流れていて、富士山は見えなかった。

その頃から街道を東にむかう兵の姿が見えるようになり、隊列をくんでいる集団もあった。左手には、海の輝きが見えた。

蒲原、由比をすぎ、興津について昼食をとった。

御輿はさらに進み、江尻をすぎてようやく夕刻近くに駿府の町に入った。

惣持寺を宿所に予定していたが、急に取りやめになった。寺が浅間神社に隣接し、近くに神社の神職が多く住んでいて、危険と判断されたのである。

付近一帯の神社の神官たちは、王政復古の大号令が発せられたのを知ったと同時に、にわかに特異な動きをみせていた。かれらは、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の学風に心酔し、尊崇する朝廷の衰微をなげいていた。仏教を重んじる幕府に不満をいだき、神道の隆昌をねがっていた。王政復古はかれらの望みをかなえるもので、かれらはひそかに寄り集まって新しい時代がくることをねがって話し合いを繰り返していた。

そのうちに鳥羽、伏見の戦いで幕府軍が大敗し、ついで有栖川宮熾仁親王を大総督として朝廷軍が東にむかったのを知り、狂喜した。かれらは、こぞって朝廷軍にしたがって倒幕に力をつくすことを誓い合い、冨士亦八郎を中心に駿州赤心隊を結成した。

朝廷軍の大軍が駿府に近づいてきたことを知ったかれらは、安倍川の河原に行ってつつしんで朝廷軍を出迎え、駿府まで案内した。駿府城に入ってそこを本営とした大総督府は、赤心隊の倒幕の意志がかたいことをみとめ、市内の巡回、警備を命じた。

赤心隊は、城に近い浅間神社に仮営所をかまえ、神社と庭つづきである惣持寺を宿舎とすることは危険きわまりないと判断されたのである。かれらは、徳川家の墓所のある寛永寺の山主である輪王寺宮にも、好ましくない感情をいだいているはずであった。

惣持寺を宿所にできないことに宮一行は当惑したが、僧たちは町なかを宿所を求めて探しまわり、ようやく伝馬町の本陣小倉平左衛門方を宿所とすることにさだめた。すでに夜はふけていた。

執当の覚王院が、僧を使者として大総督府の本営がおかれている駿府城におもむかせ、宮一行が到着したことをつたえさせた。

どのような返事があるか宮は気づかっていたが、夜道を駕籠でもどってきた僧は、明朝五ツ半（九時）に城にくるようにという有栖川宮の返事をつたえた。宮は、明るい気持ちになった。

慶喜の処置を寛大にと願うことが主だが、同時に朝廷軍に江戸への進撃をひかえて欲しいと要請しなければならぬ気持ちがある。もしも進撃すれば、幕府に忠誠をちかう武士たちが激しく抵抗するはずで、武力衝突によって江戸は戦火にさらされる。輪王寺宮としては、朝廷軍が江戸に入る前に進撃をとめることが望ましく、同じ皇族の身として誠意をもってたのめば、それはいれられるにちがいない、と期待していた。

翌朝、宮ははやく起き、執当覚王院らをしたがえて御輿に乗り、駿府城におもむいた。城の内外には銃、槍を手にした兵たちが多くみられ、城門で押しとどめられたが、覚王院が宮一行であることを口にすると、すぐに通してくれた。

城内に入り、奥座敷に通された。本営らしく人声と足音が絶えずしている。

やがて有栖川宮が、公卿参謀の正親町公董とともに姿をあらわし、輪王寺宮は頭をさげて挨拶の言葉を述べ、有栖川宮もそれに応じた。輪王寺宮は、慶喜みずからの謝罪書と諸大名よりの慶喜に対して寛大な処置をねがう嘆願書を渡し、慶喜が深く謝罪を請うため江戸城を出て、寛永寺の部屋

に謹慎していることをつたえた。

「まことに朝廷に対して申し訳ない、と心から悔いております。なにとぞ寛大な御処置をくだされるよう、私からもお願いいたします」

宮は、頭をさげた。

謝罪書と嘆願書を一読した有栖川宮は、しばらく無言でいたが、その表情はけわしかった。

有栖川宮は、口をひらき、

「慶喜の朝廷に対する叛逆は明白であり、その大罪に対して追討の勅命が発せられたのである。私たちはそれによって追討の実をはたすべく、兵を江戸にむかって進めている。今になって許しを請うても、どうにもならない」

と、冷ややかな口調で言った。

輪王寺宮は、顔をこわばらせた。有栖川宮の言葉には、慶喜に対するはげしい憎悪がむき出しにされ、徳川幕府を跡形もないまでに踏みにじろうとする意志がみられる。

輪王寺宮は、有栖川宮の怒りをふくんだ眼に、幕府に対する私的な怨念がひそんでいるのを感じた。有栖川宮は、和宮と婚約することが内定していたのに、幕府側の強引な要請によってそれは破談となり、和宮は前将軍家茂に降嫁した。それは有栖川宮の胸に、消すことのできない傷となってのこり、東征大総督に任じられた身として積年の恨みを一挙にはらそうとしているとも思える。

当面の対象は慶喜で、許しがたい逆賊として徹底的に追いつめる。それは東征大総督の責務であり、慶喜の謝罪を請うため駿府にやってきた輪王寺宮にも、憤りを感じているにちがいなかった。

有栖川宮の後ろに座る正親町公董が、口をひらいた。
「慶喜追討は重大事であり、たとえ慶喜が寺に謹慎していると申しましても、追討はあくまでもつらぬかねばなりません。それにもかかわらず、今になって陳情書を提出するとは、慶喜がみずからの大罪を知らぬ証拠と申さねばなりません」
倒幕派公卿らしいするどい口調であった。
輪王寺宮は、少しの間黙っていたが、正親町に視線をむけると、
「私は、単に慶喜一人のために陳情しているのではありません。慶喜追討となれば朝廷軍が江戸に入ることになり、江戸は大混乱におちいります。多くの町民が逃げまどい、傷つき斃れ、そのようなことになれば、天子様の御心をなやますことにもなり、それを恐れているのです」
と、言った。
正親町は、
「仰せられることはわかります。されど慶喜追討は、勅命によるもので、天子様の御心を安んじ民をすくうのは、ひとえに慶喜を厳罰に処することにあると存じます」
と、言った。
輪王寺宮に随行している覚王院らは、表情をかたくして黙っている。
輪王寺宮は、これ以上対座していてもいい結果は得られず、あらためて話し合う機会をつくるべきだ、と考えた。
宮は、有栖川宮に挨拶し、それに応じた有栖川宮は席を立って座敷を出ていった。

輪王寺宮は、随行の僧たちとともに座敷を出たが、執当の覚王院は座敷にのこり、重ねて正親町と対談したいと申し入れた。しかし、正親町は無言で席を立ち、代わりに武家参謀の薩摩藩士西郷隆盛と宇和島藩士林玖十郎が座敷に入ってきて、覚王院と対座した。
覚王院は、陳情書の写しを見せ、朝廷軍が慶喜追討のため江戸に入ることは大動乱をひきおこす恐れがあり、進撃をやめて欲しい、と要請した。
西郷と林は、よく考えた上で回答する、と答え、その日の会談は終わった。
思いがけず有栖川宮の態度は冷ややかで、聴き入れる余地は全くないという感じですらあった。
宿所にもどってきた覚王院は、公卿参謀の正親町に、わざわざ江戸から出向いてきた皇族の輪王寺宮に対する敬意がみられず、きびしい口調で慶喜追討の正当性を主張したことに憤りの色をみせていた。
輪王寺宮は、無言であった。
四日後の三月十一日、有栖川宮よりの指示で僧が駿府城におもむき、明日、再び輪王寺宮に面談したいので城に来て欲しいということがつたえられた。
そのため翌朝五ツ（八時）、輪王寺宮は、覚王院らをしたがえて駿府城におもむいた。
対座した有栖川宮は、前回よりさらにきびしい表情をしていて、眼は異様に光っていた。
有栖川宮が、口をひらいた。
「慶喜が寛永寺内で謹慎しているというが、それはかれの勝手である。ただ一通の謝罪書だけを提出して罪をゆるして欲しいとは言語道断であり、それをそのまま聴き入れることなどできぬ」

その言葉に、座敷の空気が凍りついた。
輪王寺宮は、しばらく黙っていたが、口をひらくと、
「それでは、慶喜が心からその罪をゆるして欲しいということをしめすには、どのようにしたらよろしいのでしょう」
と、有栖川宮の顔を見つめた。
「それは、参謀からおききいただきたい」
と言うと、立って座敷を出ていった。
素っ気ない態度で、輪王寺宮はそのまま座っていた。
覚王院が、いらだって座敷の隅に座っている有栖川宮の従者に、
「参謀殿は、どこにおられるか」
と、声をかけた。
頭をさげた従者が座敷を出てゆくと、しばらくしてもどってきて、
「こちらへ……」
と、言った。
参謀が輪王寺宮の前にくるべきなのに、失礼きわまりないという色が覚王院の顔にあらわれたが、輪王寺宮は立ち、その後から覚王院が座敷を出た。
廊下を歩き、別室に入った。そこには、参謀の宇和島藩士林玖十郎のみが座って待っていた。西郷隆盛は、昨日、先鋒軍と打ち合わせをするため城を出て東海道を東にむかったという。

席についた覚王院が、有栖川宮と輪王寺宮の対談の内容を話し、慶喜が朝廷に罪を謝す具体的な方法を参謀に問いただすように、と有栖川宮が言ったことを告げた。
うなずいた林は、
「それにはまず江戸城を差し出し、軍艦、銃器などすべてを朝廷軍に渡す。さらに幕臣どもを向島（むこうじま）の水戸藩下屋敷に移すのが先決で、その上で、謝罪すべきである」
と言って、手にした慶喜の謝罪書と諸大名からの嘆願書をすべて返した。
さらに、幕府軍が会津、桑名両藩兵を大坂城から出撃させたことによって、慶喜が朝敵と定められたのである、と述べ、この言葉に、覚王院は反論し、
「はっきりしておかねばならぬことがあります。会津、桑名両藩の兵が城を出て進んだ折に、薩摩の陣営から一方的に、突然、大砲を打ちかけてきたことから、戦さがはじまったのである。会津、桑名両藩から朝廷軍に対し弓をひいた者は一人もいないことは、まぎれもない事実」
と、強い口調で言った。
林は、しばらく黙っていたが、
「もしも江戸に朝廷軍が入れば、武士、町民が多くいる地であるので、朝廷軍に抵抗する者がいるかも知れない、と言われる。そのため江戸に入ることを御猶予いただきたいと申されるが、それは慶喜が朝廷に恭順していない証拠と考えられる」
と、言った。
「それは承服いたしかねる。慶喜公が恭順しているとしても、古くからつづいてきた徳川家の滅亡

を見るにしのびず、抵抗する者がいても当然のことである。決して朝廷に反抗するのではなく、忠誠心の故とは思われぬか」

覚王院の言葉は、するどかった。

理路のかなった言葉に、林は顔をこわばらせて黙っていたが、

「慶喜が寛永寺に謹慎したとしても、天子様の御命令で兵を進めることは、おしとどめられません。それは、いかなることがあっても変更は一切ない」

と、辛うじて答えた。

さらに覚王院は、

「それはそれとして、慶喜公は、いかように罰せられようとも、いささかも恨みはいたしませんと申され、寛永寺に御謹慎なさっておられる。これ以外に謝罪の道があると思われますか」

と、林の顔を見つめた。

林は、口をつぐんでいた。

二人の話をきいていた輪王寺宮は、これ以上話をしても無駄と考え、

「もうよい」

と、覚王院に声をかけ、腰をあげて座敷を出た。

覚王院は、憤りの色をあらわにして城を出た。

宿所にもどった輪王寺宮は、京へのぼることを決意した。有栖川宮に訴えてもらちがあかず、参謀たちもかたくなに江戸への進撃を強行しようとしている。

この上は、京におもむき、天皇に直訴する以外にない、と思った。慶喜追討は必然的に江戸を戦火にまきこむことにつながり、それは絶対に避けるべきだと訴えれば、天皇とその側近は耳をかたむけてくれるにちがいなかった。

ただし、有栖川宮は、天皇の命によって東征大総督に任じられている身で、自分が京におもむくことはつたえておかなければならない。それが自分のとるべき態度であり、有栖川宮に会う必要がある、と考えた。

覚王院にそれを告げると、覚王院もそれ以外にありますまい、と同意した。

城に僧を使いに出して、有栖川宮に面会を申し込み、輪王寺宮は御輿に乗って城にむかった。

奥座敷に入って待っていると、有栖川宮が姿をみせた。

輪王寺宮は、これより京にのぼって天皇に慶喜謝罪のことを直訴するつもりである、と述べ、

「慶喜追討は、必然的に江戸を戦火にまきこむことになり、それは天子様も決してお望みになられぬことと存じます。私は、天子様に江戸の町民をお救い下さいと熱意をこめて申し上げたく存じます」

と、言った。

有栖川宮は顔色を変え、輪王寺宮にするどい眼をむけた。憤りで顔が赤く染まり、唇が小きざみにふるえている。

「なんという愚かしいことを言われるのか。第一、この駿府に慶喜に寛大な処置をと嘆願しにくることなど、全く無為な愚行にすぎぬ。慶喜は天下の大叛逆人であり、それを追討することは、いさ

さかのゆるぎもない。それを宮は、のこのことこの地まで来て、慶喜の謝罪を認めてもらえるとでも思われたのか」

有栖川宮の眼には、蔑みにみちた色がうかんでいる。

「京にのぼって天子様に直訴するなどとは愚かしきかぎりである。天子様は、私を東征大総督に任じて慶喜追討を命じられ、錦の御旗もおさずけ下さった。そのような天子様が、あなたの直訴をおうけなさると思われるのか。会うことはもとより、追い返されることはあきらかだ」

有栖川宮の声には、怒気がふくまれていた。

輪王寺宮は、体をかたくして有栖川宮の顔を見つめていた。

有栖川宮は、言葉をあらためると、

「江戸へ、おもどりなされ。宮にできることと言えば、慶喜にいかにすれば謝罪がかなうかを知らせることのみです。江戸の人心を安んじさせるためにも、宮はただちに江戸にもどられるがよい」

と、言った。

輪王寺宮は、屈辱を感じた。有栖川宮の態度には、強大な兵力を背にした傲岸さがある。駿府まで嘆願にきた自分の行為を愚行だ、と言ったが、初めから聴く耳持たずという態度であった。もしも京にのぼろうとすれば、有栖川宮は兵をうごかして阻止し、拘束するにちがいない。従者は数名の僧のみで、それに抵抗することなどできない。

有栖川宮のかたわらに座る参謀たちの顔には、かすかに薄ら笑いの表情がうかんでいる。

「江戸にもどられよ。それもただちに……」

有栖川宮が、甲高い声で言った。眼にけわしい光がうかんでいる。

輪王寺宮は、しばらく視線を落として黙っていたが、静かに腰をあげると、座敷を出た。後から従者の僧がついてくる。

みじめな思いであった。有栖川宮と参謀たちの顔が、眼の前にちらつく。それはことごとく自分を見くだすような、蔑みにみちた顔であった。

宮は、待っていた御輿に身を入れ、城門を出た。

宿所にもどると、覚王院をはじめ僧たちが集まってきた。京行きの準備がはじめられていて、覚王院は、京に御所参内の予定であるという書面をすでに送っていた。

輪王寺宮は、静かな口調で有栖川宮との面談の内容を話した。有栖川宮は、慶喜に寛大な処置を嘆願にきた輪王寺宮の行為を愚かしいかぎりだときめつけ、京におもむくことは許さず、ただちに江戸へもどれと、半ば命じるように言ったと告げた。

覚王院は、激怒した。

宮は、声をふるわせて話す覚王院の言葉を無言できいていた。江戸からはるばる東海道を進んできたが、随行の武家は途中から追い返され、僧のみがしたがって箱根路にかかった。そこにやってきた薩摩、長州両藩の兵たちに行く手をさえぎられ、御輿の扉を槍の柄で小突かれ、さらに扉をあけてのぞき込む者すらいた。かれらは、きくに堪えない蔑みにみちた歌を浴びせかけ、それに覚王院たちは堪えねばならなかった。

その後も、予約していた旅籠や寺が兵たちに独占され、寝泊まりする場所をさがして右往左往し、

食事もままならなかった。輪王寺宮としては今まで味わったことのない屈辱にみちた旅で、それに堪えながらようやく駿府にたどりついた。

駿府城には、東征大総督の有栖川宮熾仁親王が本営をもうけていて、輪王寺宮は、覚王院らをしたがえて城におもむき、有栖川宮と対面した。輪王寺宮は、慶喜に寛大な処置をとねがって慶喜みずからの謝罪状、それに譜代大名たちの連署した嘆願書を差し出し、慶喜の罪をゆるして欲しいと懇請した。宮みずから長旅の末に陳情してきたことで、当然、有栖川宮が心をうごかされる、と思っていた。

「宮様がわざわざ江戸から、ひとかたならぬ苦難をお忍びになられて参ったのに。同じ皇族の身としてそれなりの御回答があるとかたく信じていましたが……」

覚王院の怒りは、はげしかった。

有栖川宮は、嘆願に一切耳をかさぬという態度で終始し、不快感をあらわにして顔をそむけがちであった。有栖川宮の顔には、強大な軍勢をひきいた東征大総督の自負があふれ、一語一語に威丈高なひびきがあった。公卿参謀と武家参謀の態度も尊大で、かれらには、当然あってしかるべき皇族である宮に対する畏敬の念は全くみられず、むしろ見くだすような傾きがあった。

それにもかかわらず、輪王寺宮が気分をそこねる風もみせず、ひたすらおだやかな言葉で陳情をつづけたのは、慶喜の謝罪によって江戸を戦火からまぬがれさせたいという真情にもとづくものであった。しかし、言葉をつくして訴えた慶喜の謝罪はすべてきき入れられず、武家参謀の林玖十郎から、慶喜の謝罪状、諸大名からの嘆願書を残らず突き返された。この上は京にのぼって天皇に訴

えようとしたが、有栖川宮は、荒々しい言葉でそれを許さず、江戸にもどれ、と命じた。

「宮様に対して、まことに無礼千万な応接。このように宮様に屈辱をおかけするためこの地に来たのではない」

覚王院は、声をふりしぼるように言った。眼から涙が流れていた。

僧たちは、頭を垂れている。

無言で身じろぎもせず座っている輪王寺宮の気持ちは、覚王院のそれと全く同じであった。皇族としてすごしてきた宮は、このように身の危険すら感じた旅をしたことはなく、その上、有栖川宮と参謀たちから冷ややかな眼を注がれた。願いの筋は素っ気なく拒絶され、有栖川宮からは即刻、江戸へもどれ、と命じられた。覚王院は、無礼千万な応接と言ったが、まさしくその通りであった。

軍勢をひきいる有栖川宮の命令にさからうことはできず、無念ではあるがむなしく江戸へ引き返さなければならない。駿府に来たことはなんの意味もなく、宮は激しい憤りとともに悲哀を感じていた。

覚王院は、憤りを抑えかねるように座っていたが、宮の京行きがとりやめになって江戸に引き返すという書状をしたため、飛脚便で京へ送った。

すでに夕闇が濃く、座敷の行灯に灯が入った。

その夜、江戸へもどる準備がはじめられ、覚王院は、実情報告のため、明朝夜明け前に駿府をはなれて江戸へ先行することになった。

「この度の旅は、まことに無念で、生涯忘れられませぬ。宮様にはまことに申し訳なく、心からお

詫び申し上げます」

覚王院は眼に涙をうかべ、頭を深くさげた。

宮は、うなずいていた。

江戸

翌日、覚王院が江戸に出立し、次の日の三月十四日夜明けに輪王寺宮は、僧たちをしたがえて、本陣の小倉平左衛門宅をはなれた。薄暗い町に人気はなく、御輿は森閑とした家並みの間を進んでゆく。

宮は、東照宮のある日光の山主も兼ねているので久能山の東照宮に参拝するため、御輿から降りてつづら折りの長い石段を息をはずませてのぼり、東照宮におもむいた。参拝した宮は、駿府まで来ながらむなしくもどらねばならぬ悲哀を感じた。

休息後、山をおりて江尻宿に入り、本陣の寺尾与右衛門方に投宿した。朝廷軍の先鋒の兵たちはすでに過ぎていて、宿場は閑散としていた。僧たちは口数も少なく、うつろな眼をしていた。

翌十五日、荒れた街道を宮の御輿は進み、蒲原、吉原をすぎ、七ツ（午後四時）すぎに原宿について本陣の渡辺平左衛門方に入った。将卒が脱ぎ捨てたらしいおびただしい草鞋が、庭の隅に乱雑に積み上げられていた。

その宿場にも兵はみられず、朝廷軍の武士の出入りがしきりであった。

駿府を出立以来、晴天つづきで、翌日も富士山を左手に見て東海道を進んだ。所々に流れる小川

の水は澄み、陽光にかがやいていた。

沼津宿には多くの将兵があふれ、宮一行は、かれらの注視する中を急いで宿場をぬけ、夕刻七ツ（四時）に三島宿についた。

その夜は雨になったが、朝にはあがり、箱根路にかかった。幸いにも兵の姿はなく、箱根を越えて小田原宿に入った。

荷をはこぶのに牛、馬しか使わない街道は、おびただしい砲車や大八車の通った轍の跡がきざまれ、荒れに荒れていた。道ばたには弁当包みが散乱し、烏が群れていた。

翌日は戸塚泊まりになって、十九日に品川宿についた。道を急いできたので、一同、疲労の色が濃かった。

これまでの道中、多くの検問所があったが、西に進んでいった時とは異なって、江戸へむかう宮一行は検問をうけることもなく、翌日の四ツ半（午前十一時）に江戸へ入り、寛永寺に帰りついた。その到着は、飛脚便で報せてあったので、多くの僧が合掌して宮を迎えた。前日、江戸にむかった覚王院が、慶喜嘆願が不首尾におわったことをつたえたらしく、閣老をはじめ大名たちの姿はみられなかった。

宮は、法衣をつけて僧たちと本堂に入り、帰着の読経をした。

宮は、山主としての静かな生活にもどったが、二月二十一日に寛永寺をはなれてから一カ月の間に、江戸の空気が驚くほど変化しているのを感じた。

朝廷軍が京を進発して諸街道を江戸にむかっているという報せに、江戸で迎え撃つ幕府方との間

に大戦争が起こるという話が飛びかい、恐怖をおぼえた者たちが、家財とともに近在へのがれていた。武家も町民も奉公人をふる里へ帰し、商品の流通は絶え、戸をしめた店が目立っていた。

そのような騒然とした世情の中で、治安をつかさどる町奉行所の役人は職務に手がつかず、その機能は失われていた。そのため金銭をめぐる暴力沙汰が続発し、辻斬りが横行して夜間に通行する者は絶えていた。町々は無法状態になっていて、集団を組んだ盗賊が豪商の家に押し入って金品をうばい、家人を殺傷する事件がつぎからつぎに起こっていた。

不穏な空気に、上野の山への人の出入りは制限され、寛永寺には警備の者が配置されていた。

寛永寺をめぐる動きも、宮が駿府にむかう以前とは異なる様相をみせ、それは日を追って急速に緊迫の度を増していた。

慶喜が寛永寺の大慈院に入って謹慎したことを知った一橋家の家臣たちが、その警護のために上野の山に集まってきていたが、最初に動きをみせたのはかれらであった。水戸藩主徳川斉昭の子である慶喜は、一橋家をついでいて、いわばそれらの武家たちは慶喜の旧家臣たちであった。

かれらは、慶喜がはからずも叛逆人とされたことに驚き、追討令が発せられて朝廷軍が京を発したことを知った。それは、あきらかに薩摩、長州両藩の陰謀によるものと考え、激昂した家臣たちは寄り集まって進撃してくる朝廷軍に徹底して戦うことを決意していた。

かれらは、寄り集まって互いに怒りの言葉をかわし、同志を糾合しようとして二月十一日に左のような檄文を作った。

わが慶喜公は、終始朝廷に忠義の志あつく、昨年冬には二百年つづく幕府の政権を朝廷に奉還し、

その大英断はひろく天下の知るところである。それにもかかわらず、朝廷に巧みに入りこんだ策士どもの陰謀によって、追討を受ける身になり、われらは憤りに身をふるわせている。君辱しめられれば臣死すのたとえ通り、死を賭して戦うものである。

檄文の最後に、御相談申し上げたきことがあるので、明十二日昼九ツ（正午）、雑司ケ谷（豊島区）の茗荷屋に晴雨にかかわらず御参集願いたい。また、十七日四ツ（十時）にも、四ツ谷鮫カ橋ぎわの円応寺で、第二回の会合を持つ、と記されていた。

その檄文は、かれらの手によって要所要所に配布された。

翌日、予告通り雑司ケ谷の茶店で第一回の会合がひらかれたが、前日に檄文が配られたばかりなので集まってきたのはわずか十七名で、なんの決議もされず散会した。

ついで、五日後、四ツ谷円応寺で第二回の会合をひらくと、三十余人が参集してきた。

かれらは、話し合いの末、全員が同じ考えをもっていることを確認し、広く同志を糾合することになり、第三回の会合を二十一日に同寺でひらくことを決定した。

二十一日は空が青く澄んだ晴天で、定刻に六十七人の武家が寺にぞくぞくと集まってきた。元旗本の天野八郎、一橋家の家臣で陸軍奉行支配調役の渋沢成一郎の姿もあった。

かれらは、口々に主戦論を熱っぽい口調で唱え、それにもとづいて決議書が作成された。慶喜公の恥辱をぬぐい去るため、公を窮地に追いつめた薩摩藩こそ天下叛逆の徒であり、これを徹底的に討ちはたす、と記されていた。

一同、その書につぎつぎに署名し、同一行動をとることをかたく誓い合った。

かれらは、さらに結束を強固なものにするため、組織化すべきだという意見が出て、それについて協議するため浅草本願寺に二日後に参集することをきめた。

二十三日は小雨が降っていたが、かれらは一人残らず集まってきた。

これまで会合の通知を出すのに、尊王恭順有志会としていたが、正式の隊名をつけることになった。かれらの間からさまざまな案が出され、容易にまとまらなかったが、最後に貫義、彰義の二案にしぼられた。

決をとった結果、満場一致で彰義とすることに決定した。

「彰義隊か、語呂もよくこれはいい」

かれらは、喜び合った。

ついで組織の編成に移り、投票によって隊の頭取に渋沢成一郎、副頭取に天野八郎がえらばれ、隊の規則も定められた。

夕刻になり、かれらは雨の中を散っていった。

彰義隊が結成されたことはたちまち旧幕臣の間にひろまり、浅草本願寺の本営に来て隊員に加えて欲しいという申し込みがつづき、いつしか三百人を越えるまでになった。

かれらはしばしば会合をひらき、隊員は増加する傾向にあった。

この集団の存在は、慶喜の気持ちに反するものであった。

慶喜は、自分の思いをひろくつたえるため、江戸の町々に町触れを出させていた。

この度、京より朝廷の御軍勢が江戸に派遣されるが、その御軍勢に対して決して刃むかうような

ことがあってはならぬ。もしもそのようなことをすれば、まことに朝廷に申し訳なく、江戸の住民たちに戦争の苦しみを味わわせることにもつながる。派遣された御軍勢に刃むかう者は、私の心にそむき、私の身に刃物を突き当てるのと同じである。このことを十分に考え、決して心得ちがいをせぬように、市中すみずみまで触れおくものである。

この町触れが出ると、彰義隊員の間で激しい議論が起こった。

ある者は、鳥羽、伏見の戦いが起こったのは、薩摩藩の陣営からの突然の砲撃によるもので、断じて幕府側から仕掛けたものではない。それなのに朝敵呼ばわりされるのはまことに許しがたく、このことを朝廷に強く訴え、抗弁すべきである。

また、他の者は、朝廷に繰り返し許しをこうてもきき入れられず、それならば全力をあげて戦う以外にない、とはげしく主張した。

このような熱をおびた議論がかわされ、これによってかれらの意気はとみにあがり、必然的にかれらの結束をさらに強固なものになった。

隊員の数は日を追って増し、二月二十五日からは、慶喜を警護すると称して寛永寺を中心とした上野の山にぞくぞくと集まるようになった。

このような隊員たちの動きを見まもっていた勝安房守をはじめ旧幕府の重臣たちは、深い憂慮をおぼえるようになっていた。

慶喜の謹慎している寛永寺周辺に血気さかんな者たちが多数集まっていることは、慶喜が朝廷に恭順している姿勢を疑わせるのに十分であった。進撃してくる朝廷軍は、むろん江戸市中に多くの

密偵を潜入させていて、旧幕臣たちが彰義隊を結成し、寛永寺周辺に屯集していることも探知して、朝廷軍側に通報していることはあきらかだった。

旧幕府の重臣たちは、彰義隊の存在が慶喜の朝廷に対する謝罪恭順の姿勢を根底からつきくずし、江戸へ軍勢が乱入してくることにつながる、と考えた。

このことについて勝安房守は、重臣たちを集めて連日、協議をかさねた。

慶喜の謝罪を朝廷軍にみとめてもらうには、彰義隊を解散させるのが最も好ましい。朝廷軍をおだやかに江戸にむかえ入れ、慶喜の謝罪についてあらゆる手段をつくして努力すれば、成功するかも知れない。そのためには彰義隊の存在が大きな障害になるが、だからと言って隊を解散させるのは容易なことではない。すでに隊名をさだめ、頭取もきめて一つの集団を結成している。これに対して解散を命じれば、かれらは憤激し、予想を絶した行動に出る恐れが多分にある。

隊を構成している旧幕臣たちは、薩摩、長州両藩を主力とする軍勢を迎え撃とうという意欲に燃えている。それに解散命令を発したなら、かれらの間にみなぎっている戦意が一気に爆発し、徳川家に恩義をいだく市民もそれにくわわって、江戸は収拾のつかぬ大混乱におちいる恐れがある。

そのような事態になることを恐れた重臣たちは、彰義隊に解散を命じることは絶対にすべきではない、と考えた。

とは言え、彰義隊をそのまま放置しておくことはできなかった。重臣たちは協議をかさね、さまざまな案が飛び交ったが、かれらを江戸の治安をまもるために利用すべきだという意見が出され、それに一同賛成した。

大政奉還によって幕府の権勢はうしなわれ、それによって盗賊が横行し、豪商の家がおそわれて家の者を惨殺する事件が続発している。町奉行所は、それを取り締まる力はうしなわれ、治安はみだれにみだれている。彰義隊を町奉行所に代わる組織として治安の回復を依頼すれば、血気にはやる隊員の気持ちもこれによって発散する。さらに隊の存在に疑惑の眼をむける朝廷軍に、隊が江戸の治安をまもるためのものだと釈明すれば、朝廷軍も納得するだろう。

これは妙案だということになり、早速、使者を上野に派遣し、重役たちの要請がつたえられた。彰義隊の主立った者が協議し、それを受けることに決定した。かれらも治安の乱れを憂えていて、市民を守るため隊員が連れ立って巡回し、取り締まりにあたるべきだ、と考えたのである。

巡回は主として夜間におこなわれるので、隊では多量の円提灯（まるぢょうちん）を提灯屋に発注した。これによって提灯がぞくぞくとはこびこまれてきたが、隊の注文通り提灯の中央にえがかれた丸い線の中に彰という朱の文字が、筆太に書かれていた。

その夜から、刀を腰に槍を手にした隊員たちが、数名ずつ組んで提灯をかかげ、上野の山からおりて町々に散っていった。

隊員はいつの間にか千名を越えていて、かれらのかかげた円提灯が夜の街を縫うように進む。夜盗の群れが商家をおそう現場に遭遇したこともあり、隊員たちは刀槍を手にして追いつめ、打ち据えて捕縛し、奉行所に突き出す。辻斬りをはたらく者を、斬り伏せることもあった。

隊員の巡回によって犯罪は激減し、安らいだ夜を持つことを得た市民は感謝し、主立った者が、連れ立って上野の山の屯所に来て金品を差し出すことも多くなった。

江戸の町民たちは、当然のことながら徳川家に尊崇と親愛感をいだいていた。

長年の間にきずかれた幕府の整然とした機構のもとで、日々、安泰の生活を送ることができ、これもひとえに徳川家のおかげと感謝していた。それがはからずも薩長両藩を主力とした朝廷軍との間で戦さがはじまり、幕府軍は大敗して将軍慶喜は江戸に逃げ帰ってきている。町民たちにとって、それは予想もしない出来事で、やがて慶喜追討のため朝廷軍が江戸に進撃してくるという。

かれらは恐れおののきながらも、旧幕臣によって彰義隊が結成され、薩摩、長州両藩の軍勢に徹底抗戦を唱えていることを知った。それは町民たちに頼もしさを感じさせ、薩長両藩への反感をそのまま代行してくれているように思えた。

さらに、彰義隊員が、町の治安をまもるため夜明けまで巡回していることに感謝していた。町民たちは、円提灯をかかげてやってくる隊員たちに茶菓を出し、酒をすすめる者もいる。隊員と町民たちの結びつきは、日増しに強くなっていた。

旧幕府の重臣たちは、江戸の治安が回復したことに安堵していたが、かれらは、迫りくる朝廷軍への接触をひそかに進めていた。このまま手をこまぬいていれば、江戸は戦火にまきこまれ、すべての機構が破壊され、潰滅状態におちいる。それは、なんとしてでも避けねばならなかった。

重臣の意をくんで積極的に動いたのは、旧幕臣の山岡鉄太郎であった。

旗本の家に生まれた鉄太郎は、槍の師匠である山岡家をつぎ、千葉周作について剣の道をきわめ、剣槍（けんそう）の武芸はもとより洋式調練、砲術などの訓練をおこなう講武所の世話役に任じられた。

また、文久二年（一八六二）に幕府が浪士募集（新徴組）をおこなった折には、その指導力を買

われて浪士取締役を命じられた。

かれは、進撃してくる朝廷軍の総指揮者の東征大総督の有栖川宮熾仁親王が、和宮についで輪王寺宮の嘆願もすげなく拒否したことをつたえきいていた。総督府内には、幕府の領地をことごとく取り上げるだけにとどまらず、慶喜を切腹させよという強硬論も根強く、それは幕府を完全に消滅させる意図のあらわれであると感じていた。そのような朝廷軍が江戸に入ってくれば、旧幕臣たちは徹底抗戦する。かれは、それを深く憂えていたが、回避することは不可能とも判断していた。

二月下旬、小石川伝通院裏にある山岡の家に、寛永寺から慶喜の使者が来て、ただちに出頭せよと命じられた。何事かといぶかしみながらも、山岡は衣服をただして駕籠で寛永寺におもむいた。

御前に進むようにと言われ、かれは慶喜の謹慎している部屋に入った。

平伏して顔をあげた山岡は、慶喜を眼にして愕然とした。頬はこけ、くぼんだ眼には弱々しい光がうかび、憔悴しきった顔に元将軍としての面影は失われていた。

座敷には、思いがけず高橋泥舟がひかえていた。泥舟は、山岡の養父山岡静山の弟で、静山の没後、代わって槍術を教授し、遊撃隊頭取の任にあった。かれが寛永寺にいたのは、遊撃隊員をひきいて慶喜の警護にあたっていたのである。

山岡は、泥舟に目礼した。

慶喜が、口をひらいた。

「一つの役割をはたしてもらおうと思い、招いた。駿府まで来ている朝廷軍の総督府におもむいて、私が朝廷にあくまでも恭順していることを心をこめてつたえて欲しい。天下の泰平をねがうには、

これ以外にない」

慶喜の眼には、涙がうかんでいる。

思いがけぬ言葉に、なぜ自分がそのような重大な使命を命じられたのか、つかみかねた。

かれは、慶喜の後方に座っている泥舟を意識した。泥舟が自分を推挙し、慶喜もそれをうけいれたにちがいなかった。

山岡は、思いもかけぬ言葉に、すぐには返事もできず青白い慶喜の顔を見つめていた。

泥舟が、眼でお答えするようううながした。

山岡は、手をつき、

「今日、このような情勢にあって、上様が恭順のお気持ちになられているのを、正直のところ私は十分に理解できかねます。お役目をお引き受けします上は、上様の真のお気持ちをおきかせいただきとう存じます」

と、率直に言った。それは、かれのみならず、旧幕臣の共通した思いであった。

かすかにうなずいた慶喜は、

「大坂をはなれる時から、私はひたすら朝廷に対してあくまでも恭順することを心にきめ、それは今でもいささかも変わりはない。しかし、私に追討の勅命が下され、私は自分の命はないものと覚悟している。ただし、自分のこの気持ちがつたわらず朝敵とされていることは、なんとしても無念でならない」

と、涙を落とした。

その言葉に、山岡はようやく慶喜の真意を察することができた。

慶喜は切腹しなければならない立場にあることを承知しているが、朝敵の汚名をこうむったまま死を迎えることは避けたい。これまで和宮についで輪王寺宮に謝罪嘆願をしてもらったが、それは全く効果がなく、最後の望みを自分に託そうとしているのだろう。

慶喜は、自分の悩みを泥舟に打ちあけ、泥舟は気骨のある山岡を使者として駿府にさしむけることをすすめたにちがいない。

山岡の胸に、ふくれあがるものがあった。

将軍職にあった慶喜が、涙を流してまで頼んでいることを引き受けないわけにはいかない。泥舟は、自分を推挙し、その信頼にこたえるためにも託された使命をはたさねばならない。

「よくわかりましてございます。上様が誠心誠意、朝廷に対して恭順のお気持ちをもっておられることを、御命令にしたがい、大総督府に参ってつたえ、朝廷の御疑惑を氷解させることにつとめます」

山岡は、平伏した。

慶喜はうなずき、山岡は退いて部屋を出た。

泥舟が立って、入り口までついてきた。山岡は、泥舟を見つめ、頭をさげると寛永寺を辞した。

駕籠が山をくだり、広小路を伝通院の方にむかった。

山岡は、翌日から面識のある重臣の屋敷を駕籠でまわって、慶喜の依頼で駿府に行くことを告げた。しかし、重臣たちはただきいているだけで、賛成する者は一人もいなかった。和宮の使者につづいて輪王寺宮がおもむいてもなんの効果もなく、一幕臣の山岡が行っても追い返されるにすぎない、と思っているようだった。

山岡は、大政奉還後、幕府の事実上の実力者が陸軍総裁の勝安房守と若年寄の大久保一翁であることを知っていた。

山岡は、ことに勝が実行力のある人物だときいていたので、勝なら助力してくれるはずだと考え、三月五日、赤坂氷川町の勝の屋敷を訪れた。

かれは玄関に立つと、出てきた家臣に役職、姓名を名乗り、勝にお会いしたいと言った。

奥に入った家臣は、しばらくしてもどってくると、勝は多忙のため会うことはできぬという言葉をつたえた。

勝は、山岡についてあらかじめ大久保一翁からの忠告をうけていた。山岡は剣、槍に長じ、人を少しも恐れることのない人物で、時によっては勝を殺すことがあるかも知れず、近づけぬ方がいいと告げられていたのだ。

多忙で会えぬということに、山岡は不服で、再び面会したいと勝に告げて欲しい、と家臣にせまった。身長六尺二寸（一八八センチ弱）、体重二十八貫（一〇五キロ）の山岡の気迫に押され、家臣は、再び奥に入って勝に、拒絶しかねます、と告げた。

やむなく勝は会うことになり、山岡は奥座敷に通され、出てきた勝と対座した。

山岡は、

「この度、上様（慶喜）の御命令により、東征大総督宮にお会いするため駿府におもむくことにな

りました。これについてどのようにお考えになられますか、おききしたい」
と言って、慶喜から命じられた嘆願について詳細に述べた。
勝は、無謀とも思える話に口をつぐみ、山岡の顔をながめていた。
黙しつづけている勝にいらだった山岡は、
「このさしせまった時期に、なにをためらっておられるのですか。重臣として、上様の御命令によって駿府におもむく私に、なにかお考えがおありでしょう。率直にお答えいただきたい」
と、大きな声で言った。
勝は、山岡に眼をむけると、
「それではおたずねするが、あなたは、この重大な時期に、幕府の取るべき方針はどのようにすべきだ、と思っておられるか」
と、おもむろにたずねた。
山岡は、即座に、
「もはや、今のわが国においては、幕府だ薩摩だと言っておるべきではない。心を一つにして、この国をどのようにしたらよいか考える大切な時であると存じます」
と、答えた。
かすかにうなずいた勝は、言葉をあらためると、
「私は、あなたとは初めて会う。どのようなお人柄であるかも知らず、突然たずねてこられたあなたに会うことをお断りしたのは、自然である」

と、前置きして、
「あなたの噂はきいている。山岡という男は、企(たくら)みをもって人の弱味につけこむ油断のならぬ人物だ、と。大久保（一翁）殿などは、山岡を決して近づけてはならぬ、かれはあなたを殺しかねない男だ、と真面目(まじめ)に忠告なさってくださった。しかし、ただ今、あなたの言葉をきいて、私が誤解していたことを知った。悪く思わないで欲しい」
と、言った。
勝は、手あぶりに手をかざしてしばらく黙っていたが、さらに言葉をつづけ、
「あなたの決意をおききし、仕損じることはあるまいと思う。私からもお願いする。すみやかに駿府に行き、上様の願いを強く訴えてほしい。総督府の武家参謀西郷隆盛殿とは面識がある。西郷殿に書状を書くから、持参してもらいたい」
と、言った。
勝は立って奥に入り、しばらくして書状を手にもどってくると、それを山岡に渡した。
山岡は、勝の諒解(りょうかい)を得られたことに安堵した。
勝は、表情を曇らすと、
「ところで、東上してくる朝廷軍の大軍の中をどのようにして駿府まで行くおつもりか」
と、たずねた。
朝廷軍の先鋒は、早くも江戸から七里（二十八キロ）の神奈川宿まできているという情報が入っている。東海道は、それらの軍勢であふれ、その中を幕臣の山岡が通りぬけてゆくことは不可能に

近い。

「臨機応変」

山岡は、反射的に答え、

「朝廷軍の陣営に引き立てられることがありますれば、その時はその時。大小の刀を渡し、縛ると言うのなら素直に縛につき、斬ると言うのなら斬られましょう」

と、言った。

勝は、山岡の死をも辞さぬ決意のほどを知り、無言でうなずいた。

「それでは、明朝、出立いたします。西郷殿にお会いすることができました折には、書状をお渡しします」

山岡は、頭をさげ、勝の屋敷を辞去した。

小石川伝通院裏の家にもどったのは、夜もふけてからであった。

かれが酒を飲んでいると、訪れてきた者がいた。薩摩藩士の益満休之助であった。

安政六年（一八五九）、山岡が文武指南所で同志を集めた時、益満がそれにくわわってきて、旧知の間柄であった。益満は、前年に西郷の命をうけて江戸に入り、三田の薩摩藩邸を根城にして江戸の治安の攪乱工作をつづけ、その結果、藩邸の焼き打ちにあい、捕らえられて勝のもとにあずけられ、幽閉されていた。

勝は、山岡が辞去した後、単身で駿府へおもむく山岡の身を案じ、益満を同行させることを思いついた。朝廷軍は、薩摩、長州両藩を主力とした軍勢で、薩摩藩士の益満をともなえば、山岡の駿

府行きに役立つのではないか、と考えたのだ。

そのことを益満に話すと、拘束されていることにうんざりしていた益満は同行をのぞみ、山岡の家を訪れてきたのである。

山岡は、願ってもない同行者を得たことを喜び、仮眠した後、夜明けとともに益満と出立した。

品川、大森をへて六郷川を渡ると、すでに朝廷軍の先鋒の薩摩藩の軍勢が来ていて、銃を持った兵があふれていた。山岡は益満とその中を歩いていったが、だれも道をさえぎる者はいない。

隊長がいると思われる大きな家に案内も請わずに入り、隊長らしき武士に、

「私は朝敵徳川慶喜公の家臣山岡鉄太郎。大総督府へまかり通る」

と、大声で言った。

突然の言葉に、隊長は徳川慶喜と低くつぶやき、その場にいた藩士たちも呆気にとられたように山岡に眼をむけているだけであった。

山岡は、これで諒解を得たと考え、家の外に出た。

神奈川宿に近づくと、そこからは長州藩の軍勢がいて、見張りの者が宿場の入り口に立っていた。

山岡は、益満を先に立たせて、

「薩州藩の者だ」

と名乗りながら、道を急いだ。

通行手形はなかったが、長州藩の者たちは訊問することもなく通してくれた。

泊まりをかさね、小田原宿をへて箱根を越えた。

東海道を足早に進み、三月九日に駿府に到着した。春めいた日であった。
益満が、大総督府のおかれた駿府城におもむき、西郷隆盛が城にはおらず、本陣の小倉平左衛門方を宿所としていることを聴き出してきた。
山岡は、すぐに益満をともなって本陣におもむいた。
入り口に立つ衛兵に、益満が名を告げ、西郷に面談したいという山岡に同行してきた、と言った。
それが奥につたえられ、藩士が出てきて二人を座敷に通してくれた。
すぐに西郷が姿をあらわし、益満になつかしそうな眼をむけ、
「捕らわれたときいていたが……」
と言って、その後の事情をたずねた。
益満は捕縛され、勝安房守の屋敷に幽閉されていたが、この度、山岡が駿府に行くというので同道してきた、と答えた。
山岡は西郷を見つめ、身分、姓名を名乗り、
「この度の御征討については、理由のいかんを問わず兵を進ませるおつもりですか。御決意のほどをうけたまわりたい」
と、たたみ込むような口調でたずねた。
西郷は、しばらく黙っていたが、
「私が、参謀をお引き受けしたのは、朝廷にそむく者を討つためである。理由のいかんを問わずとは、どのような意味か」

と、言った。
眼が、山岡を直視している。
山岡も西郷に視線をすえ、
「わが主君慶喜様を追討するため、兵を進めているとのこと。慶喜様は、もっぱら恭順謹慎して寛永寺にとじこもり、朝廷の御沙汰を待ち、生死いずれとも朝廷の御意向のままと言っておられます」
そこで言葉を切ると、
「そのようにわが主君がひたすらひれ伏して許しを請うておりますのに、なんの必要があって大軍を進撃させているのですか」
と、強い口調でたずねた。
西郷は、姿勢をくずさず、
「慶喜公が恭順謹慎していると申されるが、甲州では朝廷軍に抵抗している一団がいるという報せをうけている。あなたの言葉は信用できない」
と、淡々とした口調で言った。
山岡は、即座に口をひらいた。
「わが主君は、決して天子様の御軍勢に刃むかってはならぬ、と家臣たちにきびしく命じておられます。しかし、多くの家臣の中には、その御命令に反し、あるいは脱走して反乱をおこしている者もいるでしょう。それらは、徳川家とは縁のない者たちで、断じてわが主君の関知するところでは

ありません」

山岡は、言葉をあらため、

「私は、わが主君の真情を訴えるためこの地にまいったのです。なにとぞ大総督有栖川宮殿下におとりなしいただきたい」

と言って、頭をさげた。

西郷は、鋭い眼をして山岡を身じろぎもせず見つめている。

長い沈黙が、つづいた。

山岡が、口をひらいた。

「私は、主君のお気持ちをつたえようとして、礼をもって申し上げている。それを御承知下さらぬと言われるのなら、私に残された道は死のみです」

西郷は、口をつぐみ、再び沈黙が流れた。

山岡が、言葉をつづけた。

「旗本八万騎、生命を惜しまぬのは、私だけではありません。そうなれば、徳川家のみではなく、日本の将来はどうなりますか。それでもなお兵を進めると申されるのですか」

かれの視線は、西郷の眼にむけられたまま動かない。

西郷も、身じろぎもせず山岡の顔を見つめている。

益満は、体をかたくして座っていた。

山岡の口が、動いた。

「あくまでもこのまま兵を進めると申されるなら、それは天子様の御軍勢とは申せません。天子様は、民の父であり、善悪をあきらかにし、国を売ろうとする者を討ちはたす、それが天子様の御軍勢と申すべきです。つつしんで朝廷の御沙汰にしたがうと申している主君慶喜様に対し、寛大な御処分がなければ、天下これより大乱となることはあきらかです。なにとぞこのことを十分にお考えいただきたい」

山岡の顔には、決死の色が濃くうかんでいた。

西郷は表情を動かさず、思慮している様子であった。

やがて口をひらいた西郷は、

「あなたがこの地までこられた事情はよくわかった。その旨を大総督宮に申し上げよう。しばらくここで御休息ありたい」

と言ってゆっくりと席を立ち、座敷を出て行った。

あきらかに西郷は、大総督府のおかれた駿府城におもむくにちがいなかった。

山岡は、益満とともに無言で座っていた。

かなりの時間がたち、西郷が書面を手に座敷にもどってきた。

「大総督宮殿下より、御指示の書面が下された」

西郷は、座につくとその書面を山岡に渡した。

山岡は、書面に視線をすえた。

「一、城を明け渡す事

一、城中の人数を向島（水戸藩下屋敷）へ移す事
一、兵器を渡す事
一、軍艦を渡す事
一、徳川慶喜を備前（藩）へ預ける事」
西郷は、読み終えた山岡に、
「この五個条を実行されれば、徳川家に対して寛大な御処置があると思う」
と言った。
山岡の眼に涙がうかび、手をつくと頭を深くさげ、
「つつしんでうけたまわりました」
と、言った。
しかし、すぐに顔をあげると、
「ただし、この五個条のうち一個条だけは、断じてお受けできかねます」
と、強い口調で言った。
その言葉に、
「どの個条か」
と、西郷は表情を動かさずたずねた。
「主君慶喜様を備前（藩）に預けるという一条です。これは、いかなることがあろうともお受けできません。この一条について、徳川家に恩義をいだく者たちは決して承知いたしません。これを強

行なされば、大乱となって数万の人命を失うことになり、これは天子様のなすべきことではありません。あなた方は単なる人殺しとなり、それ故、私はこの一条に断乎反対なのです」
山岡は、よどみない口調で言った。
「天子様の御命令である」
西郷は、きびしい口調で言った。
山岡は、屈することなく、
「たとえ天子様の御命令でありましょうとも、この一条は断じて承服できません」
と、ふるえをおびた声で言った。
「天子様の御命令である」
西郷は、怒気をふくんだ声で言った。
山岡は、西郷の眼に視線をすえたまま、
「それならば、私とあなたと立場をかえてお考えいただきたい」
と、言い、言葉をつづけた。
「あなたの主君島津侯が、もしも誤って朝敵の汚名をこうむり、朝廷軍の御征討をうける身となったとします。当然、島津侯は、ひたすら恭順謹慎の態度をとられるでしょう」
西郷は、山岡を直視している。
「そのような状況下で、あなたが私のように使者に立ち、島津侯が他家あずけになることを、あなたは平然として御承諾なさるでしょうか。家臣として、それを忍ぶことができましょうか。わが主

君は将軍職にもあった御身であり、私には、到底承服できるものではありません」

山岡は、この一条は断じて承服いたしかねると、眼に涙をうかべて繰り返し説いた。

西郷は、切々と訴える山岡の言葉を無言できいていたが、しばらくして、

「あなたの言われることは、よくわかった。慶喜公の事柄については、私がお引き受けしよう」

と、言った。

思いがけぬ西郷の言葉に、山岡は手をつき頭を深くさげた。

西郷は、山岡の差し出した勝の手紙を黙って読んでいた。むろん内容は、山岡の言葉同様のものであった。

西郷は酒を持ってこさせ、山岡、益満とともにそれを口にふくんだ。

これよりただちに江戸へ、という山岡の言葉に、西郷は検問所の通行手形を渡してくれた。

西郷は、大総督府の武家参謀として京を進発した頃、慶喜追討を主目的として断じて切腹させなくてはおかぬ、と強く主張していた。それにもかかわらず、山岡と対面したかれが、結果的には慶喜の朝廷に対する恭順をみとめ、その死を撤回したのはなぜか。山岡が死を賭して談判したとは言え、それまでの西郷の言動から考え、山岡の弁論に屈したわけではなかった。

朝廷軍の上層部には、考え方の変化が生じていた。

公卿の代表的人物である岩倉具視は、幕府側の慶喜の助命と徳川家存続の嘆願に対して、慶喜に謝罪の誠意があるなら、その嘆願を受けいれるべきであるという考えにかたむいていた。ことに皇族である輪王寺宮と元皇族の和宮の動きを、公卿として無視することはできなかった。そのような

岩倉の考えに同調する者も、徐々に増していた。

それに、江戸にむけて大軍を進める総督府内にも、武力による社会秩序の破壊が民衆の暴発をまねく恐れがある、と懸念する声もきざしていた。

すでに動乱に乗じた一揆（いっき）や打ちこわしが各地ではじまっていて、それは加速する気配が濃厚だった。勝は、山岡に託した西郷への手紙で、民衆への恐れを記していた。朝廷軍が江戸に進撃してきた折には、日本最大の都市である江戸には、多くの市民が住みついている。慶喜は朝廷への恭順を広くつたえ、町触れによってそれを守るよう命じてはいるものの、それに不満をいだく者たちが、衆をたのんで収拾のつかぬ変事をひき起こす恐れが十分に予想された。

勝は、そのような事態におちいることを防ぐため全力をつくすつもりではあるが、ほとんどそれは不可能に近い、と記していた。

勝は手紙の最後に、これを苦慮して身の細る思いでいるが、そのことを、大総督府の方々にもつたえ、慎重に行動して欲しい、と訴えていた。

勝の懸念は、大総督府のそれでもあった。徹底的に幕府を根こそぎ消滅させようとしていた大総督府の考えは、ここに至って大きく軟化していた。それが西郷と山岡との対話にはっきり現れたのである。

山岡は、本陣をはなれると、益満とともに東海道を江戸に急いだ。途中、神奈川宿で韮山（にらやま）の代官江川英武（えがわひでたけ）が朝廷軍に差し出す馬を借り、益満とともに江戸へ走った。

勝安房守の屋敷についた山岡は、勝が登城しているときいて、益満を屋敷に残し、江戸城に急い

でおもむいた。

勝と会った山岡は、西郷から渡された大総督有栖川宮熾仁親王認可の五個条の条件を記した書面を差し出し、西郷と約束した事柄を報告した。

勝は、予想外の成果に驚き、山岡をともなって若年寄大久保一翁のもとに急いだ。

書面を見、山岡の報告をきいた大久保の顔には、喜びの色があふれた。朗報をききつたえた重臣たちがぞくぞくと集まり、互いに安堵の声を交わした。

大総督府内で最も強硬論をとなえていたのは西郷で、慶喜を切腹させずにはおかぬと主張していたことは、大久保たちも探知していて、その西郷が慶喜の嘆願について、

「すべてを自分にまかせて欲しい、心配はいらぬ」

と約束したという山岡の報告に、かれらは喜びの声をあげた。

城を出た山岡は、ただちに寛永寺におもむき、慶喜の謹慎している部屋に入ると平伏し、駿府に行って西郷と話し合った結果を報告した。

不安にみちた表情をしていた慶喜は、山岡の言葉をきいているうちに眼がかがやき、涙がうかんだ。西郷が慶喜の嘆願を受けいれたという山岡の報告に、慶喜は無言でうなずいていた。

山岡は、寛永寺を辞した。

西郷は、山岡の後を追うように駿府をはなれ、幕僚とともに江戸にむかっていた。大総督府は、三月十五日に江戸へ進入することを決定していたが、その件について旧幕府側と協議するためであった。

三月十三日、西郷は、江戸高輪の薩摩藩邸に入り、江戸城に使者を立てて、その旨をつたえた。

それを知った山岡は、すぐに薩摩藩邸に出向き、身辺警護の任についた。

勝が、幕府側の代表者として馬で江戸城から薩摩藩邸に行き、座敷に通された。

西郷が、山岡とともに姿をあらわし、勝と対座した。以前に一度会ったことがある二人は親しげに挨拶をかわし、雑談となった。

かれらは、互いの考え方をさぐるように肝腎のことについてはふれない。西郷は、勝が益満を世話してくれたことに礼を述べたりした。

その日は昼すぎから雷鳴がとどろき、霰が降ったりしていたが、やがて天候が回復した。

勝は山岡と相談して、西郷を薩摩藩邸に近い愛宕山に案内した。山上からは、江戸の町々が遠くまで見渡せた。

勝は、家並みのひろがりに眼をむけながら、

「明後日は、これが焼け野原になっているかも知れませんな」

と、つぶやくように言った。

十五日に朝廷軍が江戸に進撃することを知っていた勝は、西郷がそれを実施するかどうか、探りを入れたのだ。

西郷は、無言であった。

翌日、勝は再び薩摩藩邸におもむいた。

山岡も座につき、西郷は、幕僚の薩摩藩士村田新八らをしたがえて座敷に入ってきて、勝とむか

い合って座った。
正式な会談がはじまり、村田が大総督府の提示した条件について、
一、城を明け渡す事
一、城中の人数を向島へ移す事
一、兵器を渡す事
一、軍艦を渡す事
と、徳川慶喜を備前へ預ける事をのぞく四個条について、あらためて読み上げた。
「この四個条の要求について、どのようにお考えか」
西郷が、勝に視線を据えた。
「誠意をもって実行いたす」
勝は、答えた。
これによって、基本的な合意を見た。
勝は、きびしい表情をして西郷に、
「明日、あなた方の軍勢は、江戸に進撃する御予定ときいているが、それについて決行なさるおつもりか、おうかがいしたい」
と、たずねた。
もしも江戸に軍勢がなだれこんでくれば、旧幕臣との間に戦争が起こり、江戸は戦場と化す。勝はそれを最も恐れ、絶対に回避しなければならないと考えていた。

同席している山岡も、息を殺して西郷がどのような回答をするか見つめた。
「その件は、私の一存ではお答えできぬ。大総督府宮に急使を出して、それについての御意向をただす。その御回答があるまで、全軍に進撃せぬよう命じる」
西郷は、身じろぎもせず答えた。
その言葉に、勝の顔に安堵の色がうかんだ。回答はすぐにはこないはずで、少なくとも明日の進撃は中止されることを知ったのだ。
やがて大総督府からの回答が寄せられ、それは江戸進撃の中止を命じるものであった。
勝は、江戸市中に町触れを出し、江戸への進撃が中止されたことをつたえた。みだりに動揺することなく、すべて静穏にいたすように、と指示した。
すでに中山道を進んできていた征討軍の先鋒は市ケ谷に、東海道よりの軍勢は芝増上寺、北陸道を進んできた先鋒は千住に達していて、江戸進撃の態勢はととのっていた。それらの軍勢に、薩摩藩邸から中止せよという命令が発せられたのである。
まず、江戸城引き渡しのことが実行に移された。
若年寄以下旧幕府の役人は、江戸城を出て田安邸に移り、和宮と徳川家定の夫人天璋院は、それぞれ江戸城を出て清水邸、一橋邸に身を寄せた。もろもろの所蔵品は、浅草と本所の蔵にはこび込まれた。
一応の受け入れ準備がすんで、四月四日、東海道を進んできた先鋒総督が、勅使として参謀ら三十人をしたがえて、池上本門寺から町奉行の案内で江戸城に入った。さらに四月八日に駿府を発し

た東征大総督の有栖川宮熾仁親王が、十五日に江戸の増上寺につき、二十一日諸軍をひきいて江戸城に入り、これによって江戸城の朝廷軍への明け渡しが完了した。

これに先立って、慶喜は水戸に隠退謹慎することが決定し、四月十一日暁八ツ半（午前三時）、寛永寺を出た。家臣、旗本ら三百名ほどが随行した。

道の両端に膝をついて見守る者たちは、慶喜の姿に嗚咽した。髪は「蝟毛（はり鼠の毛）」のように乱れ、顔は憔悴し、蒼白だった。身につけているのは、黒木綿の羽織に小倉の袴で、麻裏の草履をはいていた。それは、徳川将軍とは程遠い身なりであった。

一行は、水戸への道を進み、夕刻から雨に見舞われ、松戸宿に泊まった。

翌日は雨があがり、その日は藤代宿、次の日は土浦宿に入った。そこには水戸藩士二人が迎えに来ていて、翌日は片倉泊まりになった。水戸から来た家老が待っていて、慶喜と同室で寝た。

翌日、ようやく水戸につき、弘道館におもむいた。館の入り口には城代をはじめ重臣たちが出迎え、慶喜はその一室に入った。重臣たちは慶喜の姿に涙ぐみ、藩士たちが警護にあたった。

空は、厚い雲におおわれていた。

彰義隊

慶喜の水戸への謹慎で、江戸は一種の虚脱状態にあった。

町の者たちは、ひたすら恭順、謝罪を請うた慶喜を余りにも腑甲斐ないと嘆き、かれらの表情は暗かった。また、旧幕臣の間には、慶喜の謝罪をねがって朝廷軍との交渉にあたった勝安房守と大久保一翁を、徳川家を売る逆臣として殺害しようとする動きもあった。

その間に、徳川家の存続をゆるした大総督府は、閏四月二十九日、徳川御三卿の一つである田安家の亀之助に、家名をつがすことを公布した。江戸に争乱の起こるのをふせぐ配慮からであった。

西郷は、江戸の治安が乱れることを恐れ、大久保一翁と勝安房守にその取り締まりをゆだね、勝は、これまでと同じように上野の山に屯集する彰義隊に市中を巡回するよう、あらためて指示した。

江戸城を接収した朝廷軍の兵たちが、町なかに姿をみせるようになった。かれらにとって、江戸は眼にしたこともない大規模な町で、多種多様の商品をあきなう商店が軒をつらねている。道には、商品をのせた大八車や町駕籠が往き交い、芝居小屋や華美な遊女屋の並ぶ区画もある。食物を売る店も多く、かれらには眼もくらむような魅力にみちた町に思えた。

かれらは、好奇の眼を光らせて連れ立って歩き、警戒して集団をくみ、単独で行動する者はいな

かった。しかし、やがてかれらはおびえきった町の者たちを意識することによって戦勝気分になり、大胆な振る舞いをするようになった。酒を売る店に入って酒を買いもとめ、酔って笑い声をあげて歩きまわる。遊廓にも足をふみ入れ、女を抱く。中には、民家に入って若い女をからかい、金品を強要する者もいた。

かれらは、着物の袖に朝廷軍であることをしめす錦の布切れをつけていたが、武器を手にしたかれらを市民は恐れ、その姿を眼にすると身を避けた。

軍規は次第にみだれ、かれらの行動を監督する機関はなく、かれらは町々をのし歩き、その横暴が日増しにつのっていった。

町々には、彰義隊員が連れ立って巡回し、朝廷軍の兵と行き遭うこともあって、必然的に衝突事件が起こることもあった。

最初に起こったのは、谷中三崎町の路上であった。

彰義隊の関規矩守が、隊員をともなって上野の山からおりて谷中三崎町を通行中、前方から朝廷軍の薩摩藩士数名が、道にひろがってやってきた。

藩士たちはかなり酒に酔っていて、いちはやく関たちを旧幕臣と気づき、道をさえぎった。

「朝敵、朝敵」

さげすむ声が、藩士たちから関たちに浴びせかけられ、つづいて慶喜が尻尾をまいて水戸に逃げるように去ったことをあざ笑った。

関らは、顔色を変えた。

藩士たちは、なおも慶喜を臆病者と罵倒しつづけた。

関たちは堪えていたが、関が抜刀するのにつづいて隊員たちも刀を抜き、それを眼にした藩士たちが一斉に刀を引き抜いた。隊員が藩士たちに斬りかかってたちまち乱闘になり、藩士の一人が斬り倒され、それを見た藩士たちは逃げた。

関たちはこれを執拗に追い、動坂の先の地蔵堂の前で一人を追いつめ、これを斬り殺した。

さらに関たちは、逃げる藩士たちを追い、駒込千駄木町の観音前で一人を斬り伏せ、そのすきに他の者たちは逃げ、姿を見失った。

この闘争で斬殺されたのは、薩摩藩士の有吉庄之丞、湯地治右衛門、有馬新八郎で、関をはじめ彰義隊も軽傷を負った。

この事件は多くの江戸の市民が目撃し、町役人も出張して死体を見分したが、市民たちは口をつぐみ、その糾明はおこなわれることはなかった。

藩士の遺体は、薩摩藩邸にはこばれ、荼毘にふされた。関たちは上野にもどり、町医によって傷の手当てをうけた。

この乱闘は、隊員の朝廷軍に対する敵意をつのらせ、慶喜を罵倒した薩摩藩士を斬殺したことを当然の処置だとした。

このような空気の中で、事件はさらにつづいた。

料理屋や酒を飲ませる店の多い上野三橋町で、酒に酔った筑前藩士たちが巡回中の彰義隊員らと口論になった。双方、抜刀して斬り合いとなり、筑前藩士一人が斬殺され、隊員たちは足早にその

場を立ち去った。

筑前藩から藩士が出張して事件の取り調べをおこなったが、町役人も目撃した市民も殺したのが彰義隊員であることを口にせず、その事件も不問に終わった。江戸の町民たちは、朝廷軍に敵意をいだき、それと戦った彰義隊員に喝采をおくっていたのだ。

上野の山に近い坂本でも、事件が起こった。

これまでの事件は、朝廷軍の兵の挑発によるものであったが、その事件は、朝廷軍そのものに対する彰義隊員の敵意から発したものであった。

白昼、坂本の道を鳥取藩士たちが弾薬数十駄をはこんでいたが、巡回中の彰義隊員たちが道をさえぎった。

隊員たちは、

「このような不穏の物は没収する」

と叫び、馬とともに弾薬をうばって去った。

これらの事件は、上野の山に近い地域で起こっていて、朝廷軍は上野近辺を通行する者はいなくなった。

彰義隊内では、頭取渋沢成一郎と副頭取天野八郎が意見の対立をみて、渋沢は隊をはなれていた。彰義隊の朝廷軍に対する敵視は一層つのるばかりで、朝廷軍との衝突が続発し、江戸市民はそれを歓迎する傾きがあった。

大総督府は、二千名を越えるまでになった彰義隊の存在を危険な集団と判断し、治安維持を託した勝安房守に、彰義隊の解散命令を下した。

やむを得ぬことと考えた勝は、山岡鉄太郎を上使として上野におもむかせ、彰義隊を支持する寛永寺執当の覚王院に解散を指示した。

覚王院は、輪王寺宮が途中朝廷軍の兵士から屈辱的な行為をうけながら慶喜謝罪のため駿府におもむいたのに、大総督有栖川宮をはじめ参謀たちから冷ややかな態度で追い返されたことに、激しい憤りをいだいていた。それは皇族に対して全く非礼であり、執当職として許しがたいことと考えていた。それは寛永寺の僧たちの一致した感情で、朝廷軍に対する憤りとなっていた。

山岡の彰義隊解散をうながす指示に、覚王院は、怒りをあらわにして反発した。

「朝廷軍と言っても、所詮は薩摩、長州の軍勢に過ぎず、貴殿が上使としてこられたのは、薩摩の策略に乗ったにすぎない」

覚王院は語気荒く、

「当寺は古くから徳川家が経営し、皇族を山主と仰ぐ寺であり、徳川家に恩を感じる者たちが集まって守護しようとするのは当然のことである。そのような忠義の者たちである彰義隊を解散せよ、と言われる貴殿は、徳川家の恩を忘れた逆臣である」

と、言った。

激論が交わされたが、覚王院はかたくなに解散を拒否し、山岡は上野を去った。

覚王院義観は、文政六年（一八二三）に武蔵国新座郡根岸村に生まれ、漢学をまなんで十歳で上野東叡山に入った。

僧としての修行に一心につとめ、豊かな学識を身につけて、二十六歳で寛永寺内の真如院の住職となった。的確な判断力と物に動じることのない強靭な意志を持つかれは、多くの僧から畏敬され、僧を統括する執当職についていた。

彰義隊員と朝廷軍の薩摩、長州藩士らの江戸市中での衝突がつづき、大総督府では、それが拡大することを恐れた。それを回避するためには、なんとしてでも彰義隊を解散させなければならなかった。彰義隊は、徳川慶喜を守護するために上野に屯集していたが、慶喜が水戸に去ってからは、寛永寺山主の輪王寺宮を警護することを目的とするようになっていた。

かれらは、輪王寺宮の側近である覚王院を尊重し、その指示にしたがうようになった。覚王院は、執当職として寛永寺第一等の人物で、朝廷軍の使者である山岡鉄太郎の彰義隊解散命令も鋭く拒絶したことが、彰義隊員たちのかれに対する畏敬の念を一層深めていた。覚王院は、いつしか彰義隊の支柱に似た存在になっていた。

この事情を察知した大総督府は、覚王院を説得しなければ彰義隊の解散は不可能と判断し、再び山岡鉄太郎を上野に派遣し、覚王院に江戸城に登城するようながした。しかし、覚王院はこれにも応じず、山岡はむなしく上野の山を去った。

その後も、繰り返し覚王院に登城をうながしたが、覚王院は、かたくなにこれを拒否しつづけた。彰と朱書きした円提灯を手にした彰義隊員が、それぞれ十数名の集団を組んで夜の江戸の町々を縫って歩く。戦勝気分で、酒に酔い放歌したり笑い声をあげたりする薩長両藩の兵と遭遇することもあるが、提灯の群れが近づくと藩兵たちは、声をひそめて通り過ぎる。時には、今にも抜刀する

緊迫した状況になることもあったが、大半は、藩兵たちが顔を青ざめさせて足早に去る。そうした姿に、町の者たちは歓声をあげていた。

上野の山には、槍、銃を手にした彰義隊員が、所々に屯し、寛永寺の周辺には警備の者たちが絶え間なく巡回していた。日が傾くと、提灯に灯が入り、それらが群れをなして山を下って町々に散ってゆく。

町民たちは、提灯の列が近づくと家々から出て来て頭をさげ、隊員が休憩のため足をとめると、茶や甘酒を出して感謝の言葉を口にする。上野の山にも食料を手にしたり大八車に積んだりして、彰義隊の屯所にとどける者がひきもきらなかった。正装し、連れ立って金を寄進する者も多かった。

朝廷軍は、江戸城を掌中におさめ、江戸に入る諸街道を封鎖していたものの、広大な江戸の町は町民のもので権勢は及んでいなかった。それは上野の山に集まる彰義隊の存在が大きく、町の治安は、彰義隊員によって維持されている趣きがあった。

東征大総督府の目的は、むろん江戸城を接収することによる江戸の完全占拠であった。しかし、町民の絶大な支持をうける彰義隊によって、それは不可能な状態にあった。その状況を打ちくだくためには、彰義隊と町民の間に深いくさびを打ち込み、彰義隊を自然消滅させる以外になかった。

総督府内では、連日、協議がかさねられた。

慶喜が水戸に去った現在、彰義隊が上野の山に屯集しているのは寛永寺山主輪王寺宮を警護するためとされている。彰義隊解散の度重なる命令も効果がなく、かれら隊員の信望を集める執当覚王院も、江戸城への登城をかたく拒否している。どのようにして彰義隊を無力化させるか、はげしい

討論が交わされた。

その結果、宮を寛永寺からはなれさせるべきだという意見が支配的になった。宮が上野からはなれれば、彰義隊の宮を警護するという大義名分がうしなわれ、隊員たちは上野から去る以外にない。宮を寛永寺からはなれさせるには、京におもむかせるのが得策と考えられた。皇族である宮が身を安んじられるのは京であり、天皇に拝謁（はいえつ）するため参内することをすすめる。京には、親族である皇族も多く、宮は京におもむく公算が大であると考えられた。

大総督の有栖川宮もそれに賛同し、寛永寺に使者を立てた。

使者の差し出した書面について、全山の僧侶が集まって協議した。

受け入れるかどうかについて、僧たちは二派にわかれて論争した。

その一派は、鳥羽、伏見の戦いで勝利をおさめ江戸に進撃してきた朝廷軍は、彰義隊を潰滅（かいめつ）させるため武力を駆使する確率が高い、という想定にもとづくものであった。不幸にしてそれが事実となった場合、宮は激しい戦闘に巻きこまれ、命を失うおそれもある。それを避けさせるためには、京におもむくべきだという。

これに対して、覚王院をはじめとした僧たちが強く反論した。

寛永寺の山主輪王寺宮は、広い寺領の町民たちの尊崇の的となっているだけではなく、連日、治安維持のため市中を巡回する彰義隊の存在によって、江戸全域の精神的支柱となっている。その宮が上野をはなれれば、町民たちの失望は大きく、江戸のためにも、宮はあくまでも上野にとどまるべきだ、という。

議論は連日つづき、大総督府よりの指示の内容が広く流れ、宮に江戸にとどまって欲しいという町民からの嘆願書もぞくぞくと上呈され、それは本坊の一室に充満するほどであった。

さらに、彰義隊員の反対もはげしく、もしも宮が京におもむくなら、それをあくまでも阻止するため、山門の外に集まって切腹する、と寺側につたえた。

このような一般の空気を背景に、覚王院らの主張が通り、宮の京行きは中止され、それが大総督府に書面でつたえられた。

それを受けた大総督府は苛立（いらだ）ち、有栖川宮が輪王寺宮を江戸城に招き、京行きをすすめることになった。

そのため、五月三日に使者が寛永寺に派遣され、登城して欲しい旨を要請したが、応接に出た覚王院は、

「宮様は御不例（病気）であらせられ、お招きには応じかねる」

と言って、その申し出をことわった。

それが偽りの言葉であるのを察した大総督府は、翌日、公卿参謀と武家参謀を寛永寺に派遣し、宮に直接会って大総督有栖川宮の登城命令を伝えさせようとした。しかし、応接に出た覚王院は、またも宮は病気で会うことはできぬ、と答え、宮の代わりに有栖川宮の命令の内容をおききしよう、と言った。

参謀らは、宮にお会いできぬなら命令の要旨を口にできぬ、と答え、寺を去った。

事態は、にわかに緊迫化した。

総督府は、輪王寺宮を寛永寺からはなれさせなければ、彰義隊を弱体化させることはできないと断定していた。輪王寺宮を京におもむかせることには、寛永寺の僧たちが反対し、宮を江戸城に招いて有栖川宮が説得しようとしたものの、応対に出た覚王院が病気を理由に拒否した。覚王院は、寛永寺の執当として前面に立ち、大総督府の命令をことごとくしりぞけている。それは、慶喜謝罪嘆願のため宮に随行して駿府におもむいた時、有栖川宮をはじめ参謀たちから受けた屈辱が頭にこびりついていたからであった。かれは、由緒正しい寛永寺の山主輪王寺宮の尊厳を、一身を投げうって守りぬこうと思っていたのだ。

大総督府は、打つべき手がすべて失われたのを知った。

その間に、彰義隊に加わる者は日を追って増し、その勢力は侮りがたいものになっていた。江戸城を接収しながら、江戸には朝廷軍に反抗する彰義隊が市中を歩きまわり、朝廷軍の藩兵に威圧感をあたえている。

そのような状況が地方にも波及すれば、各地で朝廷軍に抵抗する動きが活発化することが予想された。

そのような懸念から、大総督府内では彰義隊を一挙に武力をもって殲滅すべきだという声がたかまった。それを強く主張したのは、武家参謀の大村藩士渡辺清左衛門で、それに同調する者が多かった。渡辺は、鳥羽、伏見の戦いで目ざましい働きをし、それが認められて大総督府の参謀となっていた。

前月の末、長州藩士大村益次郎が軍防事務局判事として江戸に入り、大総督府に所属していた。

大村は、漢学を広瀬淡窓に、蘭学を緒方洪庵にまなび、兵学の修得につとめ、西洋学兵学教授となった。

幕府の長州征伐の折には、石州口の総参謀として連勝し、洋式兵術に卓越した知識をそなえていることが広く認められていた。かれは、討幕軍進発にしたがって江戸に来て、親兵を編成していた。参謀の西郷隆盛は、兵術家として大村にまさる人物はいない、と高く評価し、今後の軍事に関する一切の権限を大村に託す、と公言していた。

武力で彰義隊を潰滅させようと主張していた渡辺清左衛門は、大村益次郎のもとにおもむいた。彰義隊員の朝廷軍に対する敵視は日増しにつのり、殺害事件も起きている。寛永寺山主の輪王寺宮の京行き、江戸城への招きも、執当覚王院によって拒否され、彰義隊解散命令も無視されている。打つべき手はすべて打ち、それらが全く効果がないかぎり、一日も早く彰義隊を武力で殲滅する以外になく、軍事の全権を託された大村が、この際、武力発動を発令すべきだと強い口調で要請した。

「その必要はない」

大村は、即座に答えた。

渡辺は、大村に兵術を教えてもらっている、いわゆる弟子の立場で、その一言で言葉を返すこともなく、大村のもとを退いた。

かれは、納得がゆかず、参謀の西郷隆盛のもとにゆき、彰義隊に対する武力行使を強く要求した。

西郷は、大村が武力発動の必要はない、と答えたことをきくと、

「大村には大村の考えがある。私は大村に軍事に関することは、一切まかせている。大村がどのよ

うに動くか、それを見守るだけだ」

と、答えた。

西郷は、大村がひそかに彰義隊討伐を決意していることを察していた。かれは、大村が、彰義隊討伐の大義がまだ熟していないと考え、決行の時期を待っているにちがいない、と思ったのだ。

彰義隊は、朝廷軍より解散命令が下され、さらに輪王寺宮、覚王院の登城命令も覚王院によってことごとく拒否されたことで、大総督府が激しい憤りをいだいていることを感じていた。鳥羽、伏見の戦いで勝利をおさめて江戸に進撃し、江戸城を手中におさめた朝廷軍は、その面子からも彰義隊の討伐に手をつけるにちがいない、と察していた。

彰義隊では、五月十三日、大目付山岡鉄太郎に書を送り、

「私たちは抵抗いたす考えはないが、無謀にも進撃なさる場合には、やむを得ず、断乎武士の道としてこれに対する決意である」

と、徹底抗戦の意志があることを伝えた。

その頃、大総督府に衝撃的な報告がもたらされ、府内ははげしく動揺した。

朝廷軍は、奥羽地方にも進出していたが、終始幕府軍の先鋒として朝廷軍に抵抗してきた会津藩に対して、強い圧力を加えていた。

これを憂えていた仙台、米沢両藩では、会津藩処分を寛大にするよう嘆願していたが、その応接にあたっていた朝廷軍参謀の長州藩士世良修蔵は高圧的な態度でこれを拒否し、会津城の接収を強行しようとしていた。

これに憤りをいだいた仙台、福島両藩士たちが、閏四月二十日の明け方、福島の遊廓に登楼していた世良をおそい、斬殺した。その折、世良の所持品の中から、朝廷軍の増援部隊が到着次第、ただちに会津藩を討ち、さらに奥羽諸藩を敵として討伐する、という秘密書類が発見された。

これによって、奥羽諸藩の怒りは爆発し、五月三日、奥羽二十五藩の家老たちが仙台藩の白石城に集まり、奥羽列藩同盟を結成、その後越後の六藩が加盟して、薩長両藩による朝廷軍に徹底抗戦することを決議した。

この報を得て、彰義隊の存在によって江戸の完全支配をはたせぬ大総督府は、大きな衝撃を受けた。彰義隊をこのままにしておけば、奥羽越列藩同盟を勇気づけ、その風潮は全国にも拡大することが懸念された。

ここに至って、五月十四日、大村益次郎は彰義隊討伐を決断し、大監察使三条実美をはじめ諸将を総督府に集め、その決意をつたえ、軍議に入った。

大村は諸藩の兵を総動員して攻撃することをきめ、夜襲をとなえる者もいたが、白昼正々堂々と討伐すべきだとして、討伐の期日を翌十五日とさだめた。さらに、上野山内に屯集して朝廷軍兵士を暗殺する彰義隊は国賊であり、皆殺しにする、という公文を発し、それにともなって、上野周辺の市民にすみやかに避難するよう布告した。

輪王寺宮にも、大総督府より書状が送られた。朝廷軍兵士を暗殺するなど彰義隊の罪状がつづられ、大総督有栖川宮より使者をさしむけて輪王寺宮をはじめ執当覚王院にも登城するようながし、さらに参謀も派遣したにもかかわらず、それらはことごとく拒否された。

平和を旨として手をつくしてきたが、それもつき果て、ここに彰義隊討伐を決定した次第で、輪王寺宮にはすみやかに上野の山からお立ち退きいただきたい、と記されていた。

閏四月中旬から雨の日が多く、五月に入ると梅雨期とは言え、例のない異常な気象状況をしめしていた。

五月一日から七日まで、わずかに二日間晴れ間がのぞいただけで雨がつづき、八日には豪雨があって江戸の町々は雨しぶきで白く煙った。

九日は雨があがったが、十日からは連日絶え間なく雨が降りつづき、河川は急激に増水して堤をやぶり、濁水が町々を流れた。神田明神と湯島の後ろの崖が水をふくんでくずれ落ち、家々が破壊されて怪我人が出る騒ぎとなった。隅田川をはじめとした川には樹木や小屋などがうかぶ水が急流のように流れ、橋の上まで水に洗われて、押し流されぬように大きな石が橋の上にいくつも運ばれた。

川ぞいの地の田畑は濁水におおわれ、浅い所で三尺（九〇センチ強）、深い所では五尺にまで及んだ。多くの人家が流失し、低湿地帯では水につかった家の屋根に人々があがり、助けを求める姿もみられた。

五月十四日も雨で、大村益次郎は、翌日の彰義隊討伐にそなえて攻撃する諸藩兵の配置をさだめた。兵力は約二万であった。

これに対して彰義隊は、三千の隊員が上野に屯集していた。しかし、大総督府より、十五日に討伐決行がつたえられると、隊員の間に一つの動きが起こった。

江戸市内の家に帰っていた者たちの中には、戦さを恐れて上野山中の陣営に姿を現さぬ者もいた。また陣営に行こうとしても、すでに進出した朝廷軍が市中に土塁をきずいていて交通を遮断していたため、もどれぬ者もいた。

また、隊員の中には生きる糧を得るために隊に加わっていた者たちもいて、かれらはひそかに山をおりてのがれていた。

残ったのは二千人足らずであったが、かれらはあくまでも朝廷軍に死力をつくして戦おうと誓い合った幕臣たちで、その士気はたかかった。

かれらは、攻撃にそなえて寛永寺周辺に木柵をもうけ、これには多くの市民がすすんで作業に従事した。町の俠客たちもそれに加わり、配下の者を督励して資材をはこび、木柵づくりにはげんだ。

十四日夕方、彰義隊員は、彰と朱書きした円提灯を手に、上野近辺の町々を太鼓を打って歩き、老幼婦女子は立ち退くよう触れてまわった。

そのため町々は騒然となり、家財を運び出す者が道にあふれ、大混雑を呈した。

上野の戦い

翌十五日朝もはげしい雨が降りつづき、風も吹きつけていた。

八ツ半（午前三時）頃、雨に打たれながら諸藩の兵が砲をひき銃を手にして、江戸城大手門前に集結した。

ただちに出撃命令が下され、各藩の者たちは総指揮者大村益次郎の指示にしたがってそれぞれの配置方面に進んでいった。

上野東叡山には正門が黒門、その他新黒門、穴稲荷門、清水門、車坂門、屏風坂門、谷中門、新門の七門があり、寛永寺を守護していた。

正面からの攻撃をおこなうため黒門口にむかったのは、西郷隆盛指揮の薩摩藩兵一番、三番各小銃隊、一番遊撃隊、兵具一番隊、一番大砲隊、臼砲隊であった。

薩摩藩兵は、湯島方面に進んだが、彰義隊員の姿はなく、そのため湯島神社を待機陣営とした。

諸隊は、前方に斥候をはなって前進し、広小路に出て黒門の正面にむかった。不忍池方面からは、肥後（熊本）藩の軍勢が池のほとりに沿って進み、さらに因幡（鳥取）藩兵は、広小路に通じる切通坂から池の端の仲町を進んできていた。

薩摩藩の先鋒が斥候を出して黒門口の状況をさぐってみると、彰義隊員が堡塁をきずき、砲をすえて守りをかためているのが判明した。

大村益次郎からは、黒門口を突破せよという指令があって、薩摩藩兵の一隊は広小路を進み、黒門口の彰義隊に一斉に銃撃を開始した。六ツ半（午前七時）であった。

その銃声に、湯島神社にあった本隊は、砲五門をひいた大砲隊を黒門口前面と御徒町方面へ、さらに小銃諸隊、遊撃隊がそれにつづいて押し出し、たちまち激烈な戦闘がくりひろげられた。

彰義隊の砲は旧式砲で射程距離も短く、それとは対照的に薩摩藩の砲は、イギリスを介して輸入した最新鋭のアームストロング砲などで、射程距離も彰義隊のそれよりはるかに長く、威力も格段にすぐれていた。

それらの砲が上野広小路の呉服店松坂屋の付近にすえられ、放たれた砲弾が黒門口を守る彰義隊員に絶え間なく撃ち込まれたが、堡塁を盾にした隊員たちは少しもひるむことなく応戦した。

薩摩藩の大砲隊長は、黒門口をのぞむ会席料亭の松源と仕出し料理店の雁鍋の二階に砲をかつぎあげさせて、そこから砲撃させた。このことが後に江戸市民の批判を受け、人気のあった松源の客足は徐々に少なくなり、やがて廃業の憂き目にあった。

砲撃が黒門口に集中し、側面から進んできた肥前（佐賀）藩の軍勢からも大砲を撃ちかけた。しかし、黒門口の彰義隊員に動揺の気配はみられず、砲から砲弾が轟音をあげて放たれ、銃での応戦も絶え間なくつづけられて、雨と硝煙でその付近は白く煙っていた。

大村益次郎は、戦闘開始にのぞんで巧妙な作戦計画を立て、実行に移していた。

諸藩の兵で上野の山を包囲するが、根岸、日暮里方面には兵の配置をしていなかった。完全に逃げ口をとざしてしまえば、彰義隊は最後まで死力をつくして戦い、それだけ味方にも大きな損害が生じるので、その両方向を敗走路としてあけていたのだ。

むろん、それは彰義隊も知っていた。

黒門口は、上野東叡山の南にあるが、北の谷中口方面には長州、肥前、筑後（久留米）、大村、佐土原の各藩の連合軍が、本郷の加賀藩邸から根津方向に出撃し、根津権現にいた彰義隊の一隊と遭遇してこれを撃退し、団子坂から谷中口方面に進んでいた。

谷中口をかためていた彰義隊の諸隊は、それを知って出撃し、団子坂と善光寺坂の間の、水が満々とはられた水田をへだててはげしい銃砲撃戦となった。

また、朝廷軍の諸藩兵は、穴稲荷門をはじめ諸門を守る彰義隊に砲弾を浴びせかけ、銃弾を連続的に撃ちこみ、これに対して彰義隊も必死に応戦し、樹木は吹き飛び、硝煙で視野は閉ざされた。双方の死傷者はおびただしく、時間の経過につれてその数は増していた。手足がちぎれて血を流し、頭部が砲弾で吹き飛んだ遺体が血に染まって降雨の中にころがっていた。

黒門口の戦闘には、肥後、久留米両藩兵も戦列に加わり、さかんに黒門を守る彰義隊に大砲を撃ちかけ、砲声が絶え間なくとどろいた。

そのうちに彰義隊の陣地にすえられた砲から火箭が放たれ、それが薩摩藩兵たちの陣地の後方にある民家に落下した。たちまち民家は炎につつまれ、家から家に延焼して火はひろがった。

銃砲撃が一層激化し、死傷者は増した。

そのうちに双方、白刃をふるって突撃を繰り返すようになったが、彰義隊員は、黒門口を守って反撃をつづけていた。

民家を焼く炎が、後方から薩摩藩の陣地に近づいてきていた。薩摩藩の軍勢は、本郷方面から進んでくる長州藩兵の応援を待っていたが、彰義隊からの砲撃にはばまれて姿を見せない。黒門口の彰義隊の士気はさかんで、薩摩藩兵の激烈な銃砲撃にも少しも屈することなく、果敢に応戦していた。

薩摩藩兵の死傷者が増し、指揮者は、本陣で戦況を見守る大村益次郎のもとにおもむいて増援を要請した。しかし、大村は床几に座ったまま返事をしない。

指揮者は怒り、

「薩摩藩兵をことごとく死なせるつもりですか」

と、言った。

「もとより、その通りだ」

大村は、冷ややかに答えた。

この一言に、指揮者の怒りはさらにつのり、黒門口に駆けもどった。

薩摩藩兵の背後の民家は火炎を噴き上げ、それがせまってきて、火熱が兵たちをおおうようになっていた。このままでは、陣地を撤去して敗退することになる。指揮者は、進む以外に活路は得られぬと決断し、全軍に突入を命令、藩兵たちは喊声をあげて銃を乱射しながら黒門口に突撃した。

これを見た鳥取、藤堂藩の藩兵たちも、呼応して突き進み、これによって少しのゆるぎもなく守

られていた黒門口の陣地が突破された。

薩摩藩兵は、後退する彰義隊員を追って進み、すぐにとって返して黒門口をかためた。

彰義隊員たちは、黒門口を奪い返そうとして、後方にまわり、銃弾を放った。藩兵は応戦し、彰義隊員を追い払って、黒門口は朝廷軍の手に落ちた。時刻は、九ツ半（午後一時）すぎであった。

上野の山の北方にある谷中口では、諸藩兵が彰義隊に水田をへだてて砲撃を浴びせかけていたが、富山藩邸には肥前、筑後両藩の砲が、加賀藩邸には伊州（伊賀上野）、備前藩の砲がそれぞれすえられ、そこからも砲弾が発射されていた。

彰義隊員は、近くの民家に火を放って団子坂の長州、大村藩兵と戦っていたが、両藩兵が進撃に移り、それに押されて後方に退いた。

上野東叡山の西方にある穴稲荷門口には、彰義隊員が陣をかまえていたが、朝廷軍は小舟に分乗して不忍池をわたり、弁天の中島に上陸し、穴稲荷門口の彰義隊を攻撃した。彰義隊員は防戦し、激闘がつづいた。しかし、朝廷軍はぞくぞくと小舟で上陸し、兵力を増強して、穴稲荷門口を占拠した。

彰義隊員は退き、諸藩兵は寛永寺に砲火を集中した。そのため寺は火炎につつまれ、多くの坊は材のはじけるすさまじい音を立てて燃えさかった。

銃声は散発的に起こっていたが、戦いは、事実上終わっていた。七ツ半（午後五時）すぎであった。

依然として雨は降りつづき、上野の山には死骸が累々と横たわっていた。朝廷軍の死傷者は約百

二十名、彰義隊の死者は、二百六十六人。彰義隊の死者が多かったのは、薩長両藩の使用したアームストロング砲をはじめとした最新鋭の銃砲の威力によるものであった。

潰走した彰義隊員は、大村益次郎が故意に逃げ口としてあけていた根岸、日暮里方面にむかって山を下ってゆく。傷ついた者も多く、かれらは雨に打たれて四方に散っていった。

その日、寛永寺では、いつものように早朝に起きた輪王寺宮が、本堂で読経をしていた。

前日には、江戸城に置かれた大総督府から宮宛ての書状がとどけられ、そこには、宮の京行き、江戸城への登城をうながしたにもかかわらず、それらはことごとく拒否され、その間に彰義隊員の朝廷軍士卒の暗殺がつづき、

「最早、朝廷寛仁之道も絶果」

として、断然、討伐を決定したことがつづられていた。

さらに宮を守護する上野の山に屯集する彰義隊を国賊とし、皆殺しにする、とむすばれていた。

執当覚王院をはじめ僧たちは、戦争を覚悟し、朝廷軍に激しい戦意をいだく彰義隊員たちは、各門をかためて応戦の態勢をととのえていた。

宮は、読経をしながら沈思していた。

慶喜の謝罪嘆願のため駿府（静岡市）まで行った折のことが思い起こされる。途中、薩摩の藩兵に嘲りの言葉を浴びせられ、乗物の扉を銃や槍で威嚇するように小突かれた。むろんそのような侮蔑を受けたことはなく、不快な思いに堪えながら駿府に行き、駿府城内の大総督府におもむいた。

その折に感じたのは、大総督有栖川宮の威丈高な態度だった。薩長両藩の武力を後ろ盾に幕府を根こそぎ倒し、慶喜に死を強いずにはおかぬという意図が露骨に感じられた。それは、参謀たちにも共通していて、荒々しい言葉で慶喜謝罪の嘆願をはねつけ、そこには皇族である宮に対する畏敬の念はみじんもみられなかった。けんもほろろの応対で、宮一行は追い払われるように江戸にもどってきた。

その折の屈辱が宮の胸に根強く残っていて、思い起こすたびに激しい憤りが胸に突き上げてくる。

寛永寺の山主になって以来、宮は、いつしか江戸とその地に住む庶民に深い愛情を感じるようになっていた。寛永寺に対してかれらは畏敬の念をいだき、ことあるごとに寺にすすんで寄進する者が多い。広い寺領に住む者たちは、米や野菜を寺の台所に持ってきて、名も告げずに去ってゆく。

命ずることもないのに、寺領の者たちは、誘い合わせて境内を清掃し、年末には多くの者が集まって臼、杵を持ちこみ、餅をついて本坊をはじめ各坊に差し出す。時には、日本橋河岸にあがったばかりの魚介類を運んでくる者もいた。

駿府に出発する時も、山門の外には多くの者たちが、衣服をあらためて道の両端に膝をつき、頭を深くさげて見送ってくれた。宮にはそうした庶民がいじらしく、かれらの生活が平穏であることを願い、読経の折にもそれを祈っていた。

そうしたおだやかな江戸に、鳥羽、伏見の戦いで圧勝した朝廷軍が進撃してきて、幸いにも戦火にさらされることはまぬがれたものの、江戸城はかれらの掌中におさめられた。

市中には、薩長両藩兵をはじめとした諸藩の兵が繰り込んできて、市内をのし歩き、遊廓に登楼

して酒を飲み女を抱く。泥酔して市民をおどし、民家に入って女性に手を出し、金品を持ち去る者もいる。江戸は、かれらの横行によって不穏な地となり、夜間、通行する者は絶えていた。

かれらが江戸に入ってきてからも、彰義隊員たちは、円提灯を手に治安を守るため町々を縫って歩き、それによって盗賊の被害も減っている。巡回中、彰義隊員が朝廷軍の藩兵たちと出会い、藩兵は隊員たちを愚弄して口論となり、互いに抜刀して殺傷する事件も多発していた。市民は、彰義隊員に加担し、朝廷軍に対する反感をつのらせた。

宮は、上野に屯集して自分を警護している彰義隊員たちを、愛すべき集団だと考えていた。将軍慶喜は恭順謹慎し、水戸に退いて閉居しているが、そのような幕府に対して長年の恩義を忘れることなく、今もって幕府に忠誠をちかっている。かれらは、まことに武士らしい武士たちであり、かれらと運命を共にしても悔いはない、と思っていた。

宮が、彰義隊討伐を決断したという大総督府の通告に少しも動揺することなく、その日を迎えたのも、江戸に対する愛着からであった。

雨音だけの静寂の中で、突然、遠く砲声がきこえ、さらにつづいて一発の音高い砲声が周囲の空気をふるわせた。

寺内は騒然となり、人声がし、廊下をあわただしく走る足音もする。朝廷軍の総攻撃が本格化したのだ。

輪王寺宮は、静かに読経をつづけていた。通告通り戦端がひらかれ、それはもとより覚悟の上だった。

甲高い人声が近づき、廊下に乱れるような足音がして二、三の僧が本堂に入ってきた。
かれらは膝をつき、
「戦さがはじまったようでございます。御下堂なされてはいかがですか」
と、ふるえをおびた声で言った。
宮は振り返ることもせず、経本に視線を据えていた。朝の勤行は山主のつとめで、いかなることがあってもそれを怠ることは許されない。たとえ砲弾が落下し、藩兵たちが乱入してきても、やめるわけにはいかない。
端座し身じろぎもせず読経する宮の姿に、僧たちはそれ以上声をかけることもできず、本堂を出ていった。
砲声が再びきこえ、炒り豆がはじけるような銃撃音がそれにまじり、絶え間なくつづくようになった。寺内では人声が交錯し、寺から山門の外にあわただしく走り出てゆく者もいた。
上野の山の静寂はやぶられ、銃砲撃の音が空気をふるわせるようになっていた。
ようやく読経を終えた宮は、経文をおさめて腰をあげ、本堂を出た。
宮は、いつものように姿勢を正して廊下を歩き、座敷に入った。茶を飲み、朝食の膳がはこばれてきた。宮は、無言で箸をとった。簡素な食事であった。
主立った僧たちが集まってきて、食事をとる宮の姿を見つめて座っていた。その中には、竹林坊光映の姿もあった。
また、砲声がつづけてきこえた。

竹林坊光映は、豊後国（大分県）国東郡の生まれで、漢学をまなび、僧侶になるため十歳の折に江戸に出た。修行をかさねて学識がみとめられ、前年に僧正となって今年の閏四月に寛永寺三十六坊の一つである等覚院の住職となっていた。
食事を終えた宮は、僧たちの中に執当の覚王院がいるのを眼にし、近くにくるよう声をかけた。
覚王院が、進み出た。
宮は、覚王院に、
「今日の戦さになるいきさつについて知っていることを、詳しく申せ」
と、言った。
覚王院は、江戸城の大総督府からの要請をことごとく独断で拒否し、それを宮につたえることはしなかった。宮は、それを薄々察し、拒否したことをひそかに認めてはいたものの、戦さがはじまった段階で、これまでの経過を知っておきたかったのだ。
覚王院は顔を伏せ、答えることはしなかった。かれは、ある時は憤りをあらわにして大総督府よりの要求をかたくなに拒絶し、それが朝廷軍の総攻撃をうながしたことに自責の念もいだいていた。
宮は、覚王院に視線をすえ、それ以上声をかけることはしなかった。
寺の外に出ていった者たちが、駆けこんできて戦況をつたえるようになった。
最も激戦がくりひろげられている上野東叡山の正門である黒門口では、彰義隊員が土塁をきずき、大砲をすえて砲弾を発射し、銃撃をつづけている。
薩摩藩兵を主力とした前面の朝廷軍は、上野広小路に砲をつらねて黒門口に砲弾を浴びせかけ、

銃弾を撃ち込んでいる。門周辺の樹木は砲撃でなぎ倒され、あたり一面には枝が樹葉とともに散乱していた。彰義隊の守りはかたく、士気は旺盛で門をはなれず応戦しているという。

朝廷軍は周囲からせまり、上野の山の北方にある谷中口でも銃砲撃の音がしきりであった。その方面には、彰義隊員が応援のため走っていった。

そのうちに、山の下にひろがる不忍池を小舟でわたってきた朝廷軍の兵たちが、穴稲荷門口を守る彰義隊に攻撃をしかけ、交戦中という報告も入ってきた。

戦場が近くなったらしく、寛永寺の屋根の瓦に銃弾があたってはじける音がするようになった。緊迫した戦況がつぎつぎにつたえられてくるにしたがって、僧たちの動揺は徐々にはげしくなった。落ち着きをうしなって座敷を出てゆくと、すぐにもどってきて座る。顔は青ざめ、身をふるわせている者もいた。

寛永寺には、宮を護衛する家臣たちがいたが、さすがに武家らしく冷静に状況を把握することにつとめていた。

かれらは、上野の山を包囲する朝廷軍が彰義隊員の頑強な抵抗をうけながらも少しずつ進んできていることを知り、宮のいる座敷に入ってきた。宮の身を案じてしきりに安全な場所に移るよう要請したが、宮は無言であった。

執当の覚王院は、身じろぎもせずに座っていた。大総督府の要請を独断でことごとくはねつけたことが、宮を危険におとしいれている。かれの顔には反省の色が濃くうかんでいたが、今となってはどうにもならない。居たたまれぬ思いが、その表情にあらわれていた。

かれは不意に立つと、座敷を出て、竹林坊その他を呼び、宮の今後のことを託して、足早に廊下を去っていった。

銃砲撃の音がさらに近づき、表詰めの家臣たちが宮の前に手をつき、

「ここにおりましては危険です。安全な場所へ……」

と、かさねて要請した。

宮は、ようやくそれに応じた。退避するには法衣をまとっているわけにもゆかず、僧たちは、移動に便利なように用意していた衣服その他を差し出した。鼠色の木綿の単衣、白地錦の袈裟、脚半、草鞋で、宮は法衣をぬぎ、それらに着かえた。僧の一人が、網代笠を差し出した。

竹林坊が、ひとまず自分の寺である上野東叡山の西北の隅にある等覚院にお移りいただこうと考え、先に寺を出て等覚院に行った。

竹林坊の意見に賛同した僧たちは、網代笠をつけた宮とともに本坊を出ると、等覚院におもむいた。砲声はさらにはげしく、砲弾の炸裂する衝撃で建物が震動する。四方から銃声が絶え間なくきこえるようになっていた。

僧たちの顔に血の気はなく、随行してきた警護の家臣は、さらに他の地へ移っていただきたい、と宮に要請した。

宮はそれにも応じ、等覚院を出ると、僧たちと雨の中を道をたどり、上野東叡山の最も北の端にある林光院に入った。

その寺に身を避けたのは、攻防戦のはげしい黒門口から最もはなれた位置にあったからで、それ

だけに本坊のように瓦に銃弾があたる音はしていなかった。それに、朝廷軍の兵が配置されていない根岸口に近く、危険がせまればその方面に脱出することが可能であった。

宮の身近には、竹林坊をはじめとした僧たちと医師、家臣がひかえ、さらに山門の外には家臣たちが警護にあたっていた。

しばらくすると、寺の外に人声や足音がして、なにやら騒がしくなった。僧たちはいぶかしそうな眼をし、立って山門の方へ行く家臣もいた。

雨は勢いを増し、雨音が寺をつつみ込んでいた。

八ツ半（午後三時）頃、山門の方で突然鋭い人声がし、玄関でなにかわめいているような声がした。家臣が席を立ち、玄関口に出てゆくと、そこに雑役の仁兵衛が雨にびしょ濡れになって立っていた。

仁兵衛は、

「黒門口の彰義隊が、ふみこたえられず総崩れとなりました」

と、歯の根も合わぬうわずった声で叫んだ。仁兵衛は、家臣の命で黒門口の戦況をうかがうためその方面に差し向けられていた。

上野東叡山の正門である黒門口は、朝廷軍と彰義隊のそれぞれの主力が銃砲撃を交わして死闘していた地点で、そこが突破されたことは彰義隊の敗北を意味するものであった。

顔色を変えた家臣たちは、宮の周囲に集まり、僧たちの顔も青ざめていた。余りにも早い負け戦さで、それは予想をはるかに越えたものであった。

これ以上、宮が上野の山にふみとどまることは不可能で、銃弾を浴びる恐れがあり、それを避けることができても、乱入してきた兵にとりかこまれる。兵たちは血戦をへてきただけに殺気立っていて、宮の命を奪うか、それとも宮を荒々しく縛りつけるかするにちがいなかった。

宮を山からのがれさせる以外になく、このような事態になることは想像もできず、どこに避難させるべきか考えてもいなかった。

家臣たちは狼狽（ろうばい）しながらも話し合い、根岸口に宮を案内し、そこから落ちのびてゆく以外にないという結論になった。

かれらは宮をうながし、僧たちとともに門の外にあわただしく出た。

寺の外の様相は、一変していた。人気の全くなかった道に、刀や槍を手にした彰義隊員たちがひしめき合うように、あわただしく根岸口方面への道を急いでゆく。声を発する者はなく、血だらけになった者に肩を貸している者もいた。

宮一行は足をすくめてかれらの姿に眼をむけていたが、突然、僧たちの間から悲痛な叫び声があがった。

砲弾の炸裂音がしていた本坊方向に、黒煙とともに火の手があがり、材のはじけるすさまじい音がしはじめた。

それは谷中口から攻めこんできていた長州、肥後、佐土原の三藩からの砲火によるもので、上野東叡山の中心部をねらって砲弾を撃ち込んできたことはあきらかだった。

たちまち炎がひろがり、その火の手に戦さが最後の段階に入ったことを感じた宮一行は、あわた

だしく林光院の裏手にまわると、道を急いだ。

道の前方に二層の畳石がすえられ、その上に防禦用の丸太でくまれた木柵が、三十間（五十四メートル）ほどの長さでのび、行く手をさえぎっていた。

しかし、敗退してきた彰義隊員たちが狂ったように柵をこわし、それを乗り越えてゆく。宮は、家臣や僧たちにかこまれてこわされた柵に近づき、裾をからげてその個所からぬけ出た。

雨の勢いははげしく、風が横なぐりに吹きつけてくる。網代笠をかぶった宮は、彰義隊員の後を追うように坂道をくだっていった。

どこに行くべきか、予想もしていなかったことなので、あてはない。

随行している者の中に最高位の家臣である麻生将監がいて、坂をくだりながら考えをめぐらしていたらしく、

「これより、ひとまずわが家に……」

と、竹林坊に声をかけた。

将監は、上野の山に近い中根岸に居宅があり、そこから寛永寺に通っていた。

竹林坊は将監に眼をむけ、うなずいた。

連日の雨で赤土の坂道はぬかるみ、宮をはじめ僧も家臣も足をすべらせて尻をつく。宮の白い足袋も草鞋も泥にまみれ、衣服はよごれていた。

坂道の傾斜が急になり、右に左にくねっている。前後には彰義隊員の姿がみえ、すべってころぶ者もいる。宮の衣服は雨水をふくみ、顔も雨にぬれていた。

坂をおりると、雨に煙る百姓の家が点在している。人の気配はない。麻生将監が先に立って進み、宮は僧たちとぬかるんだ道をついていった。

道の左前方に、構えのしっかりした家が並んでいるのが見えた。それは寛永寺に勤める武家たちの居宅であった。

将監は、ひときわ構えの大きな家に近づき、宮たちはその後から門をくぐった。それは将監の家で、いつの間にか、後ろについてきていた数名の彰義隊員たちも門の中に身を入れていた。

宮は、玄関に入ると、敷台に腰をおろした。

若い家臣が家の裏手にまわると、井戸の釣瓶の音がし、桶に水をみたしてはこんできて、宮の足もとに置いた。僧が宮の足袋をぬがせ、泥にまみれた足を洗い清めた。

玄関の入り口から彰義隊員たちが宮を見つめていたが、その一人が入ってくると膝をつき、

「お供を……」

と、甲高い声で言った。

それにつづいて他の隊員たちも中に入り、同じ言葉を口にして平伏した。かれらは、僧や家臣にかこまれた若い僧が、輪王寺宮であることに気づいたようであった。

竹林坊は、少しの間、かれらを見つめていたが、将監に近づくと言葉をかけた。

勝利をおさめた朝廷軍の諸藩の兵は、敗走する彰義隊員を追って根岸口にもやってくる。あらかじめこの区域に寛永寺勤務の武家の家があることもつかんでいて、山をくだって将監の居宅にもやがて姿を見せるにちがいなかった。

「いつまでもこの家にとどまっているわけにはゆきません。早く立ち退くべきです」
竹林坊の言葉に、将監は同じことを考えていたらしくうなずいた。
足を洗い清めた宮は、玄関の敷台にそのまま座っていた。
「お供を……」
彰義隊員が、再び言った。
竹林坊は、隊員たちに視線を走らせながら、低い声で将監と話し合った。
これからどこへ落ちてゆくか。
彰義隊を潰滅させた朝廷軍は、江戸の完全占領をはたして町々を支配下におく。宮が安んじて身を置く地はなく、竹林坊は、宮をはじめ自分たちが追われ追われて逃げのびてゆく落人の悲哀を身にしみて感じた。
いずれにしても、この地から一刻も早く立ち去らねばならない。落ちてゆくには、宮を人眼につかぬようにしなければならない。色白の気品のある顔をした宮は、輪王寺宮と見やぶられる恐れがある。
お供を、と彰義隊員たちは懇願し、その気持ちはわからぬではないが、刀槍を手にしたかれらを連れてゆけば、たちまち宮であることが露顕する。
その不安を竹林坊が口すると、麻生将監をはじめ家臣たちはうなずいた。
家臣の一人が、隊員に近づくと、
「お供はならぬ、われらがお守りする。散れ」

と、鋭い口調で言った。
隊員たちは、家臣を見上げていたが、いずれも格式の高い武家の言葉だけに、かすかにうなずくと、無言で腰をあげた。
傷ついた者もいて、かれらは連れ立って玄関の外に出ていった。
雨ははげしく、庇から雨水が滝のように落ちている。
竹林坊は、家臣たちに顔をむけた。かれらは宮を護衛すると言っているが、大小刀を帯び、武家らしい眼をしたかれらが随行すれば、輪王寺宮であることがさとられる。彰義隊員のみならず、かれらが供をするのも危険であった。
これから落ちのびてゆく途中、宮の姿は、多くの村民たちの眼にもふれる。やがて追ってくるであろう朝廷軍の藩兵たちは、宮を目撃した者がいるかどうかを探り、かれらの口から宮の姿を眼にしたことをきき出すにちがいない。それによって宮の逃走路を察知し、その方面に探索の兵を繰り出すはずであった。
竹林坊は、家臣たちとともに逃げのびるべきではない、と考えた。宮に仕えるかれらは、宮が危険におちいった時には、死力をつくして闘うにちがいなかった。それは、かれらにとって武士の本望であるのだろうが、乱闘によって宮が傷つくか、命を落とすことも考えられる。
そのようなことはあくまでも避けねばならず、なるかならぬかわからぬが、宮を安全な地に落ちのびさせることを第一に考えねばならない。家臣たちとはなれて道をたどるのははなはだ心もとないが、自分たち僧だけがお供をしてゆく以外にない、と思った。

「あなたたちとともに行けば、人眼につく。ここでお別れしましょう。これよりわれら僧がお供をして参ります」

竹林坊は、家臣たちに言った。

落ちる

家臣たちは、思いもよらぬことをきいたように、竹林坊の顔を見つめた。

竹林坊は、口早に自分たち僧だけで宮をお守りし、落ちのびてゆくのが宮の身のために必要だ、と説いた。

「それはならぬ」

家臣の一人が甲高い声で言い、他の家臣たちも竹林坊の言葉に反対した。

家臣たちは、宮の身辺を警護するために仕えてきた身で、このような事態になった上は、宮を死を賭して守護するつもりだ、と口々に言った。ことに剣客の榊原鍵吉と松平康年は、いずこの地へともおそばにあって宮をお守りしたい、と強い口調で言った。

竹林坊は屈せず、

「すべては宮の御身を安んじるためのこと。皆様のお気持ちは十分にわかりますが、この際、われら僧におまかせいただきたい」

と、言葉をつくして説得したが、家臣たちはきき入れない。

それまで竹林坊と家臣たちとの言葉のやりとりを黙ってきいていた麻生が、口を開いた。

「たしかに竹林坊殿の言われることは、やむを得ぬことに思える。われらがお供をすれば、宮が尋常ではないお方とさとられるだろう。本意ではないが、ここでお別れするのがよいかも知れぬ」

その言葉に、家臣たちは口をつぐんだ。

ただちに宮は麻生宅をはなれることになり、あらためて身なりをととのえた。輪王寺宮であることをいささかなりともさとられぬように、修行中の若い学僧であるように変装する必要があった。そのため、麻生家にあった下働きの者の着る蓑を身につけ、白足袋を紺色の足袋にはきかえ、竹林坊ら僧とともに雨中を戸外に出た。

麻生ら家臣たちは家の外に出て、雨に打たれながら、宮一行が遠ざかるのを身じろぎもせず見送っていた。

宮は、僧たちと道を急いだ。

点在する民家の者は、すべて避難したらしく戸がかたく閉ざされている。家の背後は遠くつづく田畠で、その中を流れる川から水があふれ、湖水のようにひろがっていた。

路上にも水が流れ、宮一行はその中を進んだ。前後を落ちてきた彰義隊員が、槍を杖代わりにしたりして歩いている。

大砲をひいて行くことはできなかったらしく、放置され傾いた砲が、台車を水に没して道ばたに置かれていた。

道の前方に眼をむけた竹林坊が、茶店風の建物を、

「笹の雪でございます」

と、低い声で宮に言った。

元禄三年（一六九〇）、後西天皇の第六皇子公弁親王が寛永寺の山主に任ぜられて京をはなれる時、ひいきにしていた豆腐商玉屋忠兵衛に江戸にくるようすすめ、忠兵衛はそれにしたがって江戸に出た。

良質の水を求めて寛永寺の周辺を探して歩き、日暮しの里と呼ばれていた新堀村の音無川のほとりに店をかまえた。江戸には珍しい絹ごしの豆腐を客に出し、公弁親王は笹に積もった雪のように白いとほめたたえて、笹の雪という店名をあたえた。そのようないきさつから笹の雪は、寛永寺に定期的に豆腐を献上し、輪王寺宮もその味を好んでいた。

店の前を過ぎたが、そこも戸が閉ざされ、人の気配はない。

両側に、田畠が遠くまでつづくようになった。左手の谷中本村は土質が適しているのか良質の生姜を産し、採取期になると百姓たちが籠にそれを入れて寛永寺に持ってくる。宮は、それも好んで口にしていた。

水嵩がさらに増し、脛まで水につかるようになった。水のひろがる田畠と道との区別がつかず、道の端の溝に足をふみ込む僧もいた。雨は勢いを衰えさせることなく、宮の網代笠と蓑には絶えず水しぶきがあがっている。歩行は困難で、宮は何度も水の中に膝をつき、顔も泥水でよごれた。

付近一帯は寛永寺の寺領で、宮一行は、道を進んで三河島村に入っていった。

「名主の市郎兵衛のもとに参りましょう」

竹林坊が、宮に言った。

寺領の名主たちは、定められた日に、衣服を正して揃って寛永寺に来て参拝し、時には宮に拝謁することもある。馬や牛の背に米俵をくくりつけて、それを奉納するためにやってくる。各村々は寛永寺の庇護を受け、名主は寛永寺の認可を受けて任命される。

濁水の中を歩いてゆくと、大きな家が見えてきた。三河島村の名主松本市郎兵衛の家であった。家の周囲には、多くの村人が水の中に立ち、上野の山の方に眼をむけている。黒煙が空をおおって炎が立ちのぼり、火の粉が散っている。上野の山で戦さが起こり、それを知った村人たちが、名主の家に集まってきていたのだ。

かれらは、宮一行が近づいてくるのに気づき、眼をむけた。

雨に打たれながら竹林坊が先に立ち、宮一行は、名主の家の前に立つ村人たちの視線を受けながら、松本市郎兵衛の家に近づいた。村人にまじって、彰義隊員の姿もみられ、村人たちは、上野の戦いで彰義隊がやぶれ、隊員が山から三河島村までのがれてきているのを知っていた。

その地一帯は、梅雨期や二百十日前後の豪雨に見舞われる時期には出水するのが常で、どの家も三尺ほど盛り土した上に建てられていた。

宮は、竹林坊に導かれ、水の中をはなれると家の前の傾斜をのぼり、土間に入った。

土間につづく板張りの部屋で村人と座って話をしていた市郎兵衛が、驚いたように宮たちに眼をむけ、粗末な蓑を身につけた僧が宮だと気づき、あわてて立ち上がると手をつき、額を床にすりつけ頭をさげた。市郎兵衛と話をしていた者たちも、部屋の隅に急いでひきさがった。

竹林坊が、

「上野の戦さはやぶれ、宮様をこの地までお連れしてきた。宮様は御休息なされる」

と、市郎兵衛に言った。

市郎兵衛の指示ですぐに水の張った盥が運ばれ、宮は足を洗い清め、板の間にあがり、それにつづく座敷に入った。茶が運ばれたが、宮は手にすることもせず、端然と座っていた。

竹林坊は、板の間で市郎兵衛と話し合った。

早朝からの砲声に、村人たちは上野の山で戦さがはじまったことを知り、市郎兵衛の家に集まってきた。市郎兵衛は、村人たちに万一にそなえて老人、子供、女たちを避難させるように命じ、上野の山方向に人を派して村人たちと上野の山を見つめていた。

やがて、上野の山に炎が立ち昇るのが見え、村人たちは悲痛な声をあげた。それは多くの寺が焼ける火にちがいなく、さらに延焼しているようだった。

しばらくすると、刀や槍を手にした彰義隊の者たちが、出水した道に姿を見せ、村の中にぞくぞくと入りこんでくるようになった。傷を負った者も多く、かれらの口から上野の山に屯集していた彰義隊が、朝廷軍の攻撃をうけてやぶれたことを知ったという。

「まことに大事に至りましたな」

市郎兵衛は、嘆息した。

竹林坊は、落ち着きを失った眼をしていた。上野の山からのがれ出た宮の身を、あくまでも守りぬかねばならず、泥水の中をこの地までやってきた。しかし、この地も決して安全ではない。根岸口から三河島村までは、一本道で、竹林坊も宮とその道をたどって三河島村にたどりついた。根岸

口からのがれ出た彰義隊員たちも、ほとんどすべてが三河島村に入ってきている。

市郎兵衛の話によると、彰義隊員たちは、付近の農家に入りこんで槍、刀を捨て、農夫の着物に着替えていずこへともなく去ってゆく。村にとどまっている隊員は数少なく、かれらにとって村はただの通過点にすぎないようだという。

そうした隊員たちの動きからみても、三河島村にとどまっているのは危険で、一刻も早く他の地に移らねばならない。

竹林坊が、それを口にすると、市郎兵衛は、

「追っ手は必ず村にやって参ります。恐れ多いことでございますが、他の地へお移りなさるべきと存じます」

と、悲痛な表情で言った。

「どこへお移りいただくか、心当たりがあるか」

竹林坊は、せわしない口調でたずねた。

市郎兵衛は、即座に、

「村内に宮地という地があり、そこに寛永寺お出入りを許されております植木職の伊藤七郎兵衛の屋敷がございます。そこは道からはずれておりまして、とりあえずそこにお移りになられたらいかがでしょう」

と、言った。

伊藤家は、江戸城出入りの、九段の斎藤彦兵衛、向島の萩原平作とともに江戸の三大植木師の一

つと言われ、むろん寛永寺御用達ともなっている。広大な敷地には、梅、松をはじめとした三千五百本の植木が植えられ、石灯籠も二十基以上ある。

人員御用達も仰せつかっていて、嘉永六年（一八五三）にアメリカのペリー艦隊が浦賀に来航した後、海岸防備の必要から台場の築造がおこなわれた折には、幕府の要請に応じて多くの働き手を差し出した。それが経済的な大きな負担になって、一万石の格式があると称された伊藤家の家産はかたむき、それでも敷地は広く、宮をかくまうには適している、という。

竹林坊は、市郎兵衛の提案に賛成し、腰をあげると、板の間につづく座敷に入った。

宮は薄く眼を閉じていた。

宮の前に座った竹林坊は、

「ここにおとどまりになるのは心もとなく、お疲れでございましょうが、他にお移りいただきたく」

と言って頭をさげた。

植木師の伊藤七郎兵衛の家へは、名主の市郎兵衛と村の有力者啓次郎が案内することになり、僧たちをしたがえた宮は、再び雨の中に出た。家の前に集まっている村人たちは、宮一行であることを知ったらしく、立ち並んで頭をさげた。

宮一行は、雨に打たれながら市郎兵衛の敷地の外に出た。水嵩はさらに増していて、一行は腿まで水につかりながら宮地への道をたどった。

途中、彰義隊員とすれちがったが、かれらは輪王寺宮一行と気づかず、道をあける者もいない。

肩先から着物が血にそまり、そこに雨があたって袂が赤くふくれている者もいた。

やがて市郎兵衛が脇道に入り、樹木のひろがる敷地に入ってゆく。構えの大きな家が見え、市郎兵衛と啓次郎は水の中を家に近づいていった。

家の前で足をとめた市郎兵衛が、傾斜をのぼって土間に入ってゆき、宮たちもその後につづいた。奥に声をかけると、長身の男が出てきて、市郎兵衛に頭をさげ、宮一行にいぶかしそうな眼をむけた。植木師の伊藤七郎兵衛であった。

市郎兵衛は、

「このお方様たちを、人眼につかぬ場所におかくまい申し上げたい」

と言い、宮一行であることは告げなかった。

七郎兵衛は、なおも宮一行に眼をむけながらも承諾し、土間におりると、家の外に出た。

家の裏手に盛り土をした上に建てられた二階建ての大きな納屋があり、七郎兵衛は、宮一行に中へ入るようながした。宮は納屋に入った。そこには、植木職の使う梯子、鍬、剪定鋏、縄などが置かれ、宮は薄暗い階段をふんで二階にあがった。そこは植木職人たちが寝泊まりするらしく、畳の敷かれた広い部屋があった。

宮は座り、僧たちもそれにならった。

ようやく落ち着きの色をみせた僧たちは、ひそかに言葉を交わした。宮は朝以来、食物を口にせず、僧の中には寛永寺で用意していた昼食の食物を持ち出してきていた者もいた。

宮にそれを差し上げることになり、僧の一人が階下におりて母屋に行くと食器を運んできた。

宮は、箸を手にし、僧たちも食事をとった。伊藤家の者が、茶をいれて運んできた。

やがて食事がすみ、伊藤家で働いている者が食器と茶道具をさげていった。

その折、茶碗の一つがもどってこず、高貴な方は手にふれたものは返さずにおくことを知っていた七郎兵衛は、市郎兵衛にただし、初めて若い僧が宮であるのを知り、大いに驚き、恐縮した。

伊藤七郎兵衛をはじめ、家族の者たちは狼狽した。お姿を眼にすることすらできぬ輪王寺宮が家に来ていることに、かれらはあわてふためいた。

「納屋などにお通しし、まことに恐れ多いことです。奥座敷にお入りいただき、あらためてお茶を献上させていただきます」

七郎兵衛は、名主の市郎兵衛に申し出た。

「宮様はお忍びの身で、この地までおいでになられた。役僧の竹林坊様から、宮様を人眼のつかぬ所にお移し申し上げたいと言われるので、御案内してきた。納屋ではまことに恐れ多いが、宮様の御身を安んじ申し上げるには、それもやむを得ないこと」

と、市郎兵衛は沈痛な表情で言った。

七郎兵衛はなおも落ち着かず、使いを出して近くの観音寺の前住職宥應に来てもらった。

宥應は、水の中をやってきて、七郎兵衛から話をきくと、

「それは、まことか」

と言って、驚いた。

七郎兵衛は、宥應と話し合い、宮にとりあえず御挨拶すべきだということになり、衣服をあらた

めて宥應と納屋の二階にあがり、平伏した。

宮は、無言でうなずいていた。

いつの間にか敷地内に彰義隊員たちが姿をみせはじめ、その数が次第に増していた。かれらは、水を飲んだりして寄りかたまっていたが、そのうちに納屋に視線をむけるようになっていた。食器や茶道具がはこばれ、さらに正装した七郎兵衛と宥應が納屋に入り、階段をのぼってゆくのを眼にして、高貴な方が二階にいるのを知ったようだった。

かれらは、ひそかに言葉を交わし、上野の山からのがれ出た輪王寺宮が納屋におかくれになっておられるのではないか、と言い合った。宮が伊藤七郎兵衛の敷地に入るのを眼にした者もいて、家臣の姿はなく僧のみをしたがえているのを知り、それをきいた彰義隊員たちは、口々に宮を護衛すべきだ、と言った。

かれらは、水の中を納屋に近づくと、主立った者が二階にむかって、

「われらは彰義隊の者でございます。恐れ多くも、宮様がおられる御様子ですが、われら身命を賭して御警護申し上げたく、なにとぞお供をお命じ下さい」

と、ふりしぼるような声で言った。

「お供を、お供を」

他の者たちも叫んだ。

隊員の中には傷ついている者も多く、衣服は汚れ、雨に濡れている。そのような者たちが、「お供を……」と願っている姿は悲壮であった。

竹林坊はしばらく無言で座っていたが、立つと階段を下り、納屋の外に出ると隊員たちを見まわした。かれらの眼には、宮を守護しようとする強い意志の光がうかんでいる。しかし、宮にとって隊員たちは危険な存在で、納屋の二階に身をひそませている宮は、納屋の前に集まるかれらによってその所在があきらかになる。伊藤七郎兵衛方に落ちのびてきたが、この地も安穏な地ではない。

竹林坊は、雨に打たれた彰義隊員たちの姿をながめ、無言で水の中を歩いて母屋に行った。そこには、伊藤七郎兵衛と名主の市郎兵衛が気づかわしげな眼をして立っていた。

「あのように彰義隊の隊士がいては、宮様の所在が知れ、危険きわまりない。他の地にお移りいただく以外にない」

竹林坊は、血走った眼をして言った。

市郎兵衛はうなずき、観音寺の前住職宥應と三河島村の有力者啓次郎を招いて、どこにお移しするか話し合った。伊藤七郎兵衛の屋敷は三河島村にぞくし、根岸口から落ちのびてきた者たちがこの村に入ってくる確率が高く、朝廷軍の諸藩兵もこの村に来て探索するにちがいなかった。宮を一刻も早くこの村からはなれさせ、さらに奥まった地に移ってもらわねばならない。

かれらは声を低めて話し合い、北の方向二里の上尾久（かみおく）村に行き、名主の江川佐十郎方に宮をお移しすべきだということに話がまとまった。そこは隅田川に近く、氾濫（はんらん）した水が田畠をおおっていて、水の量も多いことが予想された。

その地まで水の中を宮に歩いて行ってもらうわけにはゆかず、植木師の七郎兵衛が、小舟をひいてきた。その付近の大きな構えの家々には、出水の折にそなえて小舟が用意されていた。

竹林坊は、母屋をはなれて納屋の二階にもどり、宮に、この地にとどまるのは好ましくなく、上尾久村にお移りいただきたい、と申し上げた。

宮はうなずき、立つと僧たちとともに階段をおり、納屋の外に出た。

輪王寺宮と察した隊員たちは、後ろに退き、頭をさげた。

その時、敷地に数名の者を連れた武士が、水の中を近づいてきた。それは、彰義隊の指揮者である天野八郎であった。

天野は、足をとめると僧たちを見つめ、足早に近づいてきて、

「竹林坊様」

と、声をかけた。

竹林坊は、驚いたように天野を見つめた。天野とは何度か会い、言葉を交わしたこともあった。

宮は、天野に眼をむけ、

「何者か」

と、竹林坊にたずねた。

「彰義隊の指図役である天野八郎でございます」

竹林坊は、答えた。

そのやりとりに、天野は輪王寺宮であることを察し、体をかたくして頭をさげた。

天野は、宮に眼をむけ、口を開いた。黒門口が破れ、宮の身を案じて寛永寺の玄関に入りこむと、宮は、すでに立ち退かれた、と告げられた。宮を守ろうと思っていた天野は、すぐに部下をひき連

れて山を下り、根岸口に出た。三河島村に行ったにちがいないと考え、水のひろがる道を急いだ。上野の山からは砲声がしきりにきこえていたという。

途中、落ちのびてきた隊員にきくと、数名の僧が三河島村に入っていったとき、宮一行にちがいないと思った。宮は、寛永寺御用達の植木師伊藤七郎兵衛の家にいる確率が高いと考え、来てみると竹林坊の姿を眼にしたのだという。

天野は、膝頭の上まで水につかり粗末な蓑を身につけている宮の姿に涙ぐんだ。

「なにとぞお供をお申しつけ下さい。死を賭してお守り申し上げます」

天野は、涙声で言った。集まっている隊員たちも、口々にお供を、と言った。

「それはお許しにならぬ」

竹林坊は、強い口調で言った。

宮は、身をひそませねばならぬお立場にあり、人眼につくことを最も恐れている。彰義隊員がついてくれば、輪王寺宮であることがただちに発覚し、危険にさらされる。守護したいという気持ちはわかるが、それは宮のおためにはならない。

竹林坊の説く言葉に、天野をはじめ隊員たちは頭を垂れ、かすかにうなずく者もいた。

宮は、竹林坊ら僧にかこまれて水の中を歩き、母屋の前に浮かぶ舟に僧たちと近づき、それに乗って腰をおろした。

小舟が、僧たちと名主市郎兵衛、啓次郎、僧の宥應に押されて母屋の前をはなれた。植木師の伊藤七郎兵衛と天野たちは、夕闇の中を去ってゆく舟を見送っていた。

小舟は、植木師の敷地から出ると、水に没した田畠の上を進んでゆく。舟を押す者たちの体は、腰の近くまで水につかっていた。

僧の一人が、舟を押しながら悲痛な声をあげた。かれの眼は、闇の方向にむけられている。それは根岸の方向で、その背後に黒々とした高台がつらなり、そこから火炎が噴き上がり、空を赤々と染め、火の粉がきらびやかに空に舞い上がっている。上野東叡山の寺坊が燃えている。

舟の動きがとまり、宮は上野の山の方向を見つめ、僧たちは水の中に立ちつくしてその火炎に合掌した。すすり泣く声がして、舟は再び水の上を動きはじめた。僧たちは、舟を押しながら上野の山の方に眼を向けていた。

三河島村のはずれまで来て、名主の市郎兵衛と啓次郎が足をとめた。上野の山からの落ち武者が三河島村にぞくぞくと入り込んできているはずで、市郎兵衛は名主として啓次郎とその処置にあたらねばならない。これ以上、宮に従ってゆくわけにはいかないのだ。

市郎兵衛は、竹林坊に、

「彰義隊の皆様のお世話をしなければならぬ身でございますので、これにて啓次郎とともにお暇をいただきとう存じます。これよりは、観音寺の和尚宥應様が上尾久村の名主江川佐十郎の屋敷まで御案内申し上げます。宥應様は、名主とじっこんの間柄でございます」

と、つつしんで言った。

竹林坊はうなずき、

「御苦労であった。落ちのびてくる彰義隊の方々をよろしくお世話下さい」

と言った。

市郎兵衛は、啓次郎と舟の中に端座する宮に頭をさげた。

舟が、再び動き出した。

夕闇は濃かったが、空は炎の反映で赤く染まり、市郎兵衛と啓次郎は、水の中に立って身じろぎもせずに舟を見送っていた。

舟は、僧たちに押されて静かに水の上を進んでゆく。絶え間なく降っていた雨は小降りになり、網代笠をかぶった宮の顔は仄白く見えていた。

三河島村をはなれ、上尾久村に入ると、前方に寺の屋根が見えてきた。満光寺で、そのあたりに人気はない。のがれてきた彰義隊員たちが寺で休息をとっているとも予想されたが、かれらはまだこの地点までは落ちのびてきてはいないようだった。

舟は、寺の近くを用心深く過ぎ、地蔵堂のかたわらを通って阿遮院に近づいた。

その時、阿遮院の境内から数名の人影が出てきて、舟は動きをとめた。腰に刀をさし、槍を手にしている者もいる。あきらかに彰義隊員で、かれらがこの地まで落ちのびてきているのを知った。

かれらは、舟には気づかず水の中を歩いてゆき、再び動きはじめた舟は、かれらの後を追うようにゆっくりと進んだ。

そのうちに、かれらの姿は見えなくなり、舟は前方に見える大きな家に近づいていった。

舟が敷地内に入り、家の前でとまった。

舟を押してきた観音寺の住職宥應が、舟のかたわらをはなれて家の中に入っていった。雨戸のす

き間から淡い灯がもれている。

しばらくして宥應が、中年の男とともに出てきた。男は、舟に近づき、宮に深く頭をさげた。上尾久村の名主江川佐十郎であった。

竹林坊は、佐十郎に近づいて言葉を交わし、宮を安全な場所にかくまって欲しい、と言った。

上尾久村も寛永寺の寺領で、名主の佐十郎は年貢を献上するとともにあらゆる御用をすすんでしている。ペリーひきいるアメリカ軍艦四隻が浦賀に来て以来、異国船の来航がつづいて、その度に二十歳以上四十歳までの者が上野東叡山三十六坊守護のため、駆けつける定めになっている。上尾久村でも寺領内の各村々と同様に人員の割り当てがあって、東叡山山内に行って泊まり込みで警備にあたるのが常であった。寺領の各村々では、寛永寺に親しみをこめて奉仕し、山主の輪王寺宮は仰ぎみる尊いお方であった。

その宮が、僧たちの押す舟に乗り、網代笠に百姓の着るような蓑をつけて落ちのびてきたことに、佐十郎は悲しみに襲われた。

佐十郎は、土蔵に入って御休息いただく方がよいと言い、竹林坊は承諾した。

佐十郎の息子の欽之助をはじめ家の者たちが土蔵に座布団や茶器等をはこび、宮は舟からおりた。水嵩は三河島村より増していて、宮は、腿のあたりまで水につかりながら佐十郎の案内で土蔵に入った。そこは一段高い位置にあって、土蔵の中は浸水していなかった。

行灯に灯がともされ、宮は竹林坊たちとともに土蔵の奥の板の間に入って座った。

欽之助が、平伏して宮に茶をすすめた。宮は茶を飲んだが、その顔には疲労の色が濃くうかんでいた。

しばらくすると、かすかに人声がし、それが徐々に数を増した。竹林坊をはじめ僧たちは、体をかたくして外の気配をうかがった。声は低く、弱々しく言葉を交わしているようであった。

名主の江川佐十郎がひそかに土蔵の中に入ってくると、

「上野の山からのがれてこられた彰義隊の隊士の方々が、参ってきております。水を御所望の方もおられますし、なにか食物をと言われる方もおります」

と、声をひそめて言った。

敗走してきた者たちは、渇きと空腹に堪えながら落ちのびてきて、名主の江川の屋敷でそれをいやそうとして集まってきているのだろう。かれらは、そのうちに宮が土蔵に身をひそませていることにも気づくにちがいなかった。三河島村で彰義隊員たちは、お供をと願ったが、かれらの胸には、宮を守護するというより、尊い御身である宮と同行すれば、自分たちの身の安全もはかれるという意識がひそんでいたのかも知れない。人眼をしのんで潜行する宮には、かれらにつきまとわれるのは、なんとしてでも避けなければならなかった。

人声はさらに増して、甲高い声もきこえてきた。敗走の者が、ぞくぞくと集まってきているようだった。

上尾久村まで行けば、かれらはいないにちがいないと思っていたが、それは誤算であるのを知った。かれらは朝廷軍の諸藩兵に殺されまいとして、三河島村からさらに奥の地へとのがれ、上尾久村まで来ている。さらにかれらは逃避行をつづけ、隅田川を舟で渡り、のがれてゆくことも考えて

いるのだろう。

佐十郎が、再び土蔵に入ってきた。思いがけず後ろに二人の武家がついてきていた。それは、宮の家臣である安藤直記と関右京であった。

佐十郎は、だれも土蔵に入れてはならぬ、と竹林坊に強く言われていただけに、

「宮様にお目通りいたしたい、私たちは家臣だ、と仰せられ、宮様はおられぬ、と申し上げたのですが、三河島村の名主市郎兵衛にきいてきたと、申されました。それでやむなく、お連れ申した次第です」

と、恐縮して言った。

竹林坊は、

「よい、よい。このお二方は、まちがいなく宮様の御家臣だ。このお方たちは別だ」

と、言った。

安藤は、関とともに宮の前に行って平伏し、

「御無事のお姿を拝し……」

と言っただけで言葉をつまらせ、涙を流した。

彰義隊が戦さにやぶれ、宮がこのような地にまで落ちのびていることに、悲哀を感じているようであった。

黒門口が突破されたことを知って寛永寺にもどった二人は、宮が寛永寺から林光院へ身を避けたことをきき、すぐに林光院へ行ってみた。しかし、そこにも宮の姿はなく、いずこかに落ちていっ

たことを知った。落ちのびるのは根岸口しかなく、かれらは敗走する彰義隊員たちにまじって山をおり、水につかった田畠のあぜ道を進み、三河島村にたどりついた。

宮とおぼしき若い僧をまじえた僧たちが、植木師の伊藤七郎兵衛方に入ったということを耳にし、伊藤家におもむいた。しかし、宮の姿はなく、名主の市郎兵衛たちが宮を舟に乗せ、僧たちとともにいずこかに去ったということをきいた。

しばらくすると、市郎兵衛が啓次郎ともどってきたので、宮の行き先をたずねた。市郎兵衛は、安藤たちが宮の家臣であることを確認し、上尾久村の名主江川佐十郎の屋敷にお連れ申した、と教えてくれたという。

竹林坊は、疲れきっているらしい二人の顔をながめ、どのような思いで跡をしたってやってきたかを察した。雨に打たれ水の中を歩いてこの地まできたのは、ひとえに宮の無事なお姿を眼にしたいと思ったからにちがいなく、さらに家臣として宮の身をお守りしたいという強い願いをいだいているからなのだろう。

宮が上野の山をおりた後、武家がつき従っていれば輪王寺宮であることが知れるため家臣たちと別れたが、安藤と関も同行させるわけにはゆかない。

竹林坊は、静かな口調でかれらをさとした。自分をはじめ僧のみが宮と行を共にしているのは、宮の身の安全を願ってのことである。宮の行動は、あくまでも人眼につかぬことが第一で、武家である二人がおそばに付き添っていては、たちまち宮が輪王寺宮であることをさとられてしまう。

「私たち僧が宮の御身を必ずお守りします。なにとぞ事情を御推察下され、この場をお立ち退きい

ただきたい」

竹林坊の眼には、光るものが湧いていた。

安藤と関は、体をかたくし頭を垂れて口をつぐんでいる。髪は乱れて頬にかかり、袴は水の中を歩いてきただけに泥水をふくんで変色している。紺色の足袋は泥にまみれていた。

「おわかりいただけますか」

竹林坊が、声をかけた。

二人は無言であったが、宮の顔を見上げて手をつき、頭をさげた。後ろにさがり、立ち上がると、腰をかがめて土蔵の入り口から出ていった。

人声がさらに増し、騒がしくなっていた。僧たちは、不安そうな眼をして土蔵の入り口の方に眼をむけている。

名主の佐十郎が、またも土蔵の中に入ってくると、竹林坊の前に膝をついた。

「彰義隊の方々が、宮様がこの土蔵の中におられることに気づいたようでございます。薩長の者どもがこの地に参ったら、宮様をお守りするため闘い、かれらを皆殺しにする、と息まいておる方もおります。容易ならざる気配でございます」

佐十郎の顔は、青ざめている。

たしかに、叫ぶような甲高い声もしている。血戦の中をくぐりぬけてきたかれらは殺気立ち、この地に侵入してくる者たちと死を賭して闘おうとしているのだろう。

竹林坊は、唇をかんで黙っていた。眼は光り、しきりに考えをめぐらしているようだった。

そのうちに突然、かれは立ち上がり、宮のかたわらをはなれた。土蔵の入り口に行くと、厚い扉を押して外に出た。雨脚は細くなっていて、竹林坊に気づいたらしく、人声がしずまった。夜の闇の中に、彰義隊員たちの顔がほの白く見え、眼が竹林坊にむけられている。

竹林坊は、かれらを見まわし、声をはりあげて言った。

「私は、輪王寺宮様におつきいたす竹林坊と申す者だ。宮様は、この土蔵の中で御休息をとっておられる。お疲れになっておられるので、今夜はここにお泊まりになられ、私たちがお守りするから安心するように……」

その言葉に、隊員たちの間に低いささやきが起こった。

竹林坊はかれらに背をむけ、土蔵の扉の中に身を入れ、奥に入ると、宮のかたわらに座った。かれは、眼を光らせて外の気配をうかがった。屋根から雨のしたたり落ちる音がしている。

土蔵の外の騒ぎが、徐々にしずまった。

竹林坊をはじめ僧たちは無言で座っている。行灯の淡い光に、かれらの疲労のにじみ出た顔がうかんでいた。雨の音にまじって人声がかすかにし、水でも飲もうとしているのか、井戸の釣瓶をひきあげる音がしている。

やがて人の気配がしなくなり、屋根からしたたり落ちる雨の音がするだけになった。

しばらくして、竹林坊が静かに腰をあげ、土蔵の入り口に近づくと、扉を細めにあけて外をうかがい、扉の外に出ていった。僧たちは、入り口の方に眼をむけたり、行灯をながめたりしている。

そのうちに入り口に人の気配がし、竹林坊が入ってきて宮のかたわらに座った。

「宮様がここで一夜をすごすと告げましたので、彰義隊の隊士たちは安心したらしく今では一人もおりませぬ。名主の佐十郎が申すには、隊士たちは近くの農家に宿を請うため散っていった由です」

竹林坊は、宮に顔をむけると、

「彰義隊の隊士たちに宮様がこの佐十郎の家で一夜をすごすと申しましたのは、かれらをここから去らすためのはかりごとでした。私の思いました通り、かれらは付近の農家などに去ったようです。この地にこのままとどまっておりますと、かれらに再びつきまとわれます。それを避けるため、ただちにこの土蔵からはなれ、急いで他の地へお移りいただきます」

と、言った。

僧たちはしきりにうなずき、竹林坊が宮がこの家に泊まると彰義隊員に告げたのは、かれらを追いはらうためのはかりごとであるのを知った。

時刻は、四ツ（午後十時）をすぎていた。

宮が蓑を身につけ、網代笠を手にして立ち上がり、僧たちもそれにならった。竹林坊が土蔵の扉の外をうかがい、扉をわずかに開けて外に出た。上野の山の寺々はまだ燃えさかっていて、空は赤く炎の色もみえる。

宮と僧たちは、竹林坊の後にしたがい、濁水の中に出て、母屋の方へ進んだ。

竹林坊があらかじめ命じていたらしく、母屋の前につながれた舟のかたわらに、腿まで水につかった名主の佐十郎が立っていた。

舟に近づいた宮が、竹林坊に手をそえられて乗り、佐十郎もそれにつづいて乗ると、棹（さお）を手にした。佐十郎が、棹を操り、舟は動き出した。

僧たちは、水の中をその後からついていった。

雨は、やんでいた。

五月には三日、七日が曇天だけで終日雨が降りつづき、八日昼すぎから翌日にかけてあたかも滝水のような大雨となった。そのため田畠はすべて水に没し、川は増水して氾濫した。

その後も、上野東叡山の彰義隊の戦いがはじまった十五日まで雨はやむことなく、大出水となっていたが、その雨もやんでいる。

宮は網代笠をぬぎ、蓑もはずして僧に渡した。しかし、雨気はあたりに満ち、水におおわれた田畠は靄（もや）で白く煙っている。

舟の後ろからついてゆく僧たちは、南の方向に眼をむけていた。火炎は幾分おとろえをみせてはいるが、本坊と三十六坊の上あたりの夜空は、息づくように炎で赤く染まっている。由緒ある寺々は、ことごとく焼け落ちているにちがいなかった。

舟は、東の方向にむかい、僧たちは、あたりに視線を走らせながらついてゆく。名主の江川佐十郎の屋敷に集まっていた彰義隊員たちは、近くの農家に分散したらしく人影は見えず、ただ水のひろがりがあるだけだった。

佐十郎の棹さす舟は、上尾久村をはなれ、下尾久村に入っていった。上尾久村はほとんどが田だが、下尾久村は畠が多く、それだけに水位が低くなっている。僧たちは膝のあたりまで水につかっ

て歩いていた。

佐十郎の屋敷からかなりはなれ、彰義隊員たちにつきまとわれる恐れはなくなった。

宮は、上野の山から根岸をへて三河島村にのがれ、さらに上尾久村、下尾久村までたどりついた。その間、一睡もせずに疲労の極に達しているはずであった。

竹林坊は佐十郎に声をかけ、

「宮様に御休息をとっていただかねばならぬ。お休みになられる家を探して欲しい」

と、言った。

竹林坊も疲れきっていて、その声は弱々しかった。

「承知いたしました」

佐十郎は、あたりを見まわし、一軒の農家を見出すと、その方向に舟を進ませた。

家の近くで舟をとめた佐十郎は、舟からおりて農家に近づき、戸をたたいた。僧たちは、舟のかたわらに立って、戸をたたきつづける佐十郎の姿を見つめていた。しかし、内部からの反応はなく、戸は閉ざされたままであった。

振り向いた佐十郎の顔には、失望の色がうかんでいた。

上野の山で戦さがあり、敗れた彰義隊員たちがこの付近にも落ちのびてきている。刀、槍を手にして食物や水を請い、一夜の宿を願う者もいるのだろう。農家の者たちは、かかわりになることを恐れ、深夜戸をたたく音におびえ、家の中で息を殺しているにちがいなかった。

佐十郎がもどってきて、無言で僧たちと顔を見合わせた。受けいれてくれる家があるはずもなく、

かれらの顔には濃い諦めの表情がうかんでいた。

道のかたわらに材木が積みかさねられていて、それは水につかっていなかった。宮が舟に乗ったままであるのは気の毒で、竹林坊は、せめてその材木の上で休息をとっていただきたい、と考えた。

竹林坊は、佐十郎と言葉を交わして舟を材木に近づけさせ、宮は舟からその上に移って腰をおろした。僧たちも材木の上に這い上がり、くずれるように座った。上野の山の空は、依然として赤く染まっている。

僧たちは頭をたれ、肩で息をついている。靄が立ちこめ、静かな時間が流れた。

不意に竹林坊が顔をあげ、それにならう僧もいた。靄を通して朱色をおびた空を背景に人影がうかび、水の中をこちらにむかって近づいてくる。だれなのか。竹林坊たちは人影に視線をすえた。

落ちのびてきた彰義隊員かと思ったが、刀、槍のたぐいは手にしていない。商人風の身なりをしていて、手拭いで頬かむりをしている。

男は静かに立ちどまると、手拭いをとって水につかった膝に手をのせ、額が水にふれそうになるほど深く頭をさげた。

竹林坊たちは、警戒するように男の顔を見つめた。

男が、口を開いた。

「決して怪しい者ではございません」

そこで言葉をきると、

「私は、日頃より寛永寺様の御庇護をうけて暮らしを立てております者でございます。宮様の御一

行様とお見受けし、どのようになさるのか、うかがいながらここまでついて参りました」
と、言った。
裾をからげて水の中に立っているが、律義な商人らしい男であった。

寺領

男は、さらに言葉をつづけた。
「お宿にお困りの御様子。さし出がましくは存じますが、私に心当たりがございます。むさ苦しい所で恐れ多くはございますが、もしもお許しいただければ、そこに御案内申し上げたく存じます」
その態度に、怪しい者ではないと察した竹林坊が、
「どなたか、お名は？」
と、たずねた。
男は、
「名乗るような者ではございません。ただ、なにかお世話できることがあれば、とついて参りましただけでございます」
と、言った。
他に頼りにするあてもなく、うなずいた竹林坊は、男に案内して欲しい、とたのんだ。
宮も僧たちも材木の上にあがって草鞋をぬいでいたが、再びはくと、材木の上からおり、宮は舟に乗り、僧たちは水の中におりた。佐十郎は、舟に乗ることはせず、僧たちと舟を押して男の後に

ついていった。

前方に、農家が見えてきた。

男は、水の中を歩いて家の前で足をとめ、中に入っていった。小さな農家であった。

男は、すぐに家の主らしい初老の男と出てきた。初老の男は、寝着の衿を直して水の中で頭をさげた。竹林坊は、舟の傍らからはなれ、家の主とともに戸口から身を入れた。土間につづく部屋はせまく、家族が身を寄せ合って寝ていて、宮をそこにお入れするわけにはゆかない。

竹林坊が顔をしかめると、家の主は、納屋はいかがと言って、案内した。粗末な小屋で、のぞいてみると、農具、肥桶、藁などが乱雑に置かれ、三尺（一メートル弱）四方の土間につづいて、九尺四方の板の間があるだけであった。

やむなく宮を舟からおろし、宮は納屋に入って板の間に腰をおろした。

竹林坊は、納屋から外に出て、舟の傍らに立つ上尾久村の名主江川佐十郎と話し合った。蚊が多く、羽音がしきりであった。

納屋はせまく、そこで宮に泊まっていただくわけにもいかない。僧たちも疲労していて、納屋に身を横たえる余地などない。

思案するような眼をしていた佐十郎が、提案した。彰義隊員にまといつかれるのを恐れて下尾久村まで来たが、彰義隊員たちは追及を恐れて他の地に去ったか、たとえふみとどまっていても付近の農家に分宿して寝入っているにちがいない。村には隊員の姿はないはずで、思い切って再び上尾久村にもどり、佐十郎と懇意にしている遠藤治右衛門の家に行き、そこで宮に睡眠をとってもらってはどうか。

遠藤家は大百姓で、座敷が危険ならば、納屋の二階を寝所にする。僧たちが身を横たえる広さも十分にある。

「治右衛門殿は、信のおける人物です。心をつくして宮様のお世話をするはずです」

佐十郎は、言った。

ほかに行くあてはなく、たしかに佐十郎の言う通り、彰義隊員につきまとわれる恐れはないだろう。

竹林坊は佐十郎の顔を見つめ、

「上尾久村にもどりましょう」

と、言った。

納屋に入った竹林坊は、佐十郎と話し合った内容を宮につたえた。宮はうなずき、すぐに腰をあげた。

納屋から出た宮は、再び舟に乗った。竹林坊は、納屋の外に立つ商人風の男と家の主に礼を述べ、再び佐十郎や僧たちと舟を押して、農家の前をはなれた。

舟が、佐十郎や僧たちに押されて動いてゆく。

上野の寺々の火は下火になっていて、その上の空の朱の色は淡くなっている。一面にはられた水に、魚のはねる音がした。

徐々に水嵩が増し、僧が深みに足をふみ入れることもあった。再び細い雨が降っていたが、上尾久村に入った頃にはやんでいた。

竹林坊たちは、腿まで水につかって舟を押してゆく。後方を農家に案内してくれた商人風の男が、静かに水の中をついてきていた。あたりは物音がせず、竹林坊たちが歩く水の音がしているだけであった。

前方に大きな農家が見え、佐十郎はその方向に舟を押してゆく。水は腰のあたりまで達していて、僧たちは佐十郎とともに農家の入り口に近づき、舟はとまった。

水からあがった佐十郎が、上り傾斜の土をふんで入り口の前に立ち、ひそかに戸をたたいた。反応はなく、さらにかれは戸をたたきつづけた。

ようやく内部に人の気配がして、佐十郎は、名主だ、と低い声で言った。

戸が細めに開き、行灯を手にした初老の男が顔をのぞかせた。佐十郎は、男と言葉を交わし、戸がさらに開いて、驚いたような男の顔が、行灯の灯に浮かび上がった。

なおも佐十郎と男の会話はつづき、男はうなずくと行灯の灯を吹き消した。

佐十郎が、再び水の中に足をふみ入れ、舟のかたわらにもどってきた。

「村の御用をつとめております遠藤治右衛門の家でございます。私とともに寛永寺様にも参上しておる信用のおける者です。宮様がおいでになられたことに驚き、座敷にお通ししたいと申しますが、身をおかくしなされねばならぬのだと申しましたところ、まことに恐れ多いことながら納屋の二階に御案内するとのことでございます」

佐十郎は、竹林坊に言った。

竹林坊は、うなずいた。

治右衛門が近づいてきて、腰を折って頭をさげ、こちらへと言うように手を動かし、家にそって歩きはじめた。佐十郎は、僧たちと舟を押してその後についていった。

治右衛門は、裏手にまわると二階建ての納屋の前で足をとめ、戸を開いた。宮は舟からおり、戸の内部に入った。治右衛門が階段の登り口をさししめした。

宮は手さぐりで階段をふみ、僧たちは、その後にしたがった。

治右衛門は、家にとって返すと、ふとんをかついで納屋にもどり、何度か往復してそれを僧に渡した。かれは、納屋の戸をしめた。

治右衛門は、家の前にもどると、舟の傍らにいる佐十郎と低い声で言葉を交わした。佐十郎は、追っ手の藩兵が繰り込んでくるかも知れず、十分に注意して欲しい、と言った。治右衛門は、闇の中で眼を光らせ何度もうなずいていた。

佐十郎は舟に乗り、棹を操って自分の家の方へもどっていった。

佐十郎が去って間もなく、治右衛門の家から下男らしい二人の男が出てくると、水の中を点在する農家の方へ水音をさせて急いでいった。

やがて、それらの農家から男たちが出てきて、つぎつぎに治右衛門の家に入っていった。

土間に十人ほどの男が集まり、板の間に立つ治右衛門が深刻な表情をして低い声で話しつづけた。宮様が来ておられるという低い声に、男たちの顔に驚きの色がうかんだ。かれらは、時に寛永寺へおもむき落ち葉拾いをしたり作物をとどけたりするが、宮の姿は見たこともない。その宮が、治右衛門の家の納屋の二階にいることが信じられぬようであった。

前日の朝から上野の山の方向から銃砲撃の音がさかんにし、朝廷軍と彰義隊の戦いがはじまったことを、かれらも知っていた。さらに炎があがり、夜になってもそれが空を赤く染めているのも眼にしていた。

「宮様は、この地まで僧侶のお方たちとのがれてこられた。いつ薩摩か長州の兵が追ってくるかも知れぬ。御恩のある宮様をなんとしてでもお守りしなければならぬ」

治右衛門の眼は、光っていた。

かれらは、互いに低い声で言葉を交わし、やがて結論を得たかれらは、家の外に出た。

水の中をそれぞれの家に引き返し、鳴子をかかえてもどってきた。かれらは、納屋を背に上野方向に一定の間隔で並び、鳴子の縄をつかんだ。もしも、捜索の藩兵が近づいてくるのを眼にした時には、鳴子の縄をひいて危険を報せ合うつもりであった。

かれらは、闇に視線を据えながら腿まで水につかって立ちつづけていた。八ツ半（午前三時）をすぎていた。

あたりには深い静寂がひろがり、かれらは水の中に立ったまま動かない。すでに上野の山の寺坊は焼け落ちたらしく炎の色は見えず、わずかに西の方向の夜空がかすかに赤く染まっているだけであった。

時折、治右衛門が家から出てきて、男たちの間を歩き、上野方向に眼をむけている。闇がひろがっているだけで、人影はなく、納屋の中は寝静まっているらしく物音はしない。治右衛門が、ひそかに水の中を歩き、家にもどっていった。

夜空が青みをおびはじめ、あたりが明るくなってきた。鳴子の縄をつかんだ村人たちは水の中で立っていた。

上尾久村の名主佐十郎が、舟に乗ってもどってきた。眠らずに起きていた治右衛門が家の前に出てきて、佐十郎と話し合い、朝食の支度をするため家の中に入っていった。

鳴子の縄をつかんで立っていた村人たちは、田をおおう水の中をそれぞれの家の方へもどっていった。

やがて治右衛門が家人と飯を盛った椀と味噌汁を入れた鉄鍋を手にして出てくると、納屋に入った。それを僧が受け取り、二階に運んだ。椀は欠け、うす汚れていたので、僧は飯を握り飯にして宮に差し出した。宮は、それをうまそうに口にした。僧たちも、握り飯を食べた。

味噌汁は、平生、宮が口にするものとは異なった粗末なものであった。僧たちはそれに手をつけることはしなかったが、宮は、

「このような時でなければ、民の汁の味を知ることはできない」

と言って、椀に味噌汁を入れるよう命じた。

僧たちは、

「到底、お口に合わぬものでございます」

と言って反対したが、宮は承知せず、椀に入れさせた味噌汁を口にした。

「これはこれで風味がある」

宮はつぶやくように言い、椀を置いた。

宮は、僧たちと裏手の井戸に行き、桶に水を汲んで口をすすいだ。田をおおう水は、朝の陽光にかがやいていて、遠く上野の山が見え、すでに炎の色も煙も見えず、緑の色がひろがっているだけであった。

佐十郎が納屋に来て、竹林坊を呼び出し、階段をおりてきた竹林坊に、

「名主として村におらねばならぬ身でございます。まことに申し訳なく存じますが、これより家にもどります。宮様の御無事を心よりお祈り申し上げます」

と、言った。

竹林坊は、ねぎらいの言葉をかけ、礼を言った。

佐十郎は納屋を出ると舟に乗り、治右衛門に見送られて棹を操り、去っていった。

宮は、僧たちと納屋の二階に端座していた。ようやく安息を得た気分で、宮も僧たちもくつろぎ、居眠りをする僧もいた。

四ツ（午前十時）頃、宮一行を貧しい農家に案内した商人風の男が、再び水の中をやってきた。かれは、宮一行の後をひそかにつけてきていて、遠藤治右衛門宅の納屋の二階に入ったのを見とどけ、やってきたのだ。

男は、宮や僧たちが食事に困っているのではないか、と思ったらしく、海苔巻きを笹につつんだものを持ってきて、それを竹林坊に渡した。僧たちは喜び、それを宮に献じて共に口にした。

男は、水の中を去った。

その直後、突然、遠くで銃声がきこえた。宮をはじめ僧たちは体をかたくし、顔を見合わせた。

彰義隊員が発砲するはずはなく、上野の山の戦いで勝ちを占めた朝廷軍の藩兵たちが、敗走した隊員を追ってやってきて、なにかの理由で銃を発射したのだろう。

当然、朝廷軍の総指揮をする大総督府は、四散した彰義隊員を討伐するため、夜明けと同時に命令を発し、諸藩兵は急速に行動を開始しているはずだった。

竹林坊は、顔色を変えて座っていたが、立ち上がると階段を降り、戸を細めにあけて外をうかがった。空は青く、田をおおった水の輝きがひろがっていた。

かれは、しばらく外に視線を走らせていたが、戸を閉めて二階にあがってくると、無言で座った。これまで身を置いていた上尾久村の江川佐十郎の屋敷ならば、名主であることから追尾の藩兵たちが乗り込んでくることも考えられるが、広い田畠を所有しているとは言え、単なる百姓の遠藤治右衛門の家にくるとは思えない。一応、危険はなく、ほとぼりが冷めるまでこの納屋の二階にひそんでいればよいのかも知れぬ、と思った。

「いかがなされますか」

僧の一人が、不安そうな眼をして言い、僧たちは、竹林坊の顔に視線を据えた。

竹林坊は、僧たちを見まわし、

「他に行くべきあてはない。いたずらに動くのは、むしろ危険で、ここにじっとしている方がいいのではないか」

と、自信のない口調で言った。

僧たちは、うなずいた。

かすかではあったが、再び遠くで銃声がきこえ、それが二発、三発とつづいた。竹林坊たちの顔に恐怖の色がうかび、互いに顔を見合わせた。銃声は絶え、深い静寂がひろがっていた。

しばらくすると、納屋の戸が開く音がし、竹林坊様と呼ぶ家の主の治右衛門の声がした。その声にはただならぬ気配が感じられた。僧たちはぎくりとし、すぐに立った竹林坊が階段をおりていった。

僧たちは聴き耳を立てた。治右衛門の、低いがうわずった声がしている。銃、槍という言葉がきこえ、かなり狼狽しているらしく、喘ぐように早口でなにか言っている。

やがて言葉が絶え、治右衛門が出ていったらしく戸の閉まる音がした。

階段に足音がして、竹林坊が姿をあらわした。顔はひきつれ、かれは座った。

僧たちは、竹林坊の顔を見つめた。

「数人の村人が駆けてきて、探索の者が村のはずれに入ってきたと注進に及んだそうだ」

竹林坊の顔に、血の気が失せている。

早朝から朝廷軍の藩兵多数が三河島村に繰り込み、町屋村、下尾久村をへてこの上尾久村にも入ってきた。藩兵たちは家々に容赦なく踏み込んできて、天井と床に槍の穂先を突き入れ、鉄砲を放つ。きこえてきた銃声は、そのためであるという。

「彰義隊士は四方に逃げ散ったが、捕らわれた者もいて、かれらは荒縄でしばられ、中には斬り殺された者もいる由」

竹林坊の話に、僧たちは一様に身をふるわせている。

僧の一人が竹林坊に、

「宮様をどのようにお守りなさるおつもりですか」

とただし、他の僧たちも同じ言葉を口にした。

竹林坊は、上野の山からおりて以来、宮様にお付き添いする以上は必ず御身をお守りする、と何度も言っていたが、黙ったまま答えることはしない。

治右衛門の話によると、藩兵たちは名主など村の主立った家だけではなく、家々を手当たり次第捜索し、発砲もしている。かれらがこの地にも来て、治右衛門の家に踏み込み、屋敷内を探して庭に建つ二階建ての納屋にも入ってくることは確実だった。

竹林坊は、宮の御身を必ず守りぬくと言っていたが、僧であるだけに防ぐ武器もなく、宮はたちまち捕らえられる。それは、時間の問題に思えた。

宮は、端座したまま眼を閉じている。これまでは水の中を腰までつかって歩いたり、舟に乗って逃げに逃げてきたが、ここに至ってそれがむなしいものであるのを感じているようだった。顔には、深い諦めの色がうかんでいた。

その時、納屋の戸の外で、

「御免下さいまし」

という声がした。

僧たちの顔に、恐怖の色がうかんだ。宮が二階にいるのを知った朝廷軍の者が、一応礼をつくした言葉で近づいてきたのか。

「私は、今朝、海苔巻きを召しあがっていただきました者でございます」
その声にはききおぼえがあり、後をついてきた男にちがいなかった。
竹林坊が腰をあげ、二人の僧も竹林坊の後から階下におりていった。
戸をあけると、まさしく商人風の男が立っていて、竹林坊たちに頭をさげた。
「お話ししたいことがございます」
男は、竹林坊の顔を見つめた。
まず上野東叡山の諸寺院がすべて焼け落ち、その火が今は山の下の坂本村に延焼していることを口にした。寛永寺その他が炎上したことは覚悟していたが、男の口からそれが事実であるのを知ると、竹林坊をはじめ僧たちの顔は、悲しみにゆがんだ。
さらに男は、言葉をつづけた。
浅草方面からこの地までの道は、一面水びたしになっていて、深い所では腰のあたりまで水につかる。そのような深い場所には、篠竹(しのだけ)を突き立て紙をむすんで目印としている。
「ぜひお話ししたいことがございます」
男は、言葉を改め、竹林坊の顔を見つめた。
「この方面の村々には、彰義隊の方々が多く逃げのびてこられ、そのため官軍の兵が繰り込み、探索をおこなっております。宮様の御一行様がこの地にとどまっておられるのは危険で、ここから一刻も早く脱け出すことが肝要と存じます」
男の言葉に、竹林坊たちはうなずいた。

「ここからどこへお連れ申し上げましたらよいのか。私もあちらこちらまわって参りましたが、浅草方面からここまでの道は、水が腰あたりまであります故か、官軍らしき者は一人として見受けません」
かれは、はっきりとした口調で言った。
「浅草？」
竹林坊は、うめくように言った。
「左様でございます。只今(ただいま)、浅草からこの地に歩いて参りましたが、上野の山の戦さで住民の大半は近在に避難し、彰義隊の方々の姿もなく、官軍の兵もおりませぬ」
男は、自信にみちた眼で言った。
「しばらくここに待っておれ」
竹林坊は、僧をうながして二階にあがった。
男の言葉を伝えると、二階にいた僧たちは落ち着きなく体を動かした。たしかにこの地にいることは発見される恐れが多分にあり、脱け出さねばならない。浅草への道は、水びたしであるとは言え、官軍らしき者は一人も見当たらぬ、という。
「浅草へ参りましょう。そうすれば、宮様の御身にも災いがふりかかりませぬ」
「一刻も早く浅草へ……」
僧たちは口々に言い、立ち上がろうとする者もいた。
「浅草と申しましても、いずこへ……」

僧の一人が言った。
竹林坊は、少しの間黙ってから、
「東光院へ」
と、力強い口調で言った。
「たしかに、東光院以外に考えられませぬ」
僧たちはうなずき、賛成した。
東光院は、浅草寺、観理院とともに江戸の天台宗の三つの大きな寺の一つとされ、四、二五八坪の広大な境内を保有している。末寺百八カ寺を有する総本寺として知られていたが、慶安年間（一六四八－五二）に、幕府の命によって天海僧正によって開創された寛永寺に、それら末寺のうち八十五の寺とともに所属させている。
このように寛永寺との関係は緊密で、東光院は、寛永寺を本山とした二十三カ寺の末寺頭となっている。
東光院の門前を通る道は、御成道と称され、寛永寺の山主が浅草寺におもむく折にその道をたどる。途中、東光院に立ち寄り、休息をし、昼食をとるのを習いとしていた。竹林坊も僧たちも宮につき従い、しばしば東光院の門をくぐった。当然のことながら住職とも親しくなっていて、このような折に宮をその寺にお連れするのは自然であった。
「一刻も早く東光院へ……」
僧たちはうなずき合い、出立の支度にとりかかった。

東光院

竹林坊は、東光院へ行くまでの道中を思った。
浅草までの道は水びたしになっていて、朝廷軍の藩兵の姿はない、と男は言ったが、宮をかこんで歩いてゆく自分たち僧の姿を見とがめられる恐れがある。もしも藩兵たちに行く手をさえぎられれば、宮の人相書きも配布されているにちがいなく、宮が連行されることが十分に考えられる。
それを避けるには、宮であるとさとられる物をすべて捨てていただかねばならない。宮は、香水を仏前に供えた物にふりかける散杖を持ち、それは一般の僧は携行していない。また、所持している墨壺には、輪王寺宮の紋がついていて、これらはすべて処分する必要がある。
また、竹林坊をはじめ僧たちの所持品にもそれぞれ紋がついていて、付き添っている僧のことも割り出されているにちがいなく、それらの紋から宮の素性があきらかになることも考えられる。
竹林坊は、奥の部屋にいる宮のもとにおもむくと、この地にとどまるのは危険で、浅草の東光院にお移りいただきたい、と言った。
宮は、なじみのある東光院に行くことを承知しながらも、
「あの寺まで無事に行けるのか」

と、言った。

「下尾久村で途方にくれました時、農家に案内してくれた男がおりましたが、あの男が再び参り、浅草までは大総督府御指揮の藩兵が一人も見られぬとのこと。信用のおける男ですので、まちがいないと存じます」

竹林坊は答え、

「道中、検問に遭った折に、散杖と墨壺、それに袈裟から宮様であることが知れます。それらをことごとく処分しておく方がよろしいと存じますので、お渡し下さい」

と、言った。

宮はうなずき、散杖、墨壺と袈裟を渡した。

竹林坊は、それらを押しいただいて階下におりると、僧たちの所持している紋のついた品々とともに床下にかくした。

宮は、階下におり、竹林坊は僧たちと戸を開いて納屋の外に出た。

竹林坊は、家の主の遠藤治右衛門に礼を言おうと思ったが、先を急がねばならず、治右衛門に後に迷惑がかからぬように人知れず納屋を出る方がよい、と考えた。

納屋の外に待っていた男が先に立って水の中を歩き、竹林坊たちは宮をかこむようにその後に従った。農家の者は、朝廷軍の兵が村々に繰り込んでいることを知って逃げたのか、彰義隊員たちらしい姿もない。

男は、視線を前方にむけながら歩き、しばしば農家のかげに身を寄せる。宮一行は、足をはやめて歩き、男にならって身をかくした。

男は、農家のかげからかげにつたい歩き、下尾久村に入ると、背をかがめて隅田川ぞいに進んだ。そのあたりは水嵩が増していて、腿の付け根あたりまで水につかった。

町屋村に入った頃、南の方角でつづいて発砲音がし、足をとめた。その方向には農家が寄りかたまっていて、藩兵が家々の探索をしていることはあきらかだった。

男は、その方向に視線を据えながら素早く農家のかげに身をかくし、しばらく様子をうかがった後、再び歩き出し、宮一行はその後からついてゆく。隅田川に舟の往き来はなく、増水した濁水が音をあげて流れているだけであった。

南の方向に、三河島村の農家がつらなっているのが見えた。村には捜索の藩兵たちが多く繰り込んでいるはずで、竹林坊たちは男と同じように身をかがめて農家のかげからかげへとつたい歩いた。

男が隅田川の河岸からはなれ、南の方へむかって歩いてゆく。そのあたりも水びたしになっていて、男は、竹を切って杖をこしらえ、宮に捧げた。

箕輪（三の輪）に入り、太郎稲荷のかたわらを過ぎ、四方に眼をくばりながら間道を進んだ。男の言葉通り、水の深い所には、白い紙をむすんだ目印の篠竹が突き立てられていた。

日がかたむき、西日が水面を輝かせた。前方に多くの寺の屋根が見え、男は、そこに近づいてゆく。寺と寺の間の細い道を進み、時折足をとめて宮一行がくるのを待つ。人家がせまり、水嵩もへって、一行は家並みの間を縫うように進んだ。あたりが薄暗くなり、寺町に入った。

男の顔には、ようやく安堵の色がうかび、先に立って歩いてゆく。広い境内の海禅寺の門の前を

すぎた竹林坊が、小川にかかった橋を渡ると、左手の寺の裏にまわり足をとめた。
竹林坊は、僧や男にかこまれて歩く宮をふりむくと、裏門の内部に入った。その寺は、浅草合羽橋の東光院で、竹林坊は出てきた男に名を告げ、住職に会いたい、と言った。
うなずいた男が奥に入ると、すぐに院主の幸宥が姿を見せた。上野東叡山の寺々が戦火に見舞われたことを知っていた幸宥は、竹林坊の姿に驚き、さらに後ろに僧たちが立っていることにいぶかしそうな眼をした。
竹林坊は、
「輪王寺宮様をお連れした。かくまって欲しい」
と、声を低めて言った。
その言葉に、色白の若い僧が宮であるのを知った幸宥は、膝をついた。
宮は、僧たちとともに土間に入り、板の間に腰をおろした。幸宥が、甕の水を注ぎ入れた盥を持ってきて僧に差し出し、僧はそれを宮の足もとに置いた。宮は草鞋と足袋をぬいで盥に足を入れ、僧が泥にまみれた足を洗い清めた。
幸宥に案内され、宮は、板の間にあがり、廊下を進んで奥座敷に入った。
上尾久村から東光院まで案内してきた男は、僧たちに、
「それでは、これにておいとまいたします」
と、頭をさげた。
僧の一人が進み出ると、

「名はなんと申す。その方のおかげで、無事に宮様をこの寺までお連れ申すことができた。名をききたい」
と、声をかけた。
男はためらっていたが、塚谷佐兵衛と名乗り、下谷竹町で越前屋という湯屋渡世をしている、と言った。
「先祖から七代の久しきにわたって、寛永寺様の庭のお掃除御用をうけたまわり、枯れ枝、落ち葉を拾い集めて湯屋の燃料としております。そのような御恩がありますので、少しでもお力になれれば、と思った次第です」
男は、つつましく答えた。
僧たちは話し合い、尽力した礼として金を渡そうとした。しかし、男は、金のためにしたのではない、と頑として受け取ろうとしない。僧たちは再び言葉を交わして記念の物をあたえることにし、宮の身につけていた脚半と足袋をあたえた。二つとも泥まみれで、足袋の裏には数カ所に穴があいていた。
男は喜び、涙を流して押しいただき、寺を辞していった。
宮が東光院についた日は、早朝から朝廷軍の諸藩兵多数が勢ぞろいし、江戸市中一帯に敗走した彰義隊員の行方を追って散っていた。隊員はほとんどが四方八方に逃げたが、かくれていた隊員が捕らえられ、斬殺された者もいた。
大総督府は、寛永寺からのがれた輪王寺宮の所在を探るため、左のような命令書を諸藩に発した。

「この度、上野山内屯集之賊徒討伐之砌、輪王寺宮御立退ニ相成、行衛更ニ不相分候ニ付、右御行衛相分候ハヽ、早々可申出旨御沙汰候事」

大総督府としては、彰義隊員を捕殺するとともに、寛永寺からのがれ出た輪王寺宮の探索を徹底しておこなうよう指令したのである。

宮が根岸口よりのがれた確率がたかいと推測した大総督府は、ことにその方面に十六日朝から多くの藩兵を放って大々的な捜索をおこなった。根岸口から落ちのびた隊員たちは、三河島村にぞくぞくと入ってきて、それについて三河島村には、左のような趣旨の記録が残っている。

彰義隊が敗れた五月十五日の夕刻、紺又という屋号の染物商の家に水につかった道を二十人ほどの隊員がやってきて、

「しばらくの間、かくまってくれ」

と、頼んだ。刀傷や鉄砲傷を負い、総身血だらけの者が多く、重傷者もいる。

紺又の主人は驚き、ひとまず重傷者をのぞく者たちを町屋村の方へ落ちのびさせようとした。が、そのままの姿では朝廷軍に発見されるので、血を洗い清め、髪を奴髷に結い直させた。

また、店の職人が着る丸に又という屋号の印の入った半纏を着せ、染職人であるように藍の染料の入った甕の中に手を入れさせて爪を染めさせ、職人姿にして逃がした。

つづいて数名の隊員がやってきて、これも同様にして下尾久村の方へ落ちさせた。

残った重傷者は、土蔵の中にかくまい、それぞれ傷の手当てをほどこし、探索の眼も巧みにのがれ、三カ月以上も同家にひそんでいたという。

落ちてゆく隊員たちは、武器等を水中に投げ捨ててゆき、それらが発見されて村役人から各藩の陣所へ差し出された。三河島村からとどけられた武器は、大砲三挺、鉄砲八十挺、大小刀百十一本等で、三頭の馬も渡されている。

刀四本を土蔵の中へかくしていたのを発見された家では、主人が縛られ、打ち首になるところを駆けつけた名主の懇願によって、辛うじて一命をとりとめた。

彰義隊員の落ち武者狩りと同時に、大総督府は、輪王寺宮の捜索につとめ、落ちのびていったと推測される三河島村、上、下尾久村、町屋村方面に多くの諸藩兵を出動させた。村々に宮の人相書きが配布され、宮に関する情報を提供した者には相応の褒美をあたえる旨が布告された。

しかし、長年寛永寺の寺領であったそれらの村々では、寛永寺との密接な関係からなんの効果もなかった。村人たちにとって、上野東叡山の寛永寺とそれに所属する各坊は、畏敬の対象であると同時に強い親近感もいだいていた。

当然のことながら輪王寺宮に対する尊崇の念はあつく、上野の山をのがれた宮について情報を大総督府に伝える者などいなかった。宮を一時かくまった者はもとより、その姿を眼にした者たちもかたく口をつぐんでいた。

諸藩兵は、村々を巡回して家宅捜索もし、連日、宮の行方をさぐって動きまわったが、いっこうに行方はわからない。大総督府参謀大村益次郎は、それらの村の民家に必ずひそんでいるにちがいない、と推測し、村々を統轄する上尾久村の名主江川佐十郎に使者をさしむけ、江戸城内の大総督府に出頭するよう命じた。

佐十郎は、宮の潜行に力をつくしたことが発覚したのかと恐怖にかられ、江戸城におもむき、大村の前にひれ伏した。即座に斬首されるのか、と身をふるわせた。

大村は、上野の山をのがれた輪王寺宮の行方が今もってわからぬので、村々の名主にその行方を探索するよう指示することを命じた。佐十郎は、発覚したのではないことに安堵し、下城した。

かれは、上尾久村にもどると、各村々の名主に大村からの指示を文書にして通達した。

さらに翌日には、最も潜伏の確率が高いとされた三河島村の名主市郎兵衛にも江戸城への出頭命令が出され、大村から同様の指示をうけて退出した。市郎兵衛は、管轄下の村々の名主に、宮を見かけた者は申し出るようにという触れを出すよう命じた。それに従って、各村では触れを出し、その反応をうかがった。しかし、村々から宮の消息についての情報は全くなく、佐十郎と市郎兵衛は、その旨を文書にしたためて大総督府に提出した。

このようにその地区の村々には、多くの藩兵によって徹底した捜索がおこなわれたが、宮は、すでにその地域からはなれていた。

宮一行は、東光院に一泊し、五月十七日朝を迎えた。空は厚い雲におおわれ、時折小雨が落ちてきていた。東光院の院主幸宥の話によると、浅草方面は筑前、尾張両藩の彰義隊捜索の担当地区で、両藩の藩兵が多人数繰り出し、家々の探索につとめているという。

宮が東光院にいることは発見される恐れが多分にあり、そうそうに他の地へ移る必要があった。

僧たちは話し合った末、市ケ谷の自証院におもむくことになった。自証院は、寛永寺との縁が深く、名刹の名にふさわしく建物も大きい。別名、瘤寺とも言われているが、瘤の露出した檜づくりの堅牢な建築物であることから、その名があった。

寺は、江戸城の外郭門である四谷門、市谷門に近く、自証院に行くには十分な慎重さが必要であった。これまで宮は、僧たちにかこまれて行動してきたが、人から見れば、僧たちをしたがえた宮は身分の高い僧に思われるはずであった。そのことを考え、宮には竹林坊一人が付き添い、他の僧は、時間をずらせて後から自証院にむかうことになった。

さらに東光院院主の幸宥のたっての願いで、東光院の守護に任じている侍二人を宮と行を共にすることもきめた。それは匹田二郎、加島新之丞で、剣客であり幕臣でもある伊庭八郎の門弟で剣に長じていた。かれらは宮に直接付き添うことなく、前方と後方に距離をおいて警護することを定めた。

準備がととのい、四ツ（午前十時）頃、宮は竹林坊とともに東光院の裏門から出た。

竹林坊は、裏道を伝って歩くことはかえって疑いをかけられる恐れがあると考え、両側に寺のつらなる本道を西にむかった。かなり前方に加島が、後方に匹田が、それとなく路上に視線を走らせながらつき従っていた。

道をひたしていた水はなく、竹林坊は上野山下に出て、上野広小路を南にむかった。そのあたりには、彰義隊員の死骸が数多く横たわっていて、宮は沈痛な表情をしてその傍らを過ぎた。

また雨が落ちてきて、朝廷軍の兵の一隊が、前方から歩いてくるのが見えた。竹林坊は、体をかたくして歩いてゆく。兵たちは、銃を肩にしたり槍を手にしたりして近づいてくる。かれらは故郷の訛りのある言葉で談笑し、宮たちに眼をむける者もなく傍らを通りすぎた。

竹林坊は、全身に冷たい汗が流れているのを感じ、掌で額の汗を拭った。

自証院

宮は竹林坊に付き添われて松坂屋呉服店のあたりから西への道をたどった。その付近には砲弾の落下した跡があり、焼けている家もある。その上に小雨が降りそそいでいた。

本郷をすぎると、近在に避難した者たちが大八車に家財をのせて家にもどってくるのに出会った。かれらの顔には安堵の色がうかび、子供の手をひく女の姿もあった。

竹林坊は、小石川の水戸藩邸の前を歩いてゆく。門の前には、槍を手にした朝廷軍の藩兵が二人、立っていた。

お濠にそって歩き、市ケ谷に入った。そのあたりは武家屋敷が並び、寺のつらなる地をぬけて自証院の山門の前についた。すでに先行した加島新之丞が、門の内側に立っていた。

玄関に行くと、思いがけず院主の亮栄が、旅装して草鞋をはき、玄関の前に立っていた。

竹林坊は、その姿を見て、

「いずれにかお出掛けか」

と、問うた。

亮栄は、宮の姿に驚き、拝礼すると、

「宮様が、上野東叡山をお立ち退かれたとおききし、どこに行かれたのか、御縁のある寺に行っているはずと思い、これより出掛けようとしているところでした。私の寺においで下さり、光栄に存じます」

と、言った。

亮栄は、ただちに宮を奥座敷に案内した。雨の中を歩いてきた宮の衣服は濡れ、それを脱がして新しい着物に着がえていただいた。

江戸城が近いだけに、家に藩兵が踏み込んでくる恐れがあり、竹林坊は亮栄と話し合った。

宮をかくまいはするが、あくまでも輪王寺宮とさとられぬようにしなければならない。そのためには、特別の扱いはせず、粗略な遇し方をして、あたかも亮栄の徒弟のように装う方が好ましい。

そうしたことから竹林坊は、部屋に粗末な机を据えさせてその前に宮に座ってもらい、座布団も用意しなかった。

「失礼の段、お許しのほど……」

竹林坊は、恐縮し頭をさげた。

「この方がさっぱりしていい」

宮は、頬をゆるめた。

しばらくして東光院から、随行の僧たちが自証院についた。

雨は依然として降りつづき、僧たちは、

「よく雨がふる。梅雨どきにしても珍しい」

と言って、濡れた衣を脱いでいた。

翌十八日も朝から雨で、庭の紫陽花（あじさい）の色が鮮やかであった。

その日、宮をこれからどうするかについて、院主の亮栄、竹林坊と僧たちが、宮の前に集まって話し合った。

竹林坊は声が大きく、亮栄はしばしば声を低めるようにたしなめる。竹林坊は、広い自証院に来たことで気持ちも安らいだらしく、声をあげて笑ったりする。亮栄は気が気ではなく、顔をしかめていた。

宮の今後のことについて、亮栄は、自分の意見を率直に述べた。上野の山をのがれてから、宮は出水した地を転々としてこの地まできた。しかし、朝廷軍が大々的な捜索を江戸市中にくりひろげていて、いつかは自証院にいることをつきとめ、藩兵たちが押し入ってきて拘束されることも十分に考えられる。

亮栄は、表情を改めると、

「宮様は尊い御身で、彰義隊士のように徳川家に恩顧をいだく者と同じような行動をなさるべきではない、と存じます」

と、思い切ったように言った。

かれは、宮が皇族の御身であるのだから、これ以上逃げまわることなどせず、東征大総督の有栖川宮熾仁（たるひと）親王のもとにおもむき、同じ皇族としてお話し合いをなされば、なにごともなく穏便に解決するはずだ、と淡々とした口調で言った。

竹林坊は、顔色を変えて反論した。

朝廷軍は、幕府を朝敵として根こそぎ消滅させることを企て、それに憤りをいだいた者たちが集まって彰義隊を結成した。江戸に侵入してきた諸藩兵は、市中をのし歩き、彰義隊はこれに反発して治安を守ることにつとめ、徳川家の祖廟（そびょう）である寛永寺の山主の宮を守護するため上野の山にたてこもった。

鳥羽、伏見の戦いで圧勝した朝廷軍の威光に譜代大名をはじめ諸大名は、その前にひれ伏して幕府の息の根を完全にとめようとつとめている。そうした中で、江戸城がすでに接収されているというのに、彰義隊は、圧倒的に優勢な朝廷軍に徹底抗戦の姿勢をしめし、これこそ幕府の恩義を忘れぬ忠義の士たちである。

宮は、そのひたむきな忠誠心をよしとして上野の山にふみとどまり、戦い利あらずのがれる憂き目にあわれたが、それはそれとして朝廷軍の軍門にくだるようなことは断じてすべきではない、と強調した。

眼に涙をうかべて反論する竹林坊の声は大きく、亮栄は狼狽し、何度も手できびしく制した。僧たちも顔を青ざめさせて、寺の外にきこえるのではないかと庭の方に不安そうな眼をむけていた。

ようやく竹林坊は口をつぐみ、亮栄は黙って竹林坊の顔を見つめていた。

しばらくすると、再び亮栄は、宮に視線を走らせながら低い声で自説を説きはじめた。宮は逃げまわるようなことはせず、江戸城におもむいて大総督有栖川宮熾仁親王に会い、これまで寛永寺山主として上野にふみとどまり、戦さに巻きこまれたいきさつを話すべきである。熾仁親王も、山主

としての宮のお立場を理解し、諒解してくれるはずである。
じゅんじゅんと説く亮栄の言葉に、宮は無言であった。
竹林坊が、再び口を開いた。
慶喜謝罪嘆願のため、宮が駿府城におもむいた時の熾仁親王の威丈高な応接を口にし、親王が宮を寛大に扱うはずはなく、彰義隊に守護されて上野の山にふみとどまった宮は、朝敵と目されて、きびしい処罰の対象とされる。
「お仕えする僧として、宮様には軍門にくだるようなことはしていただきたくない」
「しかし……」
亮栄は、反論する。
二人は互いに自説をゆずらず、竹林坊は興奮し、その声が一層大きくなった。亮栄は、声をひそめて何度もたしなめ、宮も不安そうに顔をしかめていた。
議論は、翌日になってもつづき、その日も雨で南風が強く、屋根に雨がたたきつけていた。
宮に付き添っていた僧たちは、いつしか亮栄の意見に賛同するようになり、声高に自説を主張する竹林坊をうとましく思うようになっていた。
宮は、終始無言であったが、亮栄の言葉を途中でさえぎり、自説を主張する竹林坊に、
「もうよい」
と、声をかけ、
「この場から去るように……」

と、きびしい口調で言った。
竹林坊は、その言葉に罷免されたことを察し、つつましく宮に拝礼し、亮栄にも挨拶して座敷を出た。身の回りの物を手に玄関に行き、僧の一人が見送った。雨は勢いを増していて、笠をかぶって去ってゆく竹林坊の姿は、雨で白く煙る坂道に消えていった。
翌二十日も朝からの雨であったが、昼頃にはやみ、雲間から青空がのぞいた。自証院では、徒弟たちが宮たちの濡れた衣類その他を廊下にひろげ、天日にさらしていた。
院主の亮栄は、宮に随行してきた僧たちと宮の今後について協議した。亮栄は、あくまでも宮を大総督有栖川宮に近づかせ、身の安全をはからねばならぬ、とあらためて強調した。
そのためには、尾張藩に仲介の労をとってもらって有栖川宮に接近するのが好ましい。紀伊、水戸藩とともに徳川御三家の一つである尾張藩を、幕府崩壊後も大総督府は重きをおいている。王政復古後、尾張藩は朝廷軍に加わることを表明し、その動きに大総督府は好感をいだいている。尾張藩が、宮の処置を穏便にと願い出れば、有栖川宮もそれをうけいれるにちがいない、という。
幸いにも自証院は、尾張藩の祈願所であった。三代将軍家光の息女千代姫が尾張藩主徳川義直（よしなお）の子光友（みつとも）に嫁し、千代姫が母の供養のため建立したのが自証院で、院主からの要請があれば尾張藩も動くはずであった。
翌日、亮栄は、尾張藩下屋敷に使いを出し、親しい藩士の永田新次郎に来てもらった。
亮栄は、永田の顔に視線を据えると、
「これからお話しすることは、一切他言せぬとお誓いいただけますか」

と、言った。
思わぬ言葉に、永田は緊張し、
「お誓いいたす」
と、答えた。
亮栄が、当院に宮がおられることを口にすると、永田は眼をみはった。亮栄は、宮の行方を探ろうとして朝廷軍の諸藩兵が江戸一帯に放たれていると前置きし、いつ自証院に藩兵が踏み込んでくるかわからない、と、永田に言った。
「私としてはなんとしてでも宮の御身を守らなければならず、そのためには尾張藩邸にお移りいただくのがよいと思う。藩邸は広く、どこかにかくまって欲しい」
亮栄は、懇願した。
傍らに座る僧たちも、頭をさげた。
宮をかくまうのは、その行方を追っている大総督府の意にそむくことになり、それが発覚すれば藩はおとがめを受ける。むろん、それを承知していた亮栄は、尾張藩を通じて宮の処置を穏便にしてもらうためだと説き、ようやく永田は納得し、自証院に藩兵が踏み込む気配が大になった場合には、尾張藩邸に迎え入れることを約束した。
永田が去ると、亮栄をはじめ宮に随行してきた僧たちの顔には安堵の色がうかんだ。
かれらは、一室に集まり、茶を飲んでおだやかな表情で話し合った。尾張藩主は大総督の有栖川宮熾仁親王に好感をいだかれ、輪王寺宮の御処置を寛大にと懇願すれば、有栖川宮もそれを受け入れてくれることが十分に期待された。
僧たちの顔には、かすかな笑いの表情もうかんでいた。
突然、南の方角で発砲音がきこえ、かれらは顔を見合わせた。発砲音が数発つづき、鋭い人声もかすかにきこえる。
僧の中には、顔色を変えて立ち上がり、廊下に出る者もいた。
「何事だ」
亮栄も、立ち上がった。
銃声は、さほど遠くない所で起こっている。大総督府指揮下の朝廷軍の発砲にちがいなく、寺に藩兵が踏み込んでくる恐れを感じた。
亮栄が宮のいる奥座敷に急ぎ、他の僧たちもそれにつづいて宮の前に座った。宮の顔も青ざめていた。
再び発砲音がし、叫ぶような人声もきこえてくる。僧たちは、体をかたくして外の気配をうかがった。
亮栄は寺の僧に、緊急事態に至った折には、裏手から宮を尾張藩邸に急いでお連れするようにと指示し、寺の徒弟になぜ発砲音がしたのか探ってくるように命じた。
徒弟は、すぐに自証院を出ていった。
亮栄は、僧たちと宮の前に座って互いに顔を見合わせていた。
しばらくすると、息を切らした徒弟がもどってきて、廊下に手をつき報告した。自証院の南八町

（八百七十メートル強）ほどの所に紀州藩の下屋敷があるが、かなりの人数の朝廷軍の藩兵たちが屋敷をとりかこみ、威嚇するように銃を連続的に発射しながら荒々しく藩邸に踏み込んだ。兵たちの交わす言葉で、輪王寺宮を捜索するためであることが判明したという。

なぜ、藩兵たちが紀州藩邸に踏み込んだのか。

徒弟は、門前にむらがる付近の住民の話をひそかにきいてまわり、その理由を知った。輪王寺宮は、伏見宮邦家親王の第九子で、妹の則子親王が紀州藩主徳川茂承（もちつぐ）の内室となっていることから、紀州藩が輪王寺宮をかくまっているのではないかという疑いをいだき、大総督府の命令で紀州藩邸に踏み込んだのだ、という。

紀州藩邸に闖入（ちんにゅう）した藩兵たちは、広い邸内を輪王寺宮の姿を求めてくまなく探しまわり、天井裏や床下まで探った。しかし、宮は発見できず、今しがた引き揚げたものの、藩兵の指揮者は、もしも宮が姿を見せた折には、即刻、陣屋に急報するようにと藩邸の者に言って、去ったという。

徒弟の報告に、亮栄をはじめ僧たちの顔に血の気は失せていた。

徳川御三家の一つである紀州藩は、鳥羽、伏見の戦いの後、朝廷軍側につくことを公言し、大総督府の軍事行動に協力する姿勢をしめしている。そのような紀州藩の屋敷に銃を発砲し、荒々しく兵が踏み込んだのは、大総督府のあくまでも宮を捕らえずにはおかぬという執念をしめしている。同時にそれは、徳川御三家の権威を全く無視した行為でもあった。

亮栄は、宮を尾張藩に託し、東征大総督有栖川宮に藩主から穏便にと願い出れば、平穏に解決すると信じていたが、それが全くの誤算であることを知り、大きな衝撃を受けていた。もしも、尾張

藩邸に宮がかくまわれていることを知れば、有栖川宮は、ただちに兵を踏み込ませ、宮を捕らえて苛酷（かこく）な罰をくわえることはあきらかだった。宮にとって、大総督府は、恐るべき敵であるのを知った。

宮の前に座る亮栄たちは、言葉もなく座っていた。

「これからどうなさったらよろしいのでしょう」

僧の一人が、つぶやくように言った。

返事をする者は、いない。

捜索は、今後さらに徹底したものになることが予想される。寛永寺と縁のある寺々はその目標となり、その一つである自証院にも探査の手がのびるのは時間の問題であった。

亮栄は、宮が身をひそませる地は江戸にはない、と思った。身の安全をはかるには、江戸を脱出する以外にない。

亮栄は深く息をつくと、

「こと、ここに至っては、宮様に江戸から脱出していただく以外にあるまい。そうは言っても、これは至難のわざで、地方に通じる街道は、ことごとくとざされ、近づけばたちまち捕らわれる」

と、言った。

僧たちは押し黙り、庭に眼をむけている者もいる。生い繁った樹木の緑の色は濃く、その中にひとかたまりになった紫陽花の色が鮮やかだった。

亮栄が寺の僧に地図を持ってこさせ、畳の上にひろげられた。

僧たちは地図を見つめ、それぞれの得ている情報を口にした。江戸以南は言うまでもなく北の方向も、水戸以北の地域以外は朝廷軍の完全な支配下にある。

「水戸より北の地しか、安全な場所はないのか」

亮栄が、息をつくように言った。

その地に行くには、海路をたどってひそかに江戸を脱け出す方法しかない。そのようなことが、可能とは思えない。

廊下に足音がして、座敷の入り口に寺の僧が手をつき、玄関に三人の武家が訪れてきたことをつたえた。

亮栄たちは、表情をこわばらせたが、寺僧が、それぞれ藤堂藩の脱藩士匹田丑之助とその悴二郎、幕府徒士目付の河野大五郎と名乗っていると告げた。

その言葉に宮の随行僧たちは表情をやわらげ、僧の一人が、

「竹林坊様と親しい、寛永寺にもよく出入りしておりました武家の方です。宮様を護衛して中根岸の麻生将監様の家まで参りましたが、竹林坊様からついてこないで欲しいと言われ、そこでお別れしたのです」

と、言った。

「信頼できるのですね」

亮栄が、僧の顔に視線を据えた。

「まちがいありません」

僧が、答えた。

紀州藩邸に朝廷軍の兵が踏み込んだからには自証院も危険で、一刻も早く逃げ出さねばならない。その方法は、どのようにすべきか。偶然にも三人の信頼できる武家がやってきたが、かれらの助力を得てこの窮状を打開すべきであった。

「そのお方たちにお会いしよう」

亮栄は立ち上がり、廊下に出て、玄関におもむいた。

玄関に二人の五十年輩の武家と若い武家が立ち、亮栄は、あがるように手を動かした。

匹田父子と河野は敷台にあがると、玄関につづく小部屋に入って亮栄と対座した。

あらためて亮栄はこの寺の住職だと名乗り、匹田父子と河野もそれぞれ名を告げた。いずれも精悍な風貌をしていて、亮栄は頼りになりそうな武家だ、と思った。

「なぜ、この寺に訪ねてこられました」

亮栄は、かれらの顔に視線を据えた。

河野が、口を開いた。

三人は、宮を護衛して上野の山からのがれたが、武家が同行することは宮の身の安全のさまたげになると説得され、別れることを余儀なくされた。しかし、三人は宮の身を案じて諸所方々を探しまわり、寛永寺と縁のある東光院にかくまわれているのではないかと考え、東光院におもむいた。

三人が竹林坊と親しい間柄であることを知っていた東光院の住職は、宮が、竹林坊たちと市ケ谷の自証院にむかったことを口にし、それによって自証院に来たのだ、という。

亮栄は、竹林坊が意見の相違から宮に罷免され、寺から去ったことを告げると、三人は顔を見合わせた。

三人に疑うべきことのないのを知った亮栄は、かれらもまじえて今後のことについて協議しようと考え、

「宮様をどのようにすべきか、相談していたところです。貴方様がたにも加わっていただきたい」

と言って、腰をあげた。

三人も立ち、亮栄の後について廊下を進み、奥座敷に入った。

そこに宮がいるのを眼にしたかれらは、座ると平伏した。

亮栄が、これまでの話し合いの経過を説明した。紀州藩邸が探索の対象になったかぎり、この自証院もいつ踏み込まれるかわからない。一刻も早く自証院をはなれなければならないが、他の場所に移っても同じことで、江戸から脱出する以外に宮を守る手だてはない。宮を水戸以北の地にのがれさせたいが、そのためには船を利用しなければならず、しかし、そのような方法をとる手がかりは考えつかず、途方にくれている、と言った。亮栄の眼は、血走っていた。

河野が口を開き、品川沖に幕府の軍艦が碇泊していて、それに乗る方策をさぐるべきだ、と言った。幕府海軍副総裁榎本武揚は、徹底した主戦論者で、江戸城を接収した朝廷軍から軍艦をすべて引き渡すようにという命令を受けたが、言を左右にしてこれを拒否し、艦船をひきいて品川沖に碇泊させていた。

思いがけぬ河野の提案に、亮栄たちは、眼をかがやかせた。幕府の軍艦が品川沖にとどまっていることは、かすかにきいていたが、それにお乗せすることができれば、宮を江戸から脱出させることができる。榎本武揚は、オランダにも留学した海軍の知識に通じた人物で、幕府軍が鳥羽、伏見の戦さでやぶれた後も、朝廷軍に徹底抗戦を主唱し、大坂城から脱出した徳川慶喜を自らの統率下にある軍艦「開陽」に乗せて江戸に送りとどけている。宮の身を託すのは、榎本以外にないと思えた。

しかし、探索のきびしい江戸の町を通ってその艦船に果たして乗ることができるかどうか。想像するだけでも至難のことであり、ほとんど不可能に思えた。

河野と匹田父子は、とりあえず榎本が引き受けてくれるかどうか、諒承を得るのが先決だと言って、あわただしく立ち上がると、寺を足早に出て行った。亮栄たちは、奥座敷に座ったままかれらの帰りを待った。夕食が運ばれたが、箸を取る者はいなかった。

三人が自証院にもどってきたのは、夜もふけてからであった。

三人は品川に行き、ひそかに小舟をやとって幕府艦隊の旗艦「開陽」におもむき、榎本に会った。榎本は事情をきくと、即座に承諾し、宮をお迎えする、と約束してくれたという。

亮栄たちは喜び、夜おそくまで宮をどのようにして榎本艦隊の船に送りとどけるかについて話し合った。艦船に行くには、小舟に宮を乗せて行かねばならない。

「星野長兵衛殿に頼んでみよう」

亮栄が、言った。

長兵衛は、松阪屋という屋号をもつ回漕問屋を営み、紀州藩の御用をつとめている。義侠心のあ

る男で、頼めば身を犠牲にしてでも引き受けてくれるはずだという。かれの問屋は、鉄砲洲船松町二丁目にあった。

翌二十二日早朝、松阪屋に使いの者が出され、長兵衛にすぐに来て欲しいと告げさせた。長兵衛は、なにごとかといぶかしみながらも駕籠に乗って自証院にやってきた。

亮栄は、決して他言せぬようにと念を押し、自証院に宮がいることを告げ、榎本艦隊の艦船に送りとどける舟の手配をして欲しい、と頼んだ。

長兵衛は、神妙な表情をして、

「徳川御三家の紀州様の御用を先祖代々つとめさせていただき、徳川様への御恩義を強く感じております。このたびの大乱で、なにか御用をつとめられぬかと常々思っておりましたので、この御大役、命にかけて果たさせていただきます」

と、言った。

誠意のこもった長兵衛の言葉に、亮栄は喜び、長兵衛を中心にして慎重に打ち合わせがおこなわれた。

三日後の五月二十五日夕刻に長兵衛が榎本艦隊の艦船まで漕ぎ寄せる舟を用意しておくことになり、その日の夕刻までに宮を鉄砲洲船松町の長兵衛の店にお連れすることにきまった。長兵衛は、当然のことながらそれに関与する店の者は信のおける者たちにかぎり、安心して欲しい、とつけ加えた。

「二十五日にお待ち申しております」

長兵衛は、腰をあげると再び駕籠に乗ってもどっていった。

船の手筈はこれでととのったが、どのようにして宮を長兵衛の店に連れてゆくかが問題であった。彰義隊が上野の山で戦さにやぶれて以来、落ちていった隊員を捕らえる指令が大総督府から出され、同時に輪王寺宮の行方もつきとめるようにという布告も発せられている。彰義隊員たちは捕らえられたり殺害されたりしているが、宮の行方は杳として知れず、大総督府は、宮の発見に焦点をしぼって江戸市中に大々的な捜索網を張りめぐらせ、その探索につとめている。

そうした江戸の町のなかを長兵衛の店まで行くことが、果たしてできるか。

亮栄たちは協議し、亮栄が一つの策を口にした。

宮がどのような変装をしようとも、かくすことができないのは頭部であった。剃髪している宮は僧とみられ、人相書きも配布されているので輪王寺宮と見破られる確率が高い。

他に剃髪している職種はなにか。医者は、古くから頭を剃っていて、それが医者の特徴ともなっている。

亮栄は、宮を医者に仕立て、長兵衛の店まで送りとどければ、人の眼をあざむくことができるのではないか、と言った。

匹田丑之助や河野大五郎も僧たちの協議に加わっていて、亮栄の提案についてあれこれと検討した。他に適当な策はなく、宮に医者に変装していただき、長兵衛の店まで行ってもらう以外にない、という結論に達した。

この件について、亮栄は、信頼のおける医師として西川玄仲の名をあげた。玄仲は肥前唐津の藩

主の抱え医者で、亮栄とはじっこんの間柄であった。玄仲は、日本橋本町三丁目に住み、名医としての評判が高かった。

亮栄は、早速、使いを出して玄仲を招いた。

病人が出たのだと思った玄仲は、門人をともなってすぐに駕籠でやってきた。

亮栄は、玄仲一人を一室に招き、他言せぬようにと念を押した上で、宮が自証院にいることを告げた。

玄仲は驚きながらも、亮栄の話に耳をかたむけた。

江戸の中心地である日本橋に住んでいるだけに、闖入（ちんにゅう）するように入ってきた諸藩兵をうとましく思っていた玄仲は、藩兵が姿を見せる前に江戸の町々を巡回していた彰義隊に感謝の念をいだいていた。それが戦さにやぶれたことに、悲しみと同情を感じていた。

宮は、彰義隊員の尊崇の的であり、亮栄の話をきいた玄仲は、宮のために力をつくしたい、と思った。

亮栄が、宮を医者に仕立てて長兵衛の回漕問屋に送りとどけたい、と言うと、玄仲は即座に承諾し、意見を述べた。宮は二十二歳という若さなので、医学修業中の玄仲の門人ということにする。玄仲は、あたかも患家を往診するように回漕問屋の長兵衛の店にむかい、その後から宮はついてゆく。医師の往診には、薬籠（やくろう）を負う者がついてゆくのが常で、匹田丑之助が下男の身なりをしてその任にあたる。三人が連れ立って歩く前後に、念のため匹田の息子の二郎が、自証院抱えの武家と一定の間隔をおいて警護する。

玄仲は、さらに門人をよそおう宮の身なりについていろいろと注意し、

「それでは、二十五日に薬籠を持って参ります」

と言って、自証院を出ていった。

亮栄は、宮のいる座敷にもどり、玄仲との話し合いの結果を報告した。

なにごともなく事が運べば、宮は榎本武揚指揮の艦船に乗り、江戸をはなれることができる。行き先は、朝廷軍の進出していない水戸以北の地で、蝦夷（えぞ）にむかうと言われている艦船に乗れば、必ずその方面におもむける。当然、僧たちも宮と行を共にする。

ようやく亮栄の顔に安堵の色がうかび、

「手筈がこれですべてととのった。上首尾であることを祈るのみだ」

と、僧たちに言った。

その夜、宮に随行する僧たちが低い声で話し合った。

宮が回漕問屋の長兵衛の店に行きつくことができれば、水戸以北の地へ逃げのびられる。それは望ましいことだが、僧たちにとっては未知の地であった。僧たちは、宮につき従ってゆくが、どのような人との出会いがあり、出来事があるか。それに対処できるかどうか、かれらには自信がなかった。

そこに突然のように匹田丑之助父子と河野大五郎が訪れてきた。かれらは、早速、榎本武揚のもとにおもむいて宮を水戸以北に送りとどける約束をとりつけ、回漕問屋へ行く宮の護衛の任にもあたる。そのような才覚は僧たちにはなく、河野たちはまことにたのもしい武家たちであった。

僧たちは、自然に中根岸の麻生将監宅で別れた家臣たちのことを思い出し、できればかれらに加わってもらえれば、心強いかぎりだと考えた。

思いは一致し、かれらは連れ立って亮栄の部屋におもむいた。

「何事です」

文机にむかって書きものをしていた亮栄は、僧たちに視線をむけた。宮が玄仲の門人として長兵衛の店に行くことに、異をとなえるのではないか、と思っているようだった。

僧の一人が、口を開いた。

これまで宮とともに上野の山からのがれ、寛永寺の寺領の村々から東光院をへてこの自証院までお供をしてきた。今後もそれに変わりはないが、水戸以北の未知の地で自分たち僧だけで宮の身の安全をお守りするにははなはだ心もとない。

「宮の身辺を護衛していた御家来衆とは、宮の安全を守るためにお別れしたが、この際、御家来衆を呼びもどし、お供をさせてはいかがか。われら話し合いの末、それがよろしかろうと一決した次第」

僧たちの顔には、切迫した表情がうかんでいた。

僧は、さらに言葉をつづけた。

「御家来衆は、長年宮にお仕えし、それぞれ思慮深く胆力にもすぐれ、緊急の折には宮の御身をお守りする手立てにも長けております。われら僧だけではなんともできず、これから後は、御家来衆をお加えいただきたい」

僧たちは、亮栄を見つめている。

亮栄は、視線をそらし、庭に眼をむけた。僧たちの話では、武家がつき従っていると、宮が輪王寺宮であると発覚する恐れがあり、それで別れたという。それは、賢明な配慮であったが、果たして今ではどうか。宮は、寛永寺山主として絶えずこれらの家臣に守られ、今まですごしてきた。家臣たちがおそばに控えるのが本来の姿であり、僧たちの望む通り、家臣たちを呼びもどすべきだ、と思った。

しかし、かれらはどこへ行っているのだろう。宮の家臣として探索の対象となっていて、それぞれ四方に散り、身をひそませているにちがいない。

かれらを探し出すのはほとんど不可能だが、亮栄は匹田丑之助父子と河野大五郎のことを思った。かれらは、宮直属の家臣ではないが、宮の身辺を守るのを義務と考え、宮が上野の山をのがれて以来、宮が身を寄せているにちがいないと思われる場所から場所をたどってこの自証院を探しあてたという。

かれらと同じように、家臣たちも姿を見せぬものの、ひそかに跡をつけているのではないだろうか。もしかすると、匹田と河野は、これら家臣たちと連絡をとり合っているのかも知れず、そうだとすれば、二人は家臣たちの居所を知っている可能性がある。

それを亮栄が口にすると、僧たちは、十分に考えられることだ、と口々に言った。

早速、亮栄は、二人を座敷に招いた。

宮の家臣たちを呼びもどしたいという言葉を口にした亮栄は、

「どこにおられるか、心当たりがありますか」
と、二人の表情をうかがった。
二人は顔を見合わせ、しばらく黙っていたが、
「およその見当はついております」
と、匹田が言った。
家臣たちは、宮が逃避する途中、ついてこぬように言われ、それに従いはしたものの、宮一行の跡をひそかにつけ、自証院にたどりついたことも知っているという。
亮栄は眼をかがやかせ、
「宮がこの自証院にいるのを知っているというのは、どなたですか」
と、たずねた。
「関右京殿と安藤直記殿」
匹田は、答えた。
僧たちは顔を見合わせ、うなずいた。
関と安藤は、宮一行が三河島村から上尾久村の名主江川佐十郎のもとに来て土蔵に身をひそめた時、訪れてきた家臣であった。その折、二人は去ったが、それ以後もひそかに宮の跡をつけてきて、自証院に入ったことを知っているのだろう。
亮栄は、
「早速、関殿と安藤殿に連絡をとり、宮様に随行するよう頼んでみていただきたい。委細は後ほど伝えると……」
と、匹田に言った。
承諾した匹田は、すぐに自証院を足早に出ていった。
かれがもどってきたのは、行灯（あんどん）に灯が入った頃であった。匹田が関と安藤に会って亮栄の言葉を伝えると、二人は大いに喜び、心してそのお役目をお引き受けする、と言ったという。
さらに匹田は、関と安藤が主立った家臣の一人である鈴木安芸守の所在も知っているので、鈴木も随行者に加えさせてやって欲しい、と頼まれたことを口にした。鈴木は、寛永寺を宮が脱け出る時に護衛につき、山をおりた宮が中根岸の筆頭家臣麻生将監の家で休息をとった後、そこで別れた。随行の僧は、家の前で気づかわしげな眼をして雨に打たれながら見送っていた鈴木の顔が忘れられない、と言った。
「鈴木殿が随行に加わって下されば、まことに心強い。ぜひともお頼みして欲しい」
僧たちは、口々に言った。
その日は終日雨で、寺は、雨の音につつまれていた。
翌二十三日はすっかり雨があがり、朝の陽光がまばゆく庭にそそぎ、樹葉の緑があざやかだった。
匹田が、鈴木安芸守と連絡をとるため出てゆき、七ツ（午後四時）頃にもどってきた。
随行することにきまったことを伝えると鈴木は喜び、宮がおもむく回漕問屋長兵衛の店に、二十五日夕刻までに必ず関右京、安藤直記とともに参上する、と約束したという。
これによって、準備はすべてととのった。

潮の匂い

翌二十四日は晴天で、長い梅雨も明けたようであった。

その日の夕刻、宮は、亮栄と随行の僧たちを召してひそかに小宴を開いた。

亮栄の綿密な配慮に宮は礼を述べ、亮栄は宮の無事を祈っている、と言った。かれらは、静かに言葉を交わし、酒を口にふくんだ。

一刻ほどして宮は寝についたが、眠りは訪れず、しきりに寝返りを打っていた。

朝を迎えた。曇天であった。

宮が僧たちと身支度をととのえ、昼の食事をとっていると、医者の西川玄仲が、薬籠を手にしてやってきた。早速、出立の準備にとりかかり、宮は玄仲の門人であるということから、玄仲の指示でそれにふさわしい身なりをととのえた。夏用の麻の羽織を身につけ、角帯をしめ、短い木刀を腰にさした。履物は雪駄で、常に玄仲の後ろに従うことが指示された。

家臣の匹田丑之助は、髪を結い直して下男らしい衣服を身につけ、薬籠を背負った。随行の二人の僧は先行することになり、鉄砲洲船松町の長兵衛の回漕問屋にむかった。

八ツ（午後二時）すぎ、宮は、玄仲にしたがって自証院の門を出た。後ろからは、薬籠を背にした匹田がついてくる。その後方二町（二百十八メートル）ほどの所を匹田の息子の二郎とその友人が、警護のためついてきていた。玄仲は、ゆっくりと歩いてゆく。空は雲におおわれていてむし暑く、玄仲は扇子を使っている。いかにも患家に往診におもむくような姿であった。

宮は、角帯をしめたことはなかったが、腰がひきしまっていて、緊張感が体全体にひろがっていた。玄仲は、東への道をたどってゆく。

右手に江戸城が見え、大名屋敷が多く、塀にそって進む。人通りはほとんどなかった。田安門の近くを過ぎ、神田の町に入った。そこも大名屋敷と武家の家々が並んでいて、いくつかの橋を渡った。玄仲は、足をとめると額や首筋に湧いた汗を手拭いでぬぐい、

「暑い、まことに暑い」

と言って宮に顔をむけ、頬をゆるめた。

商家が軒をつらねた日本橋の町に入ると、荷を載せた大八車や駄馬が往き交い、道を行く人の数も増した。上野の戦さが終わった安堵感が町々にひろがっていて、女の通る姿も目立った。

玄仲は、扇子をつかって歩き、宮は、その後からつき従っていった。

空気に潮の香が感じられるようになった。再び大名屋敷がつらなるようになり、彦根藩蔵屋敷の長い塀にそって進み、左折すると、前方に海の輝きが見えた。

小川にかかった橋を渡り、肥後藩上屋敷の門前をすぎて海岸通りに出ると、そこに回漕問屋の大きな構えの家と蔵が並んでいた。

玄仲は、二階建ての家の前で足をとめると、宮を振り返り、

「松阪屋です」
と、神妙な表情で言い、広い間口の家の中に入った。
内部は、回漕問屋の帳場らしく壁には屋号を記した提灯や傘が並び、手代らしい男が帳場に座って帳づけをしていた。
腰をかがめた店の男に、玄仲が名を告げると、男が奥に入り、すぐに長兵衛が姿を現した。
長兵衛にうながされ、宮は雪駄をぬいで玄仲の後から店の畳の上にあがった。
すぐの所に階段があり、宮は玄仲とともにそれをふんであがり、廊下を進んで左手の座敷に入った。そこには、家臣の鈴木、関、安藤とともに自証院から先行した二人の僧が待っていて、平伏して宮を迎えた。
鈴木たち家臣は、
「御無事で……」
と言い、言葉をつまらせて涙ぐんだ。
鈴木たちは、髪を商人髷に結い直し、衣服も商人らしいものにし、刀を風呂敷に包んでいた。途中、怪しまれぬための配慮であった。
主の長兵衛が、窓の障子を細めにあけた。正面に石川島の漁師町が見え、岸に漁船がもやってある。その後方に海のひろがりが見えた。
今後のことについて、匹田が説明した。榎本武揚との話し合いで、宮は、輸送船「長鯨」（九九六トン）に乗っていただく。長兵衛が、船への案内については今夜、夜陰に乗じて、松阪屋の裏手

の溝渠に引き入れてある小舟に宮一行を乗せ、「長鯨」に漕ぎ寄せる手筈をととのえてある、と言った。
一同、うなずいた。
茶菓が出され、かれらはくつろいで言葉を交わした。上野寛永寺をのがれてから、三河島、尾久をへて東光院、自証院にのがれ、この松阪屋に無事にたどりついたことが語られた。
「よくもこの地まで、まさに神仏のおかげです」
かれらは、口々に言い合った。
宮とともに「長鯨」におもむくのは、終始付き添ってきた二人の僧――邦仙と守慶、それに家臣の鈴木安芸守、関右京、安藤直記の五名であった。小舟を出すのは、夜九ツ半（午前一時）ときまった。
匹田は、息子の二郎とともに辞去することになり、宮に平伏すると、
「御無事を祈っております」
と言って、階下におりていった。
日が傾き、海が暗くなりはじめた。
長兵衛が食膳を運ばせ、酒も出した。宮は酒を口にふくみ、箸をのばして煮た野菜を口にした。
静かな夕餉であった。
家臣の鈴木が、
「まるで夢のようでございますな。宮様がなにごともなくこの地にたどりつかれるとは……」

と、感に堪えたように言った。
「まことにまことに……」
関や僧たちも、しきりにうなずいていた。
医師の西川玄仲が二階にあがってきて、辞する旨を口にした。
宮は、玄仲に杯をあたえ、
「ここまで歩いてくる間、門人になったような気分でした。木刀は記念として手もとに置きます」
と、言った。
玄仲は恐縮し、宮の前を退出した。
宮は角帯をとき、身なりをととのえた。食膳がさげられ、宮は脇息にもたれて仮睡した。
夜が更け、長兵衛が二階にあがってきて、宮は眼を開いた。
「御用意がととのいました」
長兵衛の言葉に、宮は数珠を手に立ち上がった。宮は、家臣や僧たちと座敷を出ると、廊下を進み、階下におりた。
土間には、白い鼻緒の上質の草鞋がそろえられていて、宮はそれをはき、長兵衛の後について家の裏口の方に歩いた。
土蔵の板の間の一隅に穴が開いていて、宮はそこに作られている狭い石段をおりた。穴の下には海の水が引き込まれていて、小舟がうかび、手拭いを頭からはずした男が、腰をかがめて頭をさげた。宮は、家臣や僧とともに舟に乗った。

行灯を手にした長兵衛が、御無事を祈っております、と低い声で言った。
男が、棹を手にして溝渠を突いた。舟がゆらいで動き、細い水路を進んで蔵の下から海面に出た。
男は、棹を置き、櫓をつかんだ。
空は雲におおわれ、海上は闇につつまれている。男は、櫓扱いで舟を進ませてゆく。常夜灯の灯がみえるのは石川島で、舟はその傍らをすぎた。前面に夜の海がひろがった。
男は、あらかじめ、「長鯨」の碇泊位置をたしかめてあったらしく、闇の中を舟を進ませてゆく。陸岸には、並び立つ回漕問屋からもれる灯がちらついていた。
しばらくすると、舟の進む方向の海に灯が見え、それが何カ所にも見えてきた。艦船の舷灯にちがいなかった。
舟は、その一つにむかって近づいてゆく。大きな黒ずんだ船体が徐々に近づき、甲板にともる舷灯に人の影もとらえられた。
船体が大きくのしかかるようにせまり、近づいた舟が舷側についた。
男が立ち上がり、顔を上に向けると、
「申し、申し」
と、甲板上に声をかけた。
人影が浮かび上がり、顔を突き出して、
「松阪屋か」
と、言った。

「左様でございます」
男は、答えた。
甲板で低い人声がし、舷門が開き、ついで短い縄梯子がおろされた。波はおだやかであった。
関右京が、まず縄梯子にとりつき、つぎつぎに家臣が縄梯子をふんで甲板上に消え、宮も縄をつかんで梯子をふみ、甲板上にあがった。士官らしい男が、数名の水夫とともに姿勢をただして立っていた。僧たちも甲板にあがり、小舟は舷側を静かにはなれていった。
家臣が、士官に宮を輪王寺宮だと告げると、士官は頭をさげて斯波清一郎と名乗り、
「お待ち申しておりました」
と、言った。
初めて帆船に乗った宮をはじめ家臣と僧たちは、舷灯にうかぶマストや上部構造物を珍しそうにながめまわしていた。
斯波が、
「こちらへ……」
と言って歩き出し、宮たちもその後についていった。
扉をあけて通路を進み、一室に入った。そこには机と壁ぎわにベッドがもうけられ、斯波が外に出ると、宮たちは椅子に座った。机の上におかれたランプには灯がともっていた。
しばらくすると、斯波が部屋の入り口に立ち、
「海軍副総裁榎本和泉守（武揚）様が、開陽よりこちらへ伺うそうです」

と言い、通路を去った。
やがて甲板の方で人声がし、通路を歩いてくる足音がした。靴をはいているようであった。
入り口に斯波を従えた一人の男が姿を現した。髪は洋髪で洋服を身につけ、髭をたくわえている。右手には、白鞘の大刀を手にしていた。
男は、中央の椅子に座る宮を輪王寺宮と察したらしく、
「海軍副総裁榎本武揚にございます。当艦においで下さり、まことに光栄に存じます」
と言って、頭を深くさげた。
「お世話になります」
宮は、それに応えた。
榎本は、斯波に声をかけ、通路に出ると、隣室の扉をあけ、宮一行に入るよう丁重にうながした。
その部屋は貴賓室とも言うべき部屋で、調度がととのっていた。
宮は榎本にすすめられて椅子に座り、榎本は立っていた。
榎本は宮に、
「お人払いを願わしゅう存じます」
と、言った。
宮はうなずき、家臣の鈴木たちに声をかけた。
鈴木は承知し、他の家臣や僧たちと通路に出たが、守慶のみがまごまごして部屋にとどまり、斯波が部屋の扉をしめた。守慶は戸惑い、部屋の隅にうずくまった。

榎本が、宮の前に進み出て、口を開いた。
「宮様は、奥州におもむくおつもりで当艦に御乗船遊ばされた由ですが、そのお気持ちはいかなる次第ですか、お聴かせいただきたく存じます。それを拝聴いたした上で、申し上げたきことがございます」
と、丁重な言葉づかいで言った。
宮は、
「別に他意はない。上野東叡山は、承知しておると思うが兵火によって焼失し、僧侶として身をおく所はなくなっている」
と、さわやかな口調で言った。
「私も、そのようにおききしております」
榎本は、言った。
宮は、さらに言葉をつぎ、
「奥羽には末寺も多く、戦争もない。しばらく戦地を避けて、天下が平和になるのを待ちたい」
と、言った。
榎本はうなずき、口を開いた。
「この度、宮様が江戸をはなれて奥州へおもむかれるのは、まことに重大なことであります。朝廷の意にそむく恐れ、なしとしません。それをお避けになるため、もしも大総督府におもむかれ諒承を得られたいというお気持ちが少しでもおありでしたなら、私の部下に命をかけて護衛させ、大総

督府に御案内申し上げます」
榎本は、神妙な口調で言った。このまま江戸からのがれ出れば、朝敵と目されることは確実だと思っているのだ。
宮は、表情を変えず、
「その心づかいは無用である。これまでも従う者にいろいろとはかったが、皆、江戸は危険で、たとえ大総督府に身を寄せても安全は期しがたいと言う。従って、しばらくの間、戦乱を奥州の地に避け、天下泰平の日がくるのを待ちたい」
と、言った。
その言葉には、強い決意のひびきがこめられていた。
榎本は、これ以上申し上げることはないと感じたらしく、
「よくわかりました。宮様が御乗船遊ばされました上は、榎本、命にかえましてもお守り申し上げます」
と、頭をさげ、
「後日のために、今のお言葉をお書き下さったものを頂戴いたしたく、なにとぞお願い申し上げます」
と、言った。
宮は承諾し、部屋の外に出ている家臣の鈴木安芸守を呼び寄せた。入ってきた鈴木は、宮に命じられて筆をとり、宮の口にする言葉を書面にまとめた。

宮は、それを黙読し、署名して榎本にあたえた。榎本は、拝受した。

かれは、宮の将来を考え、大総督有栖川宮への事実上の降伏をすすめたが、それを一言のもとに拒否した宮の態度に感服した。奥羽諸藩は、奥羽越列藩同盟を結成して、こぞって朝廷軍に対抗する姿勢をとっている。これに対して朝廷軍は兵を進めるはずで、宮が随行者とともに奥羽の地におもむくことは、再び戦火にまきこまれることを意味する。それを覚悟で「長鯨」に乗り込んできた宮に、榎本は感激し、無事に奥羽の地に送りとどけたい、と思ったのだ。

宮一行を「長鯨」に送りとどけた松阪屋長兵衛の店は、数日後、突然、大総督府の指揮下にある兵に踏み込まれた。長兵衛は荒々しく縄を打たれ、屯所に引き立てられた。宮一行を舟でいずれかに逃がしたという嫌疑からであったが、宮一行を舟で「長鯨」に送った水主は、このことあるを予想していた長兵衛が、金をあたえて他の地にのがれさせていた。

屯所での取り調べはきびしく、吟味者は、確証があると鋭く追及したが、長兵衛は、宮に会ったことすらないとかたくなに首をふりつづけた。そのため屯所では苛酷な拷問にかけ、長兵衛は歯が欠けてしばしば失神しながらも口を割らず、結局、そのような事実はなかったとされ、放免された。

寛永寺の寺領の村々でも、その後、宮一行をかくまい逃避に手を貸した者がいるのではないか、と、徹底した検索が繰り返された。三河島村の名主松本市郎兵衛、植木師の伊藤七郎兵衛、上尾久村の名主江川佐十郎らに嫌疑の眼がそそがれたが、それを証拠立てるものはなく、不問に付された。

むろん、宮一行を目撃した者は多く、宮を守るために手を貸した者もいたが、密告する者はなく、

それは宮に対する尊崇心と朝廷軍への反感によるものであった。

上野の山を中心にした地域には、彰義隊員の戦死した遺体が数多く散乱していた。朝廷軍の被害も大きく、傷ついた者たちは手当てを受け、戦死者の遺体はそうそうに各藩に引き取られ、仮埋葬された。これとは対照的に、彰義隊員の遺体はそのまま放置され、出水した水の中に沈んだり浮かんだりしていた。

やがて梅雨が明け、それらの死体は耕地や道に露出した。すべてが腐爛していて、蠅におおわれ烏や野犬がむらがり、悲惨な様相を呈していた。それを眼にして手を合わせる通行人もいたが、始末する者はいない。彰義隊員の死骸は、朝敵のそれであり、野捨てにされるべきで、そのような考えを持つ朝廷軍の眼をおそれてただ傍観するだけであった。

しかし、朝敵であるとは言え、徳川家代々の恩顧にむくいるために武器をとって戦い、屍をさらしているということに、同情の眼をそそぐ者もいた。かれらはそれらの遺体を収容して埋葬すべきだと考えたが、初めに動いたのは、箕輪通り新町の円通寺住職仏磨と神田旅籠町の俠客三河屋幸三郎であった。

円通寺住職の仏磨と俠客の幸三郎は、互いに同じ考え方を持っているのを知り、しばしば会って話し合った。死骸が散乱しているのをそのままにしておくのは、余りにも痛ましく、それらを丁重に収容したいと思った。しかし、江戸を完全に占拠している大総督府の許可なくして、それらの死骸を始末すれば、たちまち罪に問われる恐れがある。

二人は話し合いの末、大総督府の参謀西郷隆盛に遺体収容を許可して欲しいという陳情書を提出

した。

それを受けた西郷は、参謀たちと協議した。たとえ朝敵の死骸であっても、それらが放置されたままであることは、人心をすさんだものにさせる、という声が高かった。江戸の町民たちに、この機会に朝廷には仁慈の念が深いことをしめすためにも、陳情書を受け入れるべきだという声が支配的であった。

そうしたことから、死骸の処置を許可する旨の回答書があたえられた。

これによって仏磨と幸三郎は、積極的に遺体収容の準備をはじめた。仏磨は、寛永寺の寺領である村々に呼びかけ、それに応じた多くの村人が円通寺に集まり、幸三郎も配下の者たちを呼び寄せた。かれらは、仏磨と幸三郎から説明を受け、翌日からまず上野山内に散る死骸の収容から手をつけた。

かれらは、手拭いで鼻をおおい、腐爛しきった死骸を丁重に畚に入れたり大八車にのせたりして運ぶ。仏磨は、弟子たちとともに読経をつづけていた。

それらの遺体は、上野山王台で一部を火葬して、骨壺を円通寺におさめ、他はその近くに穴をうがって埋葬した。それを上野の山に近く住む者たちが取りかこみ、合掌して香をたき、花をそなえた。ついで、寺領の村々に散っている死骸の収容にも手をつけ、それらは円通寺の墓所に埋葬された。収容された遺体は、二百六十六体であった。

円通寺では、彰義隊の戦死者の合同葬をもよおすことを企て、寺領の各村々の名主に書面を送り、協力を要請した。

葬儀がおこなわれたのは七月四日で、各村々から多くの者たちが参集し、焼香した。これによって円通寺の名は、赤穂浪士を葬る高輪の泉岳寺に準じる高まりをみせ、その後もこの寺に詣でる者はつづいた。

榎本は、陸戦で圧倒的な優位に立った朝廷軍も、近くに碇泊している艦隊には手も足も出せないことを十分に承知していた。排水量二、八一七トンの「開陽」、一、六七八トンの「回天」を主力艦として八隻の艦船によって成る艦隊に対して、朝廷軍の海軍力はほとんど無力にひとしく、近づくことすらできない状況であった。

榎本は、艦隊を品川沖に碇泊させていることが朝廷軍に大きな威圧感をあたえているのを感じ、全艦船を品川沖にとどめていた。

しかし、輪王寺宮が「長鯨」に乗船してきたことによって、かれは予定を変更する必要があると思い直した。宮は、朝廷軍の力の及ばない奥羽行きを希望していて、それに応ずるために「長鯨」のみを艦隊から切りはなし、宮を一日も早く送り込むべきだ、と考えた。奥羽諸藩では、朝廷軍に反抗する機運がたかまっていて、皇族である宮が姿をみせれば、それがいちじるしく強化される。そうした判断から、榎本は「長鯨」を単独で奥羽にむけ出航させることを決意した。

「長鯨」は、イギリスのグラスゴーで建造された九九六トンの武装輸送船であった。蒸気機関をそなえた外輪型船であったが、二本マストに帆をあげて帆走することを原則としていた。

榎本は、「長鯨」の艦長と宮一行を送りとどける地について話し合い、水戸の北方約十五里（六

十キロメートル）の常陸国平潟浦とすることで意見が一致した。むろん、その地は朝廷軍の進攻は全くなく、廻船の重要な寄港地で、最も好ましい地と判断された。

出航は、翌二十六日と決定し、その旨が艦長から宮一行に伝えられた。

その話に、宮一行は驚いた。北の地域に送ってくれるのはかなり先のことで、それまで船内にひそんでいればよいのだ、と思っていた。しかし、他の艦船は動かず、「長鯨」のみが北にむかうのを知った宮たちは、榎本の好意が並々のものではないのを感じた。

「これで江戸の地をのがれ出られます」

守慶の言葉に、一同うなずいた。

その夜は、榎本から酒がとどけられ、僧と家臣たちは出された野菜の煮物を肴に酒を飲んだ。

翌日は、晴天であった。

無風状態であったので、榎本の座乗する旗艦の「開陽」が江戸湾口まで送ることになり、「長鯨」に近づくとバッテラ（ボート）がおろされ、二条の曳航綱がとりつけられた。「長鯨」は抜錨し、「開陽」にひかれて品川沖をはなれた。

「開陽」は、煙突から黒煙を吐き、機関の音をとどろかせながら進み、「長鯨」はそれにひかれて江戸湾を南下してゆく。宮は船室にとじこもっていたが、家臣たちは甲板に出て陸岸や海をながめていた。

上野の戦さがやんだことで漁師たちの生活も落ち着きをとりもどしたのか、海面には所々に漁船がうかんでいる。魚が群れているらしく、海鳥が雪の霏々と舞うようにむらがっている個所もあった。

「開陽」は一定の速度で進み、「長鯨」はそれに従ってゆく。波はなく、二隻の艦船はすべるように木更津沖をすぎた。両側から陸岸がせまり、「開陽」は浦賀水道に入った。艦上で手旗がふられ、「開陽」は、湾口の館山沖で動きをとめ、「長鯨」も停止した。

しばらく二隻の艦船はその場で動かなかったが、やがて「開陽」から旗がふられるのが見え、張り渡された曳航索がとかれた。その位置は外洋に近く、海を渡ってくる風が感じとれた。

「開陽」に再び機関の音がして動き出し、舳先をかえして湾内にもどってゆく。その姿は重々しく威厳にみちていた。

「長鯨」の乗組員が、鋭い笛の吹鳴で機敏に動き、マストにつぎつぎに帆が展張されてゆく。「長鯨」の船体がわずかにゆらぎ、陸岸ぞいに南にむかってゆるやかに進み、外洋に出た。

船には多くの兵が乗っていたが、艦長から四百名ほどであるときかされた。かれらは甲板に出て立ったり座ったりしていた。宮は、それらの兵の中に上野の山からのがれた彰義隊員が数多くふくまれているのを耳にした。さらに幕臣や鳥羽、伏見の戦さでやぶれた会津藩などの藩士もふくまれるという。甲板には、叉銃された銃や大砲が置かれていた。

船は、さらに進んで野島崎をかわし、舳先を北東にむけて進みはじめた。風は微風で、船の動きはゆるやかであった。

宮は、僧とともに船室の外に出ることはしなかった。動揺は少なく、初めて船に乗る宮と僧たちは、船酔いに苦しむこともなかった。

岸の近くに漁船が散っていて、風待ちをしているらしい荷船が碇泊しているのも見えた。「長鯨」の近くまで来ている漁船もあって、驚いたように「長鯨」を見つめている漁師の姿があった。

帆はしおれがちで、船の動きは鈍い。とまっているのではないかとさえ思う時もあった。小湊、勝浦沖をすぎ、九十九里浜沖を北上してゆく。そのあたりにも、漁船が多くみられた。

海がうす暗くなり、日が没した。

夕食をとった後、宮は、僧の邦仙、守慶とともに船室から初めて甲板上に出た。満天の星で、宮は身じろぎもせず空を見上げた。これまで見た星は、樹木や建物にさえぎられた空に散る星であったが、さえぎるものは全くなく、空一面に光る星であった。それに星の光が驚くほど冴え切っていて、見上げている自分の体が空にそのまま吸い上げられそうな感じであった。

京から江戸に出て寛永寺の山主となり、戦さに巻き込まれて「長鯨」で北へ落ちてゆくことが不思議に思えた。寺の周囲を巡回する彰と朱書きした円提灯の灯が、眼の前にうかぶ。物音一つせず、宮は安らいだ気持ちで星を見上げていた。

僧にうながされて、宮は船室にもどった。海を渡ってくる風は、冷えていた。

宮は、剃刀を手にした邦仙に頭髪を剃ってもらった。毛が伸びていて、宮は寛永寺山主らしく、正しく剃髪しておきたかった。平潟という地に上陸すれば多くの人に会うにちがいなく、山主としての威儀をそなえておかねばならない。

宮は、読経をし、法衣を脱いで寝台に身を入れた。船は揺れることもなく、眼を閉じた。静かな眠りが、おとずれた。

かすかな人声に、眼をさました。舷窓がかすかに明るんでいて、夜が明けたことを知った。

「犬吠埼を過ぎたところです」

家臣の鈴木安芸守が、言った。

風は、無風に近く、船の動きは相変わらずおそい。家臣や僧は、時折甲板に出ていったが、宮は船室を出ることはしなかった。

昼食後、従者を連れた艦長が、船室に入ってきて、椅子に座る宮に頭をさげ、

「なにか御不自由なことがございましたら、なんなりとお申しつけ下さい」

と、言った。

「満足しています」

宮は、答えた。

「長鯨」は、緊急の折には罐をたいて蒸気走をするが、積載した石炭の量は少なく帆走を余儀なくされていると言い、順調に船は進んでいて、翌日夜明け前に目的地の平潟につく、と言って、船室を出ていった。

その日も暮れ、五月二十八日の朝を迎えた。

「長鯨」は、予定通り平潟の沖に停船し、錨を投げた。その地は、奥州各藩から主として米を江戸に送る中継地で、漁村でもあった。岸にそって並ぶ家々は朝靄につつまれ、炊煙が立ちのぼっている。

船内で朝食がくばられ、上陸の準備がすすめられた。船に備えつけられた四艘のバッテラ（ボート）がつぎつぎに海面におろされ、その一艘に宮と僧二名、家臣三名が乗った。

バッテラは「長鯨」をはなれて進み、平潟の薬師堂に近い位置についた。すでに艦長からの指示があって、浜にいた漁師の伝之助が海中に足をふみ入れ、宮を背負って砂浜まで運んだ。

家臣の鈴木安芸守が、村役人と言葉を交わし、宮を「御出家様」とのみ言い、庄屋の鈴木主水（もんど）の家に案内させた。宮一行の突然の来訪に鈴木家では狼狽し、宮たちを海に面する奥座敷に通し、茶を献じた。

鈴木主水は、御出家様と言われる宮の容貌が優美で、その動作に気品があるのを見て、かなり高位の僧であるのを感じたようであった。

宮は、医師西川玄仲の門人をよそおったままの服装をしていて、船旅で体も衣服もよごれていた。そのため家臣が鈴木主水に風呂をたいて欲しい、と頼み、鈴木は承諾して、雇い人に湯を沸かすよう命じた。

やがて湯が沸き、宮は湯舟に身を入れ体を清めた。湯舟から出た宮は、随行してきた僧の持ってきた白い衣に着替え、小袴（こばかま）に絵模様の入った法衣をつけた。

ようやく宮が輪王寺宮であることが知れ、肥前唐津藩世子小笠原長行（おがさわらながみち）の子息繁之助が、家臣とともに兵をひきいて鈴木家に駆けつけてきた。老中職もつとめた長行は、幕府の重臣として朝廷軍にねらわれ、江戸を脱出して奥羽にのがれて来ていたのである。

また、平潟を藩領としていた川越藩主の家臣であるその地一帯を支配する奉行も姿を見せた。

奉行が来たことに、宮一行は不安を感じた。川越藩は、徳川家の譜代藩であったが、江戸を占拠した朝廷軍の配下に入っている。朝廷軍に追われている宮一行は、奉行に捕捉される恐れがあった。苦心をかさねてようやく「長鯨」で平潟までのがれて来たのに、捕らえられ、朝廷軍に突き出されるのは耐えがたい。

宮は、家臣に命じ、奉行にそのことを率直にたずねさせた。

奥羽列藩

家臣たちは、奉行に対面し、

「川越藩は、朝廷軍の支配下にあるときいているが、その通りかどうか」

と、問いただした。

奉行は、即座に首をふり、

「そのようなことはきいておりませぬ」

と、答えた。

川越藩主松平康英は、老中職もつとめ、朝廷軍の指示にしたがって京におもむき、謹慎していた。藩主の意向は、飛び地の藩領である平潟村にはとどかず、奉行が朝廷方ではないと答えたのも当然のことであった。

家臣からその旨をきいた宮は、安堵したが、いつまでもこの地にとどまるべきではない、と思った。

宮は、早めに昼食を用意させ、家臣、僧たちとともにあわただしく食事をとった。家臣たちは、これからの旅に必要であると考え、奉行に川越藩所有の米百五十俵を提供するよう求め、奉行はただちにそれに応じた。

宮一行の平潟上陸は、急速に付近の諸藩に伝えられ、平潟北方の泉藩からは引戸駕籠がさし廻された。

宮は、その駕籠に乗り、平潟を出立した。警護にあたったのは、随行の鈴木安芸守ら三人の家臣と、「長鯨」から平潟に上陸した彰義隊員、それに近くの藩の兵たちであった。八ツ（午後二時）すぎであった。

泉藩からは、特に御典医滝川済がさしむけられ、それらの者に守られて、海岸ぞいの道を北へむかった。その後から、米俵を背にくくりつけた馬の列がつづいてゆく。水が張られた田には、青々とした稲がひろがり、宮は扉をあけてそれをながめていた。

関田村を過ぎ、駕籠は、中田村の庄屋の家の前でとまり、しばらくその家で休息をとった。

警護の者をしたがえた宮の駕籠に、身分の高い人の通行と思った人々は、沿道に座って頭をさげた。宮に随行の家臣たちは、なおも警戒をおこたらず、休息をとった庄屋の家でも、宮を将軍の御典医であると言っていた。宮は医者と同じように剃髪していて、それを疑う者はいなかった。

八ツ半（午後三時）すぎ、同家をはなれ、さらに北への道をたどった。植田、新田をすぎ、釜戸川を渡り、泉藩領甘露寺村（玉露）に入り、慈眼院についた。そこには、泉藩主の命をうけた二人の家臣その他が待っていた。

奥羽諸藩は、江戸以西の諸藩が朝廷軍の支配下におかれたのとは対照的に、独自の動きをしめしていた。

朝廷軍の主目的は桑名藩とともに幕府軍の主戦力として朝廷軍と戦った会津藩に対する討伐で、左大臣九条道孝を奥羽鎮撫使として仙台に派遣していた。鎮撫使から会津を討伐するよう命をうけた仙台藩は、奥羽各藩と連絡をとり、東北の総意を代表する形で穏便な解決策を練った。

仙台藩では、米沢藩を介して会津藩に、

一、開城

二、削封

三、首謀者の首級提出

の三項目を降伏の条件としてしめし、これに対して会津藩は、「恭順謹慎、降伏謝罪ノ儀、只管」に願っている次第、と回答していた。

これにもとづいて、仙台、米沢両藩は、奥羽諸藩に書状を送り、重役を白石に派遣して欲しいと要請し、ぞくぞくと家老たちが白石に集まった。その席で会津藩が降伏を決定したことを告げ、代表として仙台、米沢両藩主が九条総督に会って、この降伏を嘆願し、会津藩の降伏嘆願書と奥羽列藩の家老連名の嘆願書を提出した。

九条総督は、内心これを受けいれる気持ちであったが、参謀の世良修蔵は断乎反対し、朝敵である会津藩をあくまでも討伐すべきである、と主張した。

日頃から傲慢粗暴な言動をする世良に強い怒りをいだいていた仙台、福島両藩士は、かれの泊まっている遊廓を襲い、これを斬殺した。その折に世良の携帯品の中から、奥羽諸藩はすべて敵であり、討伐しなければならぬという秘密文書が発見された。これによって朝廷軍に対する怒りが諸藩

の間にひろがり、閏四月二十三日、諸藩の家老たちが再び白石に会合、朝廷軍に抗戦することを目的とした奥羽二十五藩の同盟の成立をみたのだ。

さらに五月三日には家老たちが集合し、正式に同盟書を議決し、北越六藩もこれに加えて、奥羽越三十一藩の大規模な軍事同盟が成立した。宮一行は、同盟が結成された奥羽の地に入ったのである。

平潟に上陸後、近隣諸藩の扱いは好意にみちたもので、それはこれらの藩が、むろん同盟に加わっていたからで、宮一行もようやく奥羽諸藩の朝廷軍に反抗する動きを知った。泉藩は、もとより奥羽越列藩同盟に加入していて、上野の戦いにやぶれてのがれてきた輪王寺宮のお世話をさせるため、二人の家臣を慈眼院にさしむけていたのである。

時刻は七ツ半（午後五時）になっていて、宮一行は慈眼院に泊まることになった。

泉藩では、泉村の名主吉田順助に、

「今般、輪王寺宮様、甘露寺慈眼院御駐輦相成申候ニ付、右御旅館世話係申付候事」

という奉行所名の指令書を渡した。

吉田は、村人を督励し、寝具、食料の調達をおこなって慈眼院に運び込んだ。

翌日には、藩から引戸つきの立派な駕籠が慈眼院に持ち込まれ、そこには藩主の献上した座ぶとんが敷かれていた。

宮一行は朝食をすませ、四ツ（午前十時）に宮は駕籠に乗り、慈眼院をはなれた。

泉藩からは百人ほどの藩士が警護につき、さらに村はずれから湯長谷藩の藩士たちも加わり、駕

籠を守って湯本村に入った。途中、沿道には村人たちが土下座して頭をさげていた。
湯本村の旅籠兼酒造業の井桁屋の前で駕籠がおろされ、宮一行は奥座敷に入って昼食をとった。
江戸から随行の宮の家臣鈴木安芸守、関右京、安藤直記の三人は、潜行した折の商人髷、商人風の身なりをしていた。警護の藩士たちは三人を商人と思い込んでいたが、造りの立派な大小刀を帯びていることに不審そうな眼をむけていた。井桁屋の主人をはじめ家族たちも、三人の家臣に視線を走らせていた。
昼八ツ（午後二時）、多くの藩士の警護のもとに宮は井桁屋をはなれた。
駕籠は、尼子橋を渡り、胡摩沢をへて夕刻、磐城平に入った。
平藩の前藩主安藤信正は、万延元年（一八六〇）に老中となり、その年、大老井伊直弼が桜田門外で江戸城に登城途中、水戸脱藩士、薩摩藩士らにおそわれて暗殺された後、幕閣の中心となって政策を左右した。
信正は、朝廷と幕府の融合をはかろうとして皇女和宮の降嫁を強行し、それに憤激した浪士に坂下門外で襲われ、負傷した。その後、老中を罷免され、藩にもどって隠居、永蟄居の身になっていた。
信正は、鳥羽、伏見の戦い以後、あくまでも旧幕府に忠誠をちかい、奥羽越列藩同盟に参加していた。そのようなかれは、輪王寺宮が自分の藩の城下町に入ってきたことに感激していた。
信正は、輪王寺宮を迎えるため、町への入り口に家老と藩士らをおもむかせていた。駕籠は、家老らに迎えられ、藩士の家々のつらなる道を進み、飯野八幡宮の宮司飯野磯之進の屋敷の門前でとまった。飯野家は、代々宮司を兼ねた武将として広く知られ、徳川家の譜代大名につぐ格式を有していた。その自宅は館のつくりで、門も立派であった。
門前には、当主の飯野磯之進が出迎え、駕籠からおりた宮は、磯之進の案内で門をくぐった。
宮は、離れの別館にみちびかれ、奥の十畳間に入った。隣室は随行の家臣、僧の控所にあてられた。館は周囲に土塁がきずかれていて、平藩の藩士たちが厳重な警護にあたっていた。
宮がくるという通知を受けた飯野家では、風呂と厠を急造していて、宮は休息をとった後、入浴した。寛永寺をのがれ出てから、宮は初めてくつろいだ気分になった。
食膳が用意され、そこには酒も添えられていた。宮は、随行の邦仙、守慶の二僧と鈴木、関、安藤の三家臣と親しく言葉を交わしながら食事をとった。
三人の家臣たちの身なりに、話が及んだ。回漕問屋の松阪屋までくる途中、素性をかくすため髪を商人髷にし、衣服も商人風にして、そのまま「長鯨」に乗り、この地までやってきた。そのような身なりをしていながら立派な大小刀を腰におびているため、護衛の藩士たちから奇異の眼をむけられていた。
宮は、もはや人眼を恐れることはないのだから、武家姿にもどるべきだ、と言い、鈴木たちも、
「その通りでございます」
と、答えた。
鈴木が座敷を出てゆき、主の磯之進にその旨をつたえ、やがて衣類が運ばれ、髪結い職人も入っ

てきた。髪がほぐされ、月代が剃られて髷が結われ、宮は、鈴木ら三人の髪が武家らしくなってゆくのをながめていた。

宮は、邦仙と守慶を招き、

「私も還俗する。一介の人間として生きてゆく」

と、言った。

僧の身分を捨て俗人になるという宮の言葉に、邦仙と守慶は驚きの眼をみはった。

宮は、逃避行をつづけている間、還俗すべきだという考えが胸にきざし、それが次第に強くなり、平潟に上陸後はかたい信念となっていた。寛永寺山主として日々を送ってきたが、その生活は根底からくずされ、のがれのがれて奥羽の地に入った。僧として身を律してきたが、今後はどのようなことがあるかも知れず、それには制約のある僧の身分を捨て、一個の人間として機に応じて生きてゆく必要がある。

奥羽の諸藩は、朝廷軍に屈することなく徹底抗戦を決議し、奥羽越列藩同盟を結成している。その中に身を入れたかぎり、還俗するのが自然であった。

鈴木ら三人の家臣も驚いたようであったが、一介の人間として生きてゆくという宮の言葉に、宮の心がまえを感じたらしく、黙っていた。

蚊帳が吊られ、その中の見事な寝具に宮は身を横たえ、眼を閉じた。

六月一日早朝、主の磯之進が家臣の鈴木に、

「ただ今お城からお使いの方が参られ、これより対馬守（信正）様が宮様に御拝謁のためこちらに参上するとのことでございます」

と、告げた。

すでに床をはなれていた宮は、座敷に端座して待った。

六年前の文久二年（一八六二）の一月十五日に起こった坂下門外の変は、江戸市中に衝撃となって走り、宮もその報告を受けていた。老中であった信正が行列をととのえ登城する折、坂下門にさしかかると、六人の浪士が短銃の発砲を合図に襲いかかった。二年前に起こった桜田門外の変の前例もあって、信正の駕籠は五十人近い藩士によって警護されていて、たちまち浪士は一人残らず斬り倒された。

その折、信正は背部に刀傷を負っただけで難をのがれたが、それが原因で信正は老中職を追われ、藩にもどされて謹慎、永蟄居の身となっていた。

むろん面識はなかったが、その信正がくるという。

やがて襖がひらき、細面の信正が座敷に入ってきて、手をつき、この地においでいただき、光栄に存じます、と挨拶した。謹慎の身であるため、簡素な衣服を身につけていた。

信正は、それだけ言うと、すぐに退出した。後ろにひかえていた信正の家臣が、御機嫌伺いの品として菓子一折を献上し、鈴木たち家臣の控えている隣室にさがった。信正が、拝謁するとすぐに退出したのは、謹慎の身であるからだ、と宮は思った。

隣室では、宮の家臣の鈴木安芸守と信正の家来との間で話し合いがおこなわれていた。宮は出立するが、旅費が乏しく、その他刀剣、衣類を提供して欲しい、と鈴木は言った。藩の好意が十分に

感じられ、鈴木はためらうことなく申し出たのだ。

家来は、すでに退出した信正と家老にその旨を伝えると言って、そうそうに飯野の屋敷を出てゆき、しばらくするともどってきて、五百両と二百両の包み、それに刀剣と衣類を差し出した。五百両は信正より、二百両は家老より献上するとのことであった。

鈴木は、喜んでそれを受け取った。

その受け渡しを知った主の飯野磯之進も、百両を差し出し、旅費の補いにあてて欲しいと申し出た。鈴木は、礼を述べてそれも受け、代わりに平潟から馬で運んできた米を飯野に渡した。

飯野の屋敷に泊まったことで、今後の旅の不安は消えた。最も懸念していた旅費が得られ、鈴木ら三人の家臣の身なりもととのえることができ、泉、湯長谷、平の三藩の藩士の警護も約束されている。鈴木たち家臣の顔には、安堵の色がうかんでいた。

五ツ半（午前九時）、宮一行は飯野の屋敷を出立した。行き先は、会津であった。

宮の駕籠には、三藩の藩士百名ほどが警護にあたり、さらに藩主の命をうけた藩医松井玄卓がつき従った。玄卓は江戸で華岡流外科を修め、一年前に帰藩した二十六歳の医師であった。

一行は好間川にそって北西への道をたどった。空は晴れ、渓流の水は輝いていた。

合戸村をすぎ、渡戸村で昼食をとり、さらに上流への道を進んだ。山はけわしさを増し、宮は駕籠から降りて家臣たちと山道をたどり、息をはずませて長沢峠を越えた。

上三坂村をへて、あたりが薄暗くなった頃、田村郡新町についた。宮は、警護の藩士たちに慰労の酒をあたえた。

翌朝、その地を発し、けわしい山道を進み、上大越、船引をすぎ、夕方、三春の町に入った。そこは、三春藩の城下町で、藩主秋田万之助の後見人である伯父の主税が藩士とともに出迎え、宮一行を曹洞宗の龍穏院に案内した。その地で、これまで警護してきた泉藩の藩士たちが藩にもどっていった。

龍穏院は豪壮な建物で、宮一行はその寺を宿所とした。

翌六月三日、宮一行は三春藩士の警護を受けて三春を出立。山間部の道をたどって土棚で昼食をとり、阿武隈川を渡って、夕刻近く安達郡本宮に入った。その地には、奥羽越列藩同盟の盟主である仙台藩主伊達慶邦の家老が、兵一小隊をひきいて迎えに出ていた。それは、奥羽諸藩が、宮の来たのをこぞって喜んでいることをしめすものであった。

家老は、慶邦よりの献上品として白羽二重の夜着、抱巻各一枚と敷ぶとん二枚、それに枕、蚊帳を差し出し、宮の家臣はそれを受け取った。また、安達郡二本松の城主と信夫郡福島の城主のそれぞれの使者も寝所に訪れてきて、挨拶の言葉を述べた。

夜に入って、宿所に思いもかけぬ武家が訪れてきた。

宮は、上野東叡山寛永寺の山主であるとともに日光山の山主も兼ね、日光におもむいて逗留することもあった。日光には、宮を警護する家臣たちが詰めていたが、訪れてきたのはその一人である稲田寛之助であった。

奥羽に来て稲田に会うなどとは思わなかった宮は、驚いて稲田を身近に招いた。

「なに故に、この地に……」

宮は、呆気にとられて稲田の顔をみつめた。
平伏した稲田は、顔をあげておもむろにその理由を語った。
四月中旬、徳川家の旧家臣らがぞくぞくと宇都宮にのがれてきて歩兵頭の大鳥圭介を首領とし、朝廷軍に抵抗したが、やぶれて日光山にしりぞいた。朝廷軍は日光にむかって進撃し、日光山の僧侶たちは、山内の寺坊を戦火から守ろうとして使者を朝廷軍の本営に送り、攻撃しないよう要請した。
しかし、部将の谷干城は、
「敵兵のいる所は、少しの猶予もなく攻撃する。もしも、寺坊を護持したければ、敵兵を日光山から去らさせよ」
と、鋭い口調で言った。
使者は日光山にもどって、そのことを大鳥に伝えた。
大鳥はうなずき、深夜、兵をひきいて日光山から去った。
日光山の責任者である僧功徳院は、今後、朝廷軍に占拠されることは確実と判断し、東照宮の秘蔵している宝物を手にして日光山を脱出した。行く先は、幕府軍の主力として戦った会津で、稲田は功徳院を護衛して会津に来たという。
さらに稲田は、驚くべきことを口にし、宮をはじめ随行の家臣や僧は稲田の顔を見つめた。上野東叡山の寛永寺の執当職にあった覚王院が、会津に来ている、という。彰義隊が総くずれとなって宮が寛永寺から脱出した折に、覚王院はいつの間にか姿を消していた。

稲田ら日光東照宮詰めの家臣らに護られて会津に逃げのびてきていた功徳院も、覚王院が会津に来ていることに大いに驚き、覚王院と今後のことについて話し合った。功徳院は、すでに宮が江戸を脱出して平潟に上陸し、会津近くまで来ていることを会津藩士からきいていた。かれは、宮が会津に来た折には、東照宮の秘宝を護って宮に随行するつもりであった。
それを功徳院からきいた覚王院は、自分も同行したいと言っているという。
稲田は、
「なにとぞ会津へおいで下さい。功徳院様はそれを宮様にお頼みするようにと、私をこの地に差しむけたのです」
と、手をついて言った。
宮一行は、会津をへて仙台におもむく予定であった。仙台藩主は奥羽越列藩同盟の盟主であり、仙台に行って情勢を見てみたいと思っていたのである。
しかし、稲田の要請をきいた宮は、会津に行くことなく直接仙台へ行ってみようか、と思った。覚王院と顔を合わせる気にはなれず、寛永寺にいた頃、覚王院は、大総督府からの使者が来ても、自分に会わせることもなく、独断で拒否の回答をした。
「あたかも宮様の御意志であるかのごとく、御使者を追い返しました。私たちは、余りにも僭越だと怒りをおぼえております」
と、僧の一人が言っていたことも思い起こされた。たしかに覚王院は、なにごとも自分の考え通りに処理する傾きがあり、寛永寺の僧たちは、絶大な権力をもつ覚王院にさからう気配もみせず、

その指示通りに動いていた。宮は、そのような僧たちにもうとましさを感じていた。

覚王院は会津で待ち、功徳院とともに宮に随行したいと言っている、という。

宮は、覚王院に会いたくはなく、しばらくの間、思案した。大総督府からの江戸城への登城をうながす使者を独断で追い返したりしたことは許しがたいが、自分には登城する意志はなく拒否の回答をしたはずであった。有栖川宮をはじめ参謀たちの威丈高な態度は不快であり、それに屈する気はみじんもなかった。執当として身近に仕える覚王院は、そのような宮の気持ちを察して、自らを盾にして大総督府よりの強圧的な要求をことごとくはねつけていたとも言える。いたずらに覚王院を、責めるべきではない、とも思った。

宮は、稲田に眼をむけると、

「私たちは、会津をへて仙台におもむく予定である。功徳院にそのように伝えよ」

と、言った。覚王院の謁見と随行を許すとは、あえて言わなかった。

「その旨、功徳院様にお伝えいたします」

稲田は、拝礼して退いた。

翌朝、稲田は会津へ引き返すため宿所を出ていった。

宮は駕籠に乗り、仙台藩をはじめ諸藩の兵に警護されて本宮宿をはなれると、西への道をたどった。山肌をおおう緑は鮮やかで、休息のため駕籠からおりた宮は、周囲の景観をながめていた。

横川をすぎると、山道が険しくなり、宮は駕籠からおりて中山峠を越えた。前方に湖面が見えたが、それは猪苗代湖で、道は下りになり、やがて湖岸に出た。

宮を乗せた駕籠は、湖に沿った道を北に進み、夕刻に壺下の宿場に入っていった。

駕籠が宿所に近づくと、そこにはおびただしい武家がひしめくように集まっていて、姿勢を正して駕籠にむかって頭をさげる。駕籠はその中を通り、宿所の玄関についた。

駕籠からおりた宮は、それらの武家にいぶかしそうな眼をむけ、同じように呆気にとられた家臣と僧をしたがえて宿所に入った。

奥座敷に通された宮に、随行の僧邦仙が、

「あれらの武家は、何者でございましょう」

と、つぶやくように言い、守慶も、首をかしげた。

次の間に控えていた家臣の鈴木安芸守が邦仙に声をかけ、腰をあげた邦仙が隣室に出ていった。

宮は、隣室で邦仙が鈴木安芸守となにごとか話をしているのを、茶を口にふくみながらながめていた。鈴木は邦仙の顔に視線を据え、邦仙は驚いたようにしきりにうなずいている。なにか鈴木が予想もできぬ重大なことを邦仙に告げているようだった。

やがて鈴木との話が終わったらしく、邦仙が立つと、座敷に入ってきて宮の前に座り、頭をさげた。

「この家に二人のお大名が来ておられ、一人ずつぜひ宮様に御拝謁を、と願っておられる由です」

邦仙が、表情をこわばらせて言った。

「どなたか」

宮は、たずねた。

奥羽越列藩同盟が結成され、大名とは、それに参加している藩の藩主にちがいない、と思った。

邦仙は、再び頭をさげると、宮の顔を見つめ、

「備中松山の板倉伊賀守（勝静）様、肥前唐津の小笠原壱岐守（長行）様とのことでござります」

と、言った。

「なに？」

宮は、思わず短い声をあげた。

ききまちがえではないか、と自分の耳を疑った。いずれも旧幕府の老中職をつとめた大名で、その板倉勝静（伊賀守）と小笠原長行（壱岐守）が、なぜこの壺下宿に来ているのか。到底信じがたく、なにかのまちがいではないか、と思った。

宮は呆気にとられ、隣室にひかえている守慶に眼をむけた。守慶の顔にも驚きといぶかしそうな表情がうかび、宮の顔を無言で見つめている。

「伊賀守と壱岐守が来ているというが、何故だ」

宮は、隣室の鈴木に声をかけた。

鈴木は、手をつき、

「わかりませぬ。何故、この地に……」

と、首をかしげた。

宮は、ふと、宿所の前に多くの武家たちが集まっていたことを思い起こした。その姿に不審感をいだいたが、かれらは、板倉、小笠原の家臣たちで、警護のため随行してきていたのではないのか。

そのように考えれば納得できるが、それにしても板倉と小笠原がなぜこの地に来ているのか。到底理解できぬことであった。

「いかがいたしましょう」

鈴木が、宮の表情をうかがった。

会わぬいわれはなく、宮は、しばらく思案した後、

「会ってみよう」

と、答えた。

宮は、板倉勝静に会ったことはなかったが、その経歴その他についてはよく知っていた。幕府崩壊前、幕府内で最も際立った老中であったと言える。

備中松山藩主として儒者山田方谷を民間から抜擢して要路にすえ、文武ともにおこして名君として藩政を充実させた。その実績を買われて幕府の寺社奉行に就任し、ついで老中に進み、難問の多かった外交問題の処理にあたった。

宮が勝静の存在を強く意識したのは徳川慶喜との関係で、慶喜は勝静を最も信頼し、その意向にしたがう風があった。前将軍家茂の死後、勝静は慶喜こそ将軍職につくべき人物であると考え、その実現に尽力し、慶喜の幕政改革を補佐した。

ついで、慶応三年十月、慶喜が朝廷に大政奉還を申し出たが、その折にも若年寄永井尚志とともにそれを支持し、王政復古の大号令が発せられた後、勝静は、慶喜にしたがって京の二条城から大坂城に退いた。やがて鳥羽、伏見の戦いがはじまり、幕府軍が大敗して慶喜は、江戸へもどること

をひそかに決意した。その折も、勝静は慶喜の意をくんで画策し、慶喜とともに夜陰に乗じて大坂城を脱出して榎本艦隊の艦に乗り、江戸に帰ることができた。

そうした経過について、宮は、諸所方々からの情報を得ていた。

慶喜が、江戸城に入った後、寛永寺に謹慎して水戸に去り、幽閉状態にあったが、その間、勝静がどのように動いたのか、消息は全く絶たれている。

常に慶喜とともにあった勝静は、朝廷軍の大軍が江戸にむけて進撃し、江戸城を接収して以降、その存在は地中深く埋もれたかのように消えている。有能の名の高かった老中の勝静は、いったいどこに行ったのだろうか。

宮は、そのことをいぶかしく思い、時折、勝静の名を思い起こしていた。

勝静は、慶喜の第一の腹心で、慶喜を朝敵として切腹させずにはおかぬとしていた大総督府は、勝静も許しがたい存在としてきびしく処罰しようとしていることはあきらかだった。勝静が朝廷軍に捕らわれたという話はきいたことはなく、その名は完全に消えている。朝廷軍が江戸城を接収し、それを知った勝静は、死をまぬがれるため、いずこかに逃げのびているのではないだろうか。

その勝静が、この壺下の宿場にいるという。宮には、信じられぬことであった。老中という顕職にあった勝静が、会津のこの山間部にある宿場に来ている。江戸を脱出し、各地を転々としてこの地に来ているのか。

勝静は、自分に拝謁を望んでいるというが、宮は、息をのむような思いであった。

廊下に何人かの足音が近づき、隣室に家臣の鈴木安芸守が入ってきて座ると、

「板倉伊賀守（勝静）様が参りました」

と言って、頭をさげた。

その言葉が終わると、裃、袴をつけた男が家臣をしたがえて隣室に入り、腰を少しかがめて座敷に入ってきた。年齢は四十代半ばで、温厚な顔立ちをしている。

男は、宮の前に進み出て手をつくと、

「板倉伊賀守でございます」

と言って、頭を深くさげた。

この男が、慶喜と大坂から江戸にもどった伊賀守か、と思った。

顔をあげた勝静は、姿勢を正して、

「宮様が、江戸をのがれてこの地においで遊ばされるとおききし、僭越ながらぜひとも御拝謁いたしたく参上いたしました。私の望みをおききとどけいただき、御引見下さり、まことに光栄に存じます」

と言って、再び手をつき、頭をさげた。

勝静は、多くの苦難を背負い、幕府崩壊後は、さらに想像を絶した苛酷な日々を送ってきたはずであった。時には自刃したい思いもしたのだろうが、そのような表情はみられない。眼の光はおだやかで、藩主らしい風格にみちている。老中という職にあった人物にふさわしい人柄で、慶喜が最も信をおいていたことも十分にうかがえる。

宮は、隣室にひかえる随行の家臣たちの眼に、旧藩主勝静に対する畏敬の光がうかんでいるのを

見た。

勝静は、宮を直視し、

「宮様におかれましては、上様（慶喜）のさし迫ったお立場を御理解下され、ひとかたならぬ御尽力をたまわりました。幸いにも上様は、命を落とされることもなく、これ以上の喜びはございません。本日参上いたしましたのは、そのことを心から御礼申し上げたく……」

と言って、頭をさげた。

さらに勝静は、表情をひきしめて言葉をつづけた。

宮が駿府におもむいて東征大総督の有栖川宮に慶喜の謝罪嘆願をし、それがすげなく拒否されたこと。その後、江戸城に入った大総督府よりの度重なる要求をことごとく拒否し、徳川家に忠誠をちかう彰義隊に守られて上野東叡山に立てこもったこと。その遠因をたどれば、慶喜助命の嘆願に行きつく。

「彰義隊が戦いにやぶれ、宮様におかれましては、上野の山をのがれたまま行方知れずになられた由。それをおききし、おいたわしく恐れ多いことと思っておりました」

勝静は、視線を落とし、顔をあげると、

「宮様が、思いがけず平潟に御上陸なされ、会津にむかわれていることを耳にし、大いに驚きました。ここにお姿を拝見できることは、全く夢のようでございます」

と、感慨深げに言った。眼に光るものが湧いていた。

勝静は口をつぐみ、宮は、勝静の顔を無言で見つめていた。

しばらくして宮が、口を開いた。勝静が慶喜と大坂城から江戸にもどったことを口にし、

「それからいかがなされたか。なぜこのような地に来ているのか、私の方こそ驚いている。その次第をお話し下さい」

と、言った。

「恐れ入ります」

勝静は、表情をあらためて話しはじめた。

勝静は、慶喜とともに「開陽」で一月十一日品川に着き、翌日江戸城に入ると、二十九日には老中職を辞して退隠し、家督を世つぎの十二歳の勝全（かつなる）にゆずった。

二月に慶喜が朝廷に恭順謝罪のため上野寛永寺内の大慈院に謹慎してとじこもったことを知った勝静は、江戸藩邸の家臣八十名とともに日光の南照院に退き、謹慎した。

朝廷軍は、勝静の官位をすべて取り上げ、京都にあった藩邸も没収した。

板倉勝静、勝全父子は、家臣たちと日光南照院にとどまっていたが、四月十一日、江戸を手中におさめた朝廷軍は日光に兵を進め、父子は家臣とともに降伏した。父子は宇都宮城に護送されて城を確保していた彦根藩士に引き渡され、八十名の家臣中五十名が壬生（みぶ）藩預けとなった。

しかし、城は旧幕府軍の歩兵奉行であった大鳥圭介の軍勢によって攻撃を受け、十九日に落城した。そのため父子は、再び日光に戻った。

宇都宮城をめぐる攻防戦は再び激化し、大鳥軍は敗れて日光に退き、さらにその地をはなれた。

勝静父子は、日光山東照宮の留守をまもる功徳院が、戦火を避けるため東照宮の秘宝と神輿（しんよ）等を

守って会津にのがれるのに乗じて会津に入った。その折、子の勝全の姿を見失ったという。

勝静の居城がある備中松山藩は、朝敵として朝廷軍の攻撃対象とされていた。

鳥羽、伏見の戦いに圧勝した朝廷軍は、備前（岡山）藩に対し、「備中松山（藩主）板倉伊賀（守・勝静）儀、徳川慶喜反逆之妄挙ヲ助（ケ）候条、其（ノ）罪（天下に許しがたいので）、征伐」いたすように命じた。

これによって備中松山藩の重臣たちは、朝廷軍に恭順する旨をつたえ、藩は謹慎の姿勢をとった。その間、藩では、勝静父子が江戸を脱出して北にむかったことを知り、密偵を放って二人の行方を必死にさぐっていた。

密偵からの探索書がひそかに藩に送られてきていたが、藩では朝廷軍にさとられぬよう密偵に隠語をつかうよう指示し、藩領が煙草の産地であったので煙草の商業用語を隠語とし、煙草の銘柄の「玉椿」は勝静、「紅梅」は幼君勝全とした。

さらに「売切（れ）」は降伏、「獅子頭」は朝廷軍を意味し、その密書によって勝静父子の消息が藩につたえられた。

勝静のこれまでの経過を述べる話に、宮は、勝静が追われ追われて会津の地に来ている事情を知った。老中という華やかな地位についていた勝静だけに、その境遇が哀れであった。

しかし、宮は、自分も勝静と同じであるのを感じた。寛永寺の山主として多くの僧と家臣に仕えられて過ごしていた自分も、濁水の中を人眼を盗んでのがれ、奥羽の地まで逃げのびてきた。幸いにも奥羽諸藩の温かい庇護のもとにあるが、漂泊の身であることに変わりはない。

会津

「宮様の御無事であるお姿を拝見し、嬉しく存じます。今日は爽やかな日でございました。それでは、これにて退出させていただきます」

勝静は、手をついて頭をさげると隣室にさがり、廊下に出ていった。

家臣の鈴木が、隣室から宮にむかって、

「次に小笠原壱岐守長行様が御拝謁を願っております」

と、言った。

宮は、うなずいた。

宮にとって、長行がこの地に来ていることも信じがたいことであった。会ったことはなかったが、このような地でその姿を見るとは想像もつかなかった。

肥前唐津藩の世子として老中職につき、外国御用掛の任にあって外国との諸問題の交渉、解決に手腕を発揮し、幕府内で重きをなしていた。

宮がかれの名を特に記憶にとどめたのは、第二次長州征伐の折であった。

幕府は、叛逆の姿勢をとる長州藩に、第一次につぐ第二次長州征伐の軍を起こし、慶応二年（一

八六六）、幕府軍艦による周防国大島郡への砲撃によって戦端がひらかれた。戦いは一進一退を繰り返したが、長行は小倉城にあって幕府の九州諸藩の軍勢の総帥として指揮をとった。

しかし、長州藩勢は下関海峡を渡って小倉城を激しく攻め、九州諸藩軍は敗退して長行は長崎にのがれ、城は落城した。

長州征伐に力をつくした長行は、朝廷軍に敵視される存在で、その後、どのようになったのか、宮は知らなかった。

その長行が、自分に会おうとしている。

隣室に正装した男が姿を見せ、座敷に入ってくると、宮の前に座り、頭をさげた。長行で、勝静と同年輩の彫りの深い顔立ちをしていた。

長行は宮の質問に答え、会津にくるまでの経過を詳細に説明した。

鳥羽、伏見の戦いの後、老中職を辞して藩の嗣子であることもやめた。有栖川宮が東征大総督に任じられて朝廷軍が進撃して江戸に迫ったのを知った長行は、切腹か処刑かの罰を受けると考え、江戸からの脱出をはかった。三月三日であった。

その夜、正室の満寿と側室の美和にそれぞれ侍女二名をつけ、深川の高橋にある別邸の裏木戸からのがれさせた。彼女たちは、夜道を小梅村に急ぎ、中之郷の名主高橋文左衛門の離れ家に身をひそませた。

正室と側室をのがれさせた長行は、先祖の藩領であった墓所もある棚倉（福島県東白川郡）に身を避けようと思い、その夜、家臣十八名をしたがえて、別邸からはなれた。別邸のかたわらを流れる川にうかぶ舟に乗った一行は、三谷堀で舟を乗りかえ、千住大橋まで行って上陸した。

それより奥州街道を北に進み、粕壁、喜連川をへて白河に至り、三月十二日に棚倉についた。

そこにしばらくとどまった後、さらに会津をめざして四月七日、若松城下に入り、藩主の別荘である御薬園を宿所とした。その後、朝廷軍が江戸を支配下におき、将軍慶喜が水戸へ移ったことも知った。

長行の国元では、朝廷軍から、「壱岐守（長行）儀、旧幕府ニ於テ老中勤役中、去冬徳川慶喜大政返上以来、当三月後ノ挙動叛逆」があきらかであるので必ず探索し召し捕るようにという通達があった。長行は、それを知るすべもなかったが、当然そのような朝廷軍の命令が藩に下ることを、十分に予想していた。

その後、奥羽越列藩同盟の結成もあり、会津藩では老中という顕職の長行を板倉勝静らとともに優遇し、長行は会津藩から宮が壺下宿にくることをきき、待っていたのだという。

長行は、奥羽越列藩同盟の結束がかたいことを口にし、

「会津へ参られましたら、また伺候いたしたく存じます」

と言って、退出していった。

宮は、無言で座っていた。

二人の思いがけない人物に出会った驚きがまだ残っていて、宮は吐息をついた。慶喜が大坂城を脱出した時、会津藩主松平容保は勝静とともに、慶喜に随行して江戸にもどったときいており、容保は勝静に特別の親近感をいだき、語り合うことも多いにちがいない。

隣室に控えていた鈴木安芸守が、宮の前に膝を進め、
「お二人の思いもかけぬ方がこられ、まことに驚きました」
と、息をつくように言った。
宮はうなずき、
「この奥羽の地へ来ている者は多いのだな」
と、つぶやくように言った。
その日の夜、米沢藩主の用人が兵十五人をしたがえて到着、宮の警護を申し出た。
翌朝五ツ（八時）すぎ、宮一行は壺下宿を出立し、米沢、三春、平、湯長谷四藩の藩士たちが駕籠の前後をかためてついてくる。泉藩の藩医滝川済は、宮が泉藩領について以来、宮の体調をうかがいながら随行してきていた。
平潟上陸以来、天候にめぐまれ、その日も空は晴れていた。
湖面を左手に見て長瀬川を渡り、午近き頃、猪苗代についた。会津藩の支城である猪苗代の城下町で、城代家老が出迎え、城内に入った。
この地では、さらに仙台、二本松両藩の多くの藩士たちが迎えに出ていて、その数は千人を越えていた。町は、これら藩士の宿割り等で騒然としていた。
千人もの各藩の藩士がついてきているのを知った宮は、各藩の代表者を招き、自分はしばらくこの地にとどまるつもりであると述べ、護衛の必要はなく、それぞれの藩にもどるようにと告げた。
宮の言葉であるだけに、かれらは諒承し、一部の者を残して町をはなれていった。

会津から板倉勝静と小笠原長行が駕籠に乗ってやってきて、城内に入り、宮に伺候した。前日につぐ二度目の会見で、宮はくつろいで二人と言葉を交わし、上野の山をのがれてから出水地を逃げのびた折のことを話したりした。
会津藩主松平容保の使者が、威儀を正して城にやってきた。立派な大名用の網代の乗物（駕籠）が宮に献じられ、さらに白縮緬の夜具、蚊帳を差し出し、受領した。
この地にとどまるつもりと各藩の代表者に告げたのは、藩士たちを藩にもどさせたいという宮の配慮によるもので、翌朝、宮は網代の乗物に身を入れて猪苗代をはなれた。家臣、僧がそれにつづき、前後を多くの藩士たちがかためていた。
乗物は西へ進み、会津の城に近い蚕養町についた。藩主容保は、蚕養神社に急ごしらえの休憩所を用意していて、宮はそこで休息をとり、午食を口にした。
出迎えの者の中には、日光東照宮の責任者で神輿その他を守って会津にのがれてきていた僧の功徳院の姿もあった。宮は功徳院と短い言葉を交わし、再び乗物に乗り、若松に入った。米俵や武器をのせた大八車や駄馬が往き交い、戦さにそなえた藩の動きが感じられた。
多数の会津藩士に守られ、宮の乗物は城内に入った。
藩主容保が家老たちとともに出迎え、宮を奥の広間にみちびいた。板倉勝静、小笠原長行も正装して着座し、容保は会津に来て下さったことはまことに光栄である、と挨拶の言葉を述べた。
宮は別室に移り、僧の守慶、邦仙とともに休息をとり、茶を飲み、菓子を口にした。
部屋に、功徳院が入ってきて、平伏した。宮は功徳院がなにを言おうとしているのかを察し、表

情を曇らせた。寛永寺執当の覚王院のことについてであるにちがいなかった。

覚王院は、上野での戦争がはじまる前、江戸城に入った大総督府からの宮の江戸城登城要請、彰義隊解散命令等を宮に一言の相談もなくことごとく拒否した。それは朝廷軍に対する激しい憎悪によるもので、かれの少しも妥協を許さぬきびしい応対が、寛永寺そのものの姿勢とうけとめられていた。大総督府は、話し合いの余地が全くないと判断し、それが薩摩藩を主力とした軍勢の上野の山への総攻撃となり、寺坊は灰燼に帰し、多くの彰義隊員の遺体を散乱させる結果となった。

宮が攻撃軍のせまる中を寛永寺から退避した折、覚王院は宮の前から姿を消した。その後、覚王院は、上野の山からのがれて日光におもむき、御輿その他東照宮の秘宝をたずさえた功徳院とともに会津へのがれて来ているという。

功徳院は、覚王院の行為に許しを請い、宮に随行することを受けいれて欲しいと言うにちがいなかった。

「伏してお願い申し上げたきことがございます」

功徳院は、額を畳にすりつけ、深く頭をさげた。

宮は、庭に眼をむけて功徳院の訴えをきいていた。雨が樹葉を光らせている。久しぶりの雨で、庭に雨音が潮騒のようにひろがり、涼しい風が頬にふれてくる。

「平に平にお許しのほどを……」

読経と同じ渋い功徳院の声がきこえる。

宮は、寛永寺のお堂で蟬の声につつまれながら読経をしていたことを思い起こした。蟬が鳴きしきっていたが、それが静寂を一層深め、樹皮の匂い、敷かれたこまかい石の匂いも感じられるような思いであった。

「なにとぞ御引見をお許し下さい」

宮は、平伏している功徳院の言葉を無言できいていた。

功徳院の渋い声がつづく。覚王院は、寛永寺の執当職にあることにおごり、他の僧たちの言葉に全く耳をかそうとせず、不埒きわまりない。大総督府よりの使者の口上も、宮に取りつぐことなくきびしい態度で拒否したときいている。

「覚王院殿は、なにごとも自らの一存で、大事のことも思いのままに処理し、宮様の御意向をうかがうこともしなかった由で、まことに恐れ多いことと恐縮しております」

功徳院は、そこで息をつき、

「宮様がお怒りになられますのも、当然至極のことでございます。ただし、執当職の覚王院殿には、愚かしくはありますものの、すべてよかれと考えての上でございました。覚王院殿は、深く前非を悔いております故、なにとぞお許し下されまして、御引見下さりますようひとえにお願い奉ります」

と、頭を深くさげた。

宮は、庭の雨に眼をむけながら黙っていた。

功徳院は、覚王院のために許しを請うている。過ちは、人間であるかぎり、多かれ少なかれ必ずおかす。自分も仏に仕える身でありながら、それはまぬがれない。

いつまでも覚王院をとがめ立てる気持ちをもつべきではなく、功徳院の請いをいれてやるべきだと思った。

「よろしい。引見する」

宮は、さらりと言った。

「ありがとうございます」

功徳院は、畳に額を押しつけた。

かれは、しばらく平伏したままであったが、立つと腰をかがめてさがり、廊下に出ていった。

しばらくすると、功徳院につづいて覚王院が姿を見せ、座敷の端に座ると平伏した。色が青く見えるほど白かった覚王院の顔は、浅黒く日焼けし肌も荒れている。それは苦難の旅をつづけて江戸をはなれ、日光から会津まで逃げのびてきたからにちがいなかった。

「平に平にお許しのほどを……」

美しい声で読経をすると評判であった覚王院は、澄んだ声で言い、涙声であった。

宮は無言で覚王院の姿を見つめ、再び庭に眼をむけた。雨が勢いを増し、庭が白く煙っている。

これでよいのだ、と宮は胸の中でつぶやき、おだやかな眼で庭をながめていた。

覚王院は、その日から隣室にひかえるようになり、僧の邦仙と守慶は、覚王院を以前のように執当と仰いで仕えていた。

宮一行の所持している金が欠乏しているのを知った覚王院は、邦仙たちと鈴木安芸守ら三人の家臣とひそかに話し合った。藩の家老に申し出れば、多額の金を渡してくれることはまちがいないが、

覚王院にはそのような考えは全くなかった。たとえ旅先で窮乏しても、藩にたよることは、寛永寺の山主である宮の名をけがすことになる。

覚王院は守慶に、江戸におもむき、しかるべき家を訪れて金を集め、もどるよう命じた。寛永寺の僧であったことをしめすものをすべて捨てて行けば、旅をつづける貧しい僧として途中見とがめられることはないはずだった。

六月十一日朝、守慶は城を出ていった。

十四日は朝から雨であったが、宮が城中にいることを知った磐城(いわき)方面の百姓三人が、遠路はるばる城に訪れてきた。かれらは、金百両を宮に献上したいという。

応対に出た覚王院は、好意を謝した上で受け取らぬ旨を伝えた。

百姓たちは諦(あきら)め切れず、藩の家老にその旨を申し出た。家老はその熱意に負けて覚王院に会い、受納して欲しいと懇願した。

覚王院は、見知らぬ者から理由のない金品を受け取ることはできない、と固辞したが、家老は、

「私から献上申し上げるということにして、なにとぞお納め下さいますように」

と頼み、覚王院は、

「それでは、御家老からのものとしてお受けいたしましょう」

と言って、それを納めた。

覚王院は、皇族である宮の権威をそこなうことのないよう心掛けていたのである。

二日後の夕刻、宮のもとに思いがけぬ人物が姿をみせた。寛永寺づきの医師柴田元純であった。

柴田は、宮が上野の山から落ちのびた時、筆頭家臣麻生将監の家までつき従い、その場で別れた。柴田は、医師として宮の身を案じ、江戸での宮の潜伏先から潜伏先をたどって、「長鯨」で奥羽入りしたことを知り、会津にいることをたしかめてやって来たのだという。

随行の家臣と僧たちは喜び、宮は、

「よく来てくれた」

と、柴田の顔を見つめ、何度もうなずいた。

夏の陽光のもとを歩いてきた柴田の顔は赤黒く日やけし、髭がのびていた。

会津にとどまっている間、宮は、自分をめぐる諸藩の動きがにわかに一つの方向にむかって流れるようになっているのを感じていた。

奥羽越列藩同盟は、奥羽最大の仙台藩の藩主伊達慶邦を盟主としていたが、宮が奥羽に入って以来、明治天皇の叔父である宮を盟主に推戴しようとする声が起こり、それを具体化する討議がさかんになっていた。

宮は、六月十八日に米沢にむかうことになり、前日、藩主松平容保が別れの宴を開いてくれた。その席で、朝廷軍の動きが話題になった。

奥羽への重要関門である白河をめぐる攻防戦が同盟軍と朝廷軍の間で繰り返されていたが、兵力を増強した朝廷軍によって白河城は占拠された。また、前日の十六日五ツ半（午前九時）頃には、三隻の軍艦に分乗した薩摩、大村、佐土原三藩の兵が、常陸国平潟に上陸したことが急報された。会津藩としては当然予想していたことで、藩は、奥羽越列藩同盟軍とともに徹底抗戦するという。

容保をはじめ列席した藩の重役たちの眼には、鋭い決意の光がうかんでいた。

翌朝、宮は、随行の家臣、僧とともに身支度をととのえ、容保から贈られた乗物に乗った。容保をはじめ家老ら藩士多数が庭前の馬場に並んで見送り、宮の乗物は会津藩士数十名に警護されて城門を出た。

行列は北への道を進み、塩川で休息を兼ねて昼食をとった。緑のひろがる田畠では、農耕に従事する農民たちの姿が見えた。さらに北への道をたどり、熊倉（喜多方市）をへて大塩につき、その地に一泊した。

翌十九日朝、行列は大塩をはなれ、山道にかかった。道は険しさを増し、宮は乗物を降りて歩き、榧峠を越えて檜原にたどりついた。そこに多くの米沢藩士たちが警護のため迎えに出ていて、宮は会津藩士の指揮者を身近にまねき、感謝の言葉を述べて会津に帰させた。

宮は、米沢藩士に守られて山道を進み、夕七ツ（四時）、綱木（米沢市）についた。藩では宿所をととのえていて、宮は随行の者たちとそこに入った。

翌二十日五ツ（午前八時）、宮は綱木を出立、関村をへて徒歩で船坂峠をこえた。宮は再び乗物に身を入れ、米沢の城下町に入った。入り口の照陽寺には藩が仮設した休憩所があって、そこに米沢藩主の嫡子上杉茂憲が家老たちと出迎えた。

仙台

休憩所に入った宮は、上杉茂憲の挨拶を受け、休息をとった後、九ツ（正午）すぎに茂憲に導かれて米沢城に入った。

玄関脇の大広間には、数百人の藩士たちが集まっていて出迎え、平伏した。宮は、奥の広間に入り、あらためて茂憲や家老たちを謁見した。

米沢藩の宮に対する扱いは、会津藩と同じくいんぎんで、食事も心のこもったものが供されたが、宮はこれまでと同じように魚を調理したものには手をつけなかった。

次の日、仙台藩よりの使者が城内に入り、執当職の覚王院と家臣の鈴木安芸守に会い、明後日、仙台藩、会津藩、米沢藩それぞれ二名を代表とする正式の使者が、宮に言上するため城に参上することをつたえた。

二十三日、三藩の使者が城内の座敷に入り、覚王院と鈴木が応接した。使者は、奥羽越列藩同盟の会議が白石城内でおこなわれ、その席で決議された書面をお持ちした、と言って、

「この度、奥羽越列藩会議の結果、宮様にはただちに仙台へおいで下され、それより白石城に入り、そこを仮御殿としていただきたく存じます。列藩同盟といたしましては、宮様に総帥になっていただきたく、なにとぞ御容認下されますよう伏して御願い申し上げます」

と、言った。

差し出した決議書には、盟主となった宮の相談相手として徳山（板倉勝静（かつきよ）の偽名）、三好（小笠原長行（ながみち）の偽名）の両公を任ずる、と記されていた。これは、正式の宮への盟主就任要請で、覚王院と鈴木は緊張した表情で言葉を交わし、覚王院が宮におうかがいを立てることになった。

覚王院は、座敷を出ると、宮のもとに行き、決議書を差し出し、仙台から白石へ来て欲しいという使者の言葉をつたえた。

宮は決議書を読み、しばらく思案した後、

「仙台、白石におもむくことは結構である」

と言い、決議書に、

一、宮様、仮住居ハ白石城之筈（はず）

の点について、

「仙台、白石で宿泊するのは、いずれも寺院が好ましい」

と、答えた。

さらに奥羽越列藩同盟の盟主となることについては、

「私は僧侶の身で、その任にはない。このことは重大であり、とくと考えた上で返答したい」

と、述べた。

奥羽越諸藩は、進攻してくる朝廷軍に戦いをいどむ大義名分を見出（みいだ）しかねていた。それがなけれ

ば、諸藩の兵は戦意を失う。これに対して、朝廷の内部に深く食い込んだ薩摩、長州両藩の兵を主力にした朝廷軍は、明治天皇の勅令によって錦旗をさずけられて兵を進めている。その軍勢に抵抗すれば、朝敵の汚名をこうむることになる。

それはあくまでも避けねばならぬことであり、奥羽越諸藩は列藩同盟を結成しながらも、迫ってくる朝廷軍に徹底抗戦する意欲に欠けていた。

そのような折、上野の戦さからのがれてきた輪王寺宮が、思いがけず平潟に上陸してきた。宮は朝廷軍に敵意をいだき、奥州にやってきたことも知った。

宮の突然の出現に、諸藩は色めき立った。

宮は、明治天皇の叔父にあたり、上野東叡山寛永寺の山主であったが、薩長両藩兵を主力とした軍勢の攻撃を受け、上野の山からのがれた。この事実をみても、宮を死の危険におとし入れた薩長両藩こそ朝敵というべきで、奥羽越諸藩がこれに対して抗戦するのは、君側の奸を駆逐するという大義名分が立つ。

このような考えから、宮を盟主に仰ぐべきだという意見がたかまったのだ。

列藩同盟の盟主となって欲しいという決議書が宮に上呈され、とくと考えた上で、と宮は言ったが、それは事実上、内諾したものとされた。宮は、その決議書にしたがって、仙台をへて白石へおもむくと答え、その予定が組まれた。

翌二十四日は、夜明け前から風雨がはげしかった。

その日、またも思いがけぬ人物が米沢城にやってきて、宮の前に平伏した。寛永寺で筆頭家臣であった麻生将監であった。

僧も家臣たちも驚き、宮も呆気にとられて麻生を見つめた。

上野の山をのがれた宮は、中根岸の麻生の家に行き、そこで麻生をはじめ家臣たちと別れたが、麻生がなぜ宮の前に姿を現したのか信じられなかった。

筆頭家臣らしい身なりをし、威厳にみちた容姿をしていた麻生だが、髷も衣服も商人風で、顔は赤黒く、手も荒れている。麻生とは別人のようであった。

宮は、眼を輝かせて喜びながらも、麻生にどのようにして米沢にやってきたのかを問うた。僧も家臣たちも、麻生を見つめている。

麻生が、宮と別れた後のことを語った。

宮が僧たちとともに去った後、かれはあくまでも宮を警護しなければならぬと考え、落ちのびていったと思われる三河島村に行った。濁水が道や田畠をおおい、村の名主の家におもむいた。そこで宮一行が尾久村にむかったことを知り、濁水の中を腿までつかりながら、上尾久村の名主江川佐十郎のもとに行ったが、すでにいずれかに立ち退いたという。

かれは大小刀を捨て、商人に変装して宮が行ったと思われる地を探しまわったが、杳として行方が知れない。市中の噂では、水戸か上州、奥州へ落ちのびたという諸説が流れ、真偽いずれともわからない。かれは、家に帰るのは危険と考え、草の根をわけても宮を探し出そうと決意し、宮は北へ落ちていったと考えた。

六月三日、かれは脇差しに小包一つをたずさえ、板橋宿より北への道をたどった。

暑熱の中を熊ケ谷宿から太田宿へと歩き、途中、雨にあったりして山を越え、川を渡って急いだ。日光に至って東照宮の関係者に会ったが、宮の所在は知らず、恐らく奥州にのがれたのではないか、と言う。それを便りに、六月十四日、日光をはなれ、大雨の中を険阻な山路をのぼり、その夜は野宿し、焚火をして過ごした。

翌早朝、さらに山路を息をあえがせて進み、ようやく野門という村にたどりつき、農家に宿を請うて泊めてもらった。衣服は雨に濡れ、囲炉裏で乾かした。

翌十六日、同所を出立して日向村に至ると、そこには会津藩士数十人がいて旅人改めをしていた。麻生は、宮の家臣と名乗ったが、商人風の身なりをしているので信用されず、通ることを禁じられた。そのうちに、藩士が指揮者に問い合わせてくれて通行を許された。途中の検問はきびしく、ようやく十九日に会津城下へ入った。

早速、その筋に届け出ると、種々吟味の上、米沢へおもむくよう指示された。

かれは、山道をたどり、峠を越え、沢を渡って二十四日に米沢の城下に入った。かれは、町なかを歩きまわり、宮が城内におられることを知り、歓喜に身をふるわせた。早速、その筋にとどけ出て、登城の手続きをすませ、買い入れた刀を腰に登城したのだという。

麻生将監は、寛永寺で宮に仕える筆頭家臣であっただけに、思慮分別に長け、宮の信頼は篤かった。その麻生が、江戸からのがれ、はるばる自分を追ってきたことを知った宮は、喜びで胸が熱くなった。

「よく来てくれた」

宮は、声をうるませて言った。

「御無事のお姿を拝し、この上もない喜びでございます」

麻生は手をつき頭をさげ、涙を流し肩をふるわせた。

宮は、麻生を身辺におくことを力強く思った。

麻生は、僧たちのすすめで湯舟につかり、髭を結い改め、新しい衣服に着替えた。

宮は、奥羽越列藩同盟の盟主になって欲しいという諸藩の決議書を麻生にしめし、要請にしたがって白石におもむくことを告げた。麻生は賛同し、

「奥羽諸藩の喜びとなりましょう」

と、言った。

六月二十七日に仙台にむけて出発することになり、前日の午後、上杉茂憲が別れの宴をひらいてくれた。豪華な料理と酒がはこばれ、宮は僧と麻生ら家臣とともに宴にのぞみ、上杉の別れの言葉を受けた。宮は、上機嫌で、上杉に感謝の言葉を述べた。

翌朝六ツ（六時）、茂憲は家宝の杯に酒を注いで宮に献上し、朝食をすませた宮一行を城門にみちびいた。そこには家老をはじめ上席の藩士たちが立ち並び、宮に拝礼した。

宮は、乗物に身を入れ、米沢藩の重役にひきいられた多数の藩士が前後左右をかため、茂憲や家老たちに見送られて城門を出た。沿道には、町の者たちが土下座して頭をさげ、乗物はその中を進み、城下をはなれた。

乗物は糠野目をすぎ、高畠で昼食をとり、夕刻、七ケ宿（仙台）街道の宿場二井宿に至って、投

宿した。

翌朝六ツ（六時）すぎ、二井宿を発し、山道にかかって宮は乗物からおりて徒歩で一坂山峠を越え、湯原、滑津をへて八ツ半（午後三時）、関宿についた。途中、湯原に仙台藩士が兵をひきいて宮を迎え、警護して関宿に入った。

この日、宮は、行動を朝廷軍の密偵にさとられぬよう、僧と家臣の名を偽名に改めさせた。執当の覚王院を円覚院、家臣の鈴木安芸守を谷川清と改めさせるなど、宮は、絶えず周囲に警戒を怠らなかった。

翌日の早朝に関宿をはなれ、渡瀬、下戸沢をへて、夕七ツ（四時）に白石についた。城主片倉小十郎邦憲が城外まで迎えに出ていて、城内にみちびいた。

そこで一泊し、翌七月一日朝、仙台藩からの迎えの藩士たちの案内で、城を出ると奥州街道を北へむかった。街道は整備されていて、宮は乗物に身をゆだねて進んだ。

大河原をへて、夕刻、岩沼についた。大きな宿場で、宮一行は、本陣である南町検断屋敷に入った。その地には、仙台藩の家老が二小隊の兵をひきいて迎えに出ていた。

翌朝、岩沼を発し、仙台藩の藩士たちに守られ増田をへて中田に入ると、そこには仙台藩主伊達慶邦と養子の左京大夫宗敦が家老たちとともに出迎え、宮に挨拶した。宮の乗物は、城下町を進んで仙岳院の玄関につき、宮は奥座敷に入った。

仙岳院は、仙台に東照宮が創建された時、別当寺として建てられた天台宗の寺で、平泉の中尊寺をも管理するきわめて格式の高い寺として知られていた。宮は、上野寛永寺と同じ天台宗の仙岳院

を仙台での宿所として希望していたのである。

藩主慶邦と家老が宮のもとに来て、重大な発言をした。奥羽越列藩同盟としては、盟主としての宮のお言葉を待ち望んでいる。

奥羽に進撃してきている朝廷軍は、薩摩、長州両藩が幼い明治天皇の名をかりて兵をおこしたにすぎず、かれらが幕府を倒し、代わりに政権をにぎろうという野望にみちている。列藩同盟は、朝廷からこの両藩の勢力を追いはらうため、一致結束してこの両藩を主力とした軍勢と戦う意志をかためている。

思い起こされるのは源平の戦いで、後白河天皇の王子以仁王が平家追討の令旨を発し、それを得て源頼朝が伊豆国から兵をおこし、平家を追討して滅亡に追いこんだ。それと同じように、宮から薩長両藩を追討せよという令旨を頂戴できれば、奥羽諸藩はこぞって死力をつくして戦うという。

「なにとぞ御令旨をお下しなされますようお願い申し上げ奉ります。列藩同盟の一大急務にござります」

慶邦は、家老とともに頭をさげた。

宮は、答えることはしなかった。

「なにとぞよろしくお願い申し上げます」

慶邦は再び頭をさげ、退出していった。

仙岳院には、奥羽諸藩の代表者が集まり、令旨のことについて話し合っているようだった。

宮は、奥座敷にこもったまま考えをめぐらしていた。

平潟に上陸した朝廷軍については、仙台藩からその動きがつたえられていた。六月十六日に平潟に上陸した朝廷軍は、十九日夜、第二次の軍勢が上陸して兵力は千五百に達していた。その軍勢が進撃を開始し、磐城地方三藩の磐城平、泉、湯長谷藩との間に激烈な戦闘が起こり、形勢は一進一退の情勢にある。宮は、平潟に上陸後それぞれに世話になった藩だけに、気がかりでならなかった。

平潟には、つづいて第三、四、五、六次の兵が上陸し、兵力は一段と増強しているようだった。

七月八日、藩の唯一ともいうべき良港の牡鹿郡石巻から、藩を介して宮のもとに飛脚が到来した。その書状は、思いがけず自証院住職亮栄からのもので、東光院住職幸宥とともに江戸からの廻船に乗って石巻に上陸し、これから仙台におもむく予定だ、と記されていた。

宮をはじめ随行の僧や家臣たちは驚きの声をあげ、互いに顔を見合わせた。

上野の山を落ちのびた後、上尾久村で危険がせまったため、湯屋を営む塚谷佐兵衛の手引きで浅草の東光院に移り、そこに身をひそませた。さらにその地も危険になり、市ケ谷の自証院に行き、その後、鉄砲洲船松町から小舟を出して榎本武揚指揮の艦隊の「長鯨」に乗って江戸を脱出した。

東光院でも自証院でも、住職がそれぞれ宮一行の隠匿に心をくだき、無事に江戸からはなれられたのは両住職のおかげであった。その両住職が、なぜ石巻に上陸し、仙台にくるというのか。

二人はむろん住職として寺からはなれられぬ身であり、申し合わせたように同じ船に乗ってはるか遠い石巻まで来たのはなぜなのか。宮一行を追ってきたとは到底思えず、江戸にはおられぬなにかの理由があって奥羽にやってきたのではないのか。

「もしかすると」

邦仙が、つぶやいた。

守慶も鈴木安芸守ら家臣も、かすかにうなずき、宮は表情をかたくした。それは想像するだけでも恐ろしいことで、無言で互いに顔を見合わせている。

「もしかすると」

邦仙が、再び言った。

宮たちは、暗い表情をして邦仙の口にする言葉をきいていた。

宮の行方を探る朝廷軍の網は江戸一帯に張りめぐらされ、宮が浅草の東光院に、さらに市ケ谷の自証院にそれぞれかくまわれたことをつかんだのではあるまいか。捜索の兵たちは東光院と自証院を襲い、住職を鋭く追及した。むろん両住職は口を割らず、身の危険を感じて住職たちはしめし合わせてひそかに寺をぬけ出し、廻船の便を得て石巻まで逃げてきたのではないのか。

石巻は、仙台藩領に産する米を廻船で江戸に運び出す港で、江戸から雑貨類を積んで引き返すことを繰り返している。その戻り船の一艘に乗ってきたとも思える。宮は、あらためて自分に対する捜索が徹底したものであるのを感じた。

当然のことながら朝廷軍は、数多くの隠密を奥羽方面に放っていて、自分が平潟に上陸後、会津、米沢をへて仙台に来ていることもつかんでいるのだろう。宮は、邦仙の推測が的中しているにちがいない、と思った。

仙台藩主からはしきりに使者が来て、令旨を下して欲しいと強く要請していた。宮もこれを当然のことと考えるようになり、覚王院に令旨の文案をつくるよう命じた。

覚王院は、筆をとり、文章を練り直して文案を宮に差し出した。大筋では異存はなく、宮はさらに加筆、削除をして覚王院にもどし、覚王院は清書して宮に渡した。

冒頭に「嗟呼薩賊」として薩摩藩を激しく非難し、幼主（明治天皇）を巧みにあざむき、公卿たちをおどして幕府を威圧した。表面的には王政復古を唱えながら、私利私欲をほしいままにして民衆を痛めつけ、神社仏閣を破壊した。これはまことに許せぬ行為で、痛撃をあたえる覚悟である。勝利はもとよりわが方にあり、ここに輪王寺宮は令旨をさずけるものとする。

宮は署名、捺印し、その書面を手にして十日四ツ（午前十時）に覚王院をともなって乗物で仙岳院をはなれ、青葉城に入った。

藩主慶邦をはじめ家老たちが広間に列座し、宮は覚王院から令旨を慶邦に渡させた。

慶邦はそれを押しいただき、退いて別室で令旨を読み、その内容を喜んだ。それより小宴が開かれ、仙台地方で産する絹織物が宮に献上された。宮が仙岳院にもどった後、慶邦は宮のもとに使者を送り、あらためて謝意を表した。

宮一行が仙岳院に入ってから、家臣の鈴木安芸守が病臥するようになっていた。

江戸をはなれた頃から咳をすることが多く、顔色はすぐれず痩せるのが目立っていた。会津をたち米沢までの山道では息をあえがせ、おくれがちであった。食欲が失われていて、途中の宿所では粥をとり、梅干しを口にふくんでいた。時折腹痛を訴え、仙岳院にたどりつくと、そのままふとんに身を横たえた。宮は、鈴木を見舞い、十分に養生するようにと声をかけた。

医師の柴田元純が診療にあたっていたが、労咳（肺結核）ということで、煎じ薬をあたえ、時には鯉の生き血を飲ませたりしていた。鈴木は咽喉もおかされているらしく、しぼり出すような声もしわがれていた。

令旨を藩主慶邦に下賜した二日後の七月十二日、宮は白石城におもむくことになった。城には、奥州諸藩の代表者が集まり、その席で宮が令旨をあたえる。それは宮が奥羽越列藩同盟の盟主に就任することを意味していた。

病床にある鈴木を仙岳院に残し、宮一行は朝五ツ（八時）、仙岳院を出発した。仙台藩士多数が警護し、宮の乗物は、奥州街道を進んだ。沿道の村々では、宮が諸藩の総裁に就任したことが伝えられていて、村の代表者が正装して出迎え、人々は膝をついて頭をさげた。五軒茶屋、中田、増田をへて、夕七ツ（四時）に岩沼につき、城主古内左近介の出迎えを受けた。

翌十三日、朝六ツ半（七時）に岩沼をはなれ、白石川ぞいの道を進んで、船迫、大河原をすぎ、夕七ツ（四時）に白石につき、城内に入った。大広間には、奥羽越列藩同盟の各藩の重役が列座し、宮が座につくと、一斉に平伏した。

会議を主宰する仙台藩の筆頭家老が、宮より令旨を下賜されたことを告げ、それを読み上げ、宮にありがたくお受けする旨を言上し、再び列座する者たちは平伏した。

宮は大広間をはなれ、諸藩の重役たちは令旨を筆写し、それぞれの藩に急送し、藩領内に公布する手続きをとった。

城内には、喜びと安堵の声が満ち、令旨を得て薩摩、長州両藩の攻撃に大義名分をもって徹底抗戦することができる、という声が飛び交った。明治天皇の叔父である宮を盟主と仰ぐことによって、

奥羽に朝廷の政権が樹立されたという声もあった。

宮は、会津、米沢、仙台に居を移す間、それら三藩の盟主就任の強い要請を受け、僧の身としてその任につくことをためらい、象徴的存在としてそれを受け入れざるを得ない、と考えていた。しかし、日がたつにつれて宮の考え方はあらたまり、令旨をさずけ白石城にくるに及んで、名実ともに盟主につき、軍事を総轄する決意をいだくようになっていた。強大な武力を背景に朝廷をまるめこみ、江戸城も手中におさめた薩長両藩に対する激しい敵意をいだくようになっていた。

平潟に上陸した朝廷軍は、ぞくぞくと兵力を増強して泉藩、湯長谷藩の館を手中におさめ、磐城平(いわきたいら)城に総攻撃を仕掛けているという報告がもたらされていた。そのような情勢の中で、奥羽越列藩同盟はゆるぎない結束をかためて朝廷軍を迎えうたねばならず、そのためには組織を強固なものにする必要があり、盟主をすすんで引き受けることが急務であったのだ。

列藩同盟の会議は、にわかに生彩をおび、活発な討議がおこなわれるようになった。会議は各藩から二、三名の重役が派遣され、ことに仙台、米沢、会津の三藩からはそれに倍する重役がくわわり、評議した。その席に、宮の側近である覚王院たちの僧が、宮の代弁者として参加していた。

宮が白石城に入ってから三日後の夜おそく、市ケ谷自証院の住職亮栄が浅草東光院の住職幸宥とともに城内についた。二人は、石巻から仙台の仙岳院に行き、宮が白石城に行っていることを知り、町駕籠を乗りついで白石に来たのだという。

それを知った宮は、翌朝、僧の覚王院、邦仙とともに二人に会った。宮は、大いに喜び、自分をかくまってくれたことに感謝の言葉を述べ、なぜ奥羽に来たかをたずねた。

理由は、邦仙の推測通りであった。

江戸市中には、宮の人相書きが広く配布され、藩兵が家々にふみ込んで徹底した捜索をおこなった。市民からの情報収集もさかんで、人相書き通りの若い気品のある僧を路上で見かけたという話が多く、それをたどって東光院と自証院が捜索を受けた。寺の床下、天井裏までさぐられ、亮栄と幸宥は苛酷な取り調べを受けた。

このままでは命も危ないと考えた二人は、連絡し合って寺をひそかにぬけ出し、檀家(だんか)の回漕問屋に頼み込んで、石巻にもどる廻船にもぐりこみ、江戸をはなれたのだという。

「宮様が江戸をはなれられましてからの探索は、日増しにきびしく、大変でした。寺か神社にかくまわれているのではないか、と、軒並み踏みこまれまして、少しおくれていましたら、宮様もまちがいなく拘束されました」

亮栄は、眼に恐怖の色をうかべて言った。

「これからどうなされます?」

邦仙が、たずねた。

「お邪魔でなければ、宮様につき従って過ごしたいと存じます。なにとぞ願いをおいれ下さい」

亮栄が言い、幸宥も頭をさげた。

宮は、うなずいた。

列藩同盟には、戦況がぞくぞくとつたえられていた。

奥羽の関門白河では、朝廷軍が城を陥落させた後、会津、仙台両藩の同盟軍が、しばしば白河を

攻めて奪回を企てたが、武器の劣る同盟軍はその度に反撃され、白河城は、完全に朝廷軍の手に落ちた。

朝廷軍では、正親町公董（おおぎまちきんただ）を奥羽追討総督に任じ、会津攻めを企てていた。平潟に上陸した兵は泉、湯長谷についで磐城平、相馬（そうま）の各藩を攻略して仙台に入り、白河を制した兵は三春、二本松、福島の諸藩を圧伏して仙台に至り、両軍が合流して会津藩を攻める計画を立てていた。

まず、平潟に上陸した兵は、その後、増強に増強をかさね、泉、湯長谷藩を完全に制圧して磐城地方最大の藩である平藩の攻撃に着手していた。朝廷軍は、薩摩藩兵を主力に進撃したが、平藩では、相馬藩、米沢藩、仙台藩の藩兵の応援をうけて頑強な抵抗をつづけ、その進撃を許さなかった。

平城を落とすことが奥羽征討の第一の関門であるとさとった朝廷軍は、白河口の板垣退助らをまねいて作戦計画を練り、七月十三日に全軍をあげて平城の総攻撃にふみ切った。各隊の砲門が一斉にひらかれ、朝廷軍は銃撃しながら前進し、同盟軍は必死に応戦したが、次第に圧迫されていった。

兵器の差が、その攻防戦にあらわれていた。朝廷軍の銃砲は、外国から輸入した性能のすぐれたもので、これに対して同盟軍の火器は、従来の古い和式砲、火縄銃で、それによって応戦する。そのため同盟軍の陣地は各所で突破され、朝廷軍は急進し、陣地に突入した。

朝からはじまった総攻撃は、朝廷軍に優利に展開し、正午頃には城下町のはずれにきずかれた堡塁（ほうるい）をぬいて、城の外郭にせまった。

さらに朝廷軍をいちじるしく優位にさせたのは、雷鳴をともなう豪雨が降りそそいだことであった。同盟軍の火縄銃は、雨をうけて発火不能になり、城兵の火力はとみに衰えた。それを見た朝廷

軍は、銃撃しながら本城に肉薄したが、城兵は城をかたく守って必死に抵抗し、雷雨の中での激しい戦闘がつづいた。

城兵が一歩も退かぬことに苛立った朝廷軍は、巧みな戦法をとった。上野東叡山の彰義隊を包囲攻撃した時と同じように、一方に退路をあける戦法だった。死守する城兵に退却路をもうけることによって、城兵の戦意をうしなわせる効果がある。この戦法によって東、西、南の三方向から猛攻撃をくわえ、北の方面には兵を配置させなかった。

この戦法は、城内に一つの動きとなってあらわれた。

事実上の城主ともいうべき安藤信正は、家臣一同のすすめで藩士の守護のもとに北方向に脱出した。それにつづいて応援にきていた仙台藩兵も後を追い、城内に残ったのは平、相馬の両藩兵のみであった。

その間にも、朝廷軍は、外郭から本丸に突入し、繰り返し内門を突き破ろうとするが、城兵は頑強に防戦し、破れない。朝廷軍は、内門に集中砲火をあびせ、ついに扉が破壊されて開いたが、城兵はそれでも扉を閉じ、米俵を積みかさねて突入を防いだ。

本丸をめぐる攻防戦がつづき、やがて夜になった。

朝廷軍は、参謀たちの意見で夜間の戦闘は好ましくないとして、主力部隊に城外へ退くことを命じた。城内では、なおも応戦の意志をかためていたが、これ以上、長い期間にわたって籠城することは不可能という声がたかまった。食料と銃弾は十分にあったが、砲弾が欠乏していて、それに朝廷軍の兵力が格段にまさり、少数の兵で持ちこたえることはおぼつかなかった。

各隊の指揮者たちは協議した結果、退城することに決した。藩士の家族の老幼婦女子がまず避難し、傷ついた兵たちがそれにつづいた。城内にあった兵糧が馬に積まれて城外に出され、藩士たちは城に火を放って山道を落ちていった。

薩摩藩兵は、城から火の手があがるのを眼にして城内に突入し、これによって平城は陥落した。信正は、家臣に守られて相馬方向にのがれた。

平城が落城し、隠居の身であった前藩主安藤信正が城外にのがれたことは、白石城の奥羽越列藩同盟にもつたえられた。その報告をうけた宮は、磐城平で自分をいんぎんに迎え入れてくれた信正の端正な顔を思いうかべ、その無事を祈った。

平城の陥落で、戦線はさらに北上し、それにともなって平潟を上陸地としていた朝廷軍は、平潟北方三里（十二キロ）の小名浜を新たな上陸地とし、ぞくぞくと兵力を投入した。

目的は三春城攻略で、白河口から進んでくる主力と協力して本格的な攻撃態勢をととのえた。海路来援した総兵力は、一万余に達していた。これに対して、同盟軍の諸藩は、互いに連絡を密にして、寄せてくる朝廷軍を迎え撃つべく堡塁をきずき陣地を構築していた。

七月下旬は晴天の日がつづいていたが、二十六日夕、仙台方向から街道を二挺の駕籠が近づき、白石城に入った。仙岳院で病臥していた家臣の鈴木安芸守が、医師柴田元純に付き添われてやってきたのである。鈴木は、戦局が緊迫化する中で、病臥しているのに堪えきれず、仙岳院をはなれたのだという。

関右京にかかえられて座敷に入ってきた鈴木を眼にした宮は、思わず息をのんだ。

青白い顔はさらに肉が落ちて頬骨が突き出し、眼窩が深くくぼんでいる。座っているのもおぼつかないらしく、体がゆらいでいて今にも倒れそうであった。

鈴木はぎこちなく平伏し、顔をあげると、危急大事な折に病にとりつかれ、その不甲斐なさを恥じていると述べ、列藩同盟の会議に出て評議に加わりたい、と言った。その声は弱々しかったが、眼には家臣としての責務を果たさねばならぬという鋭い光がうかんでいた。

覚王院が、別室で休息をとるようにすすめたが、鈴木は動かず、宮が声をかけると、ようやく頭をさげ、再び関に体をかかえられて廊下に出ていった。

鈴木に付き添って別室に行った医師の柴田が、もどってくると宮の前に座った。

鈴木の病状は悪化していて、到底、白石行きは無理だと強く反対したが、何度説得してもきかなかった、と嘆息した。駕籠舁きにゆっくり進むように指示したが、道中、かなり体にこたえたはずで、今は、ふとんに身を横たえ、眼を閉じているという。

列藩同盟

平城を陥落させた朝廷軍は、さらに北にむかって進み、三春にせまっていた。

三春藩は、奥羽越列藩同盟に加わってはいたが、藩内に勤王派が多く、同盟の一藩として戦うか、それとも朝廷軍側につくか、藩論は二分し、大きく揺れていた。

朝廷軍の三春への総攻撃が開始される直前、藩では突然、降伏を決定し、七月二十六日、藩主の後見役が朝廷軍の陣営におもむいて降伏状を差し出した。それを受けた朝廷軍は、翌二十七日、三春城に無血入城した。

この報は、ただちに白石城内の奥羽越列藩同盟につたえられ、ある程度予想されていたことであったので衝撃は少なかった。

これに勢いを得た朝廷軍は、三春北方四里半（十八キロ）にある二本松城攻略をめざして兵を進めた。

阿武隈川ぞいにある本宮には二本松勢が陣をしき、進んできた朝廷軍と激しい銃撃戦を展開した。しかし、朝廷軍は兵力にまさり、火器もすぐれていたので、二本松勢は必死の抵抗をしながらも二本松城方向に後退した。

朝廷軍は二手にわかれて進み、これに対して木村銃太郎を隊長とする少年隊も加わった二本松勢が迎え撃ち、朝廷軍は苦戦を強いられながらも二本松勢を敗退させた。

二本松城が危機に瀕したため、藩主丹羽長国とその家族は米沢へ落ち、城内では最期の刻をむかえていた。重臣たちは攻撃を阻止するのは無理と判断し、大城代内藤四郎兵衛が城に火を放つことを命じた。

悲壮な空気が城内にみち、家老、郡代、城代の三人が、土蔵奉行の役宅に入って自刃、ついで勘定奉行が本城に登って割腹した。内藤四郎兵衛は、自刃も降伏と同じだと叫び、城外に出て朝廷軍の陣地に斬り込み、壮烈な死をとげた。

このようにして、二本松は落城した。

三春藩の降伏につぐ二本松城の落城の報がもたらされ、白石城の同盟諸藩の会議は緊張した。しかし、朝廷軍に対する戦意はおとろえることなく、それぞれの藩に援軍出動の連絡をさかんにおこなっていた。

輪王寺宮の家臣鈴木安芸守は、会議に出ることもできず病床にふしていた。その意をくんだ関右京と安藤直記が会議に出席し、また宮に代わって執当の覚王院と自証院住職亮栄がその席に加わり、宮の意志をつたえていた。

宮の頭髪は少しのび、宮はそれに櫛をあてていた。眼には、徹底抗戦する鋭い光がうかんでいた。

八月一日からは四日つづきの雨で、白石城は白く煙っていた。

列藩同盟の会議は、戦局の激化とともに一層活発化し、宮も積極的に戦闘の指示をおこなってい

た。仙台藩主伊達慶邦は、家臣をひきいて仙台から来て会議に参加し、また、会津、米沢両藩からも使者がしばしば宮のもとに来て、藩主よりの報告と進言を書面で提出していた。

八月七日、会議の席に相馬藩降伏の報が入った。

七月十三日、平城を攻略した朝廷軍は二手にわかれ、一手が相馬方面に進撃した。

相馬藩の軍勢は、朝廷軍を迎え撃って抵抗をつづけたが、三春藩の降伏につぐ二本松の落城に、相馬藩は大きく動揺した。小藩であるため兵力は乏しく、藩論はたちまち降伏と決定した。藩では、八月三日、朝廷軍に降伏謝罪の使者を送り、それが受け入れられて、七日に朝廷軍は相馬城に入城した。

列藩同盟は、それを予想していただけに、少しの動揺もみせなかった。朝廷軍が占拠した藩は、いずれも奥羽の入り口に位置している小藩で、前哨戦にすぎない。奥羽には、仙台藩をはじめ会津、米沢等の戦力の充実した大藩がひかえ、戦争はこれからだという戦意がみなぎっていた。

八月十日、磐城平藩の前藩主安藤信正が、家老をはじめ藩士たちと仙台にたどりつき、平藩の仮藩邸に入ったことが白石城につたえられた。平城が落城後、約一カ月、信正は逃れのがれてようやく仙台についたのである。

元老中首座として華やいだ位置にいた信正が、落人として仙台にたどりついたという報に、会議に列席していた者たちは感慨をおぼえ、深い沈黙がひろがった。

安藤信正の逃避行については、その後、随行の家臣から断片的につたえられた。

七月十三日、攻撃をつづけていた朝廷軍が雷雨の中を城中になだれこみ、藩では城に火を放ち、

信正は家臣とともにのがれた。信正一行は、仙台を目ざして北へ北へとむかい、途中、敗走してきた平藩兵と会い、かれらは敗戦の悲しみにひたって泣いた。家老も合流したが、朝廷軍は追撃してきていて、一行は、道を急いだ。連日の雨で道は泥濘と化していて、その中を泥まみれになって進んだ。

相馬藩の攻略をはかる朝廷軍と相馬軍との戦闘に巻きこまれ、平藩の藩士たちは相馬軍にくわわって戦った。信正は、その間を縫ってひたすら北へとむかった。

道は、膝まで没するような濁水におおわれていて、信正は家臣にまもられて息をあえがせて歩いてゆく。途中の宿場は、戦火がせまっているので混乱をきわめ、人々は荷を背負ったりしてあわただしく在方に避難する。宿場で食料の調達を予定していたが、どこにも見当たらず、空腹に堪えながらさらに道を進んだ。連日雨がつづき、かれらは濡れ鼠になっていた。

相馬藩兵が同行してきていたが、かれらの動きがおかしくなった。かれらは声を低めて話し合い、信正一行にけわしい眼をむける。そのうちに相馬藩が列藩同盟から脱け出るという噂が流れ、味方と思っていた相馬藩兵に警戒の念をいだいた。

八月一日も雨で、信正は蓑、笠をつけて藩士とともに歩きつづけたが、いつの間にか相馬藩兵は姿を消していた。食物の調達はできず、宿場に入っても旅籠は無人であった。やむを得ず、農家に行ってわずかな食物を分けてもらい、蓆をまとって仮眠した。

九日に一行はようやく岩沼に至り、竹駒稲荷神社内で草鞋をぬぐことができた。

信正以下一行の姿は無残であった。衣服も手足も泥にまみれ、袴は破れて足袋だけで歩いていた。

途中、入浴などできるはずもなかったので、体は垢にまみれていた。

翌朝、岩沼をはなれて仙台に入り、信正は平藩の仮藩邸についた。疲労は甚だしく、信正は入浴後、眠り込んだという。

その話を仙台藩方からきいた宮は、老中首座として幕閣の中心人物であった信正の身の上を思い、戦さにやぶれた者の悲哀を感じた。

板倉勝静は、小笠原長行とともに列藩同盟の内参謀となっていて、時折、宮のもとにきて戦争指導について協議し、また、各藩からは使者がひんぱんに白石城に来て、宮に藩状を報告した。諸藩の結束は、相変わらずかたいようであった。

雨の日がつづき、八月二十三日夜、六月十一日に会津から江戸に金策のため出発させた僧の守慶がもどってきた。

翌朝、守慶を引見した宮は、どのようにして江戸に入ったかをたずねた。

守慶は、会津を出立した後、生まれ故郷である下野国那須郡佐久山におもむき、そこでしばらく様子をうかがった後、江戸にむかった。旅をつづける貧しい僧という身なりであったので、途中、街道には朝廷軍の兵が北をさして移動していたが、見とがめられることもなく江戸に入った。

江戸は戦争による騒ぎも鎮まっていて、商人は店を開き、道に人々が往き交っていたが、町々を朝廷軍の兵が依然として威圧するようにのし歩いていたという。

慶喜について、守慶は、一つの情報をもたらした。上野東叡山の寛永寺大慈院から水戸に移って謹慎していた慶喜は、七月十九日に駿府に移動するため水戸をはなれ、船に乗って清水まで行き、

駿府に入った。また、徳川家御三卿の一つである田安家の亀之助に徳川家名の相続が許され、駿府に封じられるともいう。

宮は、その話に守慶の顔を無言で見つめていた。

慶喜は死をまぬがれ、徳川家の家名も存続されたという。自分が駿府におもむいた時、大総督府がそのような穏便な態度をとれば、上野の山の戦いもなく、奥羽一帯に戦乱がくりひろげられることもなかったろう。宮は、改めて大総督府に激しい憎しみと憤りをおぼえた。

守慶はさらに、市中の噂として江戸が東の都――京都になるという意味で、東京と改名されているらしい、と言った。

金策について守慶は、寛永寺の恩顧を受けている無作心院、仏頂院、泉龍院、恵恩院、福聚院、清水寺、是心院、春性院、灯明寺、保福寺等十九の寺院をひそかに訪れた。いずれの寺でも守慶の姿に驚き、無事であることを喜んだ。それらの寺も、宮が行方をくらまして以来、潜伏している確率がたかいとして荒々しい捜索の対象とされたという。

用件を守慶が口にすると、住職たちは早速、金をかき集めて渡してくれた。

総額は七百両余にも達し、清水寺戒善院では、水晶でつくられた数珠二連と絹の彩糸で模様を織り出した煙草入れを宮に献上していただきたい、とそれらを託した。

守慶は、宮に対する捜索がゆるんでいることをたしかめ、宮の叔母である豊君のもとにもおもむいた。豊君は、一橋家の徳川慶寿に嫁いで、夫の死後、剃髪して徳信院と号していた。

守慶の話をきいた徳信院は、奥に入って五百両の金を持ってきて渡してくれた。守慶は輪王寺宮

から徳信院宛ての手紙を持っていて、それを差し出した。徳信院は、感慨深げにそれを読んだが、後難を恐れたらしく、返事は書かず、歌一首をしたためて渡してくれたという。

守慶は、同席していた覚王院に集めてきた千二百両余を渡し、宮に数珠、煙草入れ、徳信院よりの和歌を献上した。

宮は、守慶の労をねぎらい、覚王院は喜びの色を顔にうかべていた。

仙台藩からは、藩士がしばしば連絡のために白石城に来ていたが、二十四日昼四ツ（午前十時）に榎本艦隊の「長鯨」が、松島湾に入ったことをつたえた。

榎本武揚は、朝廷軍よりの相つぐ艦船引き渡しの要求を拒絶し、八月十九日夜、軍艦四隻、輸送船四隻をひきいて品川沖をはなれ、北にむかった。武装輸送船「長鯨」はその先鋒で、他の艦船もぞくぞくと仙台藩領の港に入ってくる予定だという。

「長鯨」は、宮一行が江戸を脱出した時に乗った船で、宮はなつかしさを感じると同時に、有力な艦隊が入港してくることに力強さを感じた。各艦船には、彰義隊員をふくむ旧幕臣が多数乗り組んでいて、その数は二、三千名にも及ぶという。

会津方面の戦況が、緊迫化していた。

早くから藩論が勤王にまとまっていた新発田藩が七月二十五日、朝廷軍側の傘下に入り、同盟軍側の重要な補給港であった新潟港が攻略され、長岡城も陥落して越後は朝廷軍の支配下におかれた。さらに白河方面から二本松城をおとし入れた朝廷軍二千の軍勢は、それに勢いを得て会津を目ざして進撃し、八月二十二日には猪苗代城を攻め、これを攻略した。

猪苗代から会津若松までは、わずかに五里（二十キロ）で、鶴ケ城内は混乱をきわめ、城下に早鐘が打たれて家老以下があわただしく抗戦評議を繰り返していた。

その間にも朝廷軍は急速に進撃して会津城下に進入し、会津藩士はそれを迎え撃ち、すさまじい死闘がくりひろげられていた。

会津城下は火につつまれ、会津軍は決死隊を編成して突撃し、その勢いを恐れて朝廷軍の軍勢は後退した。恐るべき会津軍の抵抗に、朝廷軍は城を眼前にしながら進むことができなかった。

この会津藩の奮戦状況も、ぞくぞくと白石城に急報された。

また、仙台藩からは「長鯨」につづいて二日おくれた八月二十六日に、榎本艦隊の旗艦「開陽」が、松島湾の東名浜についたことがつたえられた。「開陽」の士官の言によると、品川沖を出航した折には艦船八隻であったが、大暴風雨に遭遇し、「美加保丸」が暗礁に乗り上げて沈没し、「咸臨丸」は離散して行方知れずとなった。両船とも帆船で、軍艦「開陽」と「回天」がそれぞれ曳航索でひいていたのだが、曳航索が切断されて難にあったのだ。

「開陽」も、暴風雨で舵を失いマストも折れ、後続の「回天」もマストを失っているという。

「開陽」は、東名浜で船体修理にあたっている由であった。

事態は複雑化し切迫してきたので、宮は仙台におもむいて総指揮をとる必要にせまられた。そのため、八月二十九日、宮が九月一日に仙台へ行くことが決定した。

その日の夜、病臥していた鈴木安芸守が大吐血をして、息絶えた。

家臣たちは肩をふるわせて泣き、宮は覚王院らと涙ぐみながら読経した。江戸をのがれ奥羽まで

来て絶命した鈴木が哀れで、宮はその死に顔を見つめていた。

九月一日、空は晴れ、朝五ツ（八時）に宮は乗物に乗って白石城をはなれた。執当の覚王院、僧邦仙、守慶、それに自証院の亮栄、東光院の幸宥、家臣の麻生将監、関右京、安藤直記が随行し、仙台藩の兵が警護にあたった。

大河原をへて岩沼の竹駒寺につくと、岩沼藩の城代、仙台藩の家老らが出迎えた。寺で一泊後、翌朝、岩沼をはなれ、八ツ（午後二時）すぎに仙台につき、再び仙岳院に入った。

仙台の町では所々に土塁がきずかれ、兵が隊列を組んであわただしく往き交っている。閉ざされた商店が多く、家財を大八車にのせたりして在方の方向に避難する者の姿がみられた。

仙台藩主伊達慶邦が仙岳院に来て、会津城下に朝廷軍がなだれ込み、会津藩は総力をあげて応戦していることを報告した。会津藩は、終始、旧幕府軍の主力として戦ってきただけに、戦力にすぐれ、藩士たちの戦意もすこぶる旺盛で、死力をつくして戦っているという。

「会津は戦っておりますが、戦さは概して思わしくありません。わが藩は会津、米沢両藩とともに薩長と戦い、必ず勝利をおさめます」

慶邦は、緊張した表情で言った。

元老中であり備中松山藩主であった板倉勝静が、宮が仙台にもどったことを知って訪れてきた。

板倉は、会津城下の戦況について語った。会津藩では、藩士にまじって少年、女子も武器を手に凄絶（せいぜつ）な戦いを繰りひろげ、至る所で大乱戦が繰り返され、会津軍は善戦している。城は堅固で、会津藩は籠城を覚悟し、少なくとも一カ月は持つが、その間に米沢、仙台両藩の軍勢が、会津救援のため攻勢に出るだろう、と言った。

伝えるところによると、朝廷軍の略奪、暴行は甚だしく、家財を分捕り、老幼男女を容赦なく殺害し、強姦を常のこととしている。

「地獄さながらの由でございます」

勝静は、悲痛な表情で言った。

かれは、松島湾に入った榎本艦隊の「開陽」のことに話をすすめ、仙台藩から馬を借りて塩釜（しおがま）まで行き、小舟に乗って「開陽」におもむき、榎本武揚に会ったという。

「和泉守（武揚）殿に会津藩の救援を切にお願いいたしました。しかし、期待に反してそれは引き受けかねると申された。和泉守殿は、ひとまずこの地に立ち寄っただけのことで、艦船を引き連れて蝦夷地（北海道）へむかわれるとのこと」

勝静は、思いがけなかったらしい表情で言った。

榎本艦隊が仙台藩領に来たことは、奥羽諸藩の同盟軍に朗報として伝えられていた。外国で建造された諸艦には、むろん西洋のすぐれた性能の大砲が搭載されていて、陸上の朝廷軍に大打撃をあたえることが期待された。しかし、榎本は、蝦夷へ艦船をひきいて行くことを目的としていて、仙台にはただ立ち寄ったにすぎない、という。

宮は、思いがけぬ勝静の言葉に呆気にとられ、勝静の説明をきいていた。

榎本は、幕府崩壊によって禄（ろく）を失った旧幕臣たちとともに蝦夷地におもむき、大々的な開拓に従事する。と同時に、ロシアは蝦夷地をかすめ取ろうとうかがっているので、それらの旧幕臣たちと

北辺の護りにつくという。
それを朝廷につたえようとして大総督府に要請状を重ねて出したが取りあげられず、そのため徳川家に忠誠をちかう者たちと品川沖を出航し、当地に来たのだという。
「そのようなことを申されたので、私は会津救援の懇請を断念し、仙台へ引き返して参りました」
勝静は言った。
かれが辞去した後、後続の榎本艦隊の軍艦「千代田形」と輸送船「神速」が東名浜に入港したという通報があった。それらは大暴風雨で船体に損傷をうけ、おくれて入ってきたのだという。
米沢方面からの戦況が、仙台にもつたえられていた。
米沢藩は、朝廷軍に攻略された長岡城をいったんは奪回したものの、朝廷軍の総攻撃をうけて再び城を奪われ、撤退した。
それがきっかけで敗色は濃厚となり、藩はひそかに降伏の道を探っているようであった。
その気配を察した仙台藩でも、大勢はすでに決したという意見が出はじめていて、藩士たちにも動揺の色がみられるようになっていた。
十三日に、思わぬ人の訪れがあった。元桑名藩主松平定敬であった。
鳥羽、伏見の戦いで桑名藩は、会津藩とともに先鋒となり、幕府軍の主力を構成していた。しかし、戦いにやぶれ、慶喜が大坂城をひそかに脱出した時、板倉勝静らとともに定敬は江戸に随行し、江戸城の西丸に入った。
宮は、定敬が江戸城にあっても強硬な主戦論を唱えていたことを知っていたが、それ以後の消息

はきいていない。
その定敬が、突然のように自分の眼の前に現れたことに宮は愕然とした。
宮は、定敬を年輩者と思っていただけにその若さに驚いた。宮より一歳上の二十三歳で、それだけに親しみを感じた。
「お会いできるとは露思いませんでした。大坂城を慶喜公と出られて江戸に入ったことはきいておりましたが、どのようにしてこの仙台へ……」
宮は、驚きをかくさずたずねた。
定敬が、おもむろに口を開いた。
桑名藩では、東海道を進んできた朝廷軍の大軍が桑名に攻め入ろうとしているのを知り、家督をゆずった十二歳の定教が家老一同とともに朝廷軍の本営に出向いて謝罪恭順を申し入れた。これによって城は明け渡され、定教は謹慎した。
これを知った定敬も、江戸深川の菩提寺に行って謹慎し、朝廷の裁きを待った。
しかし、和宮についで輪王寺宮が慶喜の謝罪恭順を嘆願したにもかかわらず、それがきき入れられぬことを知って江戸脱出を決意した。大総督府は、鳥羽、伏見の戦いで敵対行為をした旧幕府、諸藩の処分方針として、
第一等　徳川慶喜
第二等　松平容保（会津藩）、松平定敬（桑名藩）
と公表し、慶喜が恭順したことで、薩摩、長州両藩の敵意は、自分と容保に集中していることを

定敬は知った。大総督府は、慶喜を切腹させずにはおかぬ、と言い、定敬も同じような処置を強いられると考えた。

それによってかれは、江戸をはなれて横浜から外国船に乗り、津軽海峡をぬけて分領である越後の柏崎に至り、勝願寺に入った。

その後、定敬が越後にいるのを知った桑名藩士たちが、柏崎に来て定敬の警護にあたった。藩士たちの間には、徳川家再興のためあくまでも戦うべしと強く唱える者と、朝廷に反抗することは好ましくないとする恭順論者が鋭く対立し、恭順論者の吉村権左衛門は、主戦論者に暗殺された。

主戦論者の藩士たちは、柏崎方面に進撃してきた朝廷軍と戦い、いったんは勝利をおさめたもののすぐに反撃されて敗退した。定敬は戦争には関与せず、側近の藩士らと柏崎からのがれて会津藩領に身を避けた。会津藩領におもむいたのは、藩主の容保が実の兄であったからで、会津に行き城内に入り容保に会った。

会津藩の軍勢は朝廷軍の攻撃を受けて籠城態勢に入り、会津藩士のみで城に立てこもることに決していた。

そのため、容保のすすめで定敬は米沢にむかった。

定敬が米沢をたよったのは、藩主上杉斉憲と縁戚関係にあったからだが、藩領内に入るのを阻止された。米沢藩はすでに朝廷軍の軍門にくだることをひそかにきめていて、朝敵と目されている定敬が領内に入るのを拒否したのである。

やむなく定敬は、藩士らとともに仙台に来たのだという。

宮は、定敬の話をきいて、ここにも江戸から奥羽にのがれてきている人物がいるのを知った。

船で柏崎に上陸し、会津、米沢をへて仙台にたどりつく旅は、苦難にみちたものであったにちがいない。定敬は京都所司代として、京都守護職の兄容保とともに輝かしい役目に任じられていたが、今では流亡の身となっている。

老中職にあった元備中松山藩主板倉勝静と肥前唐津藩世子小笠原長行も同様であり、自分も江戸からのがれ奥羽の地にある。

「米沢藩の様子は、ほぼ降伏に傾いているように見受けられます。しかし、会津の兄容保は戦意すこぶる旺盛で、藩士一丸となって城を死守しようとかたく決意しております」

定敬は、けわしい表情で言った。

やがて定敬は、宮の前を退去していった。

宮は、身じろぎもせず座っていた。

自分を包み込んでいるものが、次々と音を立ててくずれてゆくのを感じていた。平潟に上陸して温かく迎え入れてくれた泉、湯長谷両藩は朝廷軍の軍門にくだり、平城も落城し、前藩主安藤信正は仙台にのがれてきている。二本松藩も朝廷軍に蹂躙され、米沢藩も降伏の気配が濃いという。

会津藩は、朝廷軍の猛攻をうけながらも城を守っているというが、仙台藩の軍勢は相馬藩領に接した駒ケ嶺の戦争で、大敗を喫したという情報がもたらされている。情勢は甚だ不利だが、大藩である仙台藩は、十分に兵力を温存し、会津藩も奮闘をつづけている。

仙岳院には、仙台藩の使者がしばしば来て、榎本艦隊の「開陽」につぐ大艦の「回天」（排水量

一、六七八トン）が、軍艦「蟠龍」とともに松島湾に入ったことを伝えた。これによって艦隊の六艦船すべてが、湾内の東名浜と寒風沢に集結した。それらの艦船は、損傷部分の修復につとめているという。

使者たちの表情は暗く、会津藩の抗戦がつづいていることを伝えるとともに、米沢藩が朝廷軍と接触して降伏について話し合っているらしいことも口にした。

宮は、仙台に来てから情報収集につとめ、五日前の九月八日には降伏の気配ありという米沢藩の動きをさぐるため、執当の覚王院を米沢にむけ出立させていた。また、宮の意をくんだ僧の邦仙、守慶、それに自証院住職亮栄、東光院の幸宥も、仙台藩の動きその他について精力的に情報を集めることに奔走していた。

かれらは、米沢藩がすでに降伏をきめたことを察知し、藩の使者がひそかに仙台藩に接触して降伏をすすめている模様との話もつかんでいた。

会津では依然として激戦がつづいているが、その戦闘に加わっていた旧幕臣たちが会津から仙台に脱出してきていることも知っていた。また、備中松山藩の前藩主である板倉勝静の世子である勝全が、父と離れればなれになって会津にいたが、そこからのがれて米沢をへて仙台にむかい、それを知った勝静とその家臣たちが喜んでいることも耳にしていた。

このような情勢の中で僧たちの間では、奥羽諸藩がことごとく敗れた折に宮をどのようにすべきかが、ひそかに話し合われていた。上野寛永寺と同じ天台宗の名刹である羽州（山形県）の立石寺にいったん移られ、それから日光におもむいていただくという案が有力であった。覚王院が米沢へ

行ったのは、立石寺に宮をおもむかせることを藩の幹部と内々に相談するためでもあった。

しかし、彰義隊の戦いに参画し、さらに奥羽にきて列藩同盟の盟主として戦争指導につとめている宮は、謀叛大逆の罪に相当し、死罪はまぬかれないという意見もあった。そのため、榎本艦隊の艦船を利用して仙台から脱出し、外国船に乗りかえて外国に行くという案も出た。

このことについてひそかに僧が使者に立って塩釜に行き、榎本武揚を訪れてその意向をさぐっていた。

重苦しい日々が、過ぎた。

仙台には会津からのがれてきた旧幕兵たちがぞくぞくと入りこんできていて、市内は騒然としていたが、兵の語るところによると会津での戦いは一進一退であるという。

戦闘は凄惨をきわめ、朝廷軍の藩兵は女を裸体にして強姦した上で斬り殺し、城下には庶民の死体が暑熱にさらされて腐臭を放っている。それらの死骸を両軍の兵は乗り越えて、突撃、後退を繰り返しているという。

空が青く澄む日がつづき、九月十七日も晴天であった。秋の気配が日増しにつのり、仙岳院の境内の樹木の葉も色づきはじめていた。

昼過ぎに仙台藩から使いの者が来て、藩主が宮にお会いしたいが御都合はいかが、と問うた。それを邦仙からきいた宮は、時が時だけに重要な話があると察し、諒承した。

やがて、藩主伊達慶邦が乗物に乗って仙岳院の玄関につき、宮の待つ座敷に家老後藤孫兵衛と熊谷内蔵とともに入ってきた。

手をついて頭をさげた慶邦の顔には、沈痛な表情がうかび、宮の顔を直視すると、
「米沢の上杉斉憲殿が降られました」
と、言った。
宮は、危惧していたことが事実になったのを知り、慶邦の顔を見つめた。
慶邦はわずかに視線を落とすと、戦い利あらずと判断した米沢藩は降伏を決断し、藩主の世子茂憲が家老とともに五十余人の兵をしたがえて米沢を出発し、九月十一日に新発田城におもむいて総督仁和寺宮嘉彰親王に謝罪、降伏状を提出した、と言った。
慶邦は、言葉をつづけた。
「会津の松平容保殿は、依然として戦っておりますものの、以前ほどの勢いはなく、それに列藩同盟の諸藩は、あくまでも戦おうという志は失われております」
慶邦は、そこで言葉をきり、しばらく沈思するように黙っていた。
やがて言葉をあらため、慶邦は、宮に視線を据えると、伊予宇和島の前藩主伊達宗城が朝廷軍との間の調停をはかり、穏便に列藩同盟の諸藩が朝廷軍の軍門にくだることができる道をひらいてくれた、と説明した。
「わが藩内には、徹底して戦うべしという意見と、大勢はすでにきまったとして恭順し、家名の存続をはかることが望ましいと唱える者もあり、これまで評議をかさねて参りました。その結果、わが藩は、ほぼ和親の道を進むことに決しました」
慶邦の眼には、光るものが湧いていた。

「このことを宮様に言上申し上げるために参上いたしました。まことに非力で申し訳なく存じます。平にお許し下さい」
慶邦は深く頭をさげ、家老と熊谷も平伏した。
慶邦は腰をあげ、家老とともに身をかがめて退出した。後に残ったのは、熊谷であった。
宮は、伊達慶邦の訪れに大きな衝撃を受け、言葉もなかった。仙台、会津両藩とともに奥羽諸藩の中の強力藩である米沢藩が、朝廷軍に降伏し、それにつづいて奥羽最大の藩である仙台藩も、ほぼ軍門にくだることに決したという。会津藩のみは死闘を継続しているが、押し寄せる朝廷軍の大軍に抵抗しつづけることができるはずもなく、圧伏されることはまちがいない。
仙台藩が降伏することは、列藩同盟が崩壊し、四散することを意味している。
宮の胸に苛立ちと憤りがひろがり、座にとどまる熊谷内蔵に言葉をかけた。
「仙台藩は、実収百万石以上の大藩であり、兵力も強大である。すぐれた人材が多いときいていたが、なに故にこのような結果になったのか」
宮の声は、かすかにふるえていた。
熊谷は、両手をつき、
「あらゆる情勢を勘案しまして、さまざまな意見が出た上で、やむを得まいということでこのような次第となったのでございます」
と、途切れがちの声で答えた。額と首筋には、冷や汗がふき出ていた。
宮は、口をつぐんだ。すでに藩の姿勢は決定し、今さらなにを言っても無駄であった。

「さがってよい」
宮は、辛うじて言った。
熊谷は隣室にさがり、隣室にひかえていた僧や家臣たちに仙台藩が事実上降伏の手続きに入ったことを告げ、仙岳院を辞していった。
寺内には言葉を発する者もなく、深い静寂がひろがっていた。
宮は、その夜、眼が冴えて眠りにつけなかった。列藩同盟ははかなく崩壊し、奥羽全域は朝廷軍の支配下におかれる。江戸をのがれて奥羽の土をふんだ自分は、抗戦を意図して結集した諸藩の期待のもとに、はからずも盟主の任についた。それは自然の成り行きであり、自らも一個の人間として朝廷軍に対抗しようと決意し、積極的に軍事指導に力をつくしてきた。その行為はあきらかに朝廷に対する敵意をむき出しにしたものとされ、恭順すれば厳罰に処せられることはまちがいない。
寛永寺の山主であった自分が、糾弾される身になったことが信じられぬ思いであった。
鶏鳴がしきりに起きる頃になっても、眠りは訪れなかった。

帰順

翌朝、宮は、僧と家臣たちを集め、奥羽諸藩がすべて帰順することについて、どのように対処すべきかをはかった。かれらも、夜、一睡もできなかったらしく眼は充血していた。
米沢藩についで仙台藩が降伏に決したことで大勢はすでに確定し、これ以上抵抗の姿勢をとることは愚かしく、宮の身をお守りすることにこそ力をつくすべきだ、とかれらは口をそろえて言った。
宮は、かれらの交わす言葉を悲痛な思いできいていた。奥羽にのがれ、その地も戦乱の地となって、宮は死を覚悟するようにもなっていた。しかし、僧や家臣は、この期に及んでもさらに自分の身を守ろうとしてくれている。かれらの忠誠心を感じはしたが、このような境遇になったことに物悲しい気持ちでもあった。
かれらの意見は、すぐに一つの方向に流れはじめた。奥羽各藩が帰順を決定しているかぎり、宮もそれにならう以外になく、奥羽越列藩同盟が解体同然になっているので、それに対する義理はない。具体的な方法としては、宮から朝廷軍の総督府に謝罪、帰順の書面を提出する。
かれらは意見を述べ合った後、深い静寂がひろがった。かれらは宙に眼をむけ、視線を落とし、吐息をついていた。

端座した宮は、眼を正面にむけたままであった。上野の山をのがれ、水につかりながら歩きつづけたことがよみがえる。変装し、小舟に乗って、「長鯨」の船上に移り、奥羽へ来た。朝廷軍に徹底抗戦を唱える諸藩の同盟の盟主に推されはしたが、藩はつぎつぎに降伏し、僧と家臣は、自分に帰順をすすめている。

宮は、巨岩や巨木を押し流す激流の中に身を置いているのを感じていた。それは重々しく時間の流れとともに流れていたが、鳥羽、伏見の戦いを契機に、それは堰を切ったように奔流し、多くのものをのみこんで轟音をあげて流れつづけている。それを押しとどめようとするものがあっても、それらはことごとくはね飛ばされ、流れはさらに加速して飛沫をあげながら流れ下ってゆく。列藩同盟の抵抗もあえなく打ちくだかれ、時代の大きな流れの前で、人間は無に等しい。

長い間、口をつぐんでいた宮は、家臣や僧を見まわし、

「帰順する」

と、鋭い声で言った。

その声に家臣は手をつき、僧たちはふるえる手で合掌した。かれらの間から激しい泣き声が起こっていた。

控えの間にさがった僧や家臣たちが、静かな声で言葉を交わし、宮は、無言でそれをきいていた。

帰順書の提出先は、相馬藩境の亘理にきている奥羽征討総督四条隆謌とする。仙台藩でも四条に降伏状を差し出す予定だときいている。

帰順書を四条のもとにとどけるのは、だれにすべきか。宮の帰順によって、僧も家臣も必然的に

謹慎の身となり、適当ではない。

かれらは話し合った末、仙岳院の住職に依頼することになった。

邦仙が座敷を出てゆき、しばらくすると住職を伴ってもどってきた。住職は、邦仙から宮が帰順するときいたらしく、顔は青ざめ、宮の前に行くと、黙ったまま拝礼した。

住職は、控えの間にさがって僧や家臣の間に座り、打ち合わせに加わった。帰順書の内容をどのようにすべきか、かれらは話し合った。宮の帰順書なので、宮がその内容について口述し、住職が書きとめる。

早速、筆と硯が用意され、住職が宮の前に紙をのせた机を置き、筆をとった。

宮が、おもむろに口を開いた。

去る五月十五日、上野東叡山に屯集していた彰義隊と朝廷軍との間に戦争が起こった。私の住む寛永寺の近くに砲声がとどろき、たちまち火災が発生して本堂に至るまで炎につつまれたので、麻衣を身につけて山内からのがれた。従僧たちにともなわれて冠水した田畠の間を歩き、市ケ谷自証院におもむき潜伏した。自分としては東征大総督有栖川宮熾仁親王に訴え出るつもりであったが、市中に流れているさまざまな風説をきき、朝廷軍の探索を恐れ、江戸をぬけ出してひとまず奥羽の地にのがれた。

奥羽諸藩は、私を礼をもって迎え、今も仙台藩の庇護のもとに当仙岳院に逗留している。かえりみると、これまで数カ月の間、京におもむき天皇の御意向をうかがうこともせず、なんの思慮もなくこの地にとどまっていたのは、まことに大失態であり、後悔している。ここに私は、朝廷に対し

深く懺悔し、謹慎して御沙汰の下るのを待つつもりである。
右の次第であるので、なにとぞ仁慈ある御処分をお願いしたい。このことを朝廷に御奏上なされますよう、切にお願いいたす。
宮は、それで言葉をきり、住職は下書きしたものを宮に見ていただき、清書した。
宮は、それをあらためて黙読し、慶応四辰年九月として署名した。
仙岳院の住職は、宮の前から僧、家臣らがいる控えの間にさがって、その帰順書を低い声で読んだ。かれらは頭を垂れたり眼を閉じたりして、聴き入っている。すすり泣く声が起こり、住職が読み終えてもそのまま座りつづけていた。
その日、仙台藩の家老が、藩に連絡に来ていた米沢藩の用人とともに仙岳院にやってきた。用人は平伏し、
「まことに力足らず」
と悲痛な声で米沢藩が降伏したことを宮に報告した。
宮は、
「諸般の事情を勘案し、大勢は決したと考え、私も帰順に決した」
と、言った。
家老と用人は平伏し、しばらくの間、顔もあげなかったが、その言葉に安堵したようであった。
次の日は仙台藩との打ち合わせがおこなわれ、翌二十日、帰順書をたずさえた仙岳院の住職が正使として相馬藩境の亘理にきている征討総督府にむかうことになり、仙台藩では目付の藩士を付添

人として同行させることを申し出た。
その日の朝、正装した住職は、宮に出立の挨拶をし、駕籠に乗って仙岳院をはなれていった。
夕刻、米沢につかわしていた執当の覚王院が仙岳院にもどってきた。
米沢藩が降伏の手続きをすべて終えたことを見とどけてきた覚王院は、宮が帰順を決意し、その請願書を総督に提出するため仙岳院の住職を出発させたことに、驚きというより当然のことと受けとめているようだった。
覚王院の帰着を知った宮は、自証院亮栄を招いて話し合った。
覚王院は、江戸城に入った大総督府からの登城命令、彰義隊解散の指令もことごとく拒否したが、大総督府は、当然、覚王院を朝廷に激しく反抗した人物として、厳罰の対象と考えているはずであった。朝廷に帰順を申し出た宮としては、覚王院をそのままにしておくわけにはいかなかった。帰順のあかしとして、覚王院を宮が自ら処罰するのが当然であった。
宮は、亮栄の意見もただし、まず覚王院の執当職をとりあげ、さらに謹慎させることをきめ、覚王院を呼び出して、その旨を告げた。これによって、覚王院は謹慎することになり、同時に亮栄が執当職に任じられた。
覚王院は、仙岳院の末寺に送られ、一室にとじこもって謹慎した。
末寺に送っていった僧の守慶に、覚王院は、
「宮をこのようなお立場にさせたのは、ひとえに私が大総督府よりの使者をことごとく拒否したことにある。宮が帰順書に自ら署名なされたというが、まことに申し訳なく、地に伏してお詫び申し

上げたい」

と、眼に涙をうかべて言った。

そのことが、守慶から宮随行の僧や家臣たちに伝えられた。

宮には、気にかかることがあった。備中松山藩、唐津藩、桑名藩の板倉勝静、小笠原長行、松平定敬のことであった。

かれらは、いずれも朝敵と目され、藩を捨て奥羽の地へ側近の家臣とともにのがれてきている。会津藩をのぞくほとんどの奥羽諸藩は降伏しているが、それらの藩の藩主は現在のところ死を強いられるような処置はとられていない。もしも、総督府が死罪、切腹という処置に出れば、各藩の藩士たちは激昂し、再び戦乱が起こる。総督府としては、当然、そのようなことを避けようとし、藩主たちに苛酷な処分はおこなわないだろう。

宮は、自ら帰順を決定した上は、板倉勝静ら三人にも同様に帰順させるべきだ、と思った。

かれらは、どこにいるのか。宮は、執当の亮栄にその所在を探ることを命じた。

亮栄は、僧と家臣たちを仙台市内に散らせてその行方を調べさせ、三人がそろって仙台東北方四里（十六キロ）の海岸にある塩釜の柏屋という旅宿にいることをつかんだ。

二十一日、宮は邦仙を使者に立て、柏屋に派遣した。

邦仙は三人に会って、宮が帰順し、同様に三人にも帰順を強くすすめていることを伝えた。三人は、宮が帰順したことに驚きながらも即答を避け、とくと協議した上で、と答えた。

その折、邦仙は、板倉勝静の家臣から世子勝全のことをきいた。一時は別れ別れになっていた勝

全は、脇街道を通って塩釜に入り、勝静と合流した。勝静は、勝全の身を案じて外国船の船長に横浜まで送ってもらうよう頼み、船長は引き受けて乗船させた。勝静は勝全に、江戸へ出て情勢を見た上で自首して出るように、と指示したという。

邦仙は、仙岳院にもどり、宮にそれを報告した。

旗艦「開陽」から上陸した榎本武揚が仙台に入り、登城して藩の重役をはじめ藩士たちと接触していた。榎本は、米沢藩についで仙台藩が降伏したことを憤り、旧幕府が藩に貸与していた輸送船「大江丸」と「鳳凰丸」を返還させ、蝦夷地へ出発することをきめた。

かれは、宮が仙岳院にいることを知り、従卒を連れて宮のもとを訪れてきた。

榎本は、宮に挨拶した後、落ち着いた表情で口を開き、

「宮様の御側近の方が、松島にいる私のもとを訪れてこられ、一つのお申し出をなされました。そのことについて、私の考えを述べさせていただきたく参上いたしました」

宮は、僧や家臣たちが、自分の今後のことについてひそかに榎本と話し合ったことを、執当の亮栄から耳にしていた。その中には、宮を榎本艦隊の艦船に乗せて奥羽をはなれ、外国船に頼んで外国にのがれさせようという案があることを知っていた。上野の山の戦いについで奥羽でも終始朝廷に反抗の姿勢をとりつづけてきた宮は、死罪に処せられることはなくても、切腹を命じられる恐れはあり、それならば、いっそ外国へ身を避けた方がいいと考えたようであった。

榎本が申し上げたきことがある、というのは、そのことにちがいなかった。

「奥羽諸藩がやぶれた折、宮様に難がふりかからぬよう海外に身をお避けいただきたく、力を貸し

て欲しいとのことでした。私は、これより蝦夷地へ参るつもりですが、箱館には外国船が多く出入りしており、宮様に乗船いただくことは容易です」

榎本は、宮に視線を据え、

「しかし、宮様がそのようなことをなされては、わが国の恥辱です。恐れながら、皇族の御身として御生死は、この国で決すべきと存じます。私が申し上げたいのは、すみやかに南にお帰りなされることです」

と、強い口調で言った。

宮は、体の中を涼風が吹きぬけるような思いであった。海軍副総裁として艦船を引き渡すようにという朝廷軍の強請をはねつけ、艦船をひきいて蝦夷地にむかおうとしている榎本は、尋常な男ではない。御生死はこの国で……という榎本の言葉に、宮の体は激しい衝撃を受けたようにふるえた。

すみやかに南にお帰りなされること、とは、朝廷軍が支配する南方の地にもどることを意味する。もどるとしても、宮につき従うのはわずかな僧と家臣のみで、そのような無防備の宮が、奥羽をはなれ東京にむかう。これまでは、奥羽各藩の藩士多数に警護されていたが、裸同然の姿で南への道をたどる。

上野の山をのがれた折には、宮は寛永寺山主として追われる身となったが、現在は朝廷軍に徹底抗戦を唱えていた奥羽越列藩同盟の盟主としてきびしく追及される立場にある。榎本のすすめ通りに南に帰るとしたら、どうなるか。むろん、それより以前に近くにせまる朝廷軍に帰順書を提出し、軍門にくだる意思表示をしなければならない。

これについて、朝廷軍は、どのような態度に出るか。皇族とは言え、錦の御旗をかかげた朝廷軍に反抗した宮は、まさしく朝敵であり、皇族であるからこそ、その罪は果てしなく重い。皇族でありながら朝廷に反逆するという、前代未聞の大罪をおかした宮は、八ツ裂きの刑に処せられても不思議はない。

宮は、あらためてかぎりない罪の深さを思った。帰順して朝廷軍の軍門にくだれば、そこに待っているのは苛酷な処罰だ。それをのがれるために、海外に身を避けるのも一方法だろう。しかし、宮は、胸の中で激しく首をふっていた。榎本は、それはわが国の恥辱であり、生死はこの国で決すべきだという。

宮は、その言葉に全面的に賛成だった。朝敵となったのは、やむを得ぬ自然の成り行きで、たとえ死を強いられることになっても、それは自分に課せられた宿命にほかならない。この国で生きてきた自分は、この国で死ぬべきだ、と思った。

宮は、眼の前の霧が急にはれるような思いであった。上野の山をのがれて以来、死は覚悟し、朝廷軍の軍門にくだって死に直面しても、それからのがれる気持ちはさらさらない。

宮は、おだやかな表情をうかべると、

「よいことを言ってくれた。南に帰ろう」

と、榎本に言った。

榎本は、姿勢を正し、腰を折って一礼すると、無言で宮の前を退出していった。

宮は、体のしこりが一時にゆるんだような感じがした。これからどのようになるか。流れに身を

託して流れてゆけばよく、たとえそれが死につながるものであっても、悔いはない。

翌二十二日夜、仙岳院の住職が、相馬藩境の亘理からもどってきた。

宮は、執当の亮栄とともに座敷に入ってきた住職の顔を見て、安堵をおぼえた。

住職は、拝礼し、

「亘理に参りましたところ、四条総督が宮様の帰順書をお受け取り下さいました。江戸は東京と名を改めました由で、宮様を東京の大総督有栖川宮様のもとにお連れするとお約束下されました」

と、言った。

「よろしゅうございましたな。お受け取りなさらぬのではないか、と案じておりましたが……」

亮栄は、頬をゆるめた。

住職は、さらに言葉をつぎ、

「副使として松林院と申す僧を連れて行き、そのまま亘理にとどまらせました。帰順書をお受け取りいただきましたが、今後、どのようなことになるのか。宮様は奥羽をはなれ、南へおもどりになると存じますが、そのことをよく打ち合わせるように、と指示しました」

と、言った。

亮栄は、しきりにうなずいていた。

翌朝、仙台藩から藩士がやってきて、会津藩が降伏したという報告が昨夜もたらされたことを告げた。会津藩の首脳陣は、十日ほど前に降伏をきめていたが、昨日の朝四ツ（十時）に、鶴ケ城北追手門に降参の二字を大書した白旗が立てられたという。

その後、城下の甲賀町通りで会津藩から藩主松平容保、世子喜徳、家老らが礼服をつけ、朝廷軍からは軍監中村半次郎らが諸藩の兵をひきいて降伏の式にのぞんだ。

容保が中村に降伏状を差し出し、それによって会津藩は全面降伏した。

そのことを宮に報告した亮栄は、

「会津も落ち、これにて奥羽の戦乱はやみました。わずか四カ月ほどのことでしたが、きわめて長く感じられました」

と、息をつくように言った。

平潟に上陸後、泉、湯長谷、磐城平、会津、米沢等の藩領を過ぎ、仙台に来たが、それらの通過した土地が、戦乱ですっかり荒れ果てているのを感じた。田畠はふみ込んだ軍兵に荒らされ、家は焼かれ、樹木は砲撃で裂け、多くの兵や庶民の死体が散乱している。

会津の城に立てられたという白旗が、その終わりを告げている。

宮は、体から力がぬけてゆくのを感じていた。

その夜、副使の僧松林院が亘理からもどってきた。

松林院は、仙岳院住職の指示通り宮が南へもどる手筈をととのえて欲しいと要求し、四条総督は諒承したという。

宮は、朝廷軍に恭順していることをしめすため、家臣全員に謹慎することを命じた。それに従い、かれらはその日から月代を剃ることなく、つつましく日を過ごすようになった。

塩釜にいる元備中松山藩主板倉勝静と肥前唐津藩の世子小笠原長行の使者が二人、仙岳院に訪れ

てきた。宮が僧を塩釜に派遣して帰順をすすめたことに対する回答書を持参していた。

回答書をひろげた使者は、それを声をあげて読み、その要旨は左のようなものであった。

「帰順をおすすめいただき、ありがたき幸せに存じ奉ります。私ども、徳川家再興にこれまで尽力して参りましたが、もはや今日に至り、私ども微力の及ぶところではなく断念いたしました。この上は、山林の奥深くのがれ、草木とともに朽ち果てる所存にございます。

もとより朝廷そのものに対して、いささかも反抗する気持ちなどなく、この気持ちを憐れと思し召され、なにとぞご諒察下さいますようお願いいたします。このことは、越中守殿（桑名藩主松平定敬）も同じ考えであります」

回答書を読み終えた使者はそうそうに辞去し、応対した僧は宮の前に行き、回答書の内容をつたえた。

山林の奥深くのがれ……草木とともに朽ち果てる所存とは、帰順などせず、あくまでも逃げのび、その結果、命を失っても悔いはないということをしめしている。板倉らは一国一城の主であり、それが落人同然にさらにのがれてゆくという。

「そうか、やむを得まい」

宮は、つぶやくように言うと、落涙した。

宮は知る由もなかったが、板倉ら三人は、すでに榎本と会い、艦隊とともに蝦夷地へ行く約束をとりつけていた。

しかし、榎本は、各艦船に江戸脱出時に多くの幕臣が、さらに松島湾に至って降伏した諸藩の兵

や幕臣が乗り込んでいて余地はなく、三藩主の家臣は少数にして欲しいと告げていた。板倉らは、それを諒承せざるを得ず、艦船に乗れぬ家臣たちは、それぞれ商人風などに身なりを変えて藩地にもどらねばならず、その前途は危ういものが予想されていた。

亘理では、仙台藩降伏の式が執行され、それが終わると奥羽征討総督四条隆謌は、隊列を組んだ多くの藩兵に警護されて街道を仙台にむかった。沿道の庶民たちは、錦旗をかかげた朝廷軍の兵を恐れて姿をかくしていた。

仙台に入った朝廷軍は、ただちに仙台城を接収し、四条総督は城内に総督府を設置した。その日から市内には、銃を手にした朝廷軍の兵たちが巡回し、仙台は軍政下におかれた。

九月二十九日、総督の命を受けた藤堂藩の藩士を隊長にした兵たちが仙岳院にやってきて、寺内に入り、隅々まで点検した。門には銃を手にした兵が二名立ち、出入りする者は印鑑を所持していちいち門のかたわらの検問所で書類に捺印することを義務づけられた。出入りの時刻を制限し、朝六ツから夕六ツまでと定められた。

境内には兵が常駐し、夜は所々に篝火がたかれて警戒は厳重をきわめた。

十月一日、総督府の参謀から執当の亮栄に出頭命令があり、亮栄は正装して藤堂藩の兵に付き添われ、仙台城におもむいた。

何事か、と宮は案じていたが、やがてもどってきた亮栄は、参謀から宮が南にもどることが許可され、出発は今月の十日以後になるので準備をととのえておくようにと指示されたという。

宮や僧、家臣たちは、その日からあわただしく旅の準備をはじめた。

宮は、上野東叡山の寛永寺の山主であるとともに東照宮のある日光山の山主でもあり、それらの寺に残る僧と家臣に謹慎するよう命じるべきだ、と思った。あくまでも朝廷に恭順していることをしめそうとしたのである。そのため、十月三日、全山謹慎するよう命じた書面を記し、僧の一人に持たせて日光山に派遣した。僧には日光の東照宮の責任者に渡すよう命じるとともに、東照宮にある宮の装束類をあらかじめ東京に送るよう指示した。

また、上野東叡山の僧侶と家臣にも同様の謹慎を命じ、さらに東京での出迎えを禁じる書面を書き、総督府参謀に託して東京に送ってもらうよう依頼した。

その日、藤堂藩の藩兵二十名が増員され、仙台院の警備が強化された。

仙台市内に分宿していた家臣たちが、宮の南帰が決定したことを知って仙台院に集まってきた。その中には、六月中旬、江戸から潜行してきていた医師の柴田元純の姿もあった。

翌四日、総督府参謀寺島秀之助ら四人が仙台院にやってきて、宮は引見した。寺島は、東征大総督有栖川宮熾仁親王の副参謀として、上野彰義隊との戦争の指揮にあたった萩藩士であった。

寺島たちの用件は、宮の南へ帰る旅の具体的な打ち合わせであった。そのため、執当の亮栄をはじめ僧と主立った家臣が応対した。

まず行き先は、東征大総督府のおかれた東京に定められている、と寺島は言った。ついで、随行する者についての話し合いがおこなわれ、執当亮栄をはじめ邦仙、守慶、東光院幸宥らの僧、麻生将監、関右京、安藤直記らの家臣と医師の柴田元純。中間らをふくめて総数、三十名ほどで、寺島は諒承した。

乗物は、八人でかつぐ輿が用意され、交替要員が四人つく。長持等が加えられ、行列を組んで進む。

打ち合わせはなごやかな雰囲気でおこなわれ、時に笑い声も起こった。

寺島たちは、寺を辞していった。

宮は、近々仙台をはなれるにあたって、執当であった覚王院のことをしきりに思った。

執当の職を罷免された覚王院は、仙岳院の末寺で謹慎している。覚王院は、宮様をこのような苦しいお立場にさせたのは、上野彰義隊の戦いがはじまる前、大総督府からの使者を自らの判断でことごとく拒否しつづけたことにあり、まことに申し訳なく思っている、ともらしたという。

たしかにそのことが、上野の戦いをひき起こし、自分が江戸から奥羽にのがれた原因であると言える。しかし、覚王院は、常に自らを盾として宮の皇族としての尊厳を守り、それが大総督府への激しい反発となってあらわれた。一時、宮は覚王院の独断専行に憤りをおぼえはしたが、それはすべて自分をひたすら護りたいと願ったからにほかならない。

自分たちは東京にむかい、覚王院は仙台の地に残される。

覚王院は、宮の執当職にあったと同時に、上野東叡山の真如院の住職でもあった。しかし、謹慎の身となった今では、住職の地位も失ったことになる。覚王院は、真如院のことが気がかりであるにちがいなく、宮は、真如院の後任の住職に覚王院の弟子を任じ、その心を安んじさせてやりたい、と思った。

宮は、筆をとり、その旨を書面にしたためた。弟子に真如院の住職をつがせると約束した書面を、

宮は守慶に持たせて、覚王院の謹慎する仙岳院の末寺にとどけさせた。

それでも宮の気持ちは、おさまらなかった。

覚王院は仙台に残るが、やがて冬が来て謹慎先の末寺は雪におおわれる。寒さをしのぐためには衣類を求め、暖をとることも必要になる。覚王院は、江戸からのがれ、日光をへて仙台に来ただけに着たきりのままで、ほとんど無一文と言っていい。末寺は貧しく、覚王院の面倒をみることもできないだろう。

宮は、あることを思いついた。

仙台藩の伊達家には、上野東叡山寛永寺の府庫から出した金を貸し、それは返却されないままになっている。それを覚王院にあたえてもらえれば、なに不自由なくすごすことができる。

宮は、早速、藩主伊達慶邦あてに手紙を書き、貸してある金は返す必要はなく、その金で謹慎している覚王院の面倒をみて欲しい、と記した。

宮は、それを僧に託し、慶邦のもとにとどけさせた。

これで思い残すことはなく、宮は安堵した。

仙台市中では、松島湾に碇泊している榎本艦隊の諸艦船のことが、大きな話題になっていた。艦隊が、蝦夷地におもむくことが広く知れ渡っていて、船体の損傷個所の修理も終え、燃料、食料、水の積み込みがしきりだという。

宮は、市内を歩きまわってもどってきた僧から、備中松山藩、桑名藩前藩主の板倉勝静（かつきよ）、松平定敬（さだあき）と肥前唐津藩の世子小笠原長行（ながみち）が、すでに旗艦「開陽」に乗り込んでいることを知った。家臣の

数は制限されていたが、それぞれ三名ずつが乗ることを許されたという。

宮は、山林の奥にのがれ草木とともに朽ち果てる所存、と帰順のすすめを断った板倉らの言葉を思いうかべ、悲痛な思いがした。かれらは、前途どのようになるかわからない榎本艦隊とともに、寒冷の地である蝦夷地に行こうとしている。榎本と運命を共にし、死も覚悟しているのだろう。

艦隊には、鳥羽、伏見の戦いに敗れ関東、奥羽各地を転戦した新撰組副長の土方歳三（ひじかたとしぞう）をはじめ、旧幕府歩兵奉行大鳥圭介らが乗りこみ、蝦夷地にむかおうとしている。

朝廷軍は近くにまで進んできていたが、艦隊の勢力を恐れて手を出せず、艦隊は近日中に出航するという。

南帰行

十月九日、宮一行は十二日に仙台を出立することが決定し、翌日、執当の亮栄に出頭命令があって、仙台城内の総督府に出向いていった。

再び参謀の寺島秀之助が応接し、東京行きのことについて詳細な打ち合わせをした。

警護にあたるのは、朝廷軍の将兵五十名。途中、宿場で宮をはじめ主立った僧、家臣らは本陣に泊まるが、その費用は朝廷軍が負担する。荷をはこぶ者たちは下級の旅籠に入り、それは宮一行の自弁とする。

行列が東京に入った後、宮は麹町の山王社別当の観理院に住むことも告げられた。また、元執当の覚王院は、後日、東京に帰ることを許されるという。

宮は、もどってきた亮栄の報告に満足した。

奥羽越列藩同盟の結成を知った後、宮は還俗して髪を剃ることをやめていた。僧であることは、それだけ制約も多く、周囲の者も僧としての扱いをする。その後、盟主に推された時、宮は、僧侶の身としてその任にあらずと辞退したが、盟主となった折、僧の身を捨て、一個の人間として力のかぎりつとめたいと考えた。しかし、帰順書を提出し、それがいれられて東京へ帰ることができる

宮は、再び僧にもどるべきであり、剃髪しようと思った。

宮は、亮栄に剃刀を用意させ、伸びた毛髪を剃りおとしてもらった。すがすがしい気持ちになり、剃られた頭に指をふれた。ようやく寒気が増していて、宮は剃られた頭が冷えびえとしているのを感じた。

翌日は、朝から次の日の出立をひかえて、仙岳院にはあわただしい空気がひろがっていた。持参する荷物の点検をし、食器その他を長持二つにおさめたりした。

仙台藩主伊達慶邦父子の使者二人がやってきて、応接した執当の亮栄に父子の宮への別れの挨拶を申し述べ、絹の織物と金千両を献上した。さらに宮が東京に到着した折には、東京の仙台藩邸から金二千両に相当する米穀を贈ると言った。

亮栄は、宮の意向をただし、好意を謝してそれを受領する旨を答えた。

夕刻には、旅の支度がすべてととのい、寺内は静かになった。

その時、仙岳院の住職が廊下を小走りに歩いてきて、宮の前に手をついた。青ざめた顔を見た宮は、変事が突発したのを感じ、住職の顔を見つめた。

「覚王院様が……」

住職が、息をあえがせて言った。顔に驚きとおびえの色がうかんでいる。

宮は、一瞬、背筋に冷たいものが走るのを感じ、

「どうしたというのだ」

と、咳込むようにたずねた。

「ただ今、末寺の住職が参りました。総督府から人が来て、明朝、覚王院様を罪囚として東京に押送するとのことです」

住職は、口早に言った。

宮は、口をうすく開け、眼をみひらいた。思いもよらぬことであった。参謀の寺島秀之助は、他日、覚王院の東京行きを許すと言い、それは謹慎をとくことも意味している。それなのに、覚王院を罪人として東京に送るという。

住職は、顔をこわばらせて言葉をつづけ、覚王院が逃亡せぬように部屋に檻を持ち込ませ、その中に覚王院を入れ、警備の兵を配置したという。

「なんということでしょう」

住職の声は、ふるえていた。

総督府の参謀の態度は終始おだやかで、宮は安らいだ気持ちになっていたが、その根底にはきびしい処分も辞さぬという意志がひそんでいたのだろうか。鳥羽、伏見の戦い以来、朝廷軍は幕府軍と戦い、奥羽にあっても激戦につぐ激戦で、多くの親しい者たちの命を失っている。それらの死にかれらは殺気立ち、戦後処理についても一切の妥協を許さないのだろう。

覚王院は、江戸城に入った大総督府の要求をことごとくはねつけ、それが朝廷軍の彰義隊に対する包囲、攻撃の要因ともなっている。朝廷軍にとって覚王院は憎むべき存在で、檻にとじこめ東京に押送することをきめたにちがいない。

宮は、自分が全く無力であるのを意識した。帰順したかぎり、なにごとも総督府の意向にしたがわねばならず、覚王院のことも傍観する以外にない。

翌早朝、再び住職が宮のもとに来て、末寺の住職から覚王院が東京にむかったという報せを受けた、と言った。檻から出された覚王院は、後ろ手にしばられ、戸に錠をかけた青網のかけられた罪囚駕籠に乗せられ、警備の者にかこまれて寺を出ていったという。

「後ろ手にしばられた覚王院様は、末寺の住職にお世話になりましたと丁重に頭をさげ、駕籠に身を入れられた由です」

住職は、眼に涙をうかべて言った。

朝食の膳がはこばれてきたが、宮は箸に手もつけず座っていた。

出発の時刻がせまり、玄関から宮に随行する僧と家臣らが外に出た。

執当の亮栄をはじめ邦仙、守慶、東光院幸宥らと、それに家臣の麻生将監、関右京、安藤直記、医師の柴田元純が、玄関前に置かれた輿のかたわらに立った。その後には、長持等をかついだ者たちが従った。

境内に整列していた藤堂藩兵六十名が、隊長の藩士藤堂仁右衛門の指示で、列をつくって輿に近づき、前後左右をかためた。先頭に立つ兵は、菊の御紋を染めぬいた旗を手にしていた。

やがて、法衣をまとった宮が仙岳院から出てきて、輿に身を入れた。八人の輿丁がかつぎ、輿が仙岳院をはなれた。

行列が城下町を進んだ。仙台藩の藩主伊達慶邦の指示をうけた家老が、藩士十名ほどとともに城下のはずれまでついてきて、そこで別れの言葉を言上し、もどっていった。

空気は冷え、街道に落ち葉がしきりであった。行列はゆっくりと進み、岩沼をへて灯ともし頃に槻木の宿場についた。

翌日は、川沿いの道を進んだ。

宮は、先行しているはずの覚王院を乗せた罪囚駕籠のことをしきりに思った。豪毅な覚王院は、これも宿命と諦め、端然と駕籠の中に座っているのだろう。自我の強い僧だが、それを貫いているのは見事だ、と宮はあらためて思った。

輿は、途中、かつぎ手が交替したりして船迫、大河原をへて、夕刻、白石に入った。宮は、奥羽越列藩同盟の会議所のおかれた城を複雑な思いでながめた。

その日、街道を進んでくる朝廷軍の藩兵たちの集団と何度もすれちがった。砲をひき、弾薬をのせた大八車を押してくる兵たちもいて、路面には轍の跡が深くきざまれ、道は荒れに荒れていた。田畠に兵が休息をとったらしく踏み込んだ跡が至る所にあり、弁当の皮包みが散乱していた。

翌十四日は、空は青く澄み、前日と同じように朝五ツ（八時）に白石の町をはなれた。

その日も北へむかう藩兵たちとしばしばすれちがい、朝廷軍は、奥羽北部に拡大した戦場に兵を送り込んでいるようだった。外国から輸入した砲をひいてゆく一隊もあった。

進んでくる藩兵たちは、ゆっくり進んでくる輿とそれにつづく僧たちの姿に好奇の眼をむけた。警護の藩兵の先頭に菊の御紋を染めぬいた旗がかかげられているのを眼にして、輪王寺宮一行の行列と察し、笑いの色を顔にうかべ、指さしたりする者もいた。しかし、銃を肩にした洋服の藤堂藩兵たちが警護しているのを見て、狼藉をはたらく気配はなく、むしろ、道をあけ、目礼する者もい

た。

途中、休息をとって昼食を口にしたが、守慶たち僧が、前日の昼に覚王院を乗せた罪囚駕籠がその地でかつぎ手が交替し、道を急いで南にむかっていったことを耳にしてきた。青網をかけた罪囚駕籠に、人々は好奇の眼をむけ、中に後ろ手にしばられた僧が座っていることにも関心を寄せ、遠巻きに多くの人が見つめていたという。

かれらの口にする僧の容貌、衣の色から覚王院であることはまちがいなく、覚王院は前方に眼をむけたまま端座していた。椀に水を入れて護送兵が差し出したが、覚王院は目礼しただけで辞し、その姿に、かなりの高僧だと話し合ったという。

宮は、その話を沈痛な表情できいていた。

輿には、仙岳院住職の代理人がついてきていたが、斎川をへて越河に至ると、別れの挨拶をし、道を引き返していった。

一行は、夕刻、桑折の宿場に入っていった。

宮は、僧、家臣とともに本陣に入った。日が没し、夕食をとった。

その時、護衛の隊長藤堂仁右衛門が本陣に来て、亮栄に面会を申し入れた。亮栄が出てゆくと、仁右衛門は、前方四里（十六キロ）弱の福島宿に来ている朝廷軍の参謀から書状が来ていることを告げた。

その書状によると、宮一行は、明日、桑折の宿場を発して福島泊まりの予定であったが、福島をはじめ以南の旅宿は北上する藩兵多数が泊まっていて立錐の余地もなく、しばらくの間、この桑折

にとどまって欲しい、と記されているという。途中、多くの藩兵とすれちがい、これまで宿場で宿をとったことがむしろ不自然で、亮栄は諒承した。

一行は、そのまま桑折宿にとどまり、二日間、宮は本陣から出ることなくすごした。

桑折は、佐渡の金山と並び称された銀山をひかえて栄えた町で、僧や家臣たちは、無聊をまぎらすため、寺々をまわったり、城を見に行ったりした。古い宿場だけに、落ち着いたたずまいであった。

宮は執当職の亮栄を呼び寄せ、僧の守慶を東京に先行させようと話し合った。東京についた折に宮は、麹町山王社別当所の観理院に入るよう指示されているが、あらかじめ守慶を派遣して観理院の住職に挨拶させておくべきだ、と考えたのだ。

また、その折に江戸城内におかれた大総督府にもおもむいて、礼儀上、宮が東京にむかっていることを報告しておく必要もある、と思った。

亮栄も賛同し、亮栄の指示を受けた守慶が、旅装をととのえて翌早朝、出発した。

その間にも、桑折宿には北へ進む朝廷軍の兵の集団が街道をやってきて通過していった。宿場の旅館に分宿する兵も多く、夜になると酒を飲み、歌声がきこえたりしていた。町なかを歩いてきた僧の話によると、寺々も宿所にあてられている由で、宿場は騒然としていた。

桑折にとどまってから三日後の十七日、馬にまたがった福島からの使者が、宿場に入ってきた。

応接した警備隊長藤堂仁右衛門が、書状を手に本陣にやってきた。

書状には、公卿の久我通久が、奥羽遊撃軍をひきいて進んできているが、明十八日に福島に入る

ので、宮一行はさらに桑折に逗留していて欲しい、と記されていた。公卿が道をあけるのが習いだが、恭順の立場にある宮だけに、それもやむを得ぬこととして桑折宿にとどまった。

二日後の十九日、遊撃軍の先鋒が福島方面から姿を現し、それにつづいて、騎馬の者たちが藩兵とともに宿場に入ってきた。銃を肩にした洋式の集団もあれば、槍を手にした兵たちもいる。軍の規模は大きく、宿場で昼食をとる一団もあった。

兵の通過は夕刻近くにも及び、ようやく宿場は静かになった。

警備隊長の藤堂仁右衛門が本陣にやってきて、遊撃軍の主力が通過したことをつたえ、明朝、桑折宿を出立することを告げた。

亮栄は諒承し、翌朝五ツ（八時）、宮一行は桑折宿を出立した。

宮の乗った輿は、僧、家臣とともに桑折宿をはなれ、南への道を進んだ。摺上川を舟渡しでわたり、瀬上について昼食をとった。路面は、落ち葉におおわれていた。

さらに道をたどり、九ツ半（午後一時）に福島につき、本陣に入った。田畠が遠くまでひろがり、その中央に山が見え、信夫山だという。

福島には奥羽遊撃軍の本営が残っていたが、使者が来て、本営も明日この地をはなれて北にむかう、とつたえた。

道中、天候にめぐまれ、遠くの山々まで澄み切っていた。が、次の日の夜は雨の音がして風も起こり、本陣の雨戸が音を立てて鳴っていた。寒気が増していた。

翌朝は雨もあがり、福島をはなれて街道を進み、二本松まで行き、休息して昼食をとった。

その地には、戦争の生々しい痕が残されていた。火が放たれて落城した城は、天守閣をはじめ黒々と煤けていて、焼けくずれた民家も多い。樹木は砲弾で幹から裂け、所々に銃弾の痕も見えた。町の人々の表情は暗く、町はひっそりしていた。

宮は、二本松城をめぐる朝廷軍と二本松藩士たちの攻防戦を耳にしていたが、ことに七十名近い少年隊の奮戦が印象に残っていた。

隊長は、木村銃太郎という藩の砲術師範で、少年隊をひきいて圧倒的に数にまさる朝廷軍を迎え撃ち、死力をつくして戦った。すぐれた火器を装備する朝廷軍は、陣地を次から次に突破し、少年隊は反撃しながらも後退を余儀なくされた。陣頭指揮をする木村は戦死するが、その折の話が、宮の胸に悲痛なものとしてきざみつけられている。

重傷を負った木村は、もはやこれまでと観念し、少年たちに自分の首を斬り落とすよう命じた。動転した少年たちは、当然のことながら斬ることはできない。

声をふりしぼって斬るように命じる木村に、ようやく少年の一人が刀をふりおろしたが、一太刀目は仕損じた。気持ちをはげました少年が再び刀をふりかぶり、ついに首を斬り落とした。

少年たちは泣きながら穴を掘って遺体を埋め、首を持とうとしたがふるえる手には重く、二人がかりで髪をつかみ後方にさがっていったという。

その悲壮な話を思いうかべ、宮は町の静けさがひとしお身にしみるのを感じていた。

昼食を終え、宮は、焼けこげた城に眼をむけながら輿に身を入れた。

一行は二本松をはなれ、街道を進んで夕方に本宮につき、本陣に入った。その地も激戦地で、町

は荒れに荒れていた。

街道には相変わらず北上する朝廷軍の兵が多く、砲車をひいてゆく隊もある。これより南の宿場には、これらの兵が旅籠その他を占めているということで、一行は、進むこともできずその地に逗留した。

二日後の朝五ツ（八時）、本宮をはなれ、郡山、笹川をへて夕刻に須賀川についた。相変わらず朝廷軍の北上するのに出会い、旅は遅々としていた。

白河を過ぎ、十月三十日には宇都宮、雀宮をへて小金井宿に至った。

朝五ツ（八時）前、小金井宿をはなれ、小山、間々田をへて夕刻に古河についた。

その宿場に、東京へ先行させていた僧の守慶が、宮一行のくるのを待っていた。宮一行が本陣に入ったことを知った守慶が、すぐに本陣にやってきて執当の亮栄と会った。

話し合いをした後、二人はそろって宮のいる座敷に入ってきて、座った。二人の顔には、思いがけず血の気が失せ、宮は変事が起こったのを感じた。

「宮様に御報告いたすように……」

亮栄が傍らに座る守慶をうながしたが、その声はふるえていた。

はい、と守慶は低い声で答えたが、言葉が出ないらしく顔を伏している。

宮は、不安になって守慶を見つめ、

「どうしたのだ」

と、苛立ちをおぼえて言った。

守慶が顔をあげ、宮に眼をむけると、
「申し上げます」
と、言った。顔はこわばり、声は途切れがちであった。
守慶の口にする言葉をきいている宮の顔から血の色がひき、眼を大きくひらいていた。予想もしていなかったことが、守慶の口からもれている。
東京に入った守慶は、まず上野東叡山に残っている主立った僧侶を訪れたが、かれらの口から思いもかけぬことを耳にした。大総督府からの通達があり、宮の東京に入ることを許さず、そのまま京にむかわせるようにという。それは決定事項であり、一切変更はない、と……。
「町なかにもすでにその話は広く流れ、宮様は京に送られた後、伏見宮様お預けになるとか、因州（鳥取藩）に幽閉なされるとかの噂が飛び交っております。上野東叡山に残っております僧たちは、連日、不忍池（しのばずのいけ）の弁財天に集まってどのようにすべきか話し合いをしておりますものの、いかんともしがたいとのことです」
守慶は、顔を激しくゆがめ悲痛な声で言った。
「宮様が帰順なされ、私ども僧も家臣も謹慎しておりますというのに、なんという仕打ちを……」
亮栄は、怒りをふくんだふるえ声で叫ぶように言った。
宮は呆然として、頭を垂れる二人の姿を見つめていた。
東京に帰って麹町の山王社別当寺の観理院に入ってそこに住むようにと言われたが、その指示は、いったいなんであったのか。帰順書は東京に送られ、大総督府から奥羽征討総督を通じて観理院に

住むようにと宮側につたえられたはずだが、それがにわかに変更になったというのか。
宮は、自然に徳川慶喜の恭順謝罪のため駿府城の東征大総督府におもむいた折のことを思い起こしていた。
応接した大総督の有栖川宮熾仁（たるひと）親王は、嘆願など論外という態度に終始し、そこには激しい敵意と憎悪が感じられた。また、大総督府の参謀たちも宮に礼をしめすことなどなく、傲岸な言動で蠅（はえ）を追い払うように自分たちを退去させた。
そのような大総督府の態度は今もって変わらず、むしろ彰義隊の戦いについで奥羽越列藩同盟の盟主となった自分を断じて許しがたい存在と考えているのだろう。
東京にもどって観理院に住む指示をうけた時、宮はひそかに東京での生活を胸にえがいていた。朝廷からの御沙汰（さた）を待つが、僧であり皇族でもある自分に苛酷な処分が下されるはずはなく、ほどなく許されるにちがいないと思っていた。その折には、戦火で焼尽した上野東叡山の寛永寺をはじめ寺坊の再建に手をつける。
そうした期待が、跡かたもなく崩れ去るのを感じた。
本陣は、にわかに騒然となった。僧や家臣たちは、亮栄や守慶をかこんで悲痛な声をあげて言葉を交わす。仙台をはなれてから十八日間、宮が東京にもどることのみを考え、麹町の観理院に入ってからのことを話し合っていた。上野東叡山に残っている僧や宮の家臣たちと再会し、共に寺坊の再建に力のかぎりをつくそう、と励まし合っていた。
それが、二日後には東京につくというのに、突然、東京に入ることを許さず、京に行けという。

大総督府の指令だというが、なぜそのような措置に出たのか。

泣き出す者も多く、

「何故(なにゆえ)に、何故に」

と、掌(てのひら)を畳にたたきつける者もいた。

夜おそくまで、かれらは甲高い声をあげ、眠りにつく者はいなかった。

翌朝、宮は人の声に眼をさました。廊下を行き交う足音もしている。まだ夜明け前で、外は暗い。

宮は半身を起こした。寒気が体をつつみ込んできて、寝着の衿(えり)をかき合わせた。

廊下を足音が近づき、座る気配がすると、

「宮様」

という低い声がした。

それに応じると、障子が細めに開き、

「言上申しあげます」

と、守慶が両手をついて言った。

「なにごとか」

宮は、不吉な予感がしてたずねた。

「御執当職の亮栄様が、夜明け前に東京へむかわれました」

宮は、守慶の言葉の意味が一瞬わからず、首をかしげた。

「御警衛の隊長藤堂仁右衛門様あてに書き置きを残され、これより東京に急行するとして、人眼につかぬようにして本陣を出てゆかれたようです」

その書き置きが藤堂らの泊まっている旅籠の出入り口の板の間におかれているのに気づいた藤堂は、本陣に来て、亮栄のいないのをたしかめ、守慶をはじめ宮随行の僧と家臣を起こしたという。

人声がしていたのは、そのためであることを宮は知った。

亮栄は、なぜ書き置きをしたためてひそかに東京にむかったのか。宮は、自分が東京に入れず京に送られることに衝撃を受けた亮栄が、大総督府に嘆願に行ったにちがいない、と思った。

守慶が、言葉をつづけた。

「藤堂殿は、かなり狼狽されており、これは好ましくない、としきりに繰り返されておりました。家来の一人を招き、亮栄殿を追い、なんとしてでもおしとどめるよう命じられました。命令を受けた家来の方は、あわただしく旅籠を出て行った由でございます」

守慶は、宮の顔を見つめた。

宮は、藤堂の気持ちを察することができた。

藤堂も、亮栄が宮の東京入りを大総督府に嘆願するため東京にむかったと察している。しかし、亮栄が言葉をつくして嘆願したところで大総督府がそれをききいれるはずはなく、むしろ大総督府の態度が一層硬化する恐れがある、と藤堂は考えたにちがいなかった。

重苦しい空気がひろがり、朝食の膳が運ばれてきたが、箸をとる者もなく、前日と同じ時刻に古河宿をはなれた。

中田宿をすぎ、利根川を舟渡しで越えて栗橋(くりはし)の関所にかかった。関所には朝廷軍の藩兵がいたが、

それは形式だけのことらしく旅人を検問する気配はなく、宮一行はそのまま通り過ぎた。
幸手宿で休息をとり、杉戸、粕壁をへて夜、越谷宿に入った。
宿泊をあらかじめ定めていた本陣に入ると、そこには執当の亮栄が、隊長藤堂仁右衛門の家来と待っていた。
家来は健脚で道を急ぎ、千住大橋の袂で亮栄に追いついた。家来は、なおも東京へ行こうとする亮栄をおしとどめ、隊長からの伝言をそのまま口にした。今、東京におもむいて大総督府に嘆願することは、かえって宮を不利な立場におとし入れる。家来はじゅんじゅんと説き、ようやく納得した亮栄を連れて道を引き返し、越谷宿で待っていたのだという。
疲れきった表情をした亮栄は、宮の前に来て手をつくと、
「このままでは、なんとしてもおいたわしく……」
と言って、肩をふるわせて泣いた。
覚王院の跡をついで執当となった亮栄は、宮の身を守らねばならぬという責任感から大総督府におもむいて宮の東京入りを強く嘆願しようとした。それは死を覚悟の上でのことにちがいなかった。
宮は、自分を思う亮栄の熱意に感動し、泣きつづける亮栄の姿を涙ぐんで見つめていた。家臣たちは腕を組んだりして言葉もなく、僧たちは頭を垂れていた。
翌朝、本陣に上野東叡山と日光山の寺坊の住職四人が、僧侶代表として姿をみせた。
宮は、仙台を出発前、東京に入る時に出迎えは禁じるという直筆の手紙を出していたが、それらの僧侶は、大総督府が東京へ入ることを禁じるという命令を出したことを知り、本陣を訪れてきたのである。

かれらは宮の前に並んで座り拝礼したが、言葉を口にする者はなく、宮も無言であった。
定刻になり、宮は輿に身を入れた。
輿が越谷宿をはなれ、進んでゆく。罪囚駕籠にのせられた覚王院が、この道を押送されていったことを思い、宮もそれに準じた扱いを受けているのを感じていた。大総督府は、あくまでも彰義隊とともに上野の山に立てこもった宮を、覚王院同様に憎むべき朝敵として考えている。
宮は眼を半ば閉じ、輿にゆられていた。
輿は、草加宿をへて八ツ（午後二時）に東京への入り口である千住宿についた。
宿場の本陣に行くと、護衛兵の交替がおこなわれた。それまで仙台から護衛してきた藤堂仁右衛門を隊長とした兵が、藤堂藩の支藩である久居藩の岡本治房を隊長とする五十人の兵と交替した。
大総督府の命令にちがいなかった。
宮が奥座敷に入ると、従者をしたがえた大総督の使者が騎馬で本陣にやってきた。
応接に出た執当の亮栄に、
「申し渡しをする」
と告げ、宮はこの地にとどまり、大総督府の命令を待つべし、と甲高い声で言った。
亮栄は諒承し、使者はもどっていった。
命令口調の荒々しい使者の言葉に、あらためて大総督府が宮の東京入りを断じて許さぬことを知った。

亮栄からその報告を受けた宮は、暗い眼をしてうなずいていた。
その日は晴天で、夕方には空が鮮やかな茜色に染まった。
今後、大総督府からどのような命令が伝えられるのか。亮栄たちの顔に不安の色が濃かった。夜になってもかれらはふとんに入ることもせず、座敷に寄りかたまって座っていた。夜廻りの拍子木の音が近づき、遠ざかってゆく。
翌十一月四日の夜が明け、宿場に人声や物音がきこえるようになった。さすがに旅をする者は少なかったが、それでも奥羽への出入り口の宿場だけに旅人の出入りはあった。
やがて、東京方面から多くの従兵をしたがえた武家が、見事な馬にまたがってやってきた。大総督府の軍監であった。その軍監の到来にはあらかじめ前触れがあって、亮栄をはじめ僧や家臣たちは、本陣の前に並んで軍監のくるのを待っていた。かれらの顔には不安の色がうかんでいた。
軍監は、かれらの前で馬からおりると、大総督府よりの使者であると名乗って宮にお会いしたい、と言った。
亮栄は諒承し、先に立って本陣に入ると、軍監を宮のいる座敷に導いた。宮は、濃い髭の軍監の顔を見つめた。
宮の前に座った軍監は、朝廷よりの命令を伝える、と言い、書面をひらくと、
「輪王寺宮、大義を失いしかどにより、伏見宮あずけとする。よってただちに京におもむき、謹慎なさるべし」
と、西国訛りの大きな声で言った。

宮は、かすかにうなずいた。
東京に先行した守慶が耳にしてきた噂では、伏見宮か因州藩のいずれかにあずけられるとのことだったが、宮はその言葉で京都へ送られるのを知った。宮は、伏見宮邦家親王の第九子として生まれ、いわば伏見宮あずけとなることは、生まれた家で謹慎することであった。
軍監は、すぐに腰をあげた。
亮栄をはじめ僧や家臣たちは、次の間に控えていたが、軍監がその座敷に入ってきた。亮栄たちの顔には、宮が因州藩あずけとはならなかったことに、安堵の色がかすかにうかんでいた。
亮栄たちは頭をさげ、軍監は、かれらの前に座った。軍監は、あらためて宮に告げた朝廷よりの命令を再び口にし、書面に視線を落とすと、麻生将監、山本主膳はだれか、とたずねた。
思いがけぬ言葉に、麻生と山本がいぶかしそうな表情で進み出て、それぞれ身分、姓名を名乗った。
軍監は、二人の顔に視線を据えると、
「宮様が京におもむく折に随伴するのは、麻生将監殿、山本主膳殿御両名と小者一名」
と、言った。
麻生たちをはじめ他の家臣と僧たちは、驚いたように軍監の顔を見つめた。
麻生は宮の筆頭家臣。山本は、宮が会津に入った六月上旬に江戸から宮を追って潜行してきた家臣で、鈴木安芸守が労咳（肺結核）で死亡した後、側役として宮に仕えていた。二人は、共に家臣の中で最も主立った者たちだが、大総督府は、それらのことをいつの間にか調べ上げていて、二人

を随行者に指名してきたのだ。

麻生と山本、それに小者一名のみという軍監の言葉に、亮栄たち僧と家臣たちは、茫然として顔を青ざめさせていた。仙台を出発して以来、亮栄をはじめ僧八人、家臣は麻生、山本以下十八人に医師の柴田元純がつき従ってきた。かれらの大半は、宮が奥羽にのがれたのを知り、江戸または日光から苦心して宮のもとに潜行してきた者たちであった。それら三十名近い者たちが随行してきたのに、京都に送られる宮には麻生、山本の両名と小者がつき従うだけだという。

亮栄たちは、宮に対する扱いが余りにも酷であるのに体をふるわせた。

軍監の言葉は、さらにつづいた。

「これまで宮様は、八人でかつぐ輿に乗って道中をやって来た。しかし、大義を失った謹慎の身で、そのようなことは断じて許されぬ。今後は、普通の駕籠で京へむかっていただく」

亮栄たちの顔は、さらに青ざめた。宮は皇族であり上野寛永寺の山主として、そのような駕籠に乗ったことはない。たとえ謹慎する身として京都へ送られるにしても、余りにも非礼であった。

軍監は、かたい表情の亮栄たちを見渡すと、

「麻生殿、山本殿以外の方は、それぞれの旅宿で大総督府の命令を待つように……」

と、言った。

軍監は腰をあげ、従卒とともに座敷を出ていった。

亮栄たちは、身じろぎもせず座りつづけていた。そのうちに一人立ち、二人立ちしてすべての者が座敷を出た。

「ただちに京におもむき」という大総督府の命令は、即日出発することを意味し、軍監の指示で宮の出立の準備があわただしくととのえられた。

宮は、本陣を出ると待っていた駕籠に身を入れ、同じような駕籠に麻生と山本が乗った。小者の栄助が、宮の駕籠に付きそった。

三挺の駕籠が、千住宿をはなれた。

軍監と久居藩の隊長が馬にまたがり、五十名の護衛兵が宮の駕籠の前後をかためて進む。本陣の前には、それまで随行してきた僧や家臣たちが立ち、合掌し頭をさげていた。

三挺の駕籠は、つらなって箕輪をへて金杉をすぎた。右手に樹木におおわれた上野の山が見え、落葉した樹々もある。焼け落ちた寛永寺と寺坊は、それらにさえぎられて見えない。出水した濁水につかりながら逃げつづけたことが思い起こされたが、空は青く澄み、道は白く乾いていた。

日本橋をすぎ、駕籠は進んで品川宿に入った。人馬の往来は旧に復していて、夜五ツ（八時）に川崎宿に入った。

翌日も晴天で、先を急ぐ軍監は、朝六ツ半（七時）に出立、神奈川、程谷をへて八ツ（午後二時）に戸塚宿についた。

その日、千住宿に残された宮の僧、家臣たちは、千住宿をはなれていた。大総督府から他の軍監がやって来て、僧、家臣たちに東京に親戚、知人がいるかを問うた。もしもあるなら、それらの家を謹慎所にする、と言った。しかし、僧や家臣たちは、親戚、知人に迷惑が及ぶのを恐れ、皆、ないと答えた。

そのため、宮の家臣たちは、尾張藩の藩兵にかこまれて、千住宿から江戸城山下門近くの丹波亀山藩の屋敷に連行され、藩主松平信正預けとなった。

また、亮栄をはじめ僧侶たちは、同じく尾張藩の兵に連行されて市ケ谷の自証院に入り、尾張藩預けとして禁固された。

これによって宮随行の僧、家臣たちは全員謹慎し、拘束された。

宮を乗せた駕籠は、麻生、山本の駕籠とともに東海道を進んだ。

宮が輿丁にかつがれた輿に乗って奥羽街道を東京にむかっていた時には、きわめて身分の高い人の通過と考えた沿道の庶民は膝をつき、頭をさげた。輪王寺宮と知っていた各町村の名主たちは、正装して輿を出迎え、見送った。しかし、宮の乗る駕籠は、二人がかつぐ通常の駕籠で、ただし五十人ほどの銃をかつぐ久居藩兵が前後をかためているので、重罪人の押送と思われているようだった。

休憩のため駕籠がとまると、警護の兵の眼を盗んで近づき、好奇の視線を宮に注ぐ沿道の者もいた。

小田原宿をすぎ、箱根の山を越えた。

宮は、軍監から十一月六日に有栖川宮熾仁親王が、江戸城を出て東海道を京都にむかっていることを耳にしていた。宮が東京をはなれた二日後のことで、奥羽の戦乱は全くやみ、そのため熾仁親王は東征大総督の任をとかれて京都へもどる。鳥羽、伏見の戦い以後、連戦連勝を果たし、蝦夷地をのぞく全国を平定した軍功は絶大で、京都への旅は凱旋の旅であった。

それを沿道の庶民にしめすため、熾仁親王の行列は華美で規模が大きく、東海道を圧して京へ進んでゆく。その大行列が、後方から進んでくるのを知っている軍監は、それとの距離を出来るだけはなそうとしていて、途中、休息もそこそこにして出立の命令を下す。

右手には冬空を背景に富士山が見え、九日には早くも駿府（静岡市）をすぎた。

宿場についても宮は本陣に泊まることはなく、麻生、山本とともに一般の旅籠の一室に入った。廊下にも隣室にも警備の兵が配置され、旅籠の者は重罪をおかした僧一行と思っているようだった。

旅籠を出立するのはまだ暗い夜明けで、宮は宿場で交替した駕籠に乗る。駕籠の動きははやく、宮は体をゆらせていた。

浜松をへて岡崎につき、十五日には宮宿から舟で桑名宿に入った。桑名藩前藩主、松平定敬のことが思われた。定敬は、板倉勝静、小笠原長行とともに宮の帰順のすすめを断り、榎本武揚のひきいる艦隊とともに蝦夷地にむかった。果たして蝦夷地に無事についたのか。自分は京都にむかっているが、かれら三人の大名は、依然として逃亡の旅をつづけている。

宮は痛々しい気持ちがし、ちらつく行灯の灯を見つめていた。

熾仁親王の行列とはかなりの距離がはなれたようであったが、翌朝、まだ暗い六ツ（午前六時）に桑名宿をはなれた。軍監は道を急ぎ、亀山、土山、石部と泊まりをかさね、十九日には草津をへて大津宿に入った。

京都へ三里（十二キロ）の地で、東京から京都までは通常、二十日以上を要すると言われていて、十五日間で大津についたのはかなりの速さであった。駕籠にゆられつづけてきた宮は、臀部の皮膚

がすりきれ、血がにじみ、化膿していた。

駕籠から降りて旅籠に入った宮には疲労の色が濃く、顔は土気色をしていた。

旅籠に、新政府の若い刑法官判事が、洋風の兵の一隊をひき連れて京都からやってきていた。これまで東京から警護にあたってきた久居藩兵から引きつぐためで、手続きを終えた軍監と藩兵は旅籠をはなれていった。

すでに日没を迎えていたが、判事はただちに京都へ引き返す予定を立てていて、そうそうに夕食をすませた宮は、旅籠を出ると、麻生、山本とともに駕籠に身を入れた。

五ツ（午後八時）すぎに出立、馬に乗った判事が先頭に立ち、兵たちは提灯に灯を入れ、大津をはなれた。

提灯の灯の列が、揺れながら街道を進んでゆく。宮は、冷えきった夜気に京都の匂いを強く感じていた。土、樹木の匂いは、あきらかに生まれ育った地のもので、なつかしさが身にしみてくる。兵卒の落ち葉をふむ音に、京都に近づいているのを感じていた。

駕籠が、蹴上から寝静まった京都の家並みの間に入った。

駕籠の中から、なつかしい京都のたたずまいが見える。宮は、うるんだ眼をして、自分の生家である伏見宮の屋敷に近づいてゆくのをながめていた。

駕籠の列が伏見宮禅楽（隠居して邦家を改名）親王の屋敷の前についたのは、九ツ（午前零時）であった。深い静寂があたりにひろがっている。

連絡がしてあったらしく、伏見宮家の家令が待っていて、駕籠からおりた宮は、麻生、山本とともに家令にみちびかれて屋敷内に入った。

むろん家令は顔見知りであったが、深く頭をさげただけで言葉も口にせず、提灯を手にして先に立って庭の奥に歩いてゆく。みちびかれたのは、母屋からはなれた孤立した小さな家であった。それは、宮を謹慎させるために用意された家で、宮は粗末な一室に入り、麻生と山本には隣室を控えの間と指定された。

家令は、再び頭をさげ、闇の中に消えていった。

寝具はさすがに上質のものが用意されていて、長旅の疲れが一時に出て、宮は熟睡した。麻生と山本は、隣室で就寝した。

翌朝、庭は一面の霜であった。見なれた庭であったが、謹慎の身であることから、甚だうそ寒いものに感じられた。

小者の栄助は門の近くの部屋に泊まっていて、熾した炭火を持ってきて火桶にいけた。

「広いお屋敷でございますな」

山本に言う栄助の声がきこえた。

その日から、宮は、謹慎の身をその部屋ですごした。

小者の栄助は、宮の身の回りの世話をし、食事をととのえる。宮は、部屋から出ることはせず、座りつづけていた。

拘束もうけぬ栄助は、食物の調達その他で自由に町々を歩いていたが、かれの口から有栖川宮熾仁親王が軍兵をしたがえて京都に帰還したことを知った。塀の外を酔った兵たちが、笑いながらす

ぎてゆくのがきこえたりした。伏見宮の屋敷でも人を招いて、祝いの宴が開かれているようだった。京都の町々は、賑わっているという。

栄助が麻生らにそのような話をするのを、宮は襖越しにきいていた。

京都に帰還してきた朝廷軍は連戦連勝し、まさに凱旋で、その総指揮にあたった有栖川宮熾仁親王は、華々しい栄光につつまれている。それとは対照的に、自分は朝敵の汚名のもとに幽閉されている。同じ皇族でありながら、それは天と地の差があり、これも自分の宿命なのだ、と自らを慰めた。

寒さのきびしい日がつづき、雪も降って庭一面が白くなった。

当主の父である伏見宮禅楽親王は全く姿をみせず、家令も屋敷に来た時建物に案内しただけでやってくることもなかった。

宮は、父が苦悩の日々を送っていることを思った。徳川慶喜の助命嘆願はまだよいとしても、それにつづく上野東叡山での戦い。さらに奥羽へのがれた宮が、奥羽越列藩同盟の盟主として朝廷軍に鮮明に反抗の姿勢をしめしたこと。それはまぎれもない朝敵の行為で、父は皇族として朝廷に申し訳なく、日夜、胸をかきむしる思いであったにちがいない。はからずも、屋敷が宮の謹慎所になったが、父は宮の罪深さを思い、父子の縁を切るように近づくこともしないのだろう。

宮は、父の苦悩を思い、庭に出ることもせず謹慎の姿勢をとっていた。

年があらたまり、明治二年正月を迎えた。

仙台を出立する時、藩主伊達慶邦から千両の金を贈られ、東京への道中、費消はしたものの手もとには半ば近くが残され、それを使いながら日を過ごしていた。

東京に行幸した明治天皇が江戸城を皇居として東京城と改め、東京から京都にもどったことがつたえられた。

十日に一度は湯を沸かし、それにつかるのがわずかな楽しみであった。

幽閉の日々

庭の白梅についで紅梅が咲き、桜が開花して散った。

その頃、東京の市ケ谷自証院で謹慎していた僧の亮栄から京の飛脚問屋に、内密に取り扱って欲しいという但し書きの手紙がとどいた。問屋ではひそかに宮の幽閉先に使いの者を出してその旨を伝え、小者の栄助が受け取りに行った。

やがてもどってきた栄助が、その手紙を家臣の麻生将監に渡し、麻生からそれを受け取った宮は、手紙をひらいた。そこには、前執当の覚王院の死が書きつづられていた。

罪囚駕籠で東京に押送された覚王院は、東京城西丸の糺問所の獄に投じられ、白洲できびしい取り調べを受けた。彰義隊の戦いがはじまるまでのいきさつに吟味が集中され、覚王院は、大総督府からの要求をことごとくはねつけたことについて、

「一つとして輪王寺宮様の御意志によるものはなく、全くあずかり知らぬこと。すべて私の一存によるものであります」

と、全責任を自分が負う陳述を繰り返したという。

その陳述は終始一貫していて、覚王院は牢獄から出され、本郷壱岐坂の松平美作守の屋敷あずけとなった。

その日からかれは食を断ち、屋敷の者が執拗に食物を口にするようすすめたが、感謝しながらも応ぜず、二月二十六日に衰弱死した。遺体は罪人扱いとして、千住小塚原の刑場に捨てられたという。

宮は、大きな衝撃を受け、書簡の文面を沈痛な表情で見つめていた。強靭な意志力を持った覚王院は、なにごとも自分の判断で事を即座に処理していた。それを余りにも独断すぎると、宮は批判の気持ちをいだいたこともあるが、それは皇族であり寛永寺の山主である自分を極力守護しようとする気持ちから発したものであった。

糺問所で責任はすべて自分にあると述べ、断食して死んだ覚王院の忠誠心が痛々しかった。

亮栄からの手紙はさらにつづき、自証院で謹慎を命じられた亮栄、守慶、邦仙、幸宥ら僧たちのことも記されていた。かれらはその後、軍務官の命令で自証院をはなれ、それぞれの生家にあずけられた。生涯、僧職につかぬという条件のもとに罪をゆるされたという。

亮栄は自証院、幸宥は東光院のそれぞれの住職であったが、この裁決によって両院ともその後、長い間無住職となった。

上野の山を落ちのびて三河島村、上、下尾久村をへて東光院にのがれ、さらに自証院に行って身をひそませたが、その二つの寺の住職が罪に問われて、終身、僧職をとりあげられたことに胸が痛んだ。もしも自分がそれらの寺に潜伏することがなかったら、二人はこのような不幸な目に遭うことはなく、宮は自分のとった行為が、かれらを死に等しい逆境におとしいれたことを感じた。

宮は、自らを省みた。謹慎の身として部屋から一歩も出ることなくすごしているが、日々、食物を口にし、夜も眠ることを繰り返している。生命の危険はなく、そのような生活をしていることがまことに申し訳なく、身の切られるような思いであった。

宮は、隣室にひかえている家臣の麻生将監と山本主膳を招き、その書簡を見せた。二人は、沈鬱な表情をしてそれを読み、涙ぐんでいた。

宮は、顔を伏している二人に眼をむけていた。謹慎の身として月代も剃らず、蓬髪になっている。衣類は古び、顔はやつれている。それぞれ寛永寺の筆頭家臣、宮家の家臣の任にあったが、今では自分に随行して京都に来て部屋から出ることもなく、幽閉の身となっている。かれらには家族があるのに音信も許されず、これも自分の行為によるものなのだ、と思った。

小者の栄助は、相変わらず食物を買うなど買い物をしたりして、町々を歩きまわっていた。かれは、さまざまな話をきいてきて、麻生や山本に伝え、宮は二人から外部の情勢を耳にしていた。

遠く蝦夷地の話が、京都の町にもつたえられていた。蝦夷地にむかった榎本艦隊は、予定通り目的地につき、榎本軍は蝦夷地守備の新政府軍を駆逐し、榎本武揚は、前年の十一月一日箱館に上陸した。榎本は、自らを総裁として役員をきめ、蝦夷地政権の成立を内外に公表した。

年があらたまり、新政府軍は蝦夷地に上陸し、各地で激戦が繰り返され、榎本軍は五稜郭に立てこもって抵抗したが、五月十八日に降伏し、蝦夷地での戦争は終結した。

その話をきいた宮は、自然に榎本艦隊とともに蝦夷地にむかった備中松山藩、桑名藩のそれぞれの藩主板倉勝静、松平定敬と肥前唐津藩世子小笠原長行のことを思った。

宮は、その後の三人の消息を知ることはなかったが、かれらは大名として幕府の恩顧を忘れることなくそれぞれの道を歩いた。

主君である板倉勝静の行方をさぐっていた備中松山藩では、隠密を奥羽方面に放ち、勝静が榎本艦隊とともに蝦夷地に入ったことをつかんだ。蝦夷地政権の成立を宣した榎本は、主立った者を役員に任ずるとともに板倉勝静、小笠原長行、松平定敬を列外客員とした。

榎本軍は、上陸後、蝦夷地守備の新政府軍と各地で激戦をかさね、有利に戦いを進めて敗走させた。

松山藩は、戦場にある勝静を救出しようとし、勝静が箱館に入った翌年の明治二年一月下旬、年寄役の西郷熊三郎が商人に変装して外国船に乗り、箱館に潜入した。かれは、ひそかに勝静に会い、必死に蝦夷地からの脱出を懇請したが、勝静は頑として受けいれることはしなかった。

やむなく西郷は東京へ引き返し、結果を在京の藩の重役に報告した。

諦めきれぬ重役たちは、協議の末、一つの策を実行に移すことに意見が一致した。横浜に碇泊しているプロシヤの商船の船長ウェーウは勝静と面識があり、かれを利用して勝静を救出しようとはかったのである。

藩の重役が横浜に行ってウェーウに一万ドルの金を渡し、秘策をあたえた。それはウェーウが勝静を宴を開くと称して船中に招き、そのまま出航して箱館をはなれるという案であった。

ウェーウは承諾し、横浜を出航して箱館へむかった。

勝静の箱館での生活は、大名のそれとは遠くはなれたきびしいものであった。少数の家臣は従っていたが、榎本は勝静に蝦夷地に入ったかぎり、お殿様ではなく普通の人間としてすごして欲しいと忠告し、生まれつき生真面目なかれは、もっとものことと考え、一人で身の回りのことをすべてすますようになった。家臣たちは不服であったが、勝静はかれらを野戦病院の手伝いにさせて、かれらと別居した。

連日のように雪が降り、勝静は雪をふんで買い物に出歩いたりする。以前と異なるその姿に、家臣たちは落涙した。

手持ちの金が尽きかけていて、山田屋という大きな旅籠に住んでいたが、そこにいることもできず、もと料理屋であった佐吉という者の家に移り住んだ。身分をかくすため、桑名藩の松平定敬は一色三千太郎、肥前唐津藩の小笠原長行は大井余介という変名を使っているのにならって、勝静も渋谷音輔と改名していた。

年が明けて明治二年正月を迎え、春には新政府軍の来攻が予想されて三人の間に外国か上海へでもひとまずのがれようか、という話が持ち上がった。しかし、それに要する金は手もとになく、その案は自然に立ち消えになった。榎本は、板倉、小笠原、松平の三公をあたかも余計者のように扱っていて、榎本に金を貸して欲しいと頼むことはできなかった。長行も定敬も、粗末な家に住んでいた。

四月に入ると、政府軍の艦船が七、八隻、青森に集結し、四、五日のうちに箱館を攻撃するという情報が入った。市中は大混乱におちいり、家財を手に近在に逃げる者で道は充満した。

新政府軍の来襲を確実と判断した榎本は、三公のもとに新撰組副長であった土方歳三を使者に立て、武装商船「長鯨」を用意してあるので箱館から室蘭に身を避けるようすすめた。しかし、早くも政府軍は江差の先二里ほどの乙部に上陸を開始し、それも不可能になった。

そのような緊迫した折に四月十九日、ウェーウを船長とする帆船が箱館に入港し、ウェーウが勝静の宿所である佐吉方に訪れて来て、小宴をひらいた。佐吉方を出たウェーウは榎本に会い、勝静と、さらに小笠原長行を船に乗せて脱出する旨を伝え、榎本はそれに賛同した。

四月二十三日夜明け前、勝静と長行はそれぞれ家臣とともにウェーウの船に乗り、船は箱館を出港した。箱館湾を出たプロシヤ船は南下し、六日後の四月二十九日、仙台藩領勝見浦についた。

家臣たちが上陸して様子をうかがうと、新政府軍の兵が至る所に検問所を設け、到底上陸など不可能であることがあきらかになった。船への探索もきびしくおこなわれていて、それにそなえて勝静は髪を商人風に結い直し、長行も髪をおろして医者風に変装した。さらに二人は、船底に入り、板をのせて毛布をかぶり、身をひそませた。

ウェーウは、その港に来ている他の外国船に勝静たちを乗り換えさせて横浜へむかわせる予定であったが、約束の外国船の船長は、言葉を左右にして出港しようとしない。そのうちに、港に「積立丸」という和船が碇泊しているのを知った。その船は、勝静の藩の御用船で、船頭が佐吉という者であることも判明した。

商人姿に変装した家臣二人が上陸して「積立丸」におもむき、あらためて船頭が佐吉であることを確認し、前藩主が外国船の船底にひそんでいることを打ち明け、横浜に行ってくれぬか、と頼ん

だ。佐吉は大いに驚き、積み荷が間に合わなくても人に知れぬように出帆する、と確約し、家臣はそれを勝静に報告した。

長行にもそれをつたえたが、長行は予定通りウェーウの指示した外国船に乗る方がよいと考え、即答はしなかった。長行の家臣たちはひそかに外国船に行って船長に出航をうながそうとしたが、船長は上陸していて、翌日になっても会うことはできなかった。

二日間がむなしく過ぎ、家臣たちは明日、勝静だけを「積立丸」に移して出帆することにきめ、その打ち合わせに佐吉のもとに行った。

佐吉は、思いがけぬことを口にした。

佐吉が泊まっている旅籠には、仙台藩の役人たちも泊まっていて、役人の一人が佐吉に一つの話をもらした。役人たちは、港に碇泊しているウェーウの船に箱館からの脱出者が乗っていることをかぎつけ、今日、捜索しようとしたが、他に用事ができて中止となり、明日は必ず船にふみこみ、捜索する予定だという。

佐吉はうろたえ、今夜中に勝静を「積立丸」に移し、そうそうに出帆したい、と言った。

家臣たちは顔色を変え、ただちにウェーウの船にもどり、勝静にも告げた。

深夜、雇い入れた小舟に勝静と家臣たちが乗り、ひそかに寒風沢(さぶさわ)沖で待つ「積立丸」に行き、船内に身をかくした。明け六ツ（六時）、「積立丸」は帆をあげ、寒風沢沖をはなれた。

気象状況はよく、「積立丸」は順風を得て南下した。波はおだやかで、空は青かった。

犬吠埼をかわし、五月十三日夕、房州（千葉県）勝浦湾の松部(まつべ)に着船した。商人の身なりをした

板倉勝静と家臣たちは上陸し、宿へ入った。

勝静は、横浜に行って外国船に乗り、外国へ行くことをきめていた。が、このまま家臣たちと「積立丸」で浦賀をへて横浜へ行くことは見とがめられる恐れがあり、勝静のもとに家臣一人を残して他の家臣たちは東京に陸行することになった。

家臣たちは、人眼(ひとめ)につかぬよう二手にわかれて北への道を進み、大多喜(おおたき)城下から乗合舟に乗った。舟は東京の深川につき、かれらは、北新堀(きたしんぼり)の藩の御用商人松屋勘兵衛方に入った。

勝静は、「積立丸」で松部をはなれ、江戸湾に入って五月二十日に浦賀についた。そこには松屋勘兵衛方の小舟が来ていて、それに乗り移り、深川に上陸して勘兵衛方に入った。

その家には陸行した家臣たちが待っていて合流し、一泊して翌日、釜屋堀(かまやぼり)の釜屋権右衛門の別荘に移って潜伏した。

次の日、別荘に、備中松山藩の重役その他がひそかにやってきて、勝静に会った。かれらは、すでに陸行して松屋勘兵衛方に入っていた勝静の家臣たちと、重要な話し合いをしていた。

重役たちは、勝静が外国にのがれたいという希望を持っていることを知り、それでは藩をつぐ者がいないので、なんとしてでも勝静に自首してもらわねば、藩の存立はおぼつかないと考えていた。すでに桑名藩の松平定敬は、その後、箱館を脱出し、前々日の二十日に尾張藩に自首して出ているが、命をうばわれる恐れはない様子。

重役たちは、言葉をつくして勝静を説得し、たとえ自首しても一命にかかわることは決してなく、自首して欲しいと懇願した。

勝静は、たとえ草木とともに朽ち果ててもと死を覚悟していたが、二十三日、重役たちの説得に、ついに自首することを決意した。

二十五日早朝、かれは別荘をはなれて菩提寺の駒込吉祥寺に入り、翌日、宇都宮藩に自訴状を提出した。宇都宮藩では、ただちにその自訴状を新政府に差し出し、勝静は、支藩の安中藩に移され、指示を待った。

その年の八月十五日、新政府は、極刑に処すべきところ「出格之寛典」をもって、死一等を減じ、安中藩あずけとすると伝えた。

翌月、さらに藩の再興がみとめられ、また桑名藩の松平定敬も死をまぬがれ、後に許された。

肥前唐津藩の世子小笠原長行は、どうなったのか。

仙台藩領勝見浦で備中松山藩の板倉勝静と別れた長行は、そのまま勝見浦にとどまり、やがて約束通り外国船に乗って横浜へついた。医者に変装したかれは、随行してきた尾崎という家臣とも別れ、一人品川に出て安宿に泊まり、そこから東京に潜行した。

慎重なかれは、徹底した隠密行をつづけ、わずかなつてをたよってそれらの家々を泊まり歩き、本所の古書店である和泉屋金右衛門方にも潜伏したりした。長行は読書を好み、金右衛門は、藩邸に出入りしていたのである。

金右衛門宅では、縁の下の穴蔵にひそみ、金右衛門の後妻が食物をそこに運び、使用人は全くそのことに気づかなかった。

箱館から随行してきた家臣の尾崎とひそかに連絡をとり、尾崎の手引きで上野の湯島天神に近い

御家人であった老人の屋敷の一室に移り住んだ。

尾崎は、旧藩の者たちに、世子長行は、

「御決意なされていた通り、外国船でアメリカへ身をお避けになった」

と告げ、実際は東京に潜伏していることを藩の勘定役にのみ伝えた。

勘定役は、尾崎の指示で横浜在住のアメリカの商人に為替を振り込み、それが尾崎の指示した人物に渡され、さらにその人物が湯島に持参する方法をとった。長行があくまで身をかくしていたのは、長州征伐の総指揮をとり、旧長州藩士が要職についている新政府では、自首すれば切腹はまちがいないと考えていたからであった。

そのうちに旧幕府の要人への追及がゆるやかになり、自首者には寛大な処置がとられるようになった。そのため、旧藩士たちは赦免運動に手をつけた。

旧唐津藩をついだ小笠原長国は、明治五年七月に東京府知事大久保一翁に、

「長行儀、戊辰之年（明治元年）、奥州へ脱出仕、其後函館ヨリ洋船ニ乗込、折柄風浪悪敷、竟ニ海外へ漂泊」

したが、この度、帰朝いたしましたのでお届け申し上げます、と記した届書を提出した。外国から突然帰国したようにしたのだ。

拘束された長行は、謹慎を命じられたが、一カ月ほどで許され、湯島をはなれて駒込動坂に移った。その地での生活は飄々としたもので、地元の老農と話す以外は、あらゆる交際を絶った。

明治二年五月、箱館の五稜郭を本営として戦っていた榎本軍は降伏し、全国が新政府軍の支配下

におかれ、平和が訪れた。それにともなって新しい秩序がうまれ、戦乱によって乱されていたものが徐々に回復し、人心は平静化した。

輪王寺宮は、伏見宮の離れの建物の一室にとじこもって日を過ごしていた。謹慎の身として同じ邸内に住む父伏見宮禅楽親王と顔を合わせることもなく、人の訪れは全くなかった。

十月四日、伏見宮家の者が庭をやって来て、宮に屋敷にくるようにと伝え、初めて部屋を出て屋敷におもむいた。

座敷には剃髪して仏門に入っていた禅楽親王が待っていて、朝廷よりの御沙汰書を読み上げた。謹慎を解き、伏見宮に復帰し、廩米三百石を賜うとある。

手をつき、その言葉をきいた宮は、嗚咽を抑えることができず頭を深くさげていた。同時に、家臣の麻生将監、山本主膳の謹慎も解かれ、部屋にもどってそれを伝えると、かれらは涙ぐんでいた。

自由の身になった宮は、翌日、麻生、山本を従えて兄の山階宮晃親王、聖護院宮嘉言親王、弟の華頂宮博経親王の屋敷をそれぞれ訪れ、謹慎が解かれたことを報告した。そのことをつたえきいた各宮家や公卿、比叡山の寺々から祝いに訪れてくる者が多かった。

麻生は、日光山と上野東叡山に手紙を出してそのことを報せ、二十一日にはそれらの寺の僧が連れ立って訪れてきて、祝いの言葉を言上し、金を献上した。すでに貯えもつきていたので、応対した麻生と山本は、それを受領した。

月があらたまり、十一月十日には、江戸から宮に随行して奥羽にのがれた旧家臣の関右京と安藤直記が訪れてきた。二人は丹波亀山藩あずけとなって閉居していたが、その年の二月九日に赦され

て上野東叡山にもどり、宮が謹慎を解かれたのを知ってはるばる京にやってきたのだ。

宮の前に平伏した二人は、肩をふるわせて泣き、宮も涙を流した。江戸を脱出し奥羽を転々とした折のことが思い起こされ、言葉もなかった。

ようやく落ち着きをとりもどしたかれらは、麻生、山本をまじえて思い出話をし、笑い声も起こった。苦難の日々であったが、それがかえってなつかしく、涙ぐみながらもかれらの表情は明るかった。

関と安藤は、上野東叡山の寺々から寄進されたまとまった金を持参してきていて、それを献上した。

苦悩

寒気がきびしさを増して雪も舞い、その年も暮れて明治三年正月を迎えた。

二月十六日は宮の誕生日で、その日、還俗して初めて魚肉を口にした。宮、二十四歳であった。

謹慎が解かれた後、宮は儒者を招いて漢学をまなんでいたが、六月二十七日に京都御所内にある大学に入学した。引立烏帽子を頭につけ、直垂を着て小刀を帯び、徒歩で学校に通った。

宮は、すぐ上の兄である東京在住の東伏見宮嘉彰親王と手紙を交わしていたが、嘉彰親王から東京にくるようすすめられた。寛永寺山主であった宮は、東京の町々がなつかしく、父禅楽親王の許しを得て、東京に行くことをきめた。

すでに明治天皇は再び東京に行幸し、東京城を皇居と定めてそこに住んでいた。嘉彰親王は、一時は朝廷軍に反抗した宮を、天皇のおそば近くにおくことが、なにかと好ましいと考えたようであった。

宮は、旅支度をととのえ、麻生、山本の両家臣をともなって十月二十七日に京都をはなれ、閏十月二日に東京につき、浜町の東伏見宮の屋敷に入った。

宮の幼名は能久で、その名に復すことを願い出て許され、伏見満宮能久親王と称するようにな

った。すでに徳川慶喜は謹慎をとかれ、静岡に住んでいた。

嘉彰親王は、戊辰戦争の鳥羽、伏見の戦いに軍事総裁として参画し、会津征討越後口総督として北越地方の鎮定にあたった。維新成って、前年の七月には兵部卿に任じられるなど、その業績は輝かしいものであった。

嘉彰親王の好意で東京に招かれたが、久しぶりに親王の前に座った宮は、激しい萎縮感にとらわれた。

幕末の激動期に、朝廷は王政復古を宣言し、長年日本を支配してきた幕府打倒に踏み切った。皇族、公卿はそれを推し進めるため力をつくし、薩摩、長州両藩を主力とした兵力によって鳥羽、伏見方面で戦端が開かれた。天皇は錦の御旗を授け、朝廷軍は、それをかかげて江戸にむかって進撃し、無血占拠して江戸城を接収した。さらに大軍は奥羽一帯に兵を進め、蝦夷に立てこもった榎本軍も圧伏して日本を完全支配するに至った。その間、皇族は、公卿や薩長をはじめとした藩の武家を参謀に征討軍の最高位にあって大軍を統轄し、嘉彰親王もその有力な人物であった。

戦乱はやみ、天皇は東京城に皇居をもうけ、それにともなって皇族たちは京都から東京に移り、創設された新政府によって、それぞれ維新の功労者として顕職についている。

宮は、それらの皇族の中で朝廷軍に反抗の姿勢をとったのは、むろん自分のみであることに、苦しみ悶えていた。

宮と対座した嘉彰親王の顔には、朝敵となった弟に対する複雑な表情がうかんでいた。口を開けば、なんという愚かしいことを、といった激した言葉がもれるにちがいなかった。嘉彰親王は、言

うべきこともないらしく黙っていた。
宮は、頭を深くさげ、その場をさがった。
あてがわれた部屋で、宮は座りつづけていた。庭の枯れた樹木を、うつろな眼でながめていた。
宮は、兄の嘉彰親王が、早くからヨーロッパへの遊学を希望していることを知っていた。幕末の戦争の指揮をとった親王は、欧州諸国の軍制を実地でまなびたいと望み、それを出願していた。
宮が東伏見邸に入ってから五日後、天皇からの使者が来て、嘉彰親王のイギリス留学を許可することを伝えた。
嘉彰親王は大いに喜び、邸内は賑わいにみちた。外遊するにあたって、天皇は外務省に対して、親王を賓客としてではなく一書生として扱うよう、イギリス政府に指示することを命じた。
あわただしく外遊の手続きが進められ、渡海免状も交付されて親王は東京をはなれ、閏十月二十五日、横浜から外国船に乗って出立した。
屋敷から出る時、見送りに出た宮に、
「体を損なわぬように……」
と、親王はひそかに声をかけた。
宮は、涙ぐんで頭をさげていた。
親王が東京をはなれた日、太政官の役人が来て、思いもかけぬことを宮に伝えた。勅によって東伏見宮の屋敷をはなれ、有栖川宮熾仁親王の屋敷に移るように、という。
宮は、胸のはり裂けるような驚きをおぼえ、顔から血の気が失せた。

兄の外遊によって、他に移ることをなんとなく予想はしていたが、それが有栖川宮家であるとは想像もしていなかった。宮が徳川慶喜の謝罪嘆願のために駿府に行き、それを東征大総督の有栖川宮熾仁親王が、にべもなく拒否し、宮を追い払ったことは広く知れ渡っている。その冷たいあしらいに憤った宮が、有栖川宮からの要求をことごとく拒絶し、宮が奥羽にのがれ、朝廷軍に叛旗をひるがえしたことも知られている。
いわば維新の激動期に起こった出来事で、はからずも有栖川宮と宮は、激しく敵対した立場におかれ、しかも個人的に憎しみと怒りをいだき合う間柄であった。そのような宮を、こともあろうに有栖川宮の屋敷に住まわせようという。それは、新政府内で絶大な権力を保持する有栖川宮の意識的な意向ではないのか。
宮が幽閉された後、謹慎が解かれても、有栖川宮の宮に対する憎しみ、怒りは少しも衰えることなく、手もとに引き寄せ有形無形の圧力をくわえようとしているとしか思えない。
宮は、有栖川宮の底知れぬ怨念の深さに戦慄した。
しかし、太政官の役人から渡された書面には、勅により有栖川宮の屋敷に移るようにとある。勅にとあるかぎり、東征大総督であった有栖川宮のもとにあって、過去を深く反省するようにという御沙汰であるのだろう。
宮は悩み、もだえたが、勅命であるかぎり従わざるを得ない。謹慎は解かれても、朝敵であった汚名は消えることなくそのまま残っているのだ、と思った。
その日、宮は身のまわりの物をまとめ、翌日、東伏見宮の屋敷をはなれ、広大な有栖川宮の屋敷

におもむいた。

有栖川宮熾仁親王は、その年の四月三日、東伏見宮嘉彰親王の後をついで陸海軍を統率する兵部卿に任じられていて、宮が屋敷におもむいた時は兵部省に出勤していて留守であった。

宮は、玄関で親王のおつきの者に挨拶し、庭の隅にある建物の中の部屋に案内された。

部屋に入った宮は、自分の体が鉄線でしばりつけられたような息苦しさを感じた。東伏見宮の屋敷では呼吸もでき、まどろむこともできたが、そのような空気はない。

食膳を女が運んできたが、宮は箸もとらず、再びやってきた女はそれを黙ったままさげていった。女は、食事に手もつけなかったことをいぶかしむ風もなく、かたい表情であった。

宮は、女の眼に自分を朝敵とみているのを感じた。眼には見えない牢格子が周囲にあって、そこに閉じこめられているような思いであった。有栖川宮邸をはなれても、自分にそそがれる眼は、女と同様のもので、皇族でありながら、錦の御旗に抗した存在と思われているはずだった。

自ら命を断ちたい思いであった。死をもって許しを請い、それによって、罪深きことを心から悔いていたことを世にしめす。しかし、それがもとより叶わぬことを宮は知っていた。皇族に自殺は許されず、あえて決行すれば、朝廷に対する無言の反抗とみなされる。たとえ朝敵の汚名を負わされても、生きつづけてゆかねばならぬ身であった。

悶々と日をすごすうちに、この国からはなれたい、と思うようになった。仙台で恭順書を提出する直前、外国へ身を避ける案が出たが、それは一つの案にすぎず、ひたすら朝廷に許しを請うのが自分の道だと考え、総督府の意のままにしたがった。それはそれでよかったが、外国へのがれる道

はないのか。明治政府が創設されて以来、体制を強化充実させるため、各分野の者の外遊がことに増加している。兄の東伏見宮がイギリスにむかったのもその一つであった。

熱いものが、胸の中にひろがった。

成るか成らぬか心もとないが、外国への遊学願いを出してみようか。一応、謹慎は解かれていて、請願書を提出するだけは許されるはずだ。

その思いが抑えつけられぬほどたかまり、急に立ち上がると、座敷の中を歩きまわった。もしも、外遊が許されれば、この国からはなれ、朝敵に対する視線を浴びずにすむ。

すでに夕闇が濃く、屋敷に仕える男が入ってきて行灯に灯を入れた。男は無言で廊下に手をつき、去っていった。宮は、行灯の傍らに座って、沈思した。

謹慎生活を送るようになってから気持ちが臆しがちで、なにをするにもあれこれと考え、謹慎が解かれて以後も変わりはない。請願書を出しても、その行為自体が非難されはしないか。そのような逡巡も、この国からはなれたいという強い願いで打ち消された。なにがなんでも請願書を提出し、外国への遊学を認めてもらえるよう力をつくしてみよう。

翌閏十月二十七日も晴天で、九時すぎに馬車が門から出てゆくのが見えた。有栖川宮が兵部省へむかう時刻であった。宮は、屋敷からくるように言われれば参上し、挨拶をするつもりであったが、そのような動きはみられない。

宮は、机の上に紙を置き、筆をとって請願書の下書きをはじめた。

筆をとめて思案し、文面を書き改め、削除し、加筆することを繰り返した。提出先は、太政官直

属の弁官あてとし、筆を進めた。

午後になって文章がまとまり、宮は慎重に点検し、墨をおろして筆をとり、浄書にかかった。

「臣公現（宮の出家した折の法号）」として、

「過ぐる日、まことに愚かしくも事情にうとく、あやまって賊徒となり、不敬の罪をおかしたことをお詫びしたくも、その方法を知りません。それにもかかわらず朝廷は謹慎をお解き下され、その上、廩米三百石の高禄をたまわり、その御恩にどのようにしてお報いするか、日夜、苦慮しております」

と、朝廷に反抗したことを深く悔い、恥じていると記し、それにつづいて、

「ひそかに思いますには、現在の情勢を判断いたしますのに海外の各国の実情に通じ、その長所をまなばなければ、朝廷の御恩の万分の一すらお報いできぬと存じます」

と述べ、さらに、

「伏してお願いしたいのは、イギリスにおもむき学問にはげむことができますれば、私のなによりの喜びであります。なにとぞ海外遊学をお許しいただきたく」

と、記し、「泣血歎願シ奉ル」という哀訴の文字をつらね、「頓首再拝、明治三年閏十月廿八日公現」とむすんだ。

書き終えた頃には、座敷に夕闇がしのび入ってきていて、宮は、読み直し、自分の真意が文章にあらわれていることに満足した。

翌二十八日も、澄み切った青空で、昨日の朝と同じく九時すぎに有栖川宮をのせた馬車が門を出

ていった。宮は、嘆願書を手に屋敷を出ると、太政官におもむき、嘆願書を持参したので太政官直属の弁官に手渡したいと係の者に告げた。

宮は一室に通され、やがて弁官が姿をみせ、遊学願いを提出したいと言ってそれを渡した。弁官は嘆願書を一読し、

「たしかに受領いたしました」

と言って、頭をさげた。

宮は、少し足がふらつくのをおぼえながら、外に出た。

晴天の日がつづき、十一月に入っても空は青く澄んでいた。

嘆願書を提出してから、願いの筋がいれられるかどうか、落ち着かぬ日をすごした。謹慎が解かれて間もない身で、そのような願書を出すのは懺悔の気持ちがうすいとして、うけいれられぬどころか、憤りをもたれるかも知れない。嘆願書を出すべきではなかったという後悔の念が、胸にうかんだ。

相変わらず、九時すぎには有栖川宮熾仁親王を乗せた馬車が門を出てゆく。屋敷からは宮にくるようにという招きはなく、親王が自分を無視しているのか、それとも会いたくないと思っているのか、いずれともわからなかった。

七日も快晴で、有栖川宮が出勤して間もなく、駕籠が門内に入ってきた。乗っていたのは太政官の弁官で、屋敷の者に案内されて宮のいる建物に入り、宮と対座した。

「先般、御提出なされた願書が天子様に御承認され、プロシヤ（ドイツ）留学をお命じ遊ばされま

した」

弁官は、つつしんで言うと、書面を宮に手渡した。

宮は、胸が熱くなるのをおぼえ、それをおしいただいた。

弁官は立ち、部屋を出ていった。

喜びが全身に満ち、涙でかすむ眼で書面の文字を追った。普魯士留学を命ずとあり、年金五千円を下賜する、と記されている。その文面に天皇の温情を感じた。朝敵であった自分に、天皇は寛大な気持ちで外遊を許し、過分な年金まで下賜してくれる。天皇は自分の甥にあたり、この恩にむくいねばならぬ、と思った。

宮は、親しい者に外遊をつたえ、上野東叡山の寺々からも僧たちが祝いにやってきた。僧の中には、外遊を許されたことで謹慎が全く解かれたと息をつまらせ、嗚咽する者もいた。

二十五日、宮は、朝廷からの支度料で正装し、皇居に参内し、天皇に拝謁した。宮は、外遊を許して下さったお礼を言上し、近日中に出発することを報告した。天皇は、弘光の短刀を宮に賜った。

外遊にあたって随行員四名と二名の家従がしたがうことになっていて、随行員には支度料銀千ドル、家従には七百ドルが下賜されることがつたえられた。

宮は、感動し、皇居を退出した。空のまばゆい青さが、眼にしみた。

新しい道

十二月三日、宮は随員をしたがえて横浜でアメリカ商船「グレート・ルエベブリック号」に乗った。船にはフランスに留学する公卿の西園寺公望、アメリカに赴任する外交官森有礼、ドイツにおもむく医官の池田謙斎らが乗っていた。

船は出港し、宮は日本をはなれることに救われた思いであった。有栖川宮家にとどまっている間、熾仁親王と一度も顔を合わすことはなかったが、絶えず威圧されるような息苦しさを感じていた。それから解放されたことに、たとえようのない喜びを感じていた。

太平洋を東進し、出港後二十五日でサンフランシスコに入港、初めて乗る汽車でニューヨークをへてワシントンについた。その地で、森有礼とともに大統領のグラントと会見し、ニューヨークにもどって商船でロンドンについた。さらにロンドンをはなれ、プロシヤのベルリンに入った。明治四年二月十八日であった。

宮は、ドイツ語の学習に極力つとめ、それは進んで翌年の春頃には、ほぼ精通するまでになった。その間、伏見宮智成親王によって創設された北白川宮家が、親王の死によって宮は三月二十三日、北白川宮をつぎ、北白川宮能久となった。

ついで九月五日には、父君の死がつたえられ、宮は喪に服した。

宮は勉学につとめ、明治六年に入るとプロシヤの軍学校の教官である士官らを招いて、数学、測地学、兵制の学科をまなび、充実した日々を送った。さらに七月には、坊城俊章を随員としてオーストリー国のウィーンにおもむき、万国博覧会を見学したりした。ホテルで、全権公使井田譲と会食をしながら博覧会の説明を受けた。

その年の暮れ、幕府打倒にいちじるしい功績をあげて太政大臣の任にあった三条実美から書状が送られてきた。留学生全員の帰国が決定したが、宮は除外され、なおも留学を継続なさるようにという内容であった。そろそろ帰国命令があると思っていただけに、その報せは願ってもないことであった。

宮は、陸軍の監理工場をつぎつぎに見学し、七年十二月には、皇帝、皇后、皇太子に謁見し、翌年には大演習におもむき、十月には陸軍大学校の第一期生となった。

学資金は増額され、祖国からの連絡で歩兵少佐に任ぜられたことを知った。

ドイツへの留学は、宮にとって満足すべきもので、精神的にも安定した。しかし、彰義隊の戦いで上野の山からのがれた日のことは、折にふれて思い起こされる。夜、ベッドに身を横たえてからも、奥羽にのがれた日々のことや、その後、京に幽閉されたことが次々によみがえり、寝につくことができなかった。

ドイツ国では、宮を皇族として礼遇し、八年九月には陸軍近衛連隊付として大演習におもむいたりした。

翌月、宮は、陸軍大学校に第一期生として入学し、軍事知識を深めた。

九年四月下旬、太政官から一年後に帰国するようにという連絡がもたらされた。宮は、一層、軍事研究につとめ、八月の大演習には参謀団に加わって演習の指揮をしたりした。

翌十年四月九日、陸軍大学校を卒業し、これによって留学の使命をすべて果たしたことになった。宮は、親しくなったドイツ人に別れの挨拶をし、十二日にベルリンをはなれた。

陸路、アドリア海の入り口にあるブリンディジに行って商船に乗り、アレクサンドリアに上陸した。宮は、カイロを見物し、スエズに行って再び乗船した。

船は、フランス郵便船で、六月に香港につき、やがて香港をはなれて七月二日に横浜に入港した。外遊中、宮には、赤坂門内紀尾井町の元紀州藩邸の跡地が下賜されていて、そこに建てられた屋敷に入った。

六年余の留学で、宮は軍事のみならず多くの知識を身につけ、風格をそなえていた。宮は三十一歳になっていた。

その年の二月、鹿児島で西南戦争が起こり、天皇は京都におもむいていた。

宮は、ドイツから帰国したことを奏上するため京都におもむき、八月二十二日、御所に参内して留学の御礼を言上した。そのまま、京都に逗留したが、朝廷軍参謀となっていた西郷が新政府に反抗の兵を起こしていることに、宮は複雑な思いであった。新政府軍は、田原坂で西郷軍を破っていたが、なおも戦闘はつづき、宮はその経過を見守っていた。

九月下旬に入って西郷が自刃、西南戦争は終結した。

宮は、十一月六日、東京に帰った。

翌明治十一年二月に戸山ケ原の陸軍学校に入学、十二月には天皇直属の近衛局に出仕を命じられ、同時に勲一等に叙され、旭日大綬章を授けられた。

朝廷軍に反抗した者たちの多くはすでに罪を許され、豊かな能力をもつ者は政府に登用され、顕職についていた。榎本武揚はその筆頭格で、オランダ留学の経歴があることから、七年一月に海軍中将兼特命全権公使としてロシア公使館に勤務していた。榎本と同じように、宮も有為の皇族として認められていた。

叙勲後、元土佐藩主の山内豊範（とよのり）の妹光子を妻に迎え入れた。宮は、歩兵中佐に進級していた。その後、宮は、軍人として着実に任務を遂行し、十四年十一月には歩兵大佐に進んだ。

翌年、第一王子が生まれたが、それは側室との間に生まれた子で、さらに三年後には王子と王女の生誕をみたが、それらも側室を母としたものであった。

その年の十一月、光子妃の兄山内豊範から妃を実家に引き取りたいという申し出があった。光子妃は、かねてより神経衰弱の気味があり、それが日を追っていちじるしく昂（こう）じ、宮家の正室の任にたえなくなっているのを知った豊範が、妹を引き取りたいと申し出たのである。

宮は、陸軍少将として歩兵第一旅団長の要職にあっただけに来客も多く、光子妃を哀れに思いはしたが、軍務を全うするには豊範の請いをいれるべきだと考え、実家にもどした。

翌年七月、宮は、旧宇和島藩主伊達宗徳（むねえ）の娘富子と再婚した。その年の暮れに大勲位に叙せられ、菊花大綬章をさずけられた。

明治二十四年、宮は四十五歳になり、四男四女の父になっていた。翌年、陸軍中将に任ぜられて第六師団長となり、二十六年には第四師団長となって師団のある大阪に赴任していた。

二十七年八月、日清戦争が勃発した。朝鮮で東学党指導の大規模な農民暴動が起こり、その鎮圧にてこずった朝鮮政府が清国に援兵要請をおこなった。清国は、これに応じて出兵し、日本は朝鮮が清国の属国となることを危惧して抗議したが、清国がこれを拒否した。そのため日本も出兵し、イギリスが二度にわたって調停にあたったが、効果なく、全面的に対決することになり、日本は清国に宣戦布告をしたのである。

清国の海軍はきわめて優秀で、日本海軍よりはるかに卓越し、日清戦争は両国海軍の激突によって開始された。

日清戦争

日本海軍は、豊島沖の海戦で勝利をおさめ、朝鮮は日本の勧告をいれて攻守同盟をむすんだ。陸戦では牙山の戦闘で清国軍に打撃をあたえ、平壌でも日本軍は清国軍を圧倒して優位に立った。日本軍の戦死者一八〇人、負傷者五〇六人に対し、清国軍の戦死者約二、〇〇〇、捕虜六〇〇で負傷者多数であった。

不気味であったのは、清国海軍の動静であった。その動きは全く不明で、日本は陸軍の輸送をおこなっていたが、清国海軍によってそれが絶たれ、大損害をこうむる恐れが多分にあった。それは、全作戦に致命的な影響をあたえることになる。

制海権を確保することが最も重要な課題で、日本海軍は有力な清国海軍に死力をつくして決戦をいどむ以外に活路はないと判断していた。

連合艦隊司令長官伊東祐亨は、清国海軍の動静をさぐり、威海衛に艦隊主力がいると推測して艦隊を出動させたが、清国艦隊の艦影を見ることはなかった。

連合艦隊は、陸軍の輸送に従事していたが、明治二十七年九月十七日、黄海で水師提督丁汝昌ひきいる清国の主力艦隊を望見した。東洋一の堅艦である甲鉄艦の「定遠」「鎮遠」（共に七、三五〇トン）を中央に、他の十二隻の軍艦を左右に配置した三角隊形で東方に進み、水雷艇六隻が後方を続航していた。

午後零時五分、伊東司令長官は決戦を期して旗艦「松島」（四、二一〇トン）に戦闘旗をかかげさせ、清国艦隊に突き進んだ。

「吉野」（四、一六〇トン）を旗艦とする遊撃隊の四隻の軍艦は、快速力で清国艦隊の後方にまわり、「松島」以下六隻の本隊は正面から砲弾を浴びせかけた。

戦況は、連合艦隊に有利に展開し、「致遠」以下五隻の清国軍艦を撃沈し、「定遠」「平遠」に火災を発生させた。これに比して連合艦隊は撃沈された艦はなく、勝利をおさめた。黄海海戦と称された。

大本営は東京に設置されていたが、戦局が進むにつれて作戦指揮に不便であることから、天皇は新橋駅から汽車で出発、名古屋、神戸でそれぞれ一泊後、広島に到着した。

大本営の最高指揮者である参謀総長には有栖川宮熾仁親王が任じられていて、首相伊藤博文、陸相大山巌、海相西郷従道らとともに随行し、広島に大本営がもうけられた。

黄海海戦の勝利で、連合艦隊は一挙に優位に立ち、陸軍部隊は東洋一の要塞と言われた旅順口の包囲、攻撃に移った。

フランスの提督クールベが、五十余隻の堅艦と十万の兵力で攻撃しても突破に半年はかかるだろうと感嘆した堅塁であったが、わずか一日で陥落した。

翌二十八年一月二十日には山東半島に上陸、二月二日には連合艦隊が威海衛の総攻撃を決行し、

水雷戦隊が、清国艦隊「定遠」を攻撃、大破させ、「来遠」「威遠」ほか一隻を撃沈した。ついで「靖遠」を撃沈し、「定遠」艦長は拳銃で自殺して「定遠」を自爆させた。

提督丁汝昌は、十二日午前八時、使者を「松島」に派遣して降伏書を提出、伊東司令長官はただちにそれをいれ、葡萄酒、シャンペン等を贈った。

翌十三日、再び使者が「松島」に来て復書を呈し、丁提督が毒を仰いで自殺したことを告げた。

国内は、相つぐ勝利に人々は興奮し、多くの軍歌がうまれた。

そうした中で、北白川宮能久親王は、苦悶の日々をすごしていた。

宮は、日本が清国に宣戦布告後、参謀総長有栖川宮熾仁親王とその後任と目されていた兄の小松宮彰仁親王（東伏見宮嘉彰親王改名）にそれぞれ書状を送っていた。

宮の胸中には、上野の彰義隊の戦いに関与し、ついで奥羽にのがれて奥羽越列藩同盟の盟主になったことが、依然として古傷のように残っていた。京で幽閉生活を送ったものの翌年には赦されて、嘆願の末、ドイツへの六年余にわたる留学の旅に立った。朝敵の身であったのにそのような扱いを受けたことは、すべて天皇の温情によるものと感謝していた。

明治維新成立に勲功のあった熾仁、彰仁両親王は、その後も佐賀の乱、西南の役の鎮圧につとめ、それぞれ国情を安定することに貢献していた。それと比較して宮は、自分がなにも国のために力をつくしていないことを恥じていた。

宮は、日清戦争が勃発するに及んで、この機会に国恩に報いようと考え、従軍をねがう請願書を両親王に送ったのである。

それは請願書というより、悲痛な嘆願書であった。かつて朝廷に反抗した愚かしさを恥じ、深く後悔していると記し、その汚名をこの機会にそそぎたく、最前線に派遣して欲しい、と切々と訴えたのである。

清国に宣戦布告後、日本軍は終始優位に立ち、陸軍は平壌を攻略し、海軍は黄海海戦で大勝して、なおも攻撃の手をゆるめなかった。宮は、戦争の推移を見守りながら、激しい苛立ちをおぼえていた。嘆願書は大本営にとどけられているはずだが、なんの反応もない。朝敵であった過去が依然として尾をひいていて、嘆願書が握りつぶされているにちがいなかった。

自然に、有栖川宮熾仁親王の顔が眼の前にうかんだ。

大本営の最高の参謀総長の任にある親王は、物事をすべて決裁できる立場にあり、嘆願書に回答がもたらされないのは、親王が今もって執拗な憤りを自分にいだいているからとしか考えられなかった。皇族は、陸、海軍いずれかの軍人になることが義務づけられ、日清戦争にもそれぞれ関与していたが、宮にはなんの命令も下されていなかった。

その年もむなしく暮れ、明治二十八年正月を迎えた。大阪の町には戦勝気分があふれ、官邸に年始の挨拶にくる者たちの表情は明るかったが、宮は沈鬱な思いであった。

前年の暮れ頃、宮は、有栖川宮が病におかされ、広島をはなれて摂津国舞子の別邸で療養していることを耳にした。大本営の参謀総長の職務は、陸軍大将小松宮彰仁親王が代行しているという。

小松宮は、宮の兄東伏見宮嘉彰親王で、宮を東京に呼び寄せた直後、海外遊学を許されてイギリスにおもむき、兵学等をまなんで二年後に帰国した。その後、佐賀の乱に征討総督として鎮定にあ

たり、十年の西南戦争に際しても軍功があって、十三年三月に陸軍中将に昇進した。その後、小松宮と改称し、名も彰仁と改めていた。二十三年六月には大将となり、日清戦争が勃発すると大本営に入り、有栖川宮を補佐していたのである。

有栖川宮は重態の模様であったが、軍の士気に係ることでもあるのでその病状は公表されていなかった。しかし、宮は、一月十五日、有栖川宮が危篤におちいり、死去したことを知った。六十一歳であった。

その死は、恒例によって秘されていたが、遺体は重態のままとして汽車で東京に運ばれ、一月二十四日、勅命によって国葬が営まれることが公表された。宮は、師団の営庭に弔旗をかかげさせた。

二日後、後任の参謀総長に小松宮彰仁親王が任命されたことが、発令された。

あらためて、上野の彰義隊の戦いのことがよみがえった。宮は、彰義隊と運命を共にしようという確かな気持ちになっていたが、それは徳川慶喜謝罪の嘆願で駿府（静岡）におもむいた折の有栖川宮の冷ややかな態度に屈辱感をいだいたからであった。有栖川宮の顔には、あきらかに強大な武力を背景にした傲慢さがみられ、同じ皇族でありながら見下すような尊大さのみがあった。その有栖川宮が死んだという。宮は、時間の容赦ない流れを感じた。

小松宮が参謀総長に就任してから二日後、突然、宮は第四師団長を免ぜられ、近衛師団長に補すという命令を受けた。天皇直属の近衛師団の長に任ぜられたことは昇進で、二月二日、宮は大阪をはなれて東京にもどり、近衛師団長の任についた。

この転任は、兄の小松宮が参謀総長に就任直後に発令されたことから、小松宮の指示であることはあきらかだった。

小松宮の真意がなんであるのか、宮はひそかにうかがっていたが、三月十七日、参謀総長の小松宮名で近衛師団に対して広島へくるようにという命令が下された。広島にゆくことは、日清戦争への出動を意味するものであった。

宮は、自分の嘆願がかなえられたことに大きな喜びをおぼえると同時に、今は亡き有栖川宮の自分に対する憎しみの深さをあらためて感じた。奥州で恭順書を提出して謝罪し、朝廷軍の護送で東京にむかい、落ち着き先も麹町山王社と定められていたが、千住宿で東京に入ることを禁じられた。随行の僧、家臣らは突き放され、それまで乗ってきた輿から粗末な旅駕籠に移されて京に送られ、幽閉された。それは、すべて東征大総督であった有栖川宮の厳命で、駿府以来の激しい憎しみによるものにちがいなかった。

小松宮が参謀総長に任じられたと同時に、近衛師団長に補せられ、大本営のおかれた広島にくるように命じられたことは、有栖川宮が宮の提出した嘆願書をこれまで放置していたことをしめしている。宮は、有栖川宮の死によって、自分の前に執拗に立ちはだかっていた厚い壁が突きくずされ、明るい道が開けているのを感じた。

胸に喜びがあふれ、宮は、師団とともに広島へおもむく準備にとりかかった。

三月二十五日、宮は、幕僚とともに師団をひきい、汽車で東京をはなれて二日後の午前十時三十分、広島駅についた。ただちに大本営におもむき、参謀総長小松宮に着任の挨拶をした。

小松宮は、宮の手をかたく握りしめ、

「請願書は見た。過ぎ去った日々のことはもう忘れるがよい。これからはお国のためにつくすように……」

と、言った。

その言葉にすべてが語りつくされているように思え、宮は兄の温情に眼をうるませた。

宮は、大本営勤務の陸軍参謀本部次長川上操六、海軍軍令部長樺山資紀両中将とも会い、戦況を聴取した。勝敗の大勢はきまり、すでに清国との間で講和会議が推し進められていて、三十日には日清休戦条約が締結された。

四月十日、宮は、小松宮の命令で近衛師団をひきいて宇品から乗船、大連におもむいて第二軍司令官大山巌と会見し、さらに旅順に入った。

小松宮は、日清戦争総指揮のために創設された征清大総督に任じられて旅順につき、宮は小松宮と水師営を視察したりした。

四月十七日、日清講和条約がむすばれ、朝鮮の独立承認、遼東半島、台湾、澎湖列島の割譲、賠償金二億両の支払い等が決定した。

しかし、その直後、清国に強い野心をいだいていたロシアは、ドイツ、フランスを誘って旅順、大連をふくむ遼東半島の割譲に激しく反対し、武力行使もほのめかした。日本はその干渉に窮地に追いこまれたが、対抗する武力はなく、三国の要求をそのまま受けいれて遼東半島の還付を決定し、五月五日、三国にそれをつたえた。

五月十七日、近衛師団に小松宮大総督から新たな命令が発せられた。講和会議で日本領に定められた台湾に不穏な動きがあり、五月に入るとそれがにわかに武力抗争の様相をしめしたので、大総督はそれを鎮定させるため近衛師団の台湾への投入を定めたのである。

台湾では、日本領になったことに憤慨した清国の湖広総督張之洞が、台湾が独立国であることを宣言し、日本に公然と反抗する態勢をとった。唐景崧を大総統として政府機構を定め、国旗、紙幣を制定した。台湾には正規軍五万が残存し、戦備をととのえていた。

宮は、ようやく国恩に報いる時がきたことに勇躍し、五月二十九日、軍艦「松島」にみちびかれた大輸送船団で師団をひきいて台湾北部にむかった。

台湾の戦場

近衛師団は、台湾北東端の三貂角に上陸し、敵の抵抗を排除して進んだ。

皇族は、通常司令部にとどまって作戦の後方指揮にあたるが、宮は前例をやぶって先頭部隊とともに進み、甘藷畠に天幕を張らせてそこを司令部とした。宮には、依然として朝敵であったという意識が残り、兵とともに前線にあってこの機会に汚名をそそごうという気持ちが強かった。

師団は激しい抵抗をうけながら前進し、宮は本隊とともに進んだ。宮は草鞋をはき脚半を巻き、双眼鏡と弁当を身につけていた。大風雨に見舞われることもあったが、それもいとわず露営し、宮は人家の土間に戸板を敷かせて身を横たえたが、蚊に攻められて眠ることはできなかった。

師団は基隆攻略を企てて進んだが、険しい山道であったので馬は使えず、砲兵は砲身、砲架を背負って進んだ。雨も降ってきて、宮は竹を切ってそれを杖にして雨中を進んだ。

道には傷ついたり病んだりした兵や軍夫などが身を横たえていて、竹の杖をついて近づく宮の姿に驚いて身を起こし、敬礼する。その度に宮は右手の杖を左手に移して、答礼を繰り返した。

基隆を守備する清国軍の兵力は約六千、近衛師団は四千弱で、清国軍は砲台から砲弾を絶えず浴びせかけ、おびただしい旗をかかげ喊声をあげて迫ってくる。師団の兵は応戦し、六月四日、基隆

市内に突入して砲台に国旗をかかげた。

ついで、台北の攻略作戦に移ったが、豪雨が時々襲ってきて道は泥濘に化し、その中を宮は兵とともに進んだ。

六月七日、台北の城外に達したが、敵は城門をとざして銃撃し、兵は城壁をよじ登ろうとして前進した。その時、一人の台湾女性（陳法）が、弾丸の飛び交う中を城壁に走り寄って竹梯子をかけ、日本兵はそれをよじ登って城内に突入した。

台北を完全に占領した宮は、台湾南部への進撃計画を立てたが、台南付近にいて台湾大総統と称していた唐景崧は、身の危険を感じて髭を剃り姿を変えて厦門にのがれ、敵将劉永福は、なおも接戦のため残っていた。

師団の将兵は、激しい抵抗にあいながらも各地を占領して南下した。道はせまく険阻で、食料の補給ができず、兵たちは畠の甘藷をかじって前進した。

七月に入っても、戦闘はつづき、八月にはさらに激化し、途中、蕃社の首長の父子が従軍を願い出て、宮はそれを許したりした。

師団は、さらに南進した。

その頃、師団に、恐るべき現象が起こっていた。瘧（マラリア性の熱病）が蔓延し、九月に入ると激しさを増し、師団の五分の四の将兵が軽重の差はあったものの病者になっていた。

感染して死亡する将兵も多く、第二旅団長山根信成少将も瘧にかかり、二十八日夜、死亡した。

十月に入ると瘧の流行はようやく下火になって、師団の将兵は雨中を南にむかって進んだ。洪水

で道に濁水が流れ、兵はその中を砲をひき馬をはげまして露営をつづけ、嘉義に迫った。

嘉義には敵の主力が集結していて激しい戦闘がくりひろげられ、兵は竹梯子をかけて城壁を越えて突入し、十月十日午前一時三十分、嘉義城を占領した。

最後の目標は、嘉義南方の台南で、二十三日を期して総攻撃することを決定した。

十七日、宮は、南進を命じ、諸隊はそれによって進撃準備をととのえた。

その夜、宮は発熱し、師団の軍医部長木村達が診察して瘧の兆候と診断し、後方に退いて治療を受ける必要があると言上した。しかし、宮は嘉義をはなれぬと言い、眠りについたが、翌日午前三時頃には悪寒と腰痛をおぼえた。午前七時、部隊とともに嘉義をはなれ、午後一時二十分、大茄芝に至った。

木村が再び診察し、体温三八度で口中が渇き、全身がだるいことがあきらかになり、マラリア治療薬であるキニーネを投与した。

その夜は、到着した地の粗末な家の八畳ほどの広さの部屋に、はずした扉を置き、その上に藁を敷いて身を横たえた。

翌朝の診察では発熱以外に脾臓が肥大しているのが認められ、倦怠感が増していた。

それまでは馬に乗っていたが、それもできなくなって竹で急造した轎に乗って、南下した。

師団の者は気づかなかったが、その日、台南で清国軍を指揮していた劉永福が、講和が成ったと称して兵を解散させ、雇い入れたイギリス船二隻に随従する男女千余名とともに乗って、脱出をはかった。

船がつらなって出航直後、日本軍艦に停船を命じられ、劉の乗っている「スエレス号」が臨検をうけたが、劉は石炭庫にかくれて発見をまぬがれた。

師団は南進し、その日の夕刻、宮の体温は三九度、脈搏九十二で、解熱剤アンチフェブリンを服用、深夜、下痢を起こして下痢どめを投与した。

翌日、イギリスの宣教師三人が来て、劉永福の脱出したことを告げた。

師団の諸隊は大目降という地に至って宿営し、翌朝、宮は三九度で激しい倦怠感を訴え、轎に乗ることもできず、竹四本をむすんで長方形にし、その上に竹蓆と藁、毛布を敷き、それに身を横たえて出発した。

師団の先遣部隊は、なんの抵抗もうけずに台南に入り、宮は、竹製の担架に身を横たえたまま、それを追って進んだ。

ようやく宿営地につき、夕刻の体温は四〇度、倦怠感は一層甚だしさを増していた。木村軍医部長は、キニーネを投与し、赤葡萄酒、レモン水を供した。

宮は、担架で二十二日午後五時三十分に辛うじて台南についた。食欲は全くなく、脾臓の肥大がいちじるしくなっているのが認められた。

病状は悪化し、四畳半ほどの部屋に入って籐の寝台に病臥した。

総督府の軍医部長らが来診し、薬を投与したが、その夜はうわごとを口にするようになり、この日から面会謝絶となった。右肺に水泡音が聴かれ、これは肺炎のきざしで、木村軍医部長は夜を徹して症状を見守った。

二十六日には手足に痙攣がおこり、翌日には手足のみならず舌にも激しいふるえが生じ、肺の濁音が増して、意識は朦朧となった。体温三七度五分、脈搏百三十であった。

二十八日午前三時三十分、脈が不整になり、五時には体温三九度、脈搏百三十、呼吸四十五、手足が冷たくなって全身に冷や汗を流し、意識が失われた。

木村軍医部長は、皮下注射をし、コニャック酒で浣腸をしたが、七時十五分、呼吸の間隔が徐々にひらき、やがて停止した。

木村は、周囲に立って見守る幕僚たちに、宮が薨じられたことをつたえた。

将校たちは、深く頭をさげた。兵とともに進み、最後は高熱にあえぎながら轎、担架に乗ってこの地まできた宮のことを思い、かれらは肩をふるわせて嗚咽した。

宮の薨じられたことが、ごく限られた方面につたえられた。歩兵第四旅団長として作戦指揮にあたっていた弟君の伏見宮貞愛親王をはじめ、海軍軍令部長樺山資紀、台湾副総督高島鞆之助、第二師団長乃木希典の諸将がつぎつぎに訪れ、宮の遺体に別れを告げた。

これらの諸将によって、天皇、大本営への連絡が急いでおこなわれ、宮の死は恒例にしたがって秘されることになった。

午後七時、納柩されることになり、伏見宮貞愛親王立ち会いのもとに、衣替えがおこなわれた。衣服がはずされ、素絹の単衣に白麻の襦袢、白い帯、白足袋に替え、足の裏を合わせて胡座をかいた格好で座柩におさめた。

柩は厚さ一寸五分（四・五センチ）の樟材で作られ、内面に鉛板が張りつめられ、顔の部分に窓が設けられていた。防腐のため遺体の周囲に朱と石灰が隙間なく詰めこまれ、夏の軍衣とズボンが添えられた。

部屋には注連縄を張りめぐらし、行軍の間、宮が身を横たえていた竹の担架が安置されていた。この日から、川村景明少将が近衛師団長の代行となった。

翌二十九日早朝、柩の窓を開き白布をのぞいて貞愛親王をはじめ諸将の最後の別れがあり、柩の鉛板が蠟づけされ、窓は釘づけされた。すすり泣く声が起こっていた。

柩は緞子と繻子につつまれ、軍夫として従軍していた力士四名によってかつがれ、営所の門を出た。佐本寿人少佐ひきいる乗馬憲兵が前後して進み、安平埠頭についた。宮は重症で、東京に帰るという形をとっていた。

貞愛親王をはじめとした諸将の見送る中を、柩は日本郵船所属の「西京丸」（二、九一三総トン）に載せられ、軍艦「吉野」護衛のもとに十時三十分、出航した。

船は北上し、十一月三日、土佐国須崎に仮泊、翌日午前七時四十分、横須賀に入港して柩が上陸した。

宮の妃と三人の御子、兄の小松宮彰仁親王、同妃をはじめ数百人が出迎えた。柩は、夜、汽車に移され、翌五日午前零時四十五分新橋駅着、近衛師団の兵が柩をかつぎ、午前二時霞ケ関の宮邸に入った。

別当高崎五六が、ただちに宮内大臣土方久元と陸軍大臣大山巌に柩が宮邸に到着したことを報告した。これによって午前七時十分、宮の死が公表された。同時に勅命によって国葬が発令された。

国葬は、国家に大きな功労のあった者（皇族をも含む）に対して特旨をもってとりおこなうもので、宮が負っていた朝敵の汚名は完全にぬぐい去られたのである。

宮の死は新聞に大きく報じられた。宮が台湾で竹の担架に身を横たえて指揮にあたったことを新聞紙上で知っていた人々は、その死を悲愴なものとして感動した。

終章

十一月十一日午前九時、宮の柩は屋敷を出た。

騎馬の憲兵隊を先頭に警視、軍楽隊、儀仗兵がつづき、近衛師団の将兵が列を組んで進む。さらに国葬をあらわす錦の御旗が行き、陸軍大将野津道貫以下が柩を守護し、皇族の馬車等が長々とつづいた。

沿道には多くの人々がつらなって手を合わせて見送り、葬列は、十一時三十分、豊島岡についた。

葬場祭がおこなわれた後、柩は埋葬された。

二日後の十一月十三日、宮の指揮していた近衛師団の将兵が台湾の打狗（高雄）をはなれた。師団司令部は「薩摩丸」に乗り、諸兵は十七隻の輸送船に分乗して宇品港に入り、十二月十日、汽車で東京にもどった。台湾で死亡した将兵は、千四百余名であった。

上野の山は、本坊をはじめとした寺々と樹木が焼尽し、惨状を呈していた。彰義隊が反乱を起こした地として、僧はもとより寺男も山内への出入りは禁じられていた。

そのまま放置されていたが、わずかに焼け残った寺が、大名家に返還され、住職が帰山届を提出し、明治二年二月二十七日に許された。と同時に、その日から鐘つき役の柏木家によって、鐘がつ

かれ、寺領であった村々へもひびき渡った。村人たちは、久しぶりにきく鐘の音に涙ぐむ者が多かった。

しかし、上野の山にもうけられた戦死者の墓に遺族がお参りすることは許されず、それが許されたのは明治六年末であった。それでも上野の山は、朝敵の立てこもった地として冷たい眼をむけられていた。維新の戦さはすでに過ぎ去った日のものとして扱われていたが、彰義隊は反政府のいまわしい集団とされ、他に影響をもたらさないために冷酷な処置を受けていた。

上野の山には、わずかに戦死者の遺族が墓参におもむく姿がみられるだけで、閑散としていた。寺院の再建は一切許されず、その間には樹木の芽がふき、桜の花がみられるようになっていた。

明治二十二年末、徳川家の依頼を受けた渋沢栄一、大倉喜八郎が中心になって寛永寺の再興が企てられた。山内に建築資材が持ち込まれ、槌の音がひびくようになった。

それまで姿を見せなかった寺領の村人たちがやってくるようになり、年末に石臼を運び込んで寺々に寄進する餅がつかれた。

寛永寺に静かな安らぎが訪れたのは、日清戦争後であった。

（完）

あとがき

少年時代、上野の山に近い日暮里町の生家から、よく上野公園に遊びに行った。広大な谷中墓地を横切り、寛永寺の境内をぬけるのが常であった。

いつとはなしに、戊辰戦争で圧勝し江戸城を接収した朝廷軍と、上野寛永寺を中心にした彰義隊との間に戦さが起り、敗れた彰義隊員が私の町にものがれてきたという話などを、断片的に耳にしたりした。

そうしたことを知っている親しい編集者から、なぜ彰義隊を素材に小説を書かぬのか、と問われることがしばしばあった。たしかに私の生れた町は、朝廷軍が意識してもうけた彰義隊員の敗走路の一つで、生々しい話が残っている。しかし、戦いは激しいものであったとは言え、わずか一日で終り、少くとも長篇小説の素材としては幅も奥行きも乏しく好ましくない。敗走した一隊員を主人公に、とも考えたりしたが、やがて庶民の間にとけ込んでいったにちがいなく、それを小説に書く気にはなれなかった。

三年ほど前、寛永寺山主であった輪王寺宮に視点を据えてみてはどうか、とふと思った。宮は、寛永寺を本営とする彰義隊に守護されていたが、彰義隊が朝廷軍の攻撃を受けて敗れた後、落人さ

ながらに落ちのびていったはずだが、その後のことは闇につつまれている。それを明らかにすることは、幕末から明治までの時代の推移を描くことにもなり、意義があると考えたのである。

私の触手はにわかに動き、新宿区内にある台湾協会におもむいて宮の事蹟を記した記録を見出した。それによると、上野の山を下りた宮は、根岸（台東区）にのがれている。その地は私の生れた町の隣接地で、宮は、それから三河島（荒川区）、尾久（同）へと私の幼い頃からなじんでいる地へ潜行している。

私は、荒川区立図書館に行き、ガリ版刷りの「三河島町郷土史」を手にした。簡易な郷土記録と思っていたが、宮がのがれた地の庄屋たちの朝廷軍に提出した届け書が多く記載され、それらは宮の動きをさとられまいとする村人たちの意図が透けて見え、郷土史としては予想外の傑出した内容であった。私は、その記録をもとに宮をかくまった家々の子孫の家を訪れて伝承を得、小説の執筆を決意した。

私は、宮の跡を追って浅草東光院、市ヶ谷自証院をへて、奥羽へと調査行をつづけ、それらの地で、宮についての埋れた史料を発掘研究している史家たちに会った。幕府軍が大敗後、奥羽には、幕府に忠誠をいだく多数の武家等がのがれ、その中には老中にもなった旧藩主らもいて、その動きをさぐるため、岡山県高梁市や山口県下関市にも旅をした。

宮は、台湾戦線で病死し、遺体が東京に運ばれているが、遺体を損蝕させずに運ぶ方法については、国立歴史民俗博物館長宮地正人氏、国学院大学日本文化研究所員の菅浩二氏の御指示を参考にした。

宮の曾孫である伊勢神宮大宮司の北白川道久氏には、友人の岩村和俊氏を介してお会いし、さらに伊勢神宮にもおもむいた。氏から見せていただいた宮の、台湾戦線への派遣を願う書面に、宮が上野の戦いで朝敵となったことを、その時に至っても深い心の傷として意識しているのを知り、ためらうことなく題を「彰義隊」とした。

当然のことながら寛永寺にも足をむけ、執事の浦井正明氏から寺に残る資料を見せていただき、点検もして下さった。偶然か、調査の旅は雨の日が多く、雪の降る中を歩いたこともある。

これらの旅で得た史料をもとに、朝日新聞社より依頼を受けていた連載小説の執筆に取り組んだ。執筆を見守ってくれた朝日新聞社文化部の由里幸子、牧村健一郎両氏と、出版の労を負って下さった長田匡司氏に謝意を表する。

史料収集にお力を貸して下さった永井隼人、沢弘之、保谷徹、木村周誠、館亮繁、瀬谷義彦、仲田協右、加古一朗、鵜飼幸子、吉村淑甫、鈴木喜太郎、遠藤松次郎、石橋藤雄、伊藤邦夫、西河内靖泰、野尻かおる、奥村多市郎、佐藤孝徳、小野一雄、安濃廣美の各氏に、御礼を申し述べる。

参考文献

「能久親王事蹟」棠陰會編纂
「輪王寺宮の平潟上陸とその意義」瀬谷義彦稿・北茨城史壇
「艱難実録」辻忠貞遺稿・岡山県史諸藩文書
「盤城平藩士神林千次郎北走日記」小野一雄稿・古文幻想第五号
「自歴譜」加太邦憲著　岩波書店
「麻生三郎事歴」
「戊辰戦争全史（下）」菊地明・伊東成郎編　新人物往来社
「いわき戊辰史」
「幕末の閣老　板倉勝静」朝森要著　福武書店
「復古外記」東叡山戦記
「彰義隊戦史」山崎有信著
「三河島町郷土史」荒川ふるさと文化館
「徳川慶喜公伝4」澁沢栄一著　平凡社
「昔夢会筆記」澁沢栄一編・大久保利謙校訂　平凡社
「覺王院義觀傳」鈴木時敏稿

「戊辰の夢」澤太郎左衛門記（舊幕府）
「手前味噌」三代目中村仲蔵著・郡司正勝校註　青蛙房
「上野時空遊行」浦井正明著　プレジデント社
「永井玄蕃頭尚志手記」私家版
「臺灣征討史　全」（臺灣懇話會）

初出・朝日新聞二〇〇四年十月十八日～二〇〇五年八月十九日連載

彰義隊（しょうぎたい）

二〇〇五年十一月三十日　第一刷発行

著　者　吉村昭（よしむらあきら）
発行者　花井正和
発行所　朝日新聞社
〒一〇四-八〇一一　東京都中央区築地五-三-二
電話　〇三-三五四五-〇一三一（代表）
編集・文芸編集部　販売・出版販売部
振替　〇〇一九〇-〇-一五五四一四
印刷所　共同印刷株式会社
©Yoshimura Akira 2005
Printed in Japan
ISBN4-02-250073-5
定価はカバーに表示してあります

朝日新聞社の文芸書

吉村昭
天狗争乱
井伊大老暗殺から四年。開国か攘夷か――騒然としていた幕末、徳川御三家・水戸藩の尊皇攘夷派有志が筑波山で挙兵した。その凛然とした軌跡を活写し、非業の最期を劇的に蘇らせた第二十一回大佛次郎賞受賞の本格長篇歴史小説。　文庫判

荒山徹
柳生薔薇剣
故国・朝鮮との縁を切るために縁切り寺に駆け込んだ女性うねをめぐって、幕府を二分する血で血を洗う暗闘が始まった！　司馬遼太郎の透徹した歴史観と山田風太郎の奇想天外な物語性を兼ね備えた面白さ無類の伝奇時代小説。　四六判

宇江佐真理
憂き世店　松前藩士物語
蝦夷松前への帰藩をめざして健気に生き抜く浪人暮らしの相田総八郎と妻なみ。そして二人をあたたかく見守る個性豊かな裏店の住人たち――江戸の〝憂き世〟を生きる人々の心のひだを、奥行き深く描いた人情味あふれる長篇時代小説。　四六判

陳舜臣
龍鳳のくに　中国王朝興亡の源流をたどる
中国の歴史は〝龍と鳳〟の交代劇に他ならない――。おだやかな農耕の民〝龍〟と猛き狩猟部族〝鳳〟を中心に、中国古代王朝の興亡に迫った未発表の長篇エッセイ百五十枚「よみがえる龍」を収録した滋味溢れる歴史エッセイ集。　四六判

出久根達郎
かわうその祭り
あるコレクターが残した「幻の映画フィルム」の謎を追いかけると、旧満州から日露関係を揺るがした大津事件へと繋がった！　歴史のうねりに翻弄される人々の悲喜劇を描いた、うんちく満載の痛快長篇小説。朝日新聞好評連載の単行本化。　四六判

山本一力
欅しぐれ
深川の大店・桔梗屋太兵衛から後見を託された霊巌寺の猪之吉、桔梗屋乗っ取り一味に一世一代の大勝負を賭ける！　凛とした女の強さと命がけの男気が心を揺さぶる、直木賞受賞作『あかね空』以来、久々の本格時代長篇小説。　四六判

浅田次郎

椿山課長の七日間

突然死した椿山和昭は家族に別れを告げるため、美女の肉体を借りて七日間だけ〝現世〟に舞い戻るが……。親子の絆、捧げ尽くす無償の愛、そして「死後の世界」を絡めて描く、涙と笑いの感動巨篇。

四六判／文庫判

浅田次郎

天国までの百マイル

バブル崩壊で会社も金も失い、妻子とも別れた中年男が、年老いた母の命を救うため、《奇跡》を信じて百マイルをひたすら駆ける——。親子の切ない情愛、男女の哀しい恋模様を描く長篇小説。映画化・テレビドラマ化で話題沸騰の感動巨篇。

四六判／文庫判

浅田次郎／朝日新聞社文芸編集部編

待つ女——浅田次郎読本

「浅田文学の原点」を探るロングインタビュー、デビュー以来の「自作を語る」、詳細な「読める年譜」などなど、〝浅田次郎の真実〟に迫る完全保存版の作家読本。単行本未収録の「三島由紀夫論」&特別書き下ろし小説「待つ女」も収録。

四六判／文庫判